

アルシエの物語～In
the Beginning was the
Word～

Menschsein

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ナザリック外に転移したモモンガが、アルシエと出会って冒険するお話。

時系列としては、フォーサイトにアルシエが入る前から物語がスタート。原作より二年くらい早い時点から物語りスタートです。 原作より二年

割りと暗い話も多いので、ご注意ください。

【Prologue】はアルシエのベッドシーンがあるので【閲覧注意】です。 苦手な方は、第一話からお読みください。

目次

遭遇	1	48
遭遇	5	38
邂逅	3	21
邂逅	2	14
邂逅	1	6
邂逅	4	29
邂逅	4	21
写	1	1
Prologue		
【閲覧注意：性描】		

遭遇	2	59
遭遇	3	64
遭遇	4	74
遭遇	5	82
遭遇	6	88
遭遇	7	97
昇格試験		
昇格試験	1	102
昇格試験	1	102
昇格試験	2	114
昇格試験	3	122
昇格試験	4	136
遭遇	2	59
【閲覧注意：鬱展開】		

昇格試験	1 4	189
昇格試験	1 3	207
昇格試験	1 2	197
昇格試験	1 1	189
昇格試験	1 0	184
昇格試験	9	175
昇格試験	8	167
昇格試験	7	161
昇格試験	6	154
昇格試験	5	142

遺跡調査	1	236
遺跡調査	2	243
遺跡調査	3	258
遺跡調査	4	267
遺跡調査	5	279
遺跡調査	6	289
遺跡調査	7	297
遺跡調査	8	308
遺跡調査	225	314

写) —————

帝都燃えているか

【閲覧注意：性的描

【閲覧注意：鬱展開】

帝都は燃えているか 3

帝都は燃えているか 4 【閲覧注意・グ

口描写有り】 336

帝都は燃えているか 5

帝都は燃えているか 6

帝都は燃えているか 7

帝都は燃えているか 8

帝都は燃えているか 9 【閲覧注意・

鬱展開】 376

帝都は燃えているか 10

帝都は燃えているか 11

帝都は燃えているか 12 【閲覧注

意：残酷な描写有り】 397

帝都は燃えているか 13

帝都は燃えているか 14

帝都は燃えているか 15

帝都は燃えているか 16

帝都は燃えているか 17 【閲覧注意・

残酷な描写有り】 449

帝都は燃えているか 18

帝都は燃えているか 19

Epilogue 489

Prologue

【閲覧注意：性描写】

お願い。早く終わって。

ベッドの上で見知らぬ男に身を委ねながら、アルシエ・イーブ・リイル・フルトは天井を眺めていた。

両親からまたもや持ち込まれた「縁談」。フルト家は、元貴族であった。貴族であれば、親同士が決めた縁談が持ち込まれるのは当然の社会習慣である。

貴族同士で結婚を正式に申し込む前には、お互いの顔合わせ、という習慣がある。結婚を申し込む側、即ち男が、まとまった金額を相手の親に渡し、結婚をする当人が二人つきりで会う機会を設けるのだ。

通常であればそれは、明るい太陽の下、屋敷の庭など公共性の高い場所で行われ、お互い紅茶とそしてお菓子を食べながら軽く談笑するだけのものであるはずだった。

しかし、アルシエと、アルシエに形だけ「縁談」を持ち込んだ男の面会は、深夜、そして二人だけしかない密室で行われる。

アルシエが室内に入った途端、碌な挨拶もなしに、着ていた衣服を剥ぎ取られ、そのままベッドに組み敷かれる。

悲しいのは最初だけだった。もう、諦めている。アルシエは、男が満足して果てるまでの時間を、ただ待つだけだった。親から縁談の話が持ち込まれる数日前から、親に飲めと言われる薄気味悪い紫色の飲料。アルシエは自分が飲んでいてそれがなんなのか正確には知らないが、大体想像はつく。

貴族の娘が、結婚をしていないのに子供を宿す。貴族としてあるまじきことだ。そういった事態を回避するための薬であろう。

今日の「縁談」相手の男の腰が、体重が自分にぐつとのし掛かってくる。腰の動きも、止まった。男の脈を打つような振動が体に伝わってくる。腰の動き

アルシエは、やつと終わつたか、と深く呼吸をする。早く家へと帰って身を清めたい。「元貴族で、魔法学院で評判の娘ということに興味を持ったが、張り合いがないな。人形のような。高い持参金を払ったが、これなら娼婦と遊んだほうが何倍もマシだ。今回の縁談は見合わせていただく伝えておけ」

それだけ言つて、男は服を着て、さっさと部屋から出て行ってしまった。

アルシエは、ゆつたりと体をベッドから起こし、自分も衣服を纏い、そして馬車に乗つて実家へと帰宅する。

「申し訳ありません。縁談は無かつたことにとのことでした」とアルシエは玄関で待ち構えていた両親に「縁談」の結果を報告する。

「まったくお前は、フルト家の面目を潰すつもりか！　これで何件目の縁談だと思つているのだ！」

「貴族として、結婚をすることも大事なのよ。魔法学院なんて早く辞めて、結婚をして早く幸せになつてちょうだい。私はあなたの将来を心配しているのよ？」

「今回の縁談の申込金をもらつてしまつたからな。こちらも、それ相応の品を相手にお詫びとして贈らねばならぬ。ジャイムス！　明日、商人が来るように手配しておけ」と、屋敷に仕えている執事であるジャイムスに父親が指示を出す。

「お父さん、うちはもう貴族じゃない。無駄使いは止めて……」とアルシエは懇願するが、それは聞き届けられない。

「何を言つている！　もとはといえば、お前が縁談を破棄されたのがいけないのであるう。親に尻ぬぐいをさせておいて、なんだその言い草は！」

「アルシエ。私達はあなたの将来を心配しているのよ？　あなたに幸せになつて欲しいのよ。」

この両親をいくら説得しても無駄だ……。アルシエは疲れた体に鞭打つて、両親のなじりを聞き流した。

「お嬢様。なんだか眠たそうですね」

帝国魔法学院での昼休み。昨日の疲れが残っているアルシエは、昼休みの学院の教室で頬杖を付きながらうとうととしていた。

「ジエツト……。実は昨日、興味深い魔術書を遅くまで読んでいて……」と嘘を吐いた。「流石ですね。それくらい熱心じゃなきゃ、第三位階まで使えるようにならないんですね」とジエツトは笑っている。

アルシエは、ジエツトの眼帯を見つめ、彼の生まれながらの異能を思い出す。

『あらゆる幻覚を見破ることができる』

そのタレントで、一度、彼に自分の両親を見てもらった方が良いのではないか。もしかしたら、自分の両親の化けの皮を被った悪魔が、自分の両親になりすましているのではないだろうか。いや、そんなはずは無い。ただ、自分の両親は、もう自分たちが貴族でないということを受け入れられないだけの、ただ弱いだけの両親だ。

アルシエは、自分の頭に浮かんだ悪い妄想を吹き飛ばす。

「お嬢様、大丈夫ですか？ 今日の午後の授業は休まれては？」

「大丈夫……。そうだ、ジエツト。私、近々魔法学院を退学しようと思うの……」

「縁談」で金を稼ぐということも、そのうち限界が来るだろう。それに、フルト家は自分以外の収入の宛てが無い。

自分が、稼がねばならない。愛する妹……クーデリカとウレイリカのために……。よ

り収入の良い仕事で……。

邂逅

邂逅

1

ユグドラシルの最終日、ヘロヘロさんが、体に鞭を打ってログインしてきてくれた。他の仲間……これ以上まっても、来ないだろう。

モモンガは、プレイヤーがログインしてきた時に現れるラウンドテーブルが置かれた部屋を後にする。

自分がユグドラシルで最後を迎える場所。それは、玉座の間こそ相応しい。モモンガは、玉座の間の赤絨毯を威風堂々と歩く。そして、モモンガの視線は、玉座の横に立つ女性型のNPCへと向けた。

それは純白のドレスをまとった美しい女性だ。彼女の名はモモンガでも忘れてはいない。ナザリック地下大墳墓階層守護者統括、アルベド。ナザリック地下大墳墓全NPCの頂点に立つ存在。

「どんな設定をしていたかな？」とモモンガは好奇心のままにコンソールを操作して、アルベドの設定を閲覧する。

「長つ……。タブラさん……」

一気にモモンガはアルベドの設定を読み飛ばすと、モモンガの視界に現れたのは、『ちなみにビッチである。』

「え？」と、モモンガは一瞬、目が点になる。これはちよつと酷くないかあ、とモモンガは悩み、ギルド長特権を使って、アルベドの『ちなみにビッチである。』の文字を消す。そして、『モモンガを愛している。』と書き換える。

「うわ、恥ずかしい」

でも、最後だからそれくらいやつても良いだろう。どうせ最後なんだし。モモンガはそう思い、そのまま王座に腰掛ける。

そして、リアル時間の時刻を眺めながら、自らもカウントをする。

23 : 59 : 48、49、50……

モモンガは目を閉じた。

時刻となれば、強制ログアウトが発生するだろう。ユグドラシルの思い出が走馬燈のように頭に浮かんでくる。

23 : 59 : 57、58、59……

0 : 00 : 00……1、2、3

「……あれ？」

長い走馬燈からモモンガが目を開けると、森林であつた。頭が真っ白になつた。

「……………どういふことだ？」

まだ、自分は異形種の姿のままだ。

0:00:38

何が起こったのか状況把握をしようとするが、コンソールが浮かび上がらない。サーバーがダウンするはずであるのに、サーバーがダウンしていない。自分が強制排出されていない。そして、自力でログアウトしようにも、コンソールが出現しない。

そして、決定的なのは、森から漂ってくる匂いだった。土の匂い、木々の匂い。

モモンガは足下に生えていた草を一本抜き、それを指ですり潰した。そしてそれを自らの鼻の近くへと持っていく。間違いない。これは、匂いだ。なぜ、ユグドラシルに匂いがあるのか。

ユグドラシルが現実になった？

突拍子もない考えだった。だが、考えれば考えるほど、その可能性しかないように思える。モモンガは森の中をさまよい歩く。どつちに歩けば良いのかもともと見当が付かない。とりあえず、出来るだけ真っ直ぐに歩いてみるかと思う。闇夜でも視界は確保できるので、確かではないが一つの方向へと歩いていく。アンデッドの不労不眠の効果で、疲れをまったく感じないということが、これが現実の体ではないということを示している。疲れがまったく無い。

夜通し歩き続け、太陽が昇ったころ、森が拓けた。そして、その草原近くで人が木を伐採しているが見えた。NPCか？ と思いつつも、モモンガはその木こりらしき人に近づく。言葉が通じるのか？ 見たところ、髪の色は金色。現実世界で言えば、外人だ。日本語を喋っている可能性は低い。

「あ、あの、すみません……」

「ひいひい。アンデッドだ！」

モモンガの姿を捉えた瞬間、その木こりは自らが持っていた斧や荷物を置いて逃げていつてしまった。

ああ、この外見だしな……。モモンガは寂寥感と共に、ある種の納得感があった。

言葉が通じるのは僥倖だが……。この姿は不味いか……。この世界が未だにユグドラシルであったとしても、異形種狩りというリスクがある。ここが現実の世界であったとしたら、アンデッドはモンスター扱いであろう。

姿を変える、もしくは偽装すべきであるな、とモモンガは思う。だが、幻覚の類いは見抜かれる可能性がある。

モモンガは、上位道具創造クリエイティブアイテムで、全身甲冑、そして戦士らしく、強大な二本のバスタードソードを作り出した。

これならば、中身がアンデッドでもばれない。

モモンガは、木こりらしき人が逃げていった方向へと足を向ける。それにしても、信じられない。空には、青空が広がっている。空が青いということは聞いていたが、汚染された現実世界ではいつも空は、薄灰色の有害物質に覆われていた。ブルー・プラネットさんがこの青空を見たらどう思うのであろう。

きつと、涙を流しながら深い深呼吸をずっと繰り返すのではないだろうか、そんな事をモモンガは想像をした。

やがて見えた貧相な集落。おそらく先ほどの木こりは、この集落の者であるのだろう。集落の入口では、農具を持った男達が五、六人立っている。おそらく、武器を携えているつもりなのだろう。

とりあえず友好的に接して、敵対関係になつた場合は即座に撤退するか。

「こんにちは。私は、旅の者です。名前は、モモン・ザ・ダーク・ウオリアー」

相手を刺激しないように、十分に離れた場所からモモンガは声を張る。

「武器をその場に置くのであれば歓迎しよう」という返答が数秒の沈黙のうちに返ってきた。

武器を置き。突然の訪問者。警戒するのも当然だろう。モモンガは、背中の本の剣を地面に置いて、両手を挙げながら集落へとゆっくりと歩く。

「実は、森で迷ってしまったのです。それで、集落が見えたので、尋ねてみたという次第です」

モモンガは、何故この集落に来たか？ という問いに答える。出来るだけ丁寧な物腰で対応する。そして、嘘はできるだけ付かない。自分の状況でさえ分からない。そんな状況で嘘を吐くのは得策ではない。

「そういった事情でしたか……」と、一人の男は安堵したように呟く。が、「し、しかし、さきほどあなたが来た方角に、アンデッドがいたが……。俺はさっきそいつを見て逃げてきたんだが」と別の男が口を開く。さきほど森で木を切っていた男と外見が一致する。

「ああ。そのリッチならもういませんよ。私が倒しました。実は、そいつを追いかけていたのです。そして、討伐したのは良いけれど、追跡に夢中で自分が道に迷ってしまいました。なんとも情けない話です」とモモンガは、右手を頭の後ろに回し、困ったように言う。

「あ。なるほど。冒険者の方でしたか」

モモンガは冒険者という単語に反応する。そして、『冒険者』の仕事は大凡予想ができた。

「いえ。私は冒険者ではありません。あのアンデッドは、いわば私の最愛の者の仇……。私怨で追っていたのです」

「そうだったのですか……。」と一気に男達の警戒の色が薄まり、自分に同情したような雰囲気になったことをモモンガは感じ取る。

「……ですが、私の生きる目的だった復讐も今日で終わりました。今後は冒険者にでもなつて生きようと思います。どこで冒険者になれるのですか？」

「冒険者ですか？ ああ、それなら、このまま南に向かつて一週間も歩けば、帝都ですよ」「帝都？」とモモンガは聞き返す。帝国の都みやこということであろうか？

「帝都アーウィンタールですよ。もうここは、バハルス帝国ですよ。北からアンデッドを追つて、この村に來たということ……モモン・ザ・ダーク・ウォリアーさんは、都市国家連合の方ですか……。長い復讐の旅路でしたね」と、一人の男が、お疲れ様でした、というような口調で言った。

バハルス帝国、帝都アーウィンタール、都市国家連合……。どれも、ユグドラシルでは聞いたことはない名前だ。やはりここはユグドラシルの世界では無いのか？ だが、ユグドラシルの外装のままで、しかも魔法は問題なく使える……。

「ありがたいごさいます。来て早々ですが、私はその帝都アーウィンタールへ向かいたいと思います。迷っているところ、助かりました」

「いや、こちらこそ……。アンデッドを討伐していただき助かりました。もしあいつが村に来ていたら、多大な被害が出ていましたから」と集落の男たちはお礼を言い始めた。「いえいえ。これは私の私怨でしたので、お礼を言われることではありません。さて、私は、太陽が高いうちに、帝都に向かいたいと思います。大変たすかりました」

モモンガは、帝都アーウィンタールへと向かって歩き始めた。

邂逅 2

帝都アーウィンタール。平らな石を隙間無く敷き詰めた大通りをモモンガは歩いてきた。漆黒の鎧、そしてその後ろには二本の大きなバスタードソードを背負っている。

モモンガ自身の現状。ログアウトできない。この世界がどうなっているのかわからない。アンデッドであれば、飲食不要で何もしなくても餓えて死ぬことはない。だが、誰もいない森の中で無為に過ごすということはできない。

この世界に関する情報が必要。それならば、冒険者という選択肢は有効な手段であろう。冒険者として魔物を倒すということをし事としてもよい。幸いなことに、魔物のレベルなどはユグドラシルの世界に準拠しているようだ。帝都へと向かう途中で遭遇したゴブリンやオークなどで既にそれは検証済だ。

モモンガは帝都に入る際に、衛兵から教えてもらった場所へと向かっていた。目的地はもちろん、冒険者組合であった。

冒険者組合の中には、丸テーブルやソファアが置かれ、そこに腰掛けて座っている人々がいる。そしてその奥にはカウンタがある。

モモンガが目当ての建物に踏み入った瞬間、自分自身に向けられる視線を感じた。カ

ウンターから向けられる受付の女性の視線だけではない。

見られているのは確かだが、誰から見られているのかはつきりと分からない。掲示版らしき者を見ている男が自分を横目で観察しているのかも知れない。丸テーブルを囲んで打ち合わせをしている男たち。議論を交わしながらこちらをさり気なく観察しているように思える。奥のソファアに深く腰掛け、本を読んでいる男。文字を追っているように、自分の全身甲冑を値踏みしているようにも思える。

なるほど。これが冒険者か。日常から自らの生き死にをかけて、未知を追求している。修羅場をくぐり抜けてきたという雰囲気醸し出されているな、とモモンガは感心をする。そして、モモンガはそのまま受付カウンターへと向かう。

「冒険者になりたいんだが？」

「こちらで承ります。では、こちらの用紙にご記入ください……。もしくは代筆致しますか？」と受付の女性は柔やかに対応する。

モモンガは代筆を依頼しつつ、冒険者組合というのは、しつかりとした組織なのだろうと考える。受付にも教育が行き届いている。現実世界での経験で、受付担当者の対応が悪い会社は、金払いなどが悪いなど、トラブルを起こしやすいという傾向があるということを鈴木悟自身、骨身に染みて知っていた。

「お名前は？」

「モモン・ザ・ダーク・ウォリアーだ」

「モモン・ザ……失礼ですが、もう一度お聞かせ願えませんでしょうか？」と受付嬢が、少し困ったような顔をして、モモンガに尋ねてくる。モモン・ザ・ダーク・ウォリアー。聞き慣れない名前なのであろう。そして、この名前を格好いいと思ってくれていないということは確かだ。

「……すまない。モモンだけで良い」

「畏まりました。モモン様でよろしいですね？」

申込書の必要事項が聞かれ、それに応えるモモンガ。質問の内容からして、出自などに冒険者組合は興味が無く、どれくらい強いかに重点が置かれている質問内容であった。冒険者組合側としては、求めているのは依頼を達成することができる能力、力を求めているのであろう。

「講習を受けられますか？」

「講習？」と思わずモモンガは聞き返してしまう。まさか、会社でもあるまいし、新人研修でもあるというのであろうか。

「ええ。冒険者組合の仕組みや、依頼を達成した際の報酬と失敗した場合のペナルティ。また、冒険者のランクに関する説明などを説明する講習です。参加は任意ですが、知らないモモン様に不利益が生じる場合があります。ちようど、午前中に講習がもうす

ぐ、この建物の二階で始まるですよ」と受付は言う。

『知らない』とモモン様に不利益が生じる場合があります』と言われてしまうと、参加しないわけにはいかない。情報こそが価値がある。そして有益な情報を手に入れるためにモモンガは冒険者になるのだ。ユグドラシルのプレイヤーであれば、冒険者になるという選択肢を選ぶ可能性は非常に高い。

「参加させてください」とモモンは答える。

ノートと筆記用具なんて持っていないぞ、とモモンは心配しながら冒険者組合の講習が行われる部屋の扉を開ける。椅子が十脚ほど並べてある小さな部屋であった。そして、予想に反して、その講習室は閑散としていた。少女が一人、部屋の後ろに座っているだけであった。

モモンはその相手に会釈をして講習室に入る。講習を受ける身としては、兜くらいは脱ぐのが礼儀であろうと思ったが、すでに冒険者組合の受付で兜を脱いでいないので今更であろう。

「お待たせしました」と講師らしき人が入ってきた。そして講習を受講するのは、自分を含めて二人であった。ふっとモモンガはもう一人の受講生に目をやる。杖を持つところからすると、魔法詠唱者マジック・キャスターであろう。外見は、若い。少女と形容しても良い容姿だ。それに、まだ体よりも杖の方が大きいところを見ると、体のほうは成長期という

ころなのであろう。

小学校の制服を、子供の成長を計算して大き目の制服を買っておくというようなことが、魔法詠唱者の杖でも行われているのであろう。

「以上が冒険者講習の内容になりますが、何かご質問はありませんか？」

冒険者は、未知への好奇心と挑戦をする。そんな夢のあるような仕事ではない。食うために魔物を狩る。依頼をこなす。そして、冒険者という荒くれものであるがゆえに、しつかりと冒険者組合に管理されている。モモンガが講習を受けた印象は、冒険者というのは思ったよりも夢のない仕事であるということである。また、冒険者という仕事の夢の無さが、ここが現実の世界であると、より強くモモンガに思わせた。

しかし、知るべきことは知れた。

「あの……」と、少女が手を挙げた。

「はい、どうぞ」と講師が質問を促す。

「銅プレートの冒険者が、より高額報酬の依頼……銀や金のプレートの依頼を受ける方法はありますか？」と尋ねる。

「ありませんね。そもそも、プレートに応じた難易度に依頼が振り分けられます。方法があるとすれば、より高いプレートのチームに入れてもらうことですが、それはとても難しいですよ。冒険者というのはチームに新たにメンバーを迎える際には大変慎重で

す。それまで培ってきたチームワークが崩れる可能性があり、最悪の場合、チームの崩壊につながります。それに、低位のプレートのメンバーを入れるというのも、足手まといとなる可能性が高い。チームに迎えるとしても、相応の実績のある冒険者であることが求められます。せめて、同格か、一つ下のプレートでしょうね」と講師は淀みなく答える。

「そうですか……。」と少女は残念そうにうつむく。

「他に質問はありませんか？」

しばらくの沈黙のうち、「では、これにて講習は終了いたします。ご清聴ありがとうございました。ございました」と言って、講師は部屋から出て行った。

部屋に残されたのは、二人の新米冒険者。モモンガとその少女。

モモンガは、この少女に声をかけるべきかを思慮していた。若者が冒険者を夢見ることは別にモモンガにとってどうでも良い。勇敢と無謀を履き違えて、死ぬのはどうでも良いことだ。だが、この少女は先ほどの質問からすると、金に困っている。

目的は金を稼ぐこと……。今日突然顔を合わせた人間とチームを組むということはモモンガも抵抗はある。だが、モモンガにはこの世界での常識というものが圧倒的に欠けている。それを補ってくれる存在というのは必要だ。

そして、それに関して都合の良い人間がすぐそばにいる。金に困っている。冒険者に

なる目的は金を得ること。目的がはっきりしている分、分かりやすく良い。

情報を自分が持つていない状況でもっとも警戒すべき存在は、親切面して近づいてくる人間だ。

少女は、部屋から出る気配がない。暗い表情のままだ。

まずは、情報収集だな。新米冒険者に対する罠の可能性もあるし……。まずは金に困っているという裏を取ってからだな。モモンガは立ち上がり、その少女に挨拶をする。

「同じ講習を受けたのも何かの縁だ。同じ新米冒険者として、せいぜい頑張っていこうじゃないか。俺はモモン。君は？」

「私は……アルシエ」と少女は答えた。

邂逅 3

モモンガは、手を差し出し握手を求めようと思ったが、止めた。いくら何でも、籠手を装着したまま握手を求めるのは失礼である。

「よろしくな。アルシエ。お互い生き残っていこう。新米冒険者の死亡率は高いらしいからな。まずはお互い生き残ることだな」とモモンガは言う。講習で、新米冒険者の一年以内の死亡確率は五十パーセントにのぼるといふ説明があった。

「申し訳無いけど、馴れ合うつもりはない。冒険者になったばかりだけど、私は冒険者を辞める。私はワーカーになる。次会うときは、商売敵ね」

ワーカー？ 商売敵とはなんのことだ？ 冒険者の他にワーカーというのもあるのか？ 冒険者の対立組織があるような口ぶりだな。やはり、知らないことが多いすぎるな。

「そうか……。それは残念だ。もし良かったらパーティーを組もうかと思っていたのだがな。私はそれなりに腕が立つつもりなのだがな」

「私も魔法の腕には自信がある。私は第三位階まで使える」とアルシエはモモンガを見つめる。

モモンガはアルシエの言葉を聞いて、第三位階つて微妙過ぎるだろ……と兜の中で呆れる。こいつは、ただの世間を知らない餓鬼なんじゃないか？ ユグドラシルで、第三位階が使えるって、どや顔するプレイヤーがいたら、ただのネタだぞ……。

「自分の能力を過信しないことだな。一人前を気取りたいのなら、第十位階をえるようになってからだ。第三位階魔法が全く効かない相手などもこの世界には沢山いるぞ？」

上位魔法無効化Ⅲのスキルを持っている俺とかな。

「第十位階をえるようになってから？ ふつ。あなたが魔法に関して無知だということとが分かった」とアルシエは答える。

鼻で笑いやがった。ワールドデイズスターに攻撃魔法では及ばないものの、俺も魔法職としてそこその部類に入るのだから。少なくとも、第三位階の魔法職に負けたりはしないぞ。って、餓鬼の言うことにいちいち腹を立ててもしょうが無いな。

それよりも問題は、知らないことが多すぎるといふことだ。ワーカーという職業、それに、第十位階魔法と言つて笑われる。この短い会話で認識の齟齬があり過ぎるな。

この世界の常識を持っている人間を側に置いておくのはやはり必要だ。

「俺と君は違うよ。少なくとも、金の為に無茶をやるようなことはしない」

「くっ……」

アルシエは苦虫をかみ潰したような表情となり、それをモモンガは見逃さなかった。どうやら、金に困っているというのは確かだな。しかも、高額の金が必要。そして、かなり緊急を要するのであろう。

それならば、考えられる可能性はそんなに多くはない。

「誰かが病気なのか？」とモモンガは尋ねる。病気の治療費というのはおそらくこの世界に行っても高額であろう。

しかし、アルシエは首を横に振るだけだ。

「借金……か？」

アルシエは何も言わず、少しだけ首を縦に降ろした。

「幾らあるのだ？」

しばらくの沈黙ののち、観念したかのようにアルシエは呟いた。

「金貨二百枚……」

金貨二百枚……。多いのか少ないのか分からんな。NPCの復活のためにでも金貨が五億くらいかかるからな。神級の装備ゴッスを作るにはもつとかかるし。物価が分からないというのも問題だな。

まったく学ばなければならぬことが多すぎるな、とモモンガは心の中でため息を吐きながら、金貨が百枚入った皮袋を二つ取り出し、それをアルシエに差し出す。

「これは？」

「中を見てみる。きっちり金貨二百枚あるはずだ」

アルシエは半信半疑だったのであろう。恐る恐る一つの革袋の口の紐を開けて中を覗き込む。そして金貨を一枚取り出し、部屋の永続「コンティニユアル・ライト」光が掛けてあるランプの前に持っていく。

だが、驚いた様子も一瞬であり、落胆した様子となった。

「これ、金貨？ 帝国金貨でも、王国金貨とも違うけれど……見たこともない文字と刻印……」

え？ 金貨もユグドラシルのとは違うのか……。最悪だ。この金貨が使えなかったとしたら……。実質的に俺は一文無しだな。

「その金貨で問題あるか？」とモモンガは尋ねる。心の中で、問題無いようにと祈りながら。

「これが本物の金貨なら、純度とかによると思うけれど、両替商が換金はしてくれと思う。だけど、この金貨を私に？」

「やるというわけではない。無期限で貸し出すということだな。もちろん、条件を付けさせてもらうがな」とモモンガは言う。

「悪いけど、信用できない。こんな美味しい話なんてありえない」とアルシエは金貨を元

の袋に戻し、袋をモモンガへと返す。

「条件を聞く前に断るのか？」

「だって、私もあなたも今日冒険者に成りたての新米。そんなあなたが、ポンと金貨二百枚を見ず知らずの私に渡してくるなんておかしい。そんなお金があるなら、そもそも冒険者になるというのも変。新米冒険者の半分が一年以内に死ぬ。それは、魔物に殺されて、つていうだけではないってことでしょ？ たとえば、目先のお金に目がくらんだ新米をカモにする冒険者がいたりもするってこと」とアルシエは、うさん臭そうな目でモモンガを見つめる。

せ、正論だな。たしかに、思いつきり怪しいよな。失態だ。俺が相手の立場でも警戒はするな。交渉を焦り過ぎたな。だが、頭の回転も速い。それに、冷静さも持ち合わせている。借金は自分で作ったものでない可能性が高いな。悪くない。合格点だ。では、こちらもう一枚カードを切らせてもらおう。

モモンガは、兜を脱いだ。念のため、兜を脱がざるを得ない場合に備えておいてよかったです。

「黒髪？」とアルシエは驚いた表情だ。

やはり、とモモンガは思う。どうも村人や帝都の人間は全員、髪の色が金髪だった。黒髪というのは珍しいのであろう。

「実は私は遠い国から来た旅人なのだ。そして、この帝国に來たばかりで、このあたりの常識に疎い。正直、分からないことだらけだ。風習や慣習などは地域によつて違うからな。だから、この帝国の常識を知っている人間を必要としているのだ。だから、冒険者にもなった。そして、私の欠けた常識を補ってくれる存在を探しているというわけだ」

怪しまれたり疑われたら、自らの弱みや欠点を見せる。相手に信用されるための交渉術の一つだ。人間は相手と自分の共通点を見つけると、親近感が湧く。また、相手の弱い点や欠点を知ると、精神的優位に立ち、安心感が芽生えて態度が軟化するものだ。モモンガの営業テクニクの一つだ。

「どうして帝国に來たの？ それなりの目的があるのでしょ？」

「どうやらアルシエは話を聞く気にはなってくれたようだ。それにモモンガは安堵する。席を立たれてしまったら、勧誘は失敗に終わっていたところだ。」

「実はな、使った者の願いをなんでも叶えてくれるという指輪が存在する。俺はそれを手に入れるために、多くの時間と労力を費やした……」

シユールテイングスター

流れ星の指輪を手に入れるために、主につき込んだのは、給料とボーナスだがな。

「そんな指輪が……信じられない」

「だが、存在するのは事実だ」とモモンガは断言する。

実際に自分が持っているし、自信を持ってその指輪が存在すると断言できる。交渉で

最後に必要なのは、自社の製品が一番ですと断言できる自信だ。

「それで、その金貨を貸してくれるという条件は？」

乗ってきた。モモンガは交渉の成立を確信した。

「まずは、私とパーティーを組んでもらうということだ。チームのリーダーは俺。依頼の報酬は折半。自分の報酬から私への返済をしてくれ。さっきも言ったが、その金貨二百枚は、ある時払いの催促なしだ。受ける依頼も、お前が反対するものは受けないということにしよう。二つ目が、そのお前の借金の返済の場に私も立ち会わせてもらうということだ」

「二つ目の条件は了承した。報酬が折半というのは魅力。だけど……二つ目の条件の意図は？」

「簡単な話だ。いみじくも君が言っただろう？ 新米冒険者の半分が一年以内に死ぬ。それは、魔物に殺されてということだけではない。借金を返すために冒険者になる。それは、よくある話のように思える。だが裏を返せば、新米冒険者をカモにするための口実の可能性もある。借金を返すために冒険者になったと言えば、動機はそれで十分だから。だから、君が実際に借金をしていたという事実を確認することによって、君が借金で首が回らなくなった冒険者を装っているのか、本当に金で困った冒険者なのか、それを確認したいのだ」

「お互いに信用してなかったということね」

「それは違う。信用とは実績によつて積み上げられるものだ。信用でできるできないは今のことではない。これからのことだ。俺を失望させるなよ。魔法には自信があるのだから？ アルシエ」

「分かったわ。パーティーに入るわ。あなたこそ、私を失望させないでね。それなりに腕が立つのでしょ？ モモン」

邂逅 4 【閲覧注意：飯テロ】

モモンガはアルシエに連れられて、高利貸屋へと向かっていた。

「いらっしやいませ。フルト家のお嬢様。お嬢様自らお店にいらっしやられるとは。申し付けていただけたら私の方から伺わせていただいたのですが」と、品が良いとは言えない商人が店の奥から出てきて、慇懃な挨拶をする。

アルシエが、フルト家、そしてお嬢様と呼ばれているところを見ると、ある程度出自はしっかりしているようだ、とモモンガは後ろで二人の話に耳を傾ける。

「お金の返済に来了。ただ、問題がある」とアルシエは言う。

「ほお。問題とは？」と、下品な笑みを浮かべている。まるで問題があるのが嬉しいようだ。

「この金貨での返済は可能？ ダメなら、別のところで帝国金貨に替えてから、返済するけれど」と、アルシエはユグドラシル金貨を一枚だけ商人に渡す。

「ほう……見たこともない金貨ですね。失礼ですが、調べてもよろしいですか？」

アルシエは、モモンガの反応を窺う。モモンガは、黙って首を縦に振り下ろす。

店の奥から出てきた別の従業員らしき人間が、アフレイザル・マジックアイテム道具鑑 定でユグドラシル金貨を

鑑定する。

「こ、これは純度百パーセント。こ、こんな金貨初めてみました。それにこの見事な刻印。これは美術品としての価値——「余計なことは言わなくて良い！」と商人が従業員を叱咤し、無理やり黙らせた。

「従業員が失礼をしました。魔法での鑑定では問題ないようです。あと、別の方法でも調べさせていただきます」

商人は、金貨三枚の重さを天秤で計った後、フチにギリギリまで水が入っているコップの中に金貨を三枚ほど沈めた。そして、コップから溢れた水を計量していた。

「比重を計測しても問題ありません。帝国金貨二百枚の重さと同じの金貨を頂ければこちらは問題ありません」と商人は笑顔で答える。

「ちよつと、それだとこちらが不公平じゃない。帝国金貨の純度は百じゃないでしょ？それに、さつき美術品の価値としてもあると言っていたじゃない」とアルシエは商人が提示した条件に反論をした。

「そう申されましたも、金貨は、美術品などではなく、あくまで金貨でございますから」「私は構わない。あと、商人。返済以外に、この金貨をいくらか帝国金貨に替えてもらつてよいかな？」とモモンガは後ろから口を出した。

「もちろんです。ですが、失礼ですが、あなたは？」

「私か？ アルシエと同じ冒険者チームのメンバーのモモンダ。仲間が世話になったよ
うだな」とモモンガは腕を組みながら答える。

「冒険者……。ああ、なるほど、それでお嬢様も銅のプレートを首から下げられていたの
ですね。何かのアクセサリーとばかり考えておりました」と、商人は言う。

どうせ最初から気づいていたにも拘らず、すつ呆けているような感じ。利に敏い商人
ではあるのだろうが、信用できるかといえ、その答えはモモンガとしてはノーである。
できれば、個人的に取引をしたくはなかった。

商人にユグドラシルの金貨を渡し、アルシエの借金は完済した。

「またご資金をご入用の際は、御鼻肩していただけると嬉しいですよ」と商人は丁寧な対応
をする。

モモンガはいけ好かない奴だと思った。

さて、次はチームの拠点とすべき場所を探すということになる。端的に言ってしまう
ば、冒険者チームのたまり場である。

アルシエは自宅が帝都の中にあり、そこで寝泊りはするということであった。そし
て、その実家の場所はモモンガには教えたくはないらしい。

モモンガも、アルシエの実家は、帝都のなかでも清閑な住宅地域にあるのだろうかと思

想はできたし、別に実家の場所などに興味もない。また、モモンガ自身も探られたくない分、アルシエのことは探らない。

石畳の道を進んでいく。先ほどの高利貸屋があつた一帯は、どちらかと言うと町全体が荘厳であり、品を重んじるような建物であつた。それが、道を進んでいくと徐々に庶民的な色合いの建物が増えていき、人と通りが多い町並みへと変わっていく。

「このお店なんてどうかな？」『歌う林檎亭』。一階が酒場になつていて、打ち合わせなどする時に便利だと思う。それに、アーウインタールのグルメ情報誌に、料理が美味しいと何度も掲載されていた」と、アルシエが一つの店の前で立ち止まった。

外見は年季の入つた建物のようなのである。また、まだ夕方前だと言うのに、酒場では冒険者らしき姿の者たちが飲み始めている。評判が良いというのは本当であろう。

「そうだ、アルシエ。一つ言い忘れていたことがある。私は、飲食不要のマジックアイテムを装備している。だから、食事に関しては考慮しなくても良い」とモモンガは説明しておく。今後、行動を共にするのであれば、飲食の問題が発生するだろう。同じ釜の飯を食べる仲間という言葉があるように、一緒に食事をするというのは、結束を固める良い機会だ。しかし、その食事をまったく自分がしないということであれば、アルシエは必ず不審がるはずだ。あらかじめ問題になる可能性がある事柄は対処しておくべきで

あろう。

「そんなマジックアイテムがあるんだ。でも、食事って、人生の楽しみの一つだと思っけれど」とアルシエは、店から漂ってくる匂いにお腹を空かせているようだ。そういえば、冒険者組合の講習が終わってから移動しっぱなしで、食事をしていない。人間であれば、お腹が当然空くであろう。

「確かに。だが、俺の飲食不要のマジックアイテムの不便なところは、一度装備すると取り外せなくて、しかも一回でも飲食をしてしまうと、壊れてしまうところだ。取り外しができるのであれば、食事を楽しみたいところではあるが、いかんせん、もう二度と入手できるか分からないほど貴重なマジックアイテムだからな」とモモンガは答える。これだけ説明をしておけば、今後怪しまれることはないであろうとモモンガは考える。あと、睡眠が不要ということは、狸寝入りでもしておけば隠せるであろう。また、不労ということは、無尽蔵の体力とでもいえばよいだろう。

「飲食不要というメリットは大きいけど、その分デメリットも大きい。私にはちよつと無理な装備かな」とアルシエはしみじみと言う。

「まあ、子供はたくさん食べて、大きく育つべきだ」

「ちよつと。同じチームのメンバーになったのだから、子供扱いとかはしないのが冒険者としてのルールだと思う」とアルシエは少しばかり不満そうに口を尖らす。

「子供扱いをされてムキになって反論するところが子供だ。よし、この店に入ってみよう。考慮すべきは、宿泊の値段と、この店の料理がアルシエの舌に合うかどうかだな。チーム結成の記念と言うことで、私をご馳走しよう」とモモンガは言つて、そのまま『歌う林檎亭』の中へと入つていく。

酒場の真ん中のテーブルを通され、アルシエは早めの夕食ということで、本日のお勧めであるメニューを頼んだ。モモンガは、形だけエールを一杯頼んだ。

「ちよつと打ち合わせをするには、騒々しくはないか？」とモモンガは言うが、「夕方、仕事を終えた冒険者やワーカーなどが飲みに来ているからだと思う。朝なんかはもう少し静かだと思う」

モモンガとアルシエは、今後のチームの方針や、依頼を受注する方針などを話し合う。アルシエとしては、出来るだけ高額の報酬を受注しながらも、より上位のプレートを得るようにしていきたいというものだった。もちろんモモンガもそれに賛成をした。

特に揉めることなく話し合いが順調に進む中、『歌う林檎亭』の店員が、アルシエの前に料理を置く。

そして、その料理にモモンガは驚く。

きつね色にコンガリと焼けた衣（ころも）。千切りにされたキャベツの上に置いてある。

「アルシエ。これは、なんとと言う料理なのだ？」と思わずモモンガは尋ねる。

「これは、トンクワーツと呼ばれる伝統料理だけど?」

「豚カツではなく、トンクワーツか?」

「トンクワーツよ」と言いながらアルシエは待ちきれない様子で、瓶に詰められていたソースをかけて口へと運び、ああ美味しい、と満足そうな笑みを浮かべる。

「トンクワーツか……」

豚カツとトンクワーツ。何となく発音が似ている。偶然の一致か? とモモンガは考える。だが、千切りされたキャベツの上に置くなど、妙に細かいところで似ている。いや、似すぎている。違いと言えば、白ご飯がないということだろう。

まさか、この世界にもプレイヤーが存在したということなのか? モモンガはその可能性を考慮する。確かに、自分だけこの世界に転移したという風に考える方が不自然だ。ユグドラシルの最終日、ログインしていたのは自分だけではない。

「どうしたの? 黙っちゃって?」と、千切りキャベツにソースをかけながらアルシエは尋ねる。

「いや、俺の故郷にも似た料理があつてな。驚いているだけだ」

「へえ。じゃあ、こういう食べ方は知ってる? このトンクワーツという料理のお得な点なのけど、ソースをかけて食べるだけではなくて、この小皿にのっている塩を一つまみ振りかけて、それだけで食べるの。そうすると、衣の中にぎゅっと凝縮されていた

お肉の旨みが、口に入れた瞬間、じゅわあと口に広がって最高なの。うつすらとした塩味が、より一層お肉の味を引き立てるのよ」

「なるほど。白ご飯と一緒に食いたくなるな」

「白ご飯？ 何それ？」

「米という食材を炊いたものだ。俺の故郷では主食だったのだがな」

「へえ。帝国では少なくとも、主食はパンかな。トンクワーツを食べる時にはパンは食べないけど」

「そうか。米はやはりないのだろうか。しかしそれは残念だな。TKGたまごかけごはんという、料理を

味わえないのだからな」

「TKG？ どんな料理なの？」

「一言でいえば、ご馳走だ。炊きたての白ご飯を茶碗に盛りつけ、そして湯気立つご飯の真ん中に箸という物を使って、穴を空ける。そしてその穴の中に新鮮な卵を割って入れて、醤油という物を垂らすのだ……」

モモンガは、TKGたまごかけごはんを思い出し、出るはずのない唾液が出るのを感じる。

「その醤油というのをかけて、それで？」とアルシエは興味津々な様子で尋ねる。

「それらを一気に箸で掻き回し、口の中へとかき込み入れるのだ。これが美味しいんだ」とモモンガは思わず熱く語ってしまう。

「米とか醤油とか聞いたことのない食材。本当にモモンは、遠い場所からきたんだ」とアルシエはしみじみとトクワーツを一切れ口へと運びながら言う。

モモンガも、食事をすることはできないが、なかなか楽しい団欒の時であると感じていた。そんなとき、突然、『歌う林檎亭』の中から荒々しい声が響いた。

「もう満席じゃねえかよ。待たなきやいけないのか。こっちは腹減っているつてのによ……。つて、そこのお前等、銅プレートじゃねえか。銅プレートのくせに、この店で飯を食うなんざ、身分不相応だぜ。俺達に席を譲れ」と、自らのプレートを見せつけながら、冒険者らしき風貌の男達が、モモンガとアルシエを威嚇するように睨み付けていた。

邂逅 5

「白金……」とアルシエは絡んできた冒険者のプレートを見て呟く。アダマンタイト、オリハルコンには及ばないものの、その実力はそのプレートが証明している。今日冒険者に成りたての銅カッパとは、雲泥の差であろう。

銅プレートの冒険者からしたら、白金冒険者に話しかけられただけでも少し自慢できるほどであろう。駆け出しの冒険者にとっては憧れの存在であろう。

そんな存在の、白金冒険者が席を空けると言っている。これは、即座に退かなければならない。アルシエは、最期に食べようと思つて残しておいたトンクワーツ二切れを急いで口の中へと運ぶ。

「こちらがまだ食事中だということが分からないのか？ そんな幼稚な観察力で、よくこれまで生き残つてくれたな。だが、運はいつまでも続かないぞ？」とモモンガが言う。え、モモン、何を言っているの？ とアルシエは焦るが、周りはそうではなかった。

モモンガのその発言を受けて、他のテーブルで食事をしていたワーカーたちから笑いが漏れる。モモンガを馬鹿にしているわけではなく、白金ブラチナの冒険者を嘲笑っている。笑っているワーカーたちも実力者だ。実力で比較すれば、金ゴールド級はある者たちだ。自分

たちに火の粉が降りかかってきても、それを払えるだけの實力は持っている。そんな彼らが笑いだす。

恥をかいたのは、白金冒険者たちであった。

モモンガから言い返されてしまった男は、顔が紅潮し、怒りで額に血管が浮かんでい

る。
「てめえ。もう一回言ってみろ。もう土下座程度ではすまさねえぜ？」とモモンガの前まで勇んで歩き、そしてモモンガを見下ろす形でガン付けながら言う。

「ははは」とモモンガは大声で笑い始める。

「何が可笑しいんだ？」とさらに冒険者の怒りのボルテージが上がっていく。

「いやいや、許してくれ。あまりに雑魚に相応しい台詞に笑いをこらえ切れなかった。幼稚な観察力で、本当に、よくこれまで生き残ってこれたな。喧嘩を売る相手の實力も正しく把握できないのだからな」

「てめえ」とキレた男は、モモンガが兜を付けているのに拘らず、右手を引いて思いつきり殴ろうとする。

が、その右手はモモンガの右手によって受け止められる。そして、モモンガは相手の右手を掴んだまま、自らの右手に力を込めていく。

「痛てえええ」と、白金冒険者が叫び声をあげる。モモンガの握力によって、その冒険者

の右手は握りつぶされる寸前だ。

「口ほどでもないな。お前でなら、遊ぶ程度の力も出さなくてもよさそうだな」とモモンガは一気に相手の胸ぐらを掴み、そして『歌う林檎亭』の奥へと投げ飛ばす。

「で？ 残りの連中はどうするんだ？」

「いや、俺たちは……」と残りの白金冒険者たちは、ゆっくりと後ずさりをし、そして『歌う林檎亭』から逃げ出して行ってしまった。

アルシエを含め、『歌う林檎亭』にいるメンバーは、銅プレートがあつさりと白金プレートブラチナの冒険者を投げ飛ばしたことに驚く。

「口ほどにもない連中だな」とモモンガは逃げ去っていく冒険者の背中を眺めながら、再び椅子に座ろうとした時……

「もし。その銅カッパの殿方」と、『歌う林檎亭』の奥から透き通るような声が響いた。

そして、奥の方からゆっくりと長い黄金色の髪をなびかせながら、一人の女性がモモンガへと近寄る。優雅に歩きながらも、碧色の瞳は冷静にモモンガを見つめている。

「貴方のせいで、私の治癒薬が割れてしまいました。落とし前を付けさせていただきます」

「やべえ。あれは、”重爆”だぞ……」と、小声で周りのワーカーが囁き、『歌う林檎亭』の中が静まりかえる。

「治療薬？」

「私の負った呪いを解く、貴重な霊薬を使った特製の薬です。ようやく手に入れたというのに、それを貴方が割ってしまったのです」と淡々と語る。

「それならば、先に喧嘩を売ってきたあいつに請求したらどうだ？」と、モモンガが先ほど投げ飛ばしてた男の方へと顎を動かす。

「もう、彼は殺しました。私の治療薬を割ったのですから……」

先ほどまで興味津々に見ていたワーカーも静まり返っている。帝国四騎士の一人、重爆、レイナース・ロックブルズ。四騎士に就任したのも、自らの呪いを解くためであり、呪いを解くためには、皇帝さえも裏切ると言われている女である。『歌う林檎亭』にいる誰もが、銅プレート冒険者の死を確信していた。

「そうか……で、どんな呪いなのだ？」と口を開いたのはモモンガだった。

「あなたがそれを聞いてどうする？」とレイナースは碧眼の瞳を細め、そして首を傾げる。

「呪いと一口に言っても、バッドステータスであろう？　鈍足化スロウなどの行動阻害から能

力値ペナルティまで、いろいろあるだろう。要は、治療薬を寄越せと言いたいのだろうか？　どのバッドステータスだ？」とモモンガは呆れる。

さっきの冒険者といい、こいつといい、どうして難癖付けてからんでくるのだ？　容

赦ない異形種PK以外はそれなりにマナーがあつたぞと、ユグドラシル時代の民度の高さを懐かしむ。

しばらくの沈黙ののち、女は顔の右半分を覆い隠して髪を持ち上げ、そしてそれをまたすぐに隠した。

皮膚が醜く歪み爛れ、薄茶色の膿がその皮膚から分泌されていた。

アルシエは、思わず顔を背けた。そして、その醜悪さから胃がむせ返り、先ほど平らげたトンクワーツが胃から口へと逆流しそうになる。吐いたら間違い無く殺されると、アルシエは手で口を必死に押さえる。

「そういう事情であつたとはな。恥をかかせて済まない」とモモンガは頭を下げてまず謝罪をした。顔は女性の命だという言葉がある。髪の毛で隠そうとする気持ちも分かる。それを公の前で晒せと言つた。それは知らぬとはいえ許されることではないように思えた。

モモンガは、ヒポクラテスの霊薬を無限の背負い袋インフィニティ・バックザツクから取り出して渡す。

「これで問題なく治癒されるはずだ。万が一、治らなかつたら、冒険者組合まで訪ねてきてくれ。俺の名前はモモンダ。アルシエ、食べ終わったのなら行くぞ」とモモンガは言う。

そして、親指に乗せた金貨をピンと弾いた。その金貨は、空中でくるくると回り、そ

してやがて、『歌う林檎亭』の給仕の手の中へと落ちた。

「迷惑料込みだ。釣りはいらぬい」

外へと出るモモンガの後を慌てて追うアルシエ。残された『歌う林檎亭』の中の人々は、ただ呆気にとられたままであつた。

〈高利貸屋〉

商人は、笑いが止まらなかつた。フルト家のお嬢様が持ち込んだ金貨。これは、美術的な価値も高い。また、純度が百パーセントの金貨など、帝国の技術、いやドワーフの技術でも鑄造することは不可能であろう。希少性も高い。これは、通常の金貨よりも価値のある金貨だ。上手に捌けば、同じ重量の金貨よりも五倍、十倍の価値で売りさばくことができるであろう。

そして、さらに笑いが止まらないのは、フルト家のお嬢様が冒険者となつたことだ。彼女は魔法学院で優秀であるという噂を聞いていた。冒険者となつたのであれば、それなりの収入が見込めるであろう。

そして、一緒に来た全身甲冑の男。彼が、金貨の出どころであることは間違いがない。装備も、素人の目から見ても高価なものであろうことが分かつた。

フルト家。そろそろ金を回収し、屋敷など全財産を巻き上げるタイミングであろうと

思っていたが、娘が冒険者となつて稼ぐのであれば話は別だ。借金も全額返済されてしまったが、あの、貴族であつた頃のことを忘れられない二人なら、直ぐにまた借金をさせることが可能だ。

由緒正しきとか、帝国貴族に相応しい、など適当な枕詞を付けてやれば、相場よりも高い値段を提示しても、値切りもせずに購入してくれる。

当面は、また、金貨二百枚まで貸し込んでみるか、と商人は考える。理想的な状況は、あのお嬢様が冒険者として働いて稼いでくる金額と同等の利息を取れることだ。そうすればずっと、甘い蜜を吸つていられる。そして、お嬢様に何かあつた場合、借金の回収に動き、フルト家の身ぐるみ剥げば良い。

また、何処かの貴族様と一緒にフルト家に行つて、商品売りつけさせよう。まったくぼろい商売だ。

商人は笑いが止まらなかつた。

〈レイナース自宅〉

レイナースは半信半疑だつた。『歌う林檎亭』での出来事。銅プレートの冒険者モモンから渡された治療薬。美術品のように精巧な透明の瓶に入っている薄ピンク色の液体。化粧箱の前に並べてある香水瓶よりも美しい。見事なまでガラス瓶。この容器を見ただけで、この薬が有効である可能性が高いように思える。

やっと手に入れたと思った治療薬を割られた時は怒り狂った。しかし、目の前にあるのは別の薬。『歌う林檎亭』での出来事が、本当に現実の出来事なのか疑ってしまう。

暫しの逡巡の後、レイナースは、普段、閉めつぱなしになっているドレッサーの観音開き式の鏡を開き、その前に座る。そして、目を閉じ、一気にそれを飲み干した。まるでアルコール度数の高いお酒を飲んでるように、口から胃までが一気に熱くなる。そしてその熱さが体の中全体へと広がる。

やがて体から熱が引いていく。

レイナースは目を開けた。そして、顔の右半分を覆い隠している髪をかき上げる。

「嘘……」

呪いは消えていた。呪いを受ける前と変わらぬ顔。レイナースはドレッサーの前で、鏡に映っている自分の姿が信じられなかった。

どれくらい鏡の前に座っていたであろうか。不思議と涙は出なかった。

レイナースはドレッサーの引き出しの奥に仕舞ってある日記を取り出し、最初のページを開く。

自分がやるべき三つのことが簡条書きで書かれている。

一つ、自らの呪いを解く

一つ、自分を追放した実家に復讐する

一つ、自分を棄てた婚約者に復讐をする

その一番上、『自らの呪いを解く』の上に二重線を引く。自分のやるべき事は、あと二つ。

日記の表はどうやって三つの目標を達成するかについて書かれている。どうやって復讐してやろうか。自分が想像し、実現できそうな復讐の方法を書き連ねている。

レイナースは、日記を裏返す。そして後ろのページを開く。後ろからは、この呪いが解けたらどうするかが書き連ねている。

『夜会巻きにして、大胆なドレスを着て、踊りたい』

『髪が流されることを気にせず、馬に乗りしたい』

『恋をして、結婚をしたい』

『お洒落をして帝都の大通りを歩き、何人の男が振り返ったかをこっそり数えたい』

『看板娘になつてみたい』

呪いが解けたらやろうと思っていたことを見返した、レイナースは天井を見つめる。

さて、明日は何をしよう。

そして、ふっと、思う。

明日は何をしよう。そんなことを考えたのは、久しぶりだ。何をしたいか、何をすべきか。

レイナースは、長いこと天井を見つめながら考えていた。

遭遇

遭遇

1

早朝、冒険者組合でモモンとアルシエほどの依頼を受けるかを、冒険者組合のテーブルで議論していた。

問題は、銅^{カッパ}への依頼は特段受注すべきものがないということだ。同じ仕事を依頼するなら、ワーカーへ依頼した方が金額的に安いというのが理由だ。

「銅^{カッパ}だと、採取の依頼とかしかなないみたい。後は、討伐依頼の荷物持ちとか。でも、荷物持ちは、拘束時間が長い割に実りが少ない感じね。せめて、採取と巡回任務が掛け持ち出来ればいいのだけど、巡回任務は銅^{カッパ}では受注できない。とりあえず、この採取依頼が一番割がいいと思う」とアルシエはため息交じりに言った。

モモンの強さは、昨日の『歌う林檎亭』の一件で十分に分かった。自分も魔法の腕には自信がある。高額な報酬の仕事を受けて、早く、クーデリカとウレイリカを連れて家を出て生活できるだけの纏まったお金、そして生活基盤を手に入れたい。だが、冒険者組合というルールがそれを邪魔をする。冒険者組合は、実力重視ではなく、実績重視だ。どんなに実力が認められていても、昇格試験を合格しなければ上のプレートに行くこと

ができない。依頼を達成したという実績を積み上げるには、多くの依頼をこなさなければならぬが、拘束時間が多い。アルシエは不満だった。

「最初は地道にやっけて行くしかないだろうな。まあ、駆け出しなんてそんなものさ。腐らずやっつていこう」とモモンガは言った。現実世界でも、新入社員に鈴木悟が言ったことがある言葉だった。

まるで入社したての新入社員だな、とアルシエのガツカリした様子を見ながらモモンガは思う。会社に入って、大きな仕事をできると思っていたら、任されるのは、地味で泥臭い仕事。本人的には残念かも知れないが、会社だって馬鹿ではない。いきなり重要な仕事を任したりはしない。

モモンガとしては、冒険者組合というのもしつかりとした組織のような印象を受ける。駆け出しの冒険者に回ってくるのは、地味で泥臭い仕事であるのが当たり前だ。銅プレートプレートの冒険者に任されるのが地味な仕事であればあるほど、冒険者組合が信頼できるといふものだ。

「じゃあ、今日は一日中採取ですね。私達が銀シルバープレートなら、この採取場所近くに出没する魔物の討伐も一緒に受注して、うまく魔物と遭遇できれば、五倍の報酬を得られるのに」とアルシエは頬を膨らまして不満を露わにする。

……危険な兆候だな……

モモンガはそう思う。

俺にだって私にだってあのくらの仕事ならできる。そんなことを考えていると、任された目の前の仕事がおろそかになる。

昨日の一件で、自分の実力をある程度アルシエが評価してくれているのは嬉しい誤算だ。しかし、強いからと言って、それが全てではない。良くない傾向だとモモンガは考える。

「あの、モモン様とアルシエ様でしょうか？」と、突然、後ろから冒険者組合の受付嬢が話しかけてきた。

「そうだけど？」とアルシエが答える。

「お二人に、指名依頼が入っております」

「え？ 私達に？」とアルシエは驚きつつも嬉しそうだ。

指名依頼。それは、依頼者からの名指しの依頼だ。冒険者として名が売れたり、依頼者に気に入られないと名指し依頼はされない。だが、その分、報酬は良い。

「すまないが、その指名依頼は断らせていただく」とモモンガは即答する。

「え？ 指名依頼だよ？ それに、断るにしても、内容を聞いてからにしようよ」とアルシエは不満そうに言う。

「すまないが、その必要はない。その指名依頼は断る。代わりに、この依頼を受ける」と

モモンガはアルシエがテーブルに置いていた採取依頼を受付嬢に渡した。

「モモン！」

「お互いの同意がなければ、依頼を受注しない約束だったはずだ。俺は、どんな好条件であれ、この指名依頼は受けない。だから、内容を聞いても聞かなくても結果は同じだ」とモモンガはアルシエに言い、そして「この依頼の手続きに入ってくれ」と受付嬢に言った。

「畏まりました」と受付嬢はカウンターへと戻っていく。

「勿体ない！ せっかくの指名依頼なのに！ あの指名依頼だって、昨日の『歌う林檎亭』の一件で、モモンに白金プラチナ以上の実力があるって示したからでしょ？ それに、昨日の一件を聞いた人達は、モモンを、〃釣りはいらぬ〃モモンって、呼んでるんだよ。

冒険者になって初日で二つ名を持てる冒険者なんて滅多にいないし、それで指名依頼が入ったんだよ」

「え？ 俺の二つ名がなんだったって？」

「〃釣りはいらぬ〃モモン、よ。チャンスを棒に振ったと思う」とアルシエは腕を組んで、頬を一杯一杯に膨らませている。

「おいおい。『釣りはいらぬ〃モモン』か。なんだ、その格好良すぎる二つ名は……。そうか、昨日の俺の去り際が良かったのだな。名言ってやつか……。いや、浮か

れている場合では無い。

「確かに、腕を見込んでくれての指名依頼なら嬉しいがな。だが、そうで無い場合の方が大きいだろう」

「え？」

「昨日の一件で恥をかいだ冒険者が画策して、俺達を罠に嵌めるための指名依頼の可能性がある。たとえば、指名依頼をした人物と結託して、人気の無い場所へと俺達を移動させる。そして、昨日のあの雑魚どもが俺達を襲う……。昨日の一件への復讐。そういうことも考えられないか？」

「それは冒険者のルールに違反するじゃない」

「それが露呈したら……。だろ？ 死人に口なしだ」

「そう……。その可能性が高いの？」とアルシエは、机に顔を寄せ、小声でモモンに話しかける。他の冒険者に聞かれないようにするためだ。

「いや、可能性の話だがな。まあ、旨い話に飛びつく前に、熟考しろという話だ」

「う……。ん」と、アルシエは再び腕を組み、難しい顔をする。

「まあ、地道にやるしかないって話だ。しかし……。銅プレートが大きな依頼を受ける場合って、指名依頼以外にあるのか？」とモモンガは尋ねる。

「有るにはあるだろうけど……。それは、あまり現実的ではないかな」

「ほう？　どんな場合だ？」

「他国の侵略とか、魔物の侵攻とか、帝国の騎士を含め、冒険者やワーカーが総力戦で対処しなければならぬ場合かな。でも、そんなのめつたなことではおきない。王国との定期的な戦争以外は、帝国は平和だもの」とアルシエは言う。

「ほう……魔物の侵攻な……なるほど。さて、議論は終わりだ。そろそろ依頼に行くぞ」とモモンガは立ち上がる。

その日の依頼を終えた後、アルシエと別れ、モモンガは自分が宿泊している宿へと帰る。だが、モモンガの足は、人気のない場所へと向かい続ける。そして辿り着いた場所は、墓場だった。

「おい、いつまで人の尻を追っかけているつもりだ？」とモモンガは人気のない墓場の中心で振り返る。

「昨日の借りを返しに来たぜ。『釣りはいらぬ』モモン』とか、二つ名で呼ばれて調子ぶっこいてんじやねえぞ？　墓場とは都合が良い。てめえの死体はこの場所に埋めてやるからな」と、昨日の『歌う林檎亭』で逃げ出した白金^{プラチナ}プレートの冒険者たちだ。それ以外にも、見覚えのない冒険者の姿があった。各々、武器を既に抜いている。

「ちようど良い。俺も、死体が必要だと考えていたところだ」とモモンガは静かに答え

た。

〈レイナース〉

帝都アーウィンタールのもっとも高い場所。皇帝の住む城にある見張り塔。その塔の最上階に、地平線から顔を出した太陽が光を注ぐ。帝都に朝がやってきた。

レイナースの自宅は、市場へと続く道に面している。もう、朝市で販売するための食料などを運ぶ人達の声が、部屋まで響いてくる。レイナースは、人々の活気ある声、悪く言えば喧騒で目が覚める。そしてベッドから起き上がり、鏡へと向かう。

昨日のことは夢ではなかった。ほっと安心して、レイナースは、騎士として登城するための朝の準備を始める。

ドレッサーの引き出しから日記を取り出す。そして裏側のページをパラパラとめくり、そしてとあるページで目を止めた。そしてそのページに葉しおりを挟む。

そして、髪型はいつものように、右半分を隠す。呪いが消えたから別の髪型にしたいという気持ちが無いわけではないが、その気持ちを抑える。

「レイナース様、おはようございます」

城の入口を警備している衛兵二人が、レイナースの姿に気づいて、直立不動となり、挨拶をする。

帝国貴族などが登城する際には、皇帝の権力を、貴族は皇帝の配下であることを示すために、入口の衛兵に所持品を検査される。しかし、レイナースは帝国四騎士の一人だ。顔パスで通るといふ特権が認められている。

「ごきげんよう」

呆気にとられた兵士は思わず持っていた槍を倒してしまいそうだった。レイナースは、微笑みと共に衛兵たちに挨拶を返して、城の奥へと入っていく。

レイナースの姿が見えなくなったことを確認し、城門の左右に立っていた衛兵が城門の中央に駆け寄る。

「なあ、レイナース様が挨拶を返してくださいましたように聞こえたのだが、俺の空耳か？」
「いや、俺にも同じ空耳が聞こえたぞ。あと、レイナース様、微笑まれたかのように見えただぞ」

レイナースはいつも、氷のように冷たい無表情で下級騎士の挨拶など歯牙にもかけなかった。それが、にこやかに挨拶を返す。

「今日、天気良いけど、雨降るのかなあ」

「雨ならいいけど、アンデッドでも降るんじゃないか？」と二人の衛兵は心配そうに空を見上げた。

—城内—

綺麗に磨かれた大理石の廊下をレイナースは歩き、自らが警備すべき場所へと向かう。そして廊下の反対側からは皇帝ジルクニフと主席魔法使いフルルーダが歩いて来ている。

レイナースは、皇帝の邪魔にならないようにと廊下の端により、軽く頭を下げて皇帝が通り過ぎるのを待つ。

ジルクニフとフルルーダは歩きながら軍隊での魔術詠唱者マジックキャスターの編成について打合せをしているようであった。

「おはよう。レイナース」とジルクニフは言った。

「皇帝閣下、ご機嫌麗しく」とレイナースも挨拶をする。

いつも通りの挨拶が行われ、ふっと皇帝が立ち止まって、レイナースの方へと振り返る。

「レイナース、何か良いことでもあったか？」

「良いことございませんか？」とレイナースは首を傾げ、そしてすぐに、「帝国が今日も

平和なことをごさいますでしょうか。それもすべては皇帝陛下の良き治世の賜物でございます」と微笑みながらレイナースは答える。

「それは私の力だけでは無い。お前たち帝国四騎士や他の騎士たちが帝国を守っていてくれているからでもある。これからもよろしく頼むぞ」とジルクニフも微笑み返し、そしてまた廊下を歩いていった。

レイナースは、勤務を終えて自宅に帰ってきてドレッサーの前に再び座る。そして、日記の葉しおりが挟まっているページを開いた。

『呪いが解けても、誰にも言わないで普通に過ごす。誰が最初に気づくかなあ』

第一予想：皇帝。

自称、女の扱いに慣れてる爽やかハンサム男。城内メイドが髪型を変えたりしたら、目ざとくそれを褒めたりして、点数稼ぎをしているし、誰よりも早く気付くかも。でも、呪いが解けたら私が帝国四騎士を辞める可能性を考えて、敢えて気付かない振りをする可能性もあるズルい男。

第二予想：雷光。

我らがリーダー。平民出身とかなんとか言つて、ガサツぶつてるけど、配慮が行き届いた人。たぶん、気付いたとしても私から打ち明けてくるまで何も言わなそう。

第三予想：不動。

本人は何も悪くないのだけど、いつも貧乏くじを引いちやう人。気付いた瞬間に即座に私に言つてくると予想。だけど、そのことを後から、皇帝とかバジウツドに、なんで気付かない振りをしなかつたんだ！ と怒られる不憫な人。

絶対気付かない人：主席魔法使い。

魔法にしかない興味ない狂人。私が男の格好していたとしても、たぶんそれに気付かない程の変態。むしろ、魔法的方法で治療したと知ったら、しつこく絡んできそう。』

遭遇 2 【閲覧注意：鬱展開】

「ただいま」とアルシエは自宅の扉を開く。

「お帰りなさいませ、アルシエお嬢様」と、ジャイムスがアルシエを出迎える。

「妹達は？」

「もう既にお休みになられておいでです」

「そう……」

後で、こつそり妹達の寝室に行つて、寝顔を眺めて癒やされようとアルシエは考える。流石に今日は、採取をするために、ずっと腰を曲げている状態だったから、腰が痛い。商品価値を下げないために、丁寧に採取しなければならなかったのも、アルシエの神経をすり減らしていた。そして、モモンは、採取をしている最中、まったく休憩ということをしなかった。黙々と採取を一日中続けていた。休憩をしましよと言ひ出すことも憚られ、体に鞭を打ちながらアルシエは一日中動き続けた。モモンは、白金プレート以上の実力があるということは明確だ。自分は第三位階魔法が使えるとはいへ、足を引つ張るようなことは避けたかった。

「アルシエ、帰ったのかー」と、二階の奥の廊下から怒りが混じった父親の声が響いた。

そして、階段を降りてアルシエのいるエントランスに降りてきた。

「ただいま戻りました。お父様」とアルシエは挨拶をする。

「魔法学院を退学して、冒険者になったそうだな。間違いないか？」

「……はい」とアルシエは答えると同時に、疑問が頭を過ぎる。浮き世離れた父が、なぜそんなに早く、私が冒険者になったことを知っているのでしょうか。

「このたわけ者が！ 貴族の娘が冒険者など、フルト家の恥晒しだ。それに、素顔を隠した怪しげな男と二人でチームを組んでいるだと！ 嫁入り前の娘がそんなことをするなど、一体何を考えている？ お転婆にも程がある！ そんなことをしているから『縁談』も断られてばかりなのだ！」

「あなた……。そんなに怒鳴ってはアルシエが可哀想じゃない」と母親が父親をなだめ、「でもね、アルシエ。冒険者などをして遊んでいる時間があるのなら、ダンスの練習をもっとして欲しいわ。いつ貴女に、舞踏会の招待状が来るか分からないのよ？ 最近、ダンスの練習をしていないでしょ？」と母親は優しくに語る。優しくアルシエを諭そうとしているのであろう。

「舞踏会の招待なんて、もう永遠に来ない……。もう家は貴族じゃない……。」とアルシエは弱々しく答える。没落した貴族家に舞踏会の招待状などが送られてくるはずが無い。すでに、フルト家は、貴族の社交会の外にはじき出された状態だ。フルト家に入ります

る貴族は、親睦やお茶会と称して、必ず商人を一緒に連れてくる。社交という名の商品販売会だ。そして、父親も母親も散財をしてしまう。

「違う！あの愚かな金髪の小僧が死ねば、フルト家は再興するのだ！見ろ、今日も、フルト家の財力と、金髪の小僧には屈しないという決意を見せつけてやったところだ。見ろ、あの見事な壺を！フルト家のエントランスを訪れたものは、この壺を見て、我がフルト家の財力に驚嘆するであろうな」と父親は熱っぽく語りながら、階段の横に置かれた壺を見た。

見覚えの無い壺だった。アルシエの背丈よりも大きな壺。白地に青色で文様が描かれている。描かれているのは、龍であろうか……。いや、そんなことを考えている場合ではない。

「何故そんな物を……そんな物を買うお金がどこから……」

アルシエの全身の力が抜けているのを感じる。目の前が真つ暗になった。目眩がした。やつと高利貸しからの借金は返せたのに……。

「ああ。今手持ちが無いと言ったら、貸してくれたよ。やはり、フルト家の信用は高いということだな。貴族とは、誇り高く、民から信用され、尊敬される存在であるべきだからな。それに見ろ、この珍しい金貨を！見事な彫り物であろう。それに、この金貨は純度百パーセントなのだ」とポケットから父親は金貨を取り出す。

「な、なぜその金貨を持っている……」

その金貨に見覚えがあった。つい昨日のことだ。モモンが持っていた金貨。そして、それで高利貸しに借金を返した。

「なぜ持っているか？ それは買ったからだよ」と父親は当然のことにように語る。

「いくらで……？」

「たしか金貨十枚だったかな」

アルシエの心が深い闇と怒りに蝕まれていく。昨日、モモンが出した金貨は、帝国金貨三枚分として借金の返済に充てた。それを父親が金貨十枚で買っている……。

「希少性の高い金貨だそうだ。一枚は私のコレクション用として、他は贈答用だ。帝国金貨を贈るのは無粋だが、この金貨を贈るのであれば、格式高かろう」と、父親はさらに四枚の金貨をポケットから出し、アルシエに見せびらかす。

「5枚……。金貨五十枚？」

商人は、帝国金貨15枚でその金貨を手に入れている。それを五十枚で買った？ なんと愚かな……。

「すぐに返してきて！ いや、私が返してくる！」とアルシエは父親からその金貨を奪おうと父親に掴み掛かる。

「な、何をする。この愚か者が！」

父親とアルシエの体格差がありすぎた。魔法を使わなければ、アルシエは弱い少女でしかない。父親に簡単にはねのけられ、アルシエは床に尻餅をついた。

「二人とも、喧嘩は止めて……」という母親の悲しそうな声がエントランスに響く。

「全く、どうしてこんな娘に育ってしまったのだ」と父親は吐き捨て、不機嫌そうに階段を上がっていく。

「アルシエ、大丈夫？」と母親が優しくアルシエに手を差し伸べる。アルシエはその差し出された手を弱々しく掴み起き上がる。

「アルシエにも、これを買っておいてあげたのよ」と、母親は、アルシエの目の前に、寶石の付いた髪飾りを見せる。金貨十枚はするであろう。母親はアルシエの前髪を優しく分けて、その髪飾りをアルシエに付けた。

「やっぱり思った通り。とつても可愛いわよ。これを付けていれば、きっと次の縁談で良い返事が貰えるわ」と、母親は優しくアルシエに微笑みかける。

「ありがとうございます。お母様……」

アルシエは、顔をクシヤクシヤにしながらも、無理に母親に笑ってみせた。

遭遇 3

〈冒険者組合〉

早朝、集合時間に集まったモモンガはテーブルの反対側に座っているアルシエを見つめていた。アルシエの真つ赤な目。目の下には隈が出来ている。どこか疲労感が漂っている。

「アルシエ、寝不足か？ 今日は雲一つない青空だ。あつい一日になる。体力勝負の一日になるだろう。これを飲んでおけ」とモモンガはポーシオンをアルシエに差し出す。「これがポーシオン？」とアルシエは、嫌な物でも見るかのような顔をした。血のような色のポーシオン。アルシエが知っているポーシオンの色では無かった。むしろ、縁談の前に両親がアルシエに飲ませる薬の色に似ている。気怠い体、疲れ切った体。そのうえに、縁談の夜の記憶が甦ってきて、食欲の無い中、胃の中に押し込んだ朝食が逆流しそうになる。モモンガが差し出してくる物。彼がポーシオンと言ったらポーシオンなのであろう。まだ、数日の付き合いではあるが、彼は誠実であるような印象だ。変な物を飲ませる筈はないということはアルシエにも分かる。

アルシエはモモンガが差し出すそれを受け取り、栓を開け、それを傾ける。一口、その

液体が喉を通っただけで、先ほどまでの倦怠感が嘘であったかのように消えていく。

「ありがとう……」

アルシエは、体の疲れが取れた分、気分も少しだけ軽くなったような気がした。アルシエの心の中は、真つ暗な雨雲が覆う空から、どんよりとした曇り空になったというところであろうか。

「気にするな。冒険者は体が資本だ。さて、今日の依頼だが……」

「あ、それならもう、めぼしい物はピックアップした。この三つの依頼のどれかじゃないかな」とアルシエは依頼書をテーブルの上に並べる。

「ほう。仕事が早いな」とモモンガは感心する。社会人の常識として、集合時間の十五分前に冒険者組合に姿を現したつもりであったが、そのとき既に建物の中にはアルシエの姿があった。時間を守れるということは信頼に値するとモモンガは思っていたが、アルシエはその想定の外に先を行っていた。アルシエはモモンガより早めに冒険者組合に来て、依頼の内容を吟味していたようだ。

「もう選んでいてくれたのか。感謝する。だが、今日は、依頼を受けずに、訓練でもしようじゃないか」

「訓練？」とアルシエは怪訝な顔をする。依頼をこなすために、モモンは自分にポーシヨンを差し出してくれたのではないのか。

「ああ。訓練だ。採取の依頼と言っても、魔物と遭遇する危険は常に付きまとう。そんな不測の事態に備えて、お互いの連携を確認しておきたいと思つてな。まあ、俺が前衛、アルシエが後衛ということになるだろう。だが、拙いコンビネーションで、仲間に背中を魔法で打たれるというような事態は避けたいからな」

「私が誤射するでも？」

「可能性の話だ。だが、拙い連携は無用な混乱を生む。冒険者チームとして、連携に磨きをかけていくのは当然だ」

「まあ、そうだろうけど……。私も簡単に魔物に抜かれてしまうような前衛は嫌だけど。で、どうするの？ 昨日も行つたけど……。討伐依頼は受けられないわよ」とアルシエは不満そうな顔をする。

「とりあえず待機だな」

「何それ……。それなら、採取の依頼をしながら、魔物と遭遇するのを待っていたほうが効率良い。ここに座っているだけでは、お金を入れてこない……。」とアルシエは言う。妹達と自分に必要なのは、金だ。

「それについては既に興味深い情報を入手している。恐らく、早い者勝ちということになるだろうがな。いつでも冒険者組合を飛び出せるように準備しておいてくれ」とモモングは自信満々に言った。

〈皇帝執務室〉

皇帝の朝は早い。大量の決裁待ちの書類が机に、夜の間にも山積みされている。皇帝はそれを明晰な頭脳で高速で処理をしていく。決裁すべき案件には玉爾を押捺。練り直しが必要な案件にはコメントを付して部署へと戻す。

ジルクニフが書類を処理している中、「陛下、失礼致します」と執務室に入ってきたのは、ロウネ・ヴァミリネンとフルーダであった。

ロウネ・ヴァミリネンは秘書として有能で有り、ジルクニフも彼の能力には信頼を置いていた。そして、フルーダは、自分の教育係をも務めてきた人物。今でも良き相談相手だ。

「レイナースの件だな？」とジルクニフは書類から目を離さずに尋ねた。

「はい。レイナースは治療薬を入手し、呪いの解除に成功したのは間違いありません。フルーダ様に協力を依頼し、魔法的手段で確認をしたので間違いありません」とロウネは淀みなく答える。

「意外とあっさり解除できたな。解除に難しい呪いであると聞いていたのだがな」とジルクニフはフルーダの方を一瞥した。

「魔法的手段であるなら、第六位階魔法以上が必要ですね。考えられるのは、どんな傷で

もたちまち回復できるといふ大治癒^{ヒーラル}。まあ、使える可能性があるのは、漆黑聖典の大神官くらいですか」とフールーダは右手で髭を触りながら答える。

「ああ。法国にレイナースの呪いの解除を依頼していたな。法国からの返事は来ていなかったはずだが？」

「未だに来ておらん」とフールーダも答える。

レイナースが帝国四騎士となった際、皇帝は法国にレイナースの呪い解除の協力要請を出していたが、法国はそれに対して沈黙していた。

正直なところ、ジルクニフとしては、レイナースの呪いなどどうでも良かった。むしろ、その呪いを解除できる能力を有した信仰系魔術詠唱者^{マジックキャスター}を法国が擁しているのか。戦力確認の一環として、レイナースの件を利用しただけだ。だから、年頃の女性である部下の呪いを何とかしたいという美談に仕立てあげて法国に親書を送った。

それに、法国が沈黙しているほうが都合が良い。法国から断るなり、応諾の返事があつた方がよつかいだ。断られたら、皇帝として別の方法を探すというアクションを起こさねばならない。応諾された場合ももつとよつかいだ。呪いが解除されたらレイナースは離反する可能性がある。

離反されるくらいなら、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフとレイナースを戦わせたほうが良い。レイナースが戦士長を討ち取ったならば、王国の戦力は著しく低下する。帝

国を離反したとしても、レイナーズが王国側にならないのであれば、相対的に帝国としては得をする。

「それで、レイナーズは一体どうやって呪いを解除したのだ？」

『歌う林檎亭』で、冒険者から薬をもらったということです。なんでも、冒険者同士のもめ事があり、レイナーズが自力で手に入れた治療薬をその冒険者がダメにしてしまったそうです。そして、ダメにした治療薬の代わりに冒険者が差し出した薬。それが呪いを解く効果があつたようです」とロウネが収集した情報を纏める。

「臭いな」とジルクニフは感想を述べる。

「まったくです。冒険者が代わりにと簡単に差し出せるような薬ではないですね。そんなに簡単に手に入れる治療薬なら、そもそも『重爆』が呪いを解除するのに苦労したりはしませんよ。金では買えない貴重な薬の筈です。それを都合良く冒険者が持つていた？ 偶然とは思えませんね」とロウネも答える。

「それで、その冒険者は？」

「モモンという銅カッパーの冒険者です。先日冒険者組合に登録したばかりということでした。ですが、白金プラチナの冒険者を簡単に投げ飛ばすほどの実力はあるとのことです」

「それに気になることがある……。そのモモンという冒険者、チームを組んだようなのですが、それが僕の教え子でしてな……」

「何？ どういうことだ？」

「アルシエという娘でしてな。私と同じ生まれながらの異能を持っております。魔法学院でもずば抜けて優秀であった娘であった。それが、魔法学院を退学し、冒険者となり、そのモモンという冒険者とチームを組んだようなのですぞ」とフルーダが残念そうに言う。

ジルクニフは、フルーダの口ぶりから、そのアルシエがどれほど優秀であるかを感じ取る。帝国は常に人材不足だ。他国からの人材流入は歓迎するが、人材流出は避けるべきだ。

「有能な魔術詠唱者の青田買いか。それに、帝国四騎士の一人、即戦力も引き抜こうとしているとはな。一体どここの国のスパイだ？ 帝国を舐めすぎだろ？ 殺せ」とジルクニフが怒りを露わにする。身分を問わず、実力がある者をジルクニフは登用してきた。帝都のあからさまな引き抜き行為。皇帝である自分を馬鹿にしていると思えない行動だ。

「陛下！ 緊急事態です！ 墓地に魔物が現れました。かなり強力な魔物です！ 情報では、死の騎士。死の騎士が五体現れました！」と近衛兵が緊急事態を伝えるために執務室へ飛び込んできた。

「死の騎士が五体？ あ、ありえない！」とフルーダが驚きの表情と共に呟く。

「死の騎士？ 魔法省の奥にいますと言われるアンデッドか！ まさか…… 死の螺旋」
 ? スーラーノーンか！」

たつた一体で帝国を危機的状況に追い込める、伝説級のアンデッドだと聞いた覚えがあつた。それが帝都に五体？ 帝都が壊滅するかも知れない。

「いや、それはあり得ない……。スーラーノーンの十二高弟の一人が、『死の螺旋』を目論んでいたが、三年前に王国の都市エ・ランテルに潜入したことを確認しておる。帝都では私がいる限り無理ですぞ」とフルーダは答える。

「ではなぜ伝説級のアンデッドが五体も帝都に！ いや……今は原因を考えても仕方が無いな。まずは、出来るだけの対処をするぞ。ロウネ、最悪の場合は遷都だ。それを考慮にいれて準備をしておけ。爺、どうすれば良い？」と、ジルクニフは頭を切り換えて、対策に乗り出す。

「厄介なのが、死の騎士が殺した相手は、従者の動死体となり、そして、従者の動死体が殺した相手は、動死体となること。こちらが数で押しても、逆効果で、いたずらに被害が大きくなる。選抜チームを組むことですね。死の騎士一体は、私と弟子達で対処する。長期戦になるであろうが……。あとは、帝国四騎士で一体抑えられるかどうかですかのお……」とフルーダは思案する。

「あとは、冒険者チームか。アダマンタイトの『銀糸鳥』と『漣八連』にも依頼を出せ

！ それに……武王かつ！ 至急依頼を出せ。それと、ロイヤル・アリス・ガード 皇室地護兵団とロイヤル・エア・ガード 皇室空護兵団に、墓地を囲むように展開させ、スクワイア・ゾンビ 従者の動死体や動死体ゾンビが市街地へと流れ込むことを防がせろ！ いや、私が直接指揮を執る。あとは……そうだな……オリハルコン、ミスリルの冒険者とそれと同等の実力のあるワーカーも墓地周辺の警備にあたらせろ！ 封じ込めるぞ！」とジルクニフは矢継ぎ早に指示を出していく。

〈冒険者組合〉

冒険者組合に、慌てて近衛兵が入ってきた。人間の争いへは不干渉という不文律を持つ冒険者組合に、帝国軍人が入ってくることは珍しい。その様子を、冒険者たちは何事かと興味津々に眺める。

「私は皇帝より依頼を賜った近衛兵だ。魔物が帝都の墓地に出現した！ アダマンタイトの『銀糸鳥』と『漣八連』に、至急墓地へと向かうように伝えてくれ！ また、オリハルコン、ミスリルの冒険者へ帝国は協力を要請する！ 報酬は期待して良い！ 急いでくれ！」とその近衛兵は叫ぶ。

その言葉を聞いたオリハルコン、ミスリルの冒険者は、即座にチームでの話し合い、各人の装備などの点検などを始める。また、『伝言』メッセージを使い、連絡を取り始めるなどをして、いる冒険者もいた。

そのような中、「何？ アダマンタイトとオリハルコンとミスリルの冒険者だけに依頼するだど……？」とモモンガは小声で呟いたのであった。

遭遇 4

モモンガは、オリハルコンやミスリルの冒険者たちが慌ただしく出て行く姿を寂しうに見つめる。

失態だ、とモモンガは心の中で思う。確かに、魔物が出現したとしたら、万全を期すために、実力が上位の者から割り当てられるのが普通だ。早い者勝ちなどにしたら、功を焦る駆け出し冒険者が勇み足となり、最悪死にかねないと考えるであろう。無用な混乱を避けるための措置として、上位冒険者から順に依頼をするのは、よく考えてみれば当たり前のことのように思えた。

五体では少なかったか……。下位の冒険者にまでお鉢が回ってくる数のアンデッドを創造すべきであったとモモンガは反省をする。せっかく死体があるのだからと、死体を利用してアンデッドを創造したが、それは軽率であったとモモンガは反省する。

経験値を消費してまでアンデッド創造をするのは考え物だが、スキルの回数制限は一日過ぎれば回復するのだから、下位アンデッドなども上限いっぱい創造しておくべきであっただろう。たとえば、アンデッドの数が多すぎた場合でも、一定時間経過すれば消えるであろうし、今回の死の騎士^{デス・ナイト}に与えたように、『墓地からは出るな』、『近づいてきた奴

を襲え、だが殺すな』という指示を与えておけば、無用な被害は避けることができる。

そうすればアルシエも安全であろうし、冒険者チームとしての連携の訓練もできる。そして、最終的には魔物討伐という成果も得ることができる。

また同じ冒険者として、またユグドラシルのプレイヤーとして、地味な採取などだけが楽しみ方ではなく、仲間と一緒に魔物を倒すということも楽しみの一つなのだ、アルシエに伝えるということもできれば良いと思っていた。ボッチプレイヤーでは、魔物を倒すのは作業化してしまいがちだが、仲間とであれば、最高の時間となる。

一石三鳥の作戦だと思ったのになあ。上手くいかないものだ。

「アルシエ。どうやら、私の見込みが甘かったらしい。採取の依頼に出かけよう。選んでくれた三つのどれでも私は構わない」と、モモンガはテーブルに未だに置いてある依頼書を見つめて言った。

「それじゃあ、これかな。採取場所が近場だし、運が悪いというか運が良ければ、森から迷い出てきているゴブリンと遭遇できるかも知れない」とアルシエは依頼書を一枚取り上げ、そして受付カウンターに持っていく。

ゴブリンか……。あまりにアルシエが退屈そうであったら、“ゴブリン将軍の角笛”をこっそり使ってみてもよいな。だが、見渡しのよい場所では少し難しいだろうな、と受付の手続きをしているアルシエの小さな背中を見ながらモモンガは思案に耽るので

あった。

〈墓地〉

墓地に現われた死デス・ナイトの騎士との戦いは、既に半日以上続いていた。いや、もはや、「戦い」と形容することの出来ないものであった。

帝国四騎士、武王、「銀糸鳥」と「漣八連」のメンバーたちは、傷つき地面に倒れていた。そして、まるで命ある存在を見下すように死デス・ナイトの騎士が四体立っている。

死デス・ナイトの騎士の一体は、フルーダ率いる魔術マジックキャスター詠唱者たちが、上空から魔法で攻撃を仕掛けているといった具合だ。

「ジル。三日はかかりますぞ。それも、一体に」と、魔力の回復のために戻ってきたフルーダが言った。フルーダ自身、自分の火ファイヤーボール球があまり効いていないように感じる。

「分かっている」とジルクニフは歯ぎしりをしながら答える。死デス・ナイトの騎士の強さなら、この六時間で思い知った。そして、現在は殲滅戦を放棄し、救出作戦、そして物量戦に移行していた。しかし、それが上手く進まない。

どうやら、この死デス・ナイトの騎士たちは、いたぶり殺すのが趣味なようである。身動きが取れない瀕死の状態へと追い込むが、止めは刺さない。傷つき、苦しんでいるのを見下して楽しんでるアンデッド。

「馬鹿にしやがって」と生命を持つ一人の人間として、ジルクニフは怒りを顔にする。そ

して、自らの失策を思う。

思い返せば、墓地で死の騎士^{デス・ナイト}が発見され、駆け付けたときも未だに死の騎士^{デス・ナイト}が墓地にいると分かったときに気づくべきであった。このアンデッドは何かがおかしいと。

通常のアンデッドであれば、生命を憎み、生命に反応して、人がいる場所へと雪崩れ込んでいくはずだ。巨体の割に、素早い動きをするこの死の騎士^{デス・ナイト}であれば、あつと言う間に帝都を駆け回り、蹂躪し、殺戮していたであろう。

だが、包囲が完了しても、死の騎士^{デス・ナイト}が動く気配は見えなかった。墓地にいる死の騎士^{デス・ナイト}を見た時に、間に合ったか、と安堵し、思考停止してしまったことをジルクニフは悔いていた。

ジルクニフは、この死の騎士^{デス・ナイト}は、一定の距離に近づいた時に襲ってくるという特性があることに気付いた。しかし、気付いた時にはあとの祭りだった。

襲つてこないのであれば、近づかなければ良い。墓地を封鎖して、フルーダ達に任せておけば、時間はかかったとしてもそれで事態は収拾できたであろう。しかし、その選択肢を選ぶには既に遅すぎた。

帝都壊滅の危機ということから、自分が陣頭指揮に立った。攻撃命令を下したのは自分だ。だが、その攻撃自体が、踏まなくても良い龍^{ドラゴン}の尻尾を踏んだということになる。

他の者達も、この死の騎士^{デス・ナイト}たちの不可解な特性に多くの者たちが気付いているである

う。

そして最大の問題は、帝国四騎士、武王、〃銀糸鳥〃と〃漣八連〃のメンバーたちが虫の息ではあるものの、まだ生きていてということだ。殺された、ということであれば、ある意味諦めることができる。しかし、生きている。

あの死の騎士デス・ナイトは近づかなければ安全。だから後は主席魔法使いたちが何とかする、他の者達は解散、というような選択肢は取れない。

そんなことをしたら、皇帝が愚かな攻撃命令を下し、徒いたずらに被害を増やした、ということになってしまう。

何者の仕業かは現状不明だが、死の騎士デス・ナイトの出現は、帝都を滅ぼすことが目的ではなく、皇帝の権威を失墜させるための策略なのではないかとさえ思う。そして、こんな陰険な策を考え付きそうなのは、実行できるかは別として、ジルクニフが知っている限り、リ・エステーゼ王国のラナー・ティエール・シャルドルン・ライル・ヴァイセルフぐらいであろう。

「チツ」とジルクニフは舌打ちをする。この帝都アーウィンタールの遙か西にある王都リ・エステーゼで、〃黄金〃のラナーがほくそ笑んでいる光景を想像してしまったからだ。

俺が嫌いな女の第一位は、黄金だな。格上げだ。考えてみれば、竜王国の若作りの婆ばあ

は、それだけではこちらに実害などはない。「黄金」は、この前だって、冒険者組合の重要度を下げ、面倒なルールに縛られない使い勝手の良いワーカーを増やそうとこちらが水面下で動いている時に、嫌味のように冒険者組合の改革案を出しやがって……。せつかく強い力を持った冒険者がいるのなら、戦争に駆り出せばいいだろうが、とジルクニフは愚痴る。

「皇室空護兵団の準備はまだか！ 陽が沈む前に片付けるぞ！」とジルクニフは叱咤する。

殲滅戦から救出戦に移行し、動きの素早い盗賊などから成る救出隊を編成したが、死の騎士デス・ナイトの動きの方がより俊敏であった。ミイラ取りがミイラになるという結果で終わってしまった。

次の作戦は、ポーシオンを皇室空護兵団ロイヤル・エア・ガードに空からばら撒かせるといふ物量戦だ。アンデッドである死の騎士デス・ナイトが浴びればダメージになるし、死の騎士デス・ナイトの足元に倒れている人間に浴びれば、体力が回復し、自力で死の騎士デス・ナイトから距離を取れる。動けるようになっても、また死の騎士デス・ナイトが持っている大盾で弾かれるなど、いたぶられるであろうが、殺されはしないだろう。この際、その大盾で吹き飛ばされた分だけ、死の騎士デス・ナイトから距離を稼ぐことが出来たとプラスに考えるしかない。墓地で倒れている者たちにとつては痛みを伴う救出作戦ではあるが、もはやそれしか方法がない。

ジルクニフは、今回のこの事件の首謀者の思惑に乗っているであろうことに自ら舌打ちをしながらも、もはや後に引くことなど出来ない。徹底抗戦を決意するのであった。

〈冒険者組合〉

採取が終わり、モモンガとアルシエが冒険者組合に戻ってきてみると、建物の中には冒険者は一人もおらず、受付が暇そうに立っているだけであった。

「お疲れさまでした。こちらが、報酬になります」と受付から依頼の報酬をアルシエが受け取った。結局、ゴブリンとも遭遇できず、アルシエとしては満足な報酬金額では無いような感じではあるが、それに対して不満を抱くほど、アルシエも子供ではないようであつた。

モモンガが報酬の半分を受け取っていると、「もしよかったら、緊急の依頼を受けられますか?」と受付が言う。

「緊急?」とアルシエが首を傾げる。

「ええ、実は、まだ墓地に出現した魔物の討伐が長引いております、現在、城や軍の倉庫に保管されているポーションを運び出す、また現場へ運ぶという仕事が出されております。報酬はワーカー並みですが、依頼達成の実績にはカウントされます」

「荷物運びか……。どうする? 私は、正直キツイけど、少し休憩してからなら、受けてもいいかな。昇格試験を受けるのが早くなるのは良いことだし」とアルシエは言う。

「済まないが、今何時だ？」とモモンガは受付に尋ねる。

モモンガは、受付から聞いた時刻を聞いて不審に思う。

規定時間はとつくに過ぎていて、死の騎士は消えているはずなんだがな……。

別の魔物が出現したのか？ レイドボスか？ 一度、調べてみる価値があるな……。

「その魔物は、墓地にいるのか？」とモモンガは受付に尋ねる。

「はい、そのようです」

「アルシエ、一度、その魔物について情報収集をするぞ。気になる点がある」と、モモンガは冒険者組合の出口へと向かって歩いていく。

「ちよつと、一息入れてからにしようよ」とアルシエが不満を漏らし、モモンガは立ち止まる。

「それもそうだな。墓地でかなり長時間戦っているようだし、今から行っても仕方がないな。魔物の外見など、冒険者から情報を後から聞いても良いだろうしな」と、モモンガはテーブルに座った。

「じゃあ、アゼルシアン・ティーをお願いします。砂糖多めで」と冒険者組合の受付でアルシエは紅茶を注文し、受付に代金を支払うのであった。

遭遇 5

墓地を囲むように人盛りが出来ていた。墓地の上空では夕陽を浴びながら、雁の群れのようにV字型の隊列を組みながら、飛竜ワイバーンが旋回している。そして、空からは降り注ぐポーシヨンが突然の夕立のようだった。

「なかなか幻想的な光景だな」と、モモンガは呟く。飛竜ワイバーンに騎乗して、雲よりも高くそびえる山脈を越える。地平線に沈む太陽を竜ドラゴンに乗って追いかけてみるのも良いかもしれない。

景色を楽しみながら、自らの二本足で歩いていく。それだけがこの世界の楽しみ方ではないであろうと、モモンガは気付かされた。

「ちよつと、人が多すぎて墓地が見えない」とアルシエは、何度もその場で飛び跳ねて、墓地の様子を見ようとするが、アルシエの身長では見ることができない。

「すまない。ちよつと通してくれないか？」と、墓地を見つめながら壁のようになってい
る冒険者風の男達の間をモモンガは強引に入っていく。モモンガの後ろに続いてアル
シエもその中へと入っていく。

あと一歩踏み出せば墓地の敷地、という場所。そこで、モモンガは愕然とした。なぜ、

まだ、死デス・ナイトの騎士が存在しているのか？ 規定時間過ぎてるのに消えてないとか、一体何事なんだ？ それに、この酷い状況は……。

「あれが、帝都を襲った魔物？ み、見ただけで鳥肌が立つ……。こ、ここにいて、あいつら襲つて来ないのかな？」と、アルシエは不安そうに尋ねた。

刃渡りだけでアルシエの身長を超えてしまうほど長いフランベルジュ。露出している肋骨。骨と干からびた皮。明らかに生きている存在ではない。そして、自分が勝てるような存在ではないことは明らかだ。

周りの冒険者も、同じような思いであるのであろう。顔が青ざめている。

空から降っているポーションを浴び、なんとか起き上った人を、大きな盾で突き飛ばしている。盾をぶつけられた人は、悲鳴と共にフワツと一瞬間に浮いて、そのまま墓石に体ごと叩きつけられている。大盾に付着した真っ赤な血液は、空から降ってくる青いポーションで流され落ちる。

「こんなの……戦いじゃない」とアルシエは思わず目を背ける。猫が鼠を捕まえる際に、もてあそ弄んでいるような光景。

「今吹っ飛ばされたのは、アダマンタイトだぜ。半日以上あの調子さ。怖いもの見たさつても分かるが、子供はさつきと家に帰りな。お嬢ちゃん。なんなら、俺が家まで送ってやろうか？」と、アルシエに向かつて短髪の男が明るい声で話しかけてきた。腰

に下げた二本の剣が彼の得物なのであろう。プレートを下げていないところを見ると、墓地を包囲するという仕事を引き受けたワーカーなのであろうとアルシエは判断した。「ちよつとヘツケラン！ こんな時に何ナンパしてるの？」と、ヘツケランと呼ばれた男の横に立っていた女性が肘で男をど突く。紫色の長い髪。そして特徴的な尖った耳。森妖精エルフの特徴であつた。

「ヘツケランの気持ちも分かりますよ。子供が見て良い光景ではないですね。これは」とその森妖精エルフの隣に立っている男が言う。恰幅の良い、優しげな男が横から出てきて言った。

「私は……もう冒険者だ。子供扱いはしないで」とアルシエは、ヘツケランを睨み付ける。

「そんなことは分かつてるよ。そつちの全身フルプレートの男は、〃釣りはいらぬ〃モモンダろ？ 一昨日、俺達も『歌う林檎亭』で飯食つてたからな。腕が立つようじゃねえか。なあ、今度、一緒に仕事をしないか？ 優秀な前衛は歓迎だ。それで……お互いの相性が良くて、チームの雰囲気を入つたのなら、俺達のパーティーに入つてくれてもいい。俺達は、〃フオーサイト〃。自分で言うのもなんだが、結構名の売れたワーカーのチームだ。もちろん、そつちのお嬢ちゃんも面倒見るぐらいの懐の広さもあるつもりだ」と、ヘツケランはアルシエの頭を撫でながらモモンガに言った。

「考えておこう……」とモモンガは、死の騎士デス・ナイトを見つめながら素っ気なく答える。モモンガはそれどころではない。どうしてこんな状況になっているのか。理解不能であった。そして、この状況を見て、モモンガは、集団によるイジメという答えに辿り着く。たしかに、死の騎士デス・ナイトには殺さないようにと指示を出した。どうやら、そのことをイジメに利用されたらしい。空から降ってきているのは、自分が知っている色とは違うが、どうやらポーションのようだ。傷が回復している。

スパルタの訓練と言つても、度を超している。帝国の兵士や冒険者、ワーカーが周囲を囲み、新人を逃げられないように取り囲む。そして、死の騎士デス・ナイトにタコ殴りにさせる。ダメージを受けて立ち上がれなくなつても、空からのポーションで強制的に回復させる。回復させ、そして立ち上がった所を、また死の騎士デス・ナイトに殴らせる。

強制サンドバッグ状態。たとえば、実力差があるボクサーが試合をしたとして、一方的な展開になることは仕方が無い。だが、リングに伏したら、追撃など加えることはルール違反だ。

だが、この状況はなんだ？ 強制的にポーションで回復させ、立たせる。そして、また死の騎士デス・ナイトに殴らせる。

訓練としても度が過ぎてている。スポーツとも言えるようなものではない。ただのイジメだ。なんだこの国の連中……。文明のレベルが低いとは思っていたが、野蛮人か？

こんなことをして許されると思っているのか？

自分が作った死の騎士^{デス・ナイト}がイジメに利用されていると考えただけで、モモンガは怒りを感ずる。

「ちよつと、勝手に話進めないでよ。私は反対。人を見かけで判断する人って気に入らない。これでも、第三位階まで魔法使えます！」とアルシエは頬を膨らみながら言う。まるで自分が、モモンのついでのように言われるのが気に入らない。魔法学院の神童と呼ばれた自分だ。飛行^{フライ}の魔法で魔物の上を飛び、火^{ファイヤーボール}球を放っているフルーダ先生にも目をかけてもらっていたという自負がある。

「それは、おつきく出たな。ロバーと同じ位階だよ。将来有望だ。がんばれよ、銅^{カッパー}」とヘツケランはより一層、アルシエの頭を強く撫でる。

「素晴らしいですね。子供は、夢や希望を持つて成長をするべきですね。第三位階といわず、かのフルーダ氏と同じ第六位階、いや、それ以上を目指して欲しいです」とロバーと呼ばれた男も、腕を組みながら優しく頷いている。

アルシエは、こんな慣れ慣れしい人達嫌い、と心の中で舌打ちをした。多額の借金をしていたその理由を聞いてこないモモン。会話をするのも、依頼に関する事務的な内容。適度な距離感。必要なのはお金を稼ぐこと。それ以外の目的なんてない。もう、夢なんてとつくの昔に棄てた。夢で見るのは、いつも悪夢だ。

「冒険者やワーカーとの交流も大事だが、今は他にやるべきことがある。アルシエ。行くぞ」とモモンガは墓地の中へ踏み出した。

『困った人を助けるのは、当たり前』、そうですよね、たっちさん！ モモンガは、自らの体に、たっち・みーさんが乗り移ったかのようにだった。自分の体に、精神に、正義が降臨したかのような感覚。

異形種狩りで困っていた自分を助けてくれた、たっちさん。きつと、こんな感じの怒りと、そして正義を抱えていたのではないかと、モモンガは思いながら墓地へと足を踏み出す。

「おい！ 近づくと攻撃されるぞ！ 殺されないと思ってるかも知れないが、いつ、奴らの気が変わるかも分からないぞ！」と言う声が後ろから聞こえたが、正義に燃えるモモンガの耳には届いても、心までは届かない。墓地の奥へと迷わず進んでいく。

そして、背中のバスタードソードを抜き、死デス・ナイトの騎士へとモモンガは駆け出し始めた。

遭遇 6

〈モモンガ〉

モモンガは、破壊されてしまった墓石を踏まないように意識しながら、死の騎士へと疾走する。そして、全身の力と体重を乗せた上段からの一撃を死の騎士へと振り下す。

モモンガの心の中では、一刀両断の気持ちであった。しかし、敵もさる者。騎士である。モモンガの攻撃を冷静に大盾で難なく受け止め、剣撃を逸らす。剣の威力が流されてしまったことにより、逆に体のバランスを崩されたのは、モモンガの方だった。

バスタードソードの勢いは止まらず、そのままバスタードソードは地面へと突き刺さる。モモンガの体は前のめりとなっている。そして、その隙を逃すほど、死の騎士は甘くは無い。フランベルジュが正確無比、無慈悲に、モモンガの兜と甲冑の隙間。首元という急所を容赦なく突き刺した。

モモンガも防ぐ手立てがなく、直撃をくらい、地面へと転がるように倒れる。

(いま、何をされた？ 突きか？)

モモンガは、盾で自分の斬撃が逸らされたのは理解できたが、次に何をされたのか、全く見えなかった。自らの死角となつているところからの突然の斬撃。

死デス・ナイトの騎士も一回の攻撃で終わらせるほど、暢気な騎士ではなかった。転がってまだ起き上がれず空を見つめているモモンガを足で押さえつけ、そして何度もフランベルジュでその体を突き刺し始める。

ガチャン、ガチャンというフランベルジュとモモンガの鎧がぶつかって生じる金属音が墓地に響く。

(くっ、くっのまま押さえつけておくつもりか！ させるかっ！)

モモンガは、右足で死デス・ナイトの騎士の胸を思いつきり蹴って、相手を吹き飛ばす。今度は、死デス・ナイトの騎士が宙を舞い、地面を転がる番であった。

モモンガは、素早く起き上り、剣を構える。

確かに、“上位物理無効化Ⅲ”のスキルで、死デス・ナイトの攻撃では、死ぬどころかダメージを一切負わないだろうけどさ……。俺は、一応、お前の創造主なんだけど……。足で踏みつけるのは流石になしじゃないかなあ、とモモンガは死デス・ナイトの騎士と対峙しながら心の中で愚痴る。だが、当初の目論見とは少し違い、冒険者の依頼としては討伐できなかったし、イジメに利用されたという経緯はあるが、そもそも、死デス・ナイトの騎士を作ったのは、アルシエとの連携の訓練という目的の為だった。逆に、手加減をされても訓練として意味をなさない。

それに、モモンガは戦士ではない。剣に関しては素人だ。“騎士”と“素人”の剣で

の戦い。この技量の差は、先ほどの斬り合いでモモンガは痛いほど思い知った。

危なかった、とモモンガは自らの警戒心の薄さを痛感する。攻撃レベルが二十五程度の死の騎士であったから、無傷であった。単なる幸運に過ぎない。これが例えば、冒険者の中で最高峰と言われるアダマンタイトと突然敵対することになってしまい、戦っていたとしたら……。そして同じことをされていたら……。魔法職が鎧を着て、ワールド・チャンピオンのたっちさんと戦うようなものであろう。結果は火を見るより明らかだ。

モモンガは気持ちを引き締め、考える。さて、どうしたものか。やみくもに剣を振り回しても、あの大盾で防がれ、反撃されて終わりか……。モモンガは、次に繰り出す一手について逡巡する。そして、ちらりと一瞬だけアルシエの方を見た。

チームの連携の訓練であるのだが、アルシエが動いている様子はない。だが、それもそうであろうとモモンガは思う。最初の死の騎士との一合。前衛であるモモンガがあの調子であれば、連携も何もあったものではない。死の騎士が前衛であるモモンガを吹き飛ばし、後衛のアルシエに向かって行ったならば、それでチームの陣形は崩壊していたであろう。

ふっ。まずは俺が前衛として信頼できるかを確認するということか。アルシエめ。なかなか粋なことをするな。まあ、互いに命を預け合うとは、そういうことだからな。

まずは俺が死の騎士を抑える！

モモンガは、死の騎士との間合いをゆつくりと重心をなるべく腰に置いたまますり足に近い足取りで移動する。

死の騎士は、モモンガに対して左肩を向けるように横身になった。そして大盾を構える。日本流の剣道で言えば、脇構えに近い。

ちっ、とモモンガは舌打ちをする。大きな盾に死の騎士の体が隠れ、どんな攻撃をしてくるか分からない。隙のない構えであろうように思えた。

剣術の経験のない俺が、相手の攻撃を待っていても、それに対処できるとは限らないな……。それならばっ！

モモンガは、構えた大盾に向かって勢いよく自分の左肩をぶつけた。力と力のぶつかり合い。その勝敗は、勢いよく、そして迷いなくぶつかっていった分、モモンガに天秤が傾いた。死の騎士の上半身が後方に反れる。

モモンガは、先ほどのお返しとばかりに、死の騎士の心臓部分に向けてバスタードソードを突き刺す。死の騎士も、体勢は崩れながらも、フランベルジュを横振りし、手首のスナップを利かせてモモンガの右腰の部分に衝撃を与える。

心臓は外れてしまったが、ダメージは与えられたな、とモモンガが思った瞬間、死の騎士が自らの体を回転させた。

モモンガの視界は、死デス・ナイトの騎士の漆黒のマント一色となる。

これは不味い、とモモンガが思った瞬間に、脇腹に衝撃を感じた。そして、モモンガの体は横に吹き飛ばされ、後方の墓石に背中からぶつかる。

なるほどな……。マントにもあんな使い方があるとはな。体を回転させて、マントで相手の視界を隠しつつ、回し蹴りか。だが、今度はちゃんと何をしたのか把握させてもらったぞ、とモモンガは心の中で笑う。

ユグドラシルで魔法職であった自分が感じたことのない高揚感と緊迫感。これが、戦士職かあ。近接戦闘の醍醐味ってやつか。

一撃で終わりなどではない。相手がそれで倒れなかった時の次の一手も考えておく。単発を狙うのではなく、連撃を狙う。

また、攻撃が防がれた場合、相手がどのような反撃をしてくるかを予測し、対処できるようにしておく。

自らが今後知っておくべき課題が浮き彫りになってくる。俺はまだまだ、高みへと登れる。

楽しいじゃないか。さあ、もつとやろう、死デス・ナイトの騎士！

〈アルシエ〉

ど、どうしてあんな化け物へと向かっていけるの……。私には、絶対無理——無理無理無理。あの化け物に近づくと。それを考えただけで目には涙が溜まる。

モモンが墓地の中へと進みだしていく。冒険者のチームとして、自分がこの場所で傍観をしているなどということは許されるはずがない。自分も行こうと、詠唱をしようとする。だが、その瞬間、モモンがあんな化け物に吹き飛ばされた。素人の目でも分かる首の急所を狙った一撃。

そして、死の騎士デス・ナイトは無慈悲にも、モモンを片足で押さえつけて、強大な剣で何度も突き刺している。

「あの冒険者死んだぞ……」そんな不穏な囁きが聞こえた。

アルシエの口は自然と閉じてしまった。そして、一歩、後ずさりした。一歩だけで踏みとどまり、逃げ出さなかった自分が不思議だ。

アルシエも、モモンは死んだと思った。しかし、次の瞬間、モモンは立ち上がる。周りからも驚きの声が上がった。

しかし、モモンの分が悪いのは明らかだ。自分も駆け付けねばならない。

だが怖くて、死にたくなくて、足が動かない。杖を両手で握りしめているが、その両手が震えている。

そんなとき、モモンが自分を一瞬見た気がした。いや、確かに目があった。モモンは

自分が来るのを待っているのだろうか。信じてくれているのであろうか。

『信用とは実績によって積み上げられるものだ。信用できるできないは今のことではない。これからのことだ。俺を失望させるなよ。魔法には自信があるのだから？ アルシエ』

冒険者チームを組んだ初日、モモンが言った言葉をアルシエは思い出す。信用できるか出来ないか。一緒に死線を越えることができる仲間なのか、そうでないのか。それが証明されるのが、まさしく今のようにアルシエは感じる。

「お前、無理するな」と、ヘツケランと呼ばれた男が、自分の震えている肩に手を置いた。そして、「正直、子供のお前が行っても、足手まといってもんだ。見たところ、あいつはかなりタフそうだ」

優しい言葉だった。アルシエの心がぐつと揺れる。あんな化け物の近くになんて行きたくない。死ににいくようなものだ。

「だけど、お前が冒険者であり続けたいのなら、あの男の仲間であり続けたいのなら、行くべきだろうな。これは、魔物に勝てる、勝てないの問題じゃない」

「ちよつと。子供をそんなこと言って、死地に送り出さなくても……」と森妖精族の女がヘツケランを咎めるように口をはさむ。

「イミーナ。それは違う。もし、ここで踏み出せないのなら、別の道を探したほうがいい

いつてことさ。まだ子供なんだし、魔法も使えるならいくらでも収入を得る方法なんてある。強い魔物と遭遇し、自分の命欲しさに仲間を置いて逃げる奴は、子供だろうと大人だろうと、逃げるやつは逃げる。だが、逃げない奴は逃げない。そういう意味で、冒険者としてやっていけるかどうかの良い試金石だ。冒険者やワーカーだけが生きてく方法じゃない。ちよつとした親切心さ」

ヘッケランと呼ばれた男の言葉がアルシエの心に刺さった。先輩を気取つて、何を勝手なことを言っているのだという怒りも湧き起こる。

ジエツトのように塩や調味料を魔法で生み出す仕事をするこゝだつてできるだろう。自分の魔力でなら、ジエツトよりも多くの収入を得ることは容易だろう。

魔法学院に戻つて、卒業して、帝国魔法省で勤めるといふ選択肢があるのかも知れない。帝都でも高給取りの部類に入れるかもしれない。

だけど、それでは無理なのだ。それでは足りないのだ。卒業をするまでの時間があるとも思えないし、塩や調味料を一日中生産しても十分な金額のお金を得ることは出来ない。

自分に残されている選択肢は限りなく少ない。空中に張られた細い縄を渡つていかなければならない。愛する妹、クーデリカとウレイリカのために。

アルシエは、一度目を閉じ、愛するクーデリカとウレイリカ的笑顔を思い出した。

笑っている二人の顔。

そして、目を開けたアルシエは、「フライ飛行」と唱えた。

遭遇 7

〈モモンガ&アルシエ〉

モモンガの横払いは、死デス・ナイトの騎士の右手に持っていたフランベルジュによって受け止められた。そして、左手に持っている大盾による打撃攻撃がモモンガを襲うとした時……

「雷ライトニング撃！」

モモンガのすぐ脇を、稲妻が駆け抜けていった。そして、死デス・ナイトの騎士の動きを一瞬だけ止めた。

モモンガは、その一瞬の隙を逃さなかった。モモンガは横に流されていった自らの剣を自らの筋力で上段の構えへと移動させ、そして一気に振り下ろした。

金属音と共に、死デス・ナイトの騎士の兜から突き出ている禍々しい二つの角の一本がクルクルと宙を舞った。

「来たか。アルシエ！」とモモンガは言いつつ、どうしようかと思案する。

モモンガが仕掛けた攻撃は死デス・ナイトの騎士に軽くあしらわれて逆にカウンターを受けてしまふ。逆に、死デス・ナイトの騎士から仕掛けてる攻撃は、モモンガの経験不足故に対応できない。

大盾に意識をしていると、フランベルジュによって、フランベルジュに意識を集中すると、大盾によって殴りつけられる。死デス・ナイトの騎士は、フランベルジュと大盾の二つを用いて、そして虚実フエイントを織り交ぜながら攻撃をしてくる。

フランベルジュと大盾という二択の選択肢だけではない。見せつけられた死デス・ナイトの騎士の足技。様々な角度から多彩に繰り出される死デス・ナイトの騎士の攻撃は、無限のバリエーションがあるようにモモンガには思えた。

モモンガとしては、まだ、前衛としての役割を果たしきるには経験が圧倒的に不足しているように感じる。だが、アルシエが来てしまったのだから、仕方が無い。幸運なのは、アルシエが飛行フライの魔法を使っていることであろう。アルシエが空を飛んでいる限り、死デス・ナイトの騎士はアルシエに危害を加えることはできない。

モモンガは、頭を切り換えた。今回は、前衛として護衛を守るというのは、今後の課題にさせてもらおう……。まずは、協力して魔物を倒すという成功体験を積ませてもらうとしよう。

「モモン！ お待たせ！」とアルシエは叫ぶ。

「よし、今から反撃の時間だ。死デス・ナイトの騎士よ！ 我等、冒険者チーム、モモンと愉快な仲間達ダが揃ったからには、最早お前達に勝ち目はない！ チームの力は、一タスいち一はいち、二ではなく、三にも、百にもなると知れ！」と、モモンガは高らかに宣言し、背中に残し

モンのもとへと飛んでいくアルシエの背中を見つめていた。

「あのお嬢さん、まじで第三位階を使えるみたいだな……。」とヘツケランが呟く。

「そうですね。そして、あのアンデッドに放った魔法。あれは、ライトニング雷撃。同じく第三位階

魔法です」と、ロバーデイクは解説するように言った。

「ということは、あの娘、ロバーと同じ位階をあの年で使っているということ？」とイミーナが、ロバーデイクを見ながら言う。

「そうとしか考えられませんね。間違い無く、『天才』の部類にはいるでしょうな」とロバーデイクは、嫉妬するわけでもなく嬉しそうに答えた。

そして、墓地を囲む帝国騎士、冒険者、ワーカーにも聞こえるような大きな声が響いた。

「よし、今から反撃の時間だ。死の騎士よ！ 我等、冒険者チーム『モモンと愉快な仲間

達』が揃ったからには、最早お前達に勝ち目は無い！ チームの力は、一タスいち一は、二ではなく、三にも、百にもなると知れ！」

それは、『釣りはいらぬ』モモンの声であった。

「おいおい、ようやく本領発揮してわけかよ。って……、一匹倒しちまったな」と、ヘツケランは、一体の死の騎士デス・ナイトの体が黒い霧となり、風に消えていくのを見つめていた。

「凄いの一言ですね。あのフルーダ氏の魔法でも倒れる気配がなかった死の騎士デス・ナイトが」

とロバーデイクが言う。

「このまま、全部、倒しちまえ！ 期待のルーキーチーム “モモンと愉快的仲間達” ！

“釣りはいけない” モモン。そして、 “美少女” アルシエ!!」

ヘッケランのその言葉と共に、絶望し、青い顔をしていた墓地を囲む面々の活気が甦る。そして、 “モモンと愉快的仲間達” を応援する大喝采へと変わっていったのであった。

昇格試験

昇格試験

1 【閲覧注意：鬱展開】

〈飲み処：バツカスの酒蔵〉

帝都アーウィンタールを震撼させた“死の騎士事件”は、新星の如く現れた新人冒険者チーム“モモンと愉快な仲間達”によつて解決した。“釣りはいらぬいモモン”と“美少女”アルシエ。この二人の見事な連携により、帝都はまた平穏な日常へと戻る。帝国兵士、冒険者、ワーカーなど様々な面々が、祝勝会や慰労会などをそれぞれで催している。

机に乗るのは、エールと干し肉などの酒のつまみ。

話題に上るのは、死の騎士を倒した冒険者チームの話題。

「あの年齢で、飛行と雷撃を使いこなす。凄かったぜ。颯爽と現れて、次々とトドメを刺していくんだもの……。俺の感性も雷撃を食らったぜ。“美少女”アルシエかあ……。次は、スカート穿いて空を飛んで欲しいものだ……」

「おいおい。そんなこと言っているのが“美少女”の耳に入ったら、まじ黒焦げにされるんじゃないか？ それに、もう一人の“釣りはいらぬい”モモンも、相当な実力者だ」

「ああ。まず称賛すべきは、あのタフさだ。あれだけ死の騎士デス・ナイトにやられても立ち上がる
ことができる体力。武王でさえ立っていられたのは数分だっただろ……。あの
全身甲冑フル・プレートには、回復や防御系の魔法が付与されているのは間違いないな」

「それに、あの大きさの剣を二つ振り回すことができる腕力と持久力も並じやないな。
剣の技量は……。まあ、銅カッパであることを考えればあんなものだ。『武技』を使っている
様子もなかったし」

「おいおい。ちよつと待ってくれ。あの『釣りいら』は、銅カッパなのか？ 偶然居合わせて
た他国のアダマンタイトかと思っていたぜ……。もしくは、王国戦士長ガゼフ・ストロ
ノーフ」

「ガゼフ・ストロノーフが、帝都に居るはずがないだろ。だが、モモンとガゼフ、どちら
が強いのだ？」

「そりゃあ……。王国の五宝物を装備しているのなら、剣の技量でガゼフ・ストロノーフ
に軍配があがるだろうな。彼は、フル装備状態だと、疲れ知らずで常時回復するらしい
ぜ。彼が装備をしていない状態で、疲労させて徐々にダメージを与えるくらいしか倒す
方法はないだろ……」

「それなら、『釣りいら』と『美少女』がチームで対峙した場合は、どうだ？」
銅カッパ チームとガゼフ・ストロノーフのどちらが強いのか。面白い会話をしているな、ミス

リルチームの諸君」

「そういう、オリハルコンチームのお前等も、さつき同じような会話をしたただろうが？」

「聞いていたのか。まあいい。それで、面白い情報が届いた。どうやら、あの二人、冒険者組合長に呼ばれたらしいぞ。二階の階段を登っていくところを、仲間が目撃している」

「まあ、あの強さの二人を放っておくはずがないだろうな。昇ってくるな」

「ああ。というか、いきなりアダマンタイトとかに昇格したりしてな……。実力的には、

『銀糸鳥』と『漣八連』より強いってのは証明済みだからな」

「強さだけが冒険者のプレートではないがな」

「なんだ、負け惜しみか？ ミスリル」

「とにかく今日は、全員命を拾った日だ。飲もうや！ エールお替わり……っておい、あの給仕の娘、四騎士のレイナースじゃないか？」と、忙しそうに食事を運んでいるエpsilon ン姿の給仕を冒険者の一人が見つめる。

「おい。あれは、看板娘のレイナだ。気付かない振りしておけ。殺されつぞ……。せつかく拾った命なのだろ？」とその冒険者に小声で誰かが注意をするのであった。

〈冒険者組合長室〉

冒険者組合に呼ばれたモモンとアルシエを待つていたのは、バハルス帝国アーウィンター冒険者組合長、デイス・ツバイザックであった。二人の活躍を労い、そして組合長室へと二人を誘った。

通りに面した大きな窓。そして執務机が置かれており、そしてその手前には、四人掛けのソファアと椅子が置かれている。

促されるままソファアに座ったモモンガとアルシエに、組合長が話を切り出す。

「お疲れのところ、引き留めてしまって申し訳ない。今回、お二人に昇格試験を受けて欲しいと思ひましてね。お二人の実力のほどは、今回の死の騎士デス・ナイトの討伐で十分に分かりました。昇格試験を受けるご意志はありますか？」と組合長は、にこやかに尋ねる。

にこやかではあるが、眼力は強い。モモンガとアルシエを物差しで測っているような瞳であった。

組合長も元冒険者なのであろうとモモンガは思った。年齢は四十過ぎではあるだろうが、広い肩幅。そして屈強そうな腕の筋力は衰えていないように見える。

「昇格試験ですか？ 試験の内容によつてではありますが、試験を受ける意思はもちろんです。ただ、依頼の達成数がまだ足りていないように思えるのですが、そのあたりは冒険者組合の規則上問題はないのですか？」とモモンガは、片方の膝の上に置いた

兜を甲冑でコツンと叩きながら答えた。

「あと、五回依頼を達成したら昇格試験だった」と、アルシエは答える。アルシエは、二人掛けのソファで少し窮屈そうに肩を縮めて座っている。モモンが甲冑を着たまま座っているの、座るスペースが必然的に限られるのだ。

「そこは、組合長権限でそのあたりに抜かりはありません。昇格試験を受けていただけるということです。試験内容をお伝えします。それは、カツエ平野での巡回任務です。期間は一週間。カツエ平野でアンデッドを発見した場合は適時討伐をしてください」

それを聞いたアルシエからはため息を吐く。

「ん？ アルシエ？ どうした？」

「一週間は難しい。日帰りで出来る依頼じゃないと……。門限までに家に帰れる依頼でなければ困る。それに、外泊するなんて親が許可するわけない。妹達も心配だし。足を引つ張つてごめん」とアルシエは、膝の上に置いていた手をきつく握りしめながら呟くように答える。

「……ということだそうです。あと、私の記憶では、銅カッパー冒険者の次は鉄アイアンであつたはずですが、数日に跨る巡回任務は銀シルバー以上が受けられる依頼内容であつたはず。私の印象としては、その試験内容は鉄アイアンへの昇格試験としては少し違和感がある。昇格試験に詳

しいわけではないが、期間が一週間の巡回任務は、ゴールド金いや……ブラチナ白金向けの試験のように
思えますね。それに、私としても、チームの合意がなければ、試験を受けるわけにもい
かない。試験内容の変更などは可能なのでしょうか？」とモモンガは冒険者組合長に尋
ねる。

相手の譲歩を引き出すには、やんわりと相手の条件の不備を咎が立たない指摘をする
ことも重要だ。

「か、可能ですが……。それに……。ああ。最初にご説明しておくべきでした。今回受け
ていただくのは、ミスリルへの昇格試験です。お二人の強さは既に死の騎士デス・ナイトを討伐でき
る段階で折り紙つきの実力ですからね。本来であれば、アダマンタイトへの昇格試験を
受けてもらっても良いと個人的には思っているのですが、カッパ銅からいきなりアダマンタ
イトというような昇格は前例が無くてね……。そういった意味では、御不満かも知れま
せんが」と冒険者組合長は内心では驚きながらも答えた。

「アダマンタイトなどと、我々を買いかぶりすぎですよ。デイス・ツバイザック組合長
殿。まだまだ、駆け出しの身ですので、何卒ご指導ご鞭撻をよろしく願います。ま
た、我儘を言うようで申し訳ないですが、試験内容の変更、何卒よろしく申し上げます」
とモモンガが組合長に向けて頭を下げる。それに合わせて、アルシエもモモンガに続い
て慌てて頭を下げた。

「いやいや。頭を下げられるほどのことではありません。実力のある冒険者チームの登場は組合としても大歓迎ですから。どうか頭をあげてください」とデイス・ツバイザツクは答え、そして「ああ。そういうえば、皇帝から、今回の死の騎士デス・ナイトの討伐の功労者を労う会を催したいという連絡がありました。国家と癒着することを嫌う冒険者組合に、お二人を招待する前に断りを入れて筋を通してきたというところでしょうか。帝国兵がいるから、冒険者など帝国には不要という態度を取ってきたというのに、少し節操の無さを感じます。まあ、慰労はただの名目でしょう」と組合長は困り顔で言った。

「慰労会という名目の冒険者の引き抜き、ということを心配されているなら、ご心配は不要ですよ。私にも、今回思うところがありましたからね。今回墓地で陣頭指揮を執っていたのが、皇帝であつたようですが、私は彼の下に付こうとは思いませんので」とモモンガは答える。

「それはよかつた」と組合長が言う。そして、モモンガは組合長の表情が柔らかくなったのを見逃さない。

昇格試験における讓歩。普通であれば、カッパー銅、アイアン鉄、シルバー銀、ゴールド金というように、順々に昇格していくことが普通だ。異例の待遇を取ろうとするデイス・ツバイザツク組合長は警戒に値するようにモモンガは思われた。そして、昇格試験の内容を変えろ、という無茶な要求にも前向きな姿勢で対応する組合長。『昇格試験を受けないのであれば、カッパー銅のま

まですね』が組織としてあたり前の対応だ。鈴木悟の世界で言えば、『小卒だから、出世したければ中卒とか高卒の学歴証明書を出してください』が会社の対応である。話した限り、組合長の対応は、怪しいというか裏があるとしか思えない対応だった。だが、その理由は、皇帝による冒険者の引き抜き。組合長はそれを警戒していたのであろうとモモンガは納得する。

そして決定的であったのが、今回のイジメである。指揮を執っていたのはこの国の皇帝であったと後からモモンガは知った。そして、心底呆れてしまった。現実世界においても、二千年近く前のローマ帝国において、今回のような「パンとイジメ」というような政策が行われ、闘技場などで剣闘士が戦ったという歴史があるのは知っている。だが、それは、過去の話であって、やはり西暦二千百三十八年という時代を生きていた鈴木悟にとっては不快感しかない。

それに墓地を取り囲んでいた兵士、冒険者、ワーカーの顔も青ざめていた。誰もあの状況を楽しんでいるような様子はなかった。誰もが暗い絶望的な顔をしていた。モモンガが想像するに、明日は我が身、というようなことを心配していたのであろう。暴君という言葉が似合う皇帝。それに、鮮血帝と呼ばれているということも耳にした。愚帝に天誅を下す、というような正義感をモモンガは持ち合わせてはいないが、そんな狂った皇帝の下で働くなんてまっぴらごめんである。

「アルシエはどうする？」と、モモンガが尋ねる。

「美味しいものが食べられるなら、行ってみたいかも」とアルシエは答え、そしてグウウウウという音が組合長の執務室に響く。アルシエは、採取の依頼から帰ってきて、アゼルシアン・ティーを一杯飲んだだけである。アルシエは空腹であった。

「……ということなので、招待があれば、受けることにします」とモモンガは何事も無かったかのように答え、組合長も何事も無かったように、「分かりました」と答えた。

デイス・ツバイザックは、二階の窓から、モモンとアルシエが冒険者組合の建物から出て行くのを見つめていた。

そして、「門限がある冒険者って……。それに、モモン。本気で鉄プレートへの昇格試験を受けるつもりだったのか？ 死の騎士を易々と倒す実力も規格外だが、それ以外の意味でも、規格外の冒険者だな……。ふつ。俺も年を取ったということか」と、彼の独り言が執務室に響いたのであった。

〈フルト家屋敷〉

「ただいま戻りました」と、アルシエは屋敷の玄関の扉を開けると、そこにはエントランスで待ち構えている両親の姿があった。

「アルシエ、怪我はない？」と心配そうに見つめる母親。

そして、「アルシエ。でかしたぞ！ 帝国四騎士でも倒せないという化け物を見事倒したらしいな！ さすが、誇り高き帝国貴族の娘だ！ 私の娘だ！ あの愚かな金髪の小僧め、思い知ったか！ 何が『無能な貴族など要らぬ』だ。フルト家を見下しおつて！ 今頃、あの愚かな皇帝は、自らの目が節穴であったことを思い知っておるであろうな。それに見ろ、この手紙。お前への慰労会への招待状であろう」と、父親が手紙をアルシエへと差し出す。

金を溶かして、そして皇帝自らの指輪によつて手紙が封をされていた形跡がある。既に関封されていた。そして、手紙の宛先は、『アルシエ・イーブ・リイル・フルト』。自分宛であつた。

「私宛の手紙を勝手に開封？」と怪訝な目つきでアルシエは父親を見つめる。

「我が家を冷遇した皇帝からの詫び状だと思つてな。今回は、アルシエ、お前だけの招待だが、参加した折には、あの小僧に伝えておけ。直々に我が屋敷を訪ね、今までの非礼を詫びるなら、また帝国を支える貴族として、再び手腕を振るつてやらんでもないぞ、とな。若く愚かな皇帝の過ちなぞ、水に流してやるのが貴族の務めだからな」と意気揚々と語る父親の姿。アルシエの頭は真っ白になつた。

「あなた。そんなことより、招待は明日なのよ。ドレスの新調をしないといけないわ。ねえ、アルシエ。早く部屋に行きましよう。帝都で一番の仕立屋を待たせてあるわ。そ

れに、宝石商も。フルト家として、恥ずかしくない格好をしなければならぬわ」と母親が啞然として立ちすくんでいるアルシエの手を引っ張る。

「そう気を急くな。アルシエ。お前は生まれながらの異能を持つていたな。それで、クーデリカとウレイリカは魔法の才能はあるのか？ 才能があるのであれば、明日には冒険者登録させる」

「それは絶対に駄目！ クーデリカとウレイリカは、まだ子供……。冒険者なんて無理……。お金なら私が稼ぐから！」と父親にアルシエはしがみつく。

「離せ、アルシエ！ あの二人が子供、子供言うが、それを言うならお前だつてまだ子供であろうが！ それに、フルト家の当主の私の決定に意を挟むのか？ 愚か者！ いつからお前はそんなに偉くなった！ 少しばかり貴族らしいことを出来たと思えば、図に乗りおつて！ お前が魔法を使えるのだから、私が魔法学校にお前を通わせたからだというのを忘れたか！ 父親の寛大さがいつまでも続くと思うなよ、アルシエ！」と、父親はアルシエを突き飛ばす。

「図になんか乗つてない！ 死デス・ナイトの騎士を倒せたのだから、私の実力じゃない。それは私が一番分かっている。お父様……。本当に眼を覚まして……」と、地面に突き飛ばされたアルシエは、父親を睨む。

エントランスに敷かれていた赤絨毯。昨日までは汚れが目立っていた赤茶けた絨毯

であつたはずなのに、それがいつのまにか真新しい血のような色の絨毯に変わつて
た。そして、その新調されたばかりの赤絨毯に、数滴、アルシエの涙が垂れた。

昇格試験 2

道路に沿って設置されている街灯の明かりだけを残して、帝都が静まり返っていた。飲み屋を騒がしていた冒険者やワーカーも、次の日の依頼に備えて、自らの体を休めている時間。既に深夜であった。

野良犬が月に向かって吠えている声だけが響く道を一人の少女が歩いていった。その姿は、冒険者モモンが宿泊している宿の中に消えていった。ギシギシと軋む階段を登っていく音で、居眠りをしてきた宿の受付は一度眼を覚ましたが、再び眠りに落ちる。

モモンの部屋でその足は止まり、その深夜の訪問者は数十秒の迷いの末、その扉をノックした。

ゆっくりとその扉が開き、モモンが顔を出す。

「アルシエか。どうした？ こんな夜中に。家に帰らなかつたのか？」

マント、杖。そして彼女の膝の部分の衣服は、採取依頼で、地面に膝を付けていたため、土で汚れた状態である。朝から服を一度も換えていないことは明白であった。

「話があつて……」と、アルシエはモモンガの顔を見上げながら言う。廊下の灯りが暗いせいか、アルシエの表情にも影があつた。

「下で話すか？」というモモンガの返答に、「部屋に入ってもいい？」とアルシエが答える。モモンガは、一瞬の逡巡と共に、扉を大きく開いた。アルシエは、部屋の中へと足を踏み入れる。

モモンガは、木の椅子にアルシエに座るように促し、モモンガはベッドに腰を下ろした。

「それで、緊急の用件か？」

「緊急ということでも無いけど、昇格試験の話。カツツエ平野の巡回依頼、受けられるようになった」

「門限があると言っていたが、説得は出来たのか？ 無理をしなくてもいい。デイス・ツバイザック冒険者組合長も、試験内容の変更に前向きであったしな」とモモンガは交渉の手応えを思い出しながら答える。皇帝に雇われるということにならない限り、彼は出来る限りの優遇をしてくれるだろうとモモンガは思っていた。

長い沈黙の音。アルシエがそこに新たな音を加えた。

「……問題ない」

「そうか。では、明日……というかもう既に今日か？ では、組合長にその旨を伝えよう。あの感じだと、彼も慰労会に招待されているようだしな」とモモンガは答えた。今回、魔物を倒したのはモモンガとアルシエであるが、冒険者組織の長である組合長が招

待されていないとは考えにくかった。

「うん」

「実は、私の方でも確認しておきたいことがあった」と、モモンガはテーブルの上に置かれた手紙を手取る。そして、細かい細工がしてあるメガネを付けた。

「この招待状が私にも届いたわけだが、アルシエにも届いているな？」という問いかけ。アルシエはそれに頷く。

「舞踏会形式だと書かれているのだが、これは、俺も踊る必要があるのか？ 俺はダンスなどできないが」

アルシエ自身、招待状の内容をまだ確認していなかった。父と揉め家を飛び出してきてしまった。そして、当てもなく帝都を彷徨い、行き着いたのがモモンの宿泊している宿であった。

母親がドレスを新調しようとしていたのは、舞踏会形式と招待状に書かれていたからなのであろう。散財するのはどうかと思うが、久しぶりの舞踏会の招待が娘にあったというだけで、少し浮かれてしまったのであろう。

「誘われたら踊るのが礼儀だと思う。そして、十中八九、誘われると思う」とアルシエは答えた。

今回の死の騎士デス・ナイトの立役者は、どう考えてもモモンだ。そして、チームとして考えれば、

自分も立役者の一人に数えられるであろうが……。だがその分、モモンと自分は、ダンスを申し込まれる可能性が高い。いや、帝国貴族が招待されていたとしたら、功労者をもてなすという意味でも、貴族は自分たちをダンスに誘うだろう。それが、貴族のマナーだ。

「やはりな。まったく困ったものだ」

モモンガは思った。次に狙われたのは自分達であるのだと。功労者を労わるなんてご立派な名目を建てているが、皇帝自らが墓地で死の騎士デス・ナイトを利用したイジメを企画実行しながら、その被害者の労をねぎらうというのだから、最初から筋の通っていない可笑しな話だ。そして、今度は、ダンスが踊れるはずの無い者を慰労会と称して舞踏会へ誘う。そして、多くの人の前で恥をかかせるつもり……。陰湿にも程があるというものだ。

「参加を断ろうか？」とアルシエが尋ねてきたが、モモンガは首を横に振る。

「それはそれで不味いだろうな。それよりも、アルシエ。ダンスは踊れるか？」

「え？ あんまり上手ではないけれど……」

母親がしきりとダンスの練習をするようにと小言を言っていたが、アルシエ自身、ダンスなどはもう不要だと思い、長い間練習をしていなかった。

「それで大丈夫だ。基本だけでも教えてくれ。この部屋だと狭すぎるか？」

「うん……。宿の前だったら、街灯も付いているし、スペースは十分」とアルシエは答えながら、一番簡単なダンスはどれであるかを思案する。ワルツだろうか、ブルースであろうか。今から教えるとしても付け焼き刃にしかならないであろう。とりあえず、基本のステップを教えて、後はその繰り返しだから……。

「疲れているのに、すまないな。ポーション、必要か？」

「いや。もつたいない。大丈夫」とアルシエは答えるのであった。

早朝に自宅に帰ったアルシエを待つていたのは母親の大目玉であった。曰く、ずっと針子達などを夜通し屋敷に待機させていたらしい。アルシエは睡魔が襲う体に鞭打つて、自室でお人形のように立つ。コルセットで内臓がグツと持ち上げられて、胃液が逆流してしまいそうだった。やっと解放されたと思ひ、そのままベッドに倒れ込むアルシエ。

丁寧に根元を傷つけないように採取、デス・ナイト死の騎士との戦い、徹夜でのダンスレッスン。それ等を終えてアルシエは精魂尽き果てて眠る。慰労会が始まる夜半まで、アルシエは泥のように眠るのであった。

そして迎えた舞踏会。城の前で待ち合わせたモモンと一緒に、招待状を衛兵に渡し、案内された舞踏会場。貴族の屋敷での舞踏会の経験はアルシエにもあった。しかし、城

に入るのを許されたのは初めてであったアルシエは、その城の豪華さと洗練具合に驚く。純金としか思えないような置物が随所に置かれ、金や銀、宝石がふんだんに使った織物が、壁一面に飾られている。そしてその品々は、皇帝の財力を見せつけるという訳でもなく、品良くその場に置かれている。まるで、有るべくしてそこにあるようであった。

父親が商人から購入してくる品物とは一体、なんなのであろうかとアルシエは考えざるを得なかった。この城の中に、さり気なく飾られている品々は、春の草原に咲く野花のように自然であった。自分の家にある品々は、虚飾に彩られた下品な血のように赤い薔薇のようであった。

会場にモモンと共に案内されたアルシエはさらに驚く。磨き上げられた木目の美しい床。整然と並べられた丸テーブルと真っ白なシーツ。品良く置かれた料理や飲料。単純シンプルの中に美しさが宿っていた。自分の家のエントランスに敷かれた下品な赤絨毯は一体なんなのであろう。父親が目指しているであろう貴族と、そしてその貴族の頂点たる皇帝の、相容れることの不可能な、決して埋めることの出来ない溝をアルシエは感じる。

定刻になると、余興として流されていた楽団の演奏が止み、「バハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス様のご入場」という声がかつて会場内に響き渡

る。会場にいる全員の談笑が止み、舞踏会場の二階に全員の視線が向かう。そして笑顔で登場する皇帝。万雷の拍手。

皇帝の短いが要点の纏められた演説。そして、皇帝が杯を掲げ、帝国が危機を乗り切ったことへの祝いの言葉とともに慰労会が始まる。

モモンとアルシエは二人で、挨拶にへと訪れる人々の対応に忙しかった。真つ先に二人の許へと訪れたのは、アダマンタイトの「漣八連」であった。そして次が、「銀糸鳥」であった。

「こちらから挨拶に伺わねばと思つていたのに、大先輩であられるアダマンタイト級の冒険者チームの方々からお越しいただいて、我が身の未熟を恥じるばかりです」などとモモンが対応しているのを横で聴いていたアルシエは、もしかしてモモンは何処かの貴族なのだろうか？ などとも考える。物腰も丁寧であるし、ダンスを踊れないというのは、モモンが珍しい黒髪で、そういう風習がない国であると考えれば説明が付く。それに、彼が甲冑の姿のままで慰労会に現れたということも、帝国の常識から考えれば礼儀知らずだが、ダンスなどの社交ではなく、強さを重んじる国であれば当然の服装、戦いに赴く服装が、正装であろうということも説明が付く。アルシエは、モモンの強さの理由を少し知り得たような気持ちになった。

「モモンと愉快的仲間達」へ挨拶しようとする行列は長い。誰もが今回の危機を

救った立役者が誰なのかを正確に理解しているからであろう。

そんな、モモンとアルシエと会話しようと待っている長い行列を、横から割って入った人物達がいた。

それは、この国の皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスと、主席宮廷魔法使い、フールーダ・パラダインであった。

昇格試験 3

金色に輝く髪を靡かせて、ジルクニフは笑顔でモモンと固い握手を交わす。籠手を付けたままで、バハルス帝国の皇帝たる自分と握手しようというのは失礼千万な話ではあるが、それを表情に出すことなどはしない。それを気にしないように振る舞い、相手に自分の寛大さを示す。相手が好感を覚えるような笑顔と態度で接する。貴族は腹芸が上手い。特に皇帝であり、物心ついたころから叩き込まれてきたジルクニフともなれば、一目で見破れる者はいないレベルにまでなっている。冒険者のモモンとアルシエの目にも、間違い無く優しげな好青年として映っているはずだとジルクニフは確信をしている。

猜疑の衣に身を包んだ者の心を観察するのは容易ではない。だが、信頼と好意を繰り返して蹴らせ、その衣を一枚一枚脱がせてやれば、心など丸裸同然だ。

「今回の帝都の未曾有の危機を、勇敢な行動。皇帝としてだけでなく、帝都に住む一人の人間として、心からの感謝と敬意を――

「アルシエ！」

皇帝が話をしているのを遮って、フールーダが一步前にでる。

「フルーダ先生、その……ご無沙汰しております」とアルシエが気まずそうに、スカートの裾を軽く持ち上げ、スツと腰を落として挨拶をする。貴族としての挨拶、カーテシーだ。

「死の騎士を一撃で倒していたな。あれは、どういった魔法なのだ？ 見た目はただの雷撃であるように思えたが、それでは説明が付かない。アイテムの効果か？ それとも何か魔法的な手段なのか？ 私の生まれながらの異能で見える限り、第三位階の魔力だ。何か、私が知らない魔法を習得したのか？ 考えられるのは……かの十三英雄が使ったとされる魔法二重化なのか？ もしくは、魔法位階上昇化か？ それらは第七位階以上の魔法と考えられていたが、実は違ったのか？ 教えてくれ！ もし私が魔法二重化か魔法位階上昇化を使えたら、死の騎士を倒さずとも、支配できる——」

「爺い!! 少しは落ち着け！」

今度は、フルーダの言葉を遮ったのはジルクニフであった。魔法省の奥に密かに捕えられている死の騎士。それは、将来の切り札になりえる。それに限られた者しか知らない極秘事項だ。今のフルーダは悪い癖が出ている。うっかり機密を漏らしかねない。

そして今回の帝都死の騎士襲撃で、アダマンタイト級の冒険者などでも倒すことがで

きないという実証データも取れた。フルルーダが死デス・ナイトの騎士を支配できれば、それをリ・エステイーズ王国に放てばそれですべてが事足りるというものだ。今後、フルルーダが死デス・ナイトの騎士を支配するという計画の重要性は一段高まっている。他国の間者である可能性があるモモンの前でその情報を漏らされるわけにはいかない。最悪、その死デス・ナイトの騎士まで倒されてしまつては帝国がカードを一枚失うことになる。

「死デス・ナイトの騎士などのアンデッドは、『精神作用無効』の特性を有していますからね。精神系魔法を使つての支配は難しいですよ」とモモンが沈黙に割つて入る。

せつかく討伐談義で盛り上がりそうだったのに、この男はどうして、水を差してくるのだ？ 戦いが終わった後の反省会、敵の考察もまた醍醐味の一つじゃないか。それに、この高齢の方も、ひたすら火ファイヤー・ボール球を撃たされて大変だっただろうに。年寄を労わるということも出来ないのか？ 老若男女区別無くとは、本当に陰湿だな。

「流石は死デス・ナイトの騎士と戦えるだけの冒険者！ お詳しいですね！ そうなのです。ですから、私は、第六位階の死者召喚の魔法の構成要素を自分なりに入れ替えているのですが、それがなかなかうまくいきません」

「魔法の要素を入れ替える？ それはオリジナルの魔法を造りだしているという理解でよろしいですか？」

「オリジナルと呼ぶにはお恥ずかしいですが、そうなりますね」

「なるほどですね。勉強になります。フルーダ殿も、先の飛行と火フライ・ファイヤー・ボール球を組み合わせた魔法攻撃。お見事でした」

主席宮廷魔法使い、三重魔法詠唱者トトラ・イェアツド、大賢者と呼ばれ、流石は、アルシエが尊敬しているだけの人であるとモモンは感心をした。死の騎士デス・ナイトとの戦いで効果的な魔法を使っていなかったし、アルシエからの情報では、第六位階までしか使えないということだった。正直、大したことないのではないかと思っていたが、違った。ユグドラシルで、オリジナルの魔法を作ることなどできない。可能であるとすれば、ワールドアイテムに匹敵するだけの五行相克による魔法システム改変であろうか。ワールドアイテムに匹敵するだけのことを自力でやってのける。尊敬に値するし、警戒にも値する。自分が知らない魔法を使う可能性がある。それこそ、超位魔法を超えるオリジナルの魔法を使われたら、初見での対応、苦戦は必至だ。モモンガは、頭の中のノートに、この人とは敵対してはいけない、とフルーダの項目に書き加える。

そして、ユグドラシルにはない魔法を造り出すことも可能という貴重な情報。有意義だ。自分だけのオリジナル魔法。幻想モモンガ魔法イリユージュナル・ザ・モモンガ・マジック。心躍る話である。

「ああ。あれはですね……」

「爺。魔法談義はそれくらいにしておいてくれ」と、ジルクニフ皇帝はフルルーダに強い口調で言った。帝国の秘蔵の戦略である、フルルーダの飛行と火フライ・ファイヤー・ボール球を組み合わせた魔法戦術。そして、帝国内であれば、フルルーダが転テレポーション移を併用することによって、完全な奇襲までも可能になる。その情報まで漏れてしまつては目も当てられないからだ。フルルーダも皇帝の強い口調で、さすがに諦めたようで、残念そうに口を塞ぐ。

モモンガとしても残念であつた。幻想イリコトヨナル・ザ・モモンガ・マジックモモンガ魔法を作りだすヒントか何かを得られればと思つたが、邪魔者がいるので仕方がないと諦める。

「それは残念。では、私も挨拶の続きをさせてもらおう」とモモンガは皇帝との挨拶も終わったものとして、挨拶待ちをしている人たちの方を向き、ジルクニフに背を向ける形となる。

「モモン殿」とジルクニフ皇帝の声が聞こえたので、「申し訳ない。順番を待つている方々を長い時間待たせるのは礼を失するので」

モモンガも、この帝国の最高権力者がこの皇帝であるということは分かる。この国のトップの相手を優先するのが当たり前前の行為であろうと言えよう。

だが、今はそんな気になれない。

「——こんな奴と会話をして、うっかり自分の弱みなどを探られたら、面倒なことになる。相手にしないのが一番無難な方法であろう。しかし、向こうは向こうでこちらと会話をしたいようではあるな。諦めるまで適当に挨拶を長引かせればよいか。それに、自分分は、人の争いに関わらない、国家権力に与しない冒険者。皇帝などと仲良くしても良いことなどないだろうな」

ジルクニフは思案する。どうやら、モモンという冒険者が何者であるかということの探りを入れるのがこの慰労会の真の目的であるということ、相手にばれてしまっている。いや、最初からそれが分かっている、この場へと乗り込んできたと考える方が自然だ。そして、明らかに自分を避けたということは、何か痛い腹があるからに違いない。俺を舐めるなよ？ 権力を確立するまでの間でも、実の兄弟の嘘を見抜き、処断した。自分に表面上は忠誠を誓っている貴族が密かに裏切りを企てていることを見抜き、処断したことなど両手では数えきれないほどだ。

冒険者モモン。人間、隠そうとすればするほど、不自然になるものだ。お前の技量は見せてもらった。力では及ばないが、力だけがすべてでないと知れ。この場は、舞踏会形式、いわば俺の用意した土俵。舌戦と行こうじゃないか！ ジルクニフは、モモンが次に話す相手を確認する。そして、それは都合の良いことにレイナスであった。歌

う林檎亭”での呪いの一件は聞いている。モモンは何らかのアクションを起こす可能性が高い。悪いが、会話に割り込ませてもらおうぞ！

長い金色の髪を夜会巻きにし、ビスチエデザインの純白のドレス。首の細さから鎖骨のライン、そして胸の豊満さ。そしてその美しさを極限に引き出す、彼女の瞳の色と同じエメラルドグリーンの中のネックレス。モモンガの目の前には、美しき女性の姿があった。

「『歌う林檎亭』に続き、今回も助けていただきありがとうございます。モモン殿」と、美女が挨拶をした。

モモンガは、誰だ、この人？ と一瞬思考が止まる。

「お忘れですか？ これで思い出していただけますでしょうか」と、その女性は手のひらで顔の半分を覆い隠した。

それによつてモモンガはようやく人物像が一致した。『歌う林檎亭』では、鎧姿で髪型も違う。それに今日は薄らとはあるが化粧もしており、はつきり言つてしまえば、別人に近い。女性つて、化けるものだなあとモモンガは思いながら、焦った。忘れていたわけではないが、分からなかったとあればそれは失礼に値する。そうだ、こういう場合はとりあえず、外見を褒めればよいのであろう。

「馬子にも衣装とはこのことですな。誰だか分かりませんでしたよ」とモモンガは頭をフル回転させて、レイナースを褒める。

周りで楽しいげに会話をしていた者たちもそのモモンガの言葉を聞いて、会話を止める。ジルクニフでさえ、高速回転させていた自分の思考が氷の彫刻のように固まってしまったほどだ。

アルシエも、モモン、何を言っているの？　と思う。ただ、思い当たる節はあった。普段は自分も冒険者用の服装をしている。機能性を重視して、お世辞にもオシャレとは言えない格好だ。しかし今日は、舞踏会形式ということもあり、自分もドレスを着て、おめかしをしてきたつもりだ。別に期待をしていたわけではないが、モモンから何か一言ぐらいあつてもいいだろうに、と思っていた。しかし、それが無かった。少しがっかりさせられたのも事実だ。だが、それも仕方がないのだろうともアルシエは思う。大胆なドレスで胸などの女性的な魅力を存分にあらわにしているレイナースさんに、自分は足元に及ばないであろう。そんなレイナースさんの、同性でも目を奪われるような姿でも、『馬子にも衣装』というコメントしかモモンからは出てこないのであれば、何もコメントされないだけ自分は良かったかも知れないとさえ思う。

「ふふふ」という穏やかなレイナースの笑い声。そして、「私は普段、馬で帝国を駆け巡っているじゃや馬ですからね」とレイナースは笑顔で対応をする。

「そうなのだ。私の直属の部下として、帝国の平和を守ってくれているのだ。そういえば、モモン殿がレイナースの呪いを解除してくれたのであったな。私からも感謝を述べていなかった。モモン殿、感謝をするぞ」とジルクニフは、レイナースの呪いを解除した真意を聞こうと、二人の会話に割って入る。

ジルクニフの本心では、はつきり言って余計な事をしてくれたな！ であり、まったく感謝などはしていない。むしろ、呪いがある分、安心してレイナースを部下として使っていられるというものであった。

「いえいえ。駄目にしてしまった薬の対価としてお渡ししたものを。感謝される筋合いはありませんよ」とモモンガは答える。

モモンガの内心では、この皇帝、絶対感謝してないよな、と確信した。俺のイジメの邪魔をしゃがってということであろう。この女性の呪いもおそらく皇帝の仕業だ。女性の命とも言える顔に醜い呪いをかけ、そして、死デス・ナイトの騎士を使つて彼女を痛めつける。やり方が陰湿な点も共通している。

この皇帝の下で働くのは可哀そうだろう……という気持ちだがモモンガの中に広がる。

「帝国を駆け回るのは冒険者でも同じこと。よかつたら私たちの冒険者チームに入りませんか？ もちろんあなたと、チームメイトのアルシエの同意があればですが」と、モモンガはアルシエとレイナースの両方を交互に見て尋ねる。

この野郎、と心の中で呪いの言葉を発したのはジルクニフである。自分の目の前で、直属の部下の勧誘。だが、絶妙のタイミングとも言える。この場で、レイナースとアルシエが同意をしたら、それで話が進んでしまう。なぜなら、レイナースの直属の上司である自分がこの場で話を聞いているからだ。自ら会話に割って入ったところだ。ここで明確な意思表示をしないで沈黙を守ったとしても、それは、この引き抜きともいえる行為に同意をしたということになる。だが、この引き抜きに対して異を唱えることも難しい。レイナースが呪いの解除にどれほど情熱を傾けていたかをジルクニフは理解している。呪いを解いたモモンに恩義があるというのは明白だ。単純に反対をしただけでは、レイナースを？ぎ止めておくことは難しい。裏切られてしまう恐れもある。「私は構わない。帝国四騎士だし、実力は折り紙つき。むしろ私が足を引つ張らないように頑張ります」とアルシエはモモンガの提案に同意を示す。

「私に遠慮することなどないぞ、レイナース。帝国騎士を辞めて、冒険者になったとしても、実家と元婚約者の件は、心に留めておこう」とジルクニフは言った。

冒険者になることを後押ししているようで、実は正反対だ。帝国貴族である実家、そして元婚約者。この二つに対しての復讐がまだレイナースには残っている。しかし、それを冒険者が達成するには難しい。暗殺という手段を使ったとしても、それは立派な犯罪者だ。実家と元婚約者。この二つに合法的に復讐するには、皇帝という権力が必要になる。復讐を諦められるのであれば、冒険者になれ。だが、後は知らんぞ。それが、言外のジルクニフの言葉の意味だ。

（実家と元婚約者？ 人質を取っているのか？ 本当にこの皇帝は……）

「突然のお申し出。即答出来かねますわ。少し考える時間をくださいませ。それに、私ばかり今回の立役者であるモモン殿とアルシエ様を独占してしまつては皆様に悪いですわ。私はこれで」とレイナースは答え、洗練されたカーテシーを行い、会場の人ごみの中へと消えていった。

長かった挨拶の行列を全て消化したアルシエは、ふうとため息を吐いた。流石は皇帝主催の慰労会。出席者はアルシエが今まで経験したことのあるどの舞踏会よりも多かった。

貴族として舞踏会に参加していた時は、父親から、『あれは有力貴族の子息だ。ダンスに誘われる』『茶会の約束を取りつけてこい』などと発破をかけられて、大忙しであったが、逆に挨拶されるといいうのも疲れるものである。

「何か食べたらどうだ？ 折角のごちそうだろう」とモモンが小声で話す。出席者が食べても、そして飲んでも次々と、出来立ての新しい料理が運ばれてくる。

「少し休みたい。少し綺麗な空気を吸いたいかな」

「テラスにいこう」とモモンが言つて、人の波を掻き分けてテラスへと進んでいく。

テラスは、城下を見下ろせる形となつていた。そのテラスの手すりに両肘を乗つけながら、アルシエは少しだけ肌寒い夜風で、先ほどまでの緊張をほぐす。テラスからは、城下の家々の窓から漏れた光。直線状に連なつて輝いているのは、街灯の光だった。

「なんだか疲れたな」とモモンは、手すりを両手で握りながら星を眺める。

「そうなんだ。場慣れしているようにも見えたけど？」とアルシエは言う。

「長く生きていればいろいろと似たようなことを経験するものさ。アルシエも、なかなかお辞儀など様さまになつていたじゃないか」

「私の家は、元貴族だからね。規模は小さいけど、似たようなパーティーには何度も出席したし」

「元貴族？ ああ、それでダンスを踊れたのか。この国の人間はみんな普通にダンスが踊れるのかと思って正直驚いていたぞ」

「そういえば、モモンに自分の身の上について話をするのは初めてだったとアルシエは気付く。」

「そうだよ。元貴族。元貴族の娘、アルシエ・イープ・リイル・フルト」

「長い名だ。挨拶した人たちも、長い名前で覚えられなかった。冒険者のアルシエ。それで十分だろう？」

「そうね……」という沈黙のあと、「あつ。この曲、ワルツだ。結局、ダンスも練習したけど踊らなかったね。読み違えた。ごめん」とアルシエは言う。

「まあ、あの調子だったら、踊らない方が正解だな」とモモンガは苦笑する。

「早朝までの猛練習を思い出してアルシエも笑う。そして、「せっかくだから、記念に踊っておく？ こんな機会はめつたにないだろうし、それに、誰もテラスにいないし」

「そうだな……踊るか？」

「ちやんと練習通りにして欲しい」

「分かった……」とモモンガは、片膝をつき、アルシエに向かって右手を差し出す。「私

と踊っていただけませんか？」

アルシエはその差し出された籠手の上に手を乗せ、「喜んで」と答える。そして、思いついたかのように、「足を踏むのは十回までなら許してあげる」と言った。

「それは難しい注文だ」とモモンは答えた。

ドレス姿の少女と甲冑の男。アルシエがモモンの首に手を回すには、二人の体格差はありすぎる。ダンスを踊るには不釣り合いな二人だった。

喧騒とする陰謀渦巻く会場から漏れ聞こえてくる音楽で、モモンとアルシエのダンスが始まる。夜空に輝く数億の星が、それを祝福するかのように瞬いていた。

昇格試験 4

帝都北市場は活気に満ちていた。ここに来る買い物客は一般人がかなり少なく、中央市場のイモ洗い状態とは違い、並ぶ露店に目をやりながら歩いて、人にはぶつからない。それに、露店に並べられている商品も数が多いという訳ではない。商品が多い露店でも十個程度。商品が一つだけしか並べられていない店というのも多く見かける。

それは、この北市場自体が、冒険者やワーカー向けに店を開いているからである。また、露店の主も、武器や防具を装備していないものの、眼光が鋭く、修羅場を潜り抜いて生きてきた貫禄がある者たちだ。露店の主たちも普段は依頼に出ている。そして、ダンジョンなどで手に入れた魔法道具マジック・アイテムや仲間が使わなくなったアイテムをこの場所で販売しているのだ。

そんな北市場に、モモンガとアルシエの姿があった。目的は、一週間の巡回任務に必要なアイテムを揃える為だ。水や食料、調理器具にテント、そんな当たり前に必要と思われる物以外にも、冒険者チームによって、依頼の内容によって、必要となる物が違ってくる。

たとえば、回復アイテム。チームに回復職がいれば、ポジションや回復の短杖ワンドの量は

最低限で良いチームもあるであろう。また、今回のカツツエ平野のようにアンデッドが出現するような場所であれば、攻撃用のアイテムとして、ポーシヨンや回復の短杖ワンドが必要となる場合もある。状況によって必要な物、そしてその量が変わってのた。

そして、必要かも知れないと、何でも持つていくという訳にはいかない。運べる物の量には限界がある。物を運ぶのに便利な無限の背負い袋インフイニティ・ハヴァザツクに代表されるような魔法道具マジック・アイテムなども存在しているが、そういったアイテムは高い需要がある分、高価だ。長期的に考えたら、無限の背負い袋を買った方が安いインフイニティ・ハヴァザツクが、商人でさえ、荷物を運ぶのに幌馬車を使ったり、ワーカーや低級の冒険者を雇っているというのが実情である。それほどまで、無限の背負い袋は高価である。

結果として、冒険者は長期間の依頼を受ける際には、持つていく荷物を厳選しなければならぬ。アルシエは、メモ書きを見ながら北市場を回って歩く。

アルシエは、今回の昇格試験で必要と思われる荷物を必死に計算し、メモ書きに落とし込んでいた。

人間が一日に必要な水の量は、二キロ。だが、常に移動しているし、戦闘になることなどを考えて、三キロは必要と考えていたほうが良いだろう。水の補給無しで計算し、二日間の余裕を持たせると、巡回任務の日程だけで、九日間。水だけで二十七キロになる。幸い、モモンは飲食が不要な魔法道具マジック・アイテムを装備しているということだから、自分一人

分で済む。だが、自分の分は自分で持つということが冒険者の原則だ。水だけで二十七キロ。それを担ぎながら連日歩くことが可能だろうか。

カツツエ平野に行く途中に地図上では川が流れている。冒険者組合で情報収集した結果、今の季節は水量も豊富であり、川が涸れていて水が補給できないということはないらしい。ただ、逆に雨が降り、川の水が濁流となつて泥混じりになっている可能性もあるらしい。

水の補給が前提であれば、荷物は軽くすることができ。だが、雨で川の水が濁つていればまともな水を得ることはできないだろう。水を蒸留、殺菌する魔法道具を買つておくべきか。いや、むしろ水を生み出す魔法道具を買つておくべきか。だが、水を生み出す魔法道具は高い。それなら、他の荷物の事も考えて、浮遊板（フローティング・ボード）を買つておけば応用が利く。だが、魔法道具は総じて高額だ。単純に荷物を運ばせるということであれば、荷物を運ぶ用に荷物運びを雇った方が安いであろう。自分たちは、銅の冒険者とはいえ、ミスリルへの昇格試験を受けるのだ。荷物運びを雇つたとしてもおかしくは無い。どうするべきか。まずは、掘り出し物がこの市場に売っていないか、それを確認するのが先であろう。

そして、アルシエを悩ませている問題は水だけではない。食料も問題だ。保^{ブリザーベーション}存の魔法だけで乗り切るには、七日間は長い。麦なども用意し、現地で調理するということ

も必要だ。それであれば鍋などの調理器具も必要になってくる。それも用意しなければならぬ。

アルシエは考えれば考えるほど、自分が必要だと思つて書き出してきたメモ書きに自信が無くなつてくる。それに、水や食料の問題でいえば、飲食不要の魔法道具マジックアイテムを装備しているモモンには全く無縁の問題だ。

食料や水は、分担して持つてもらうか……。いや、だが、それは流石に都合が良すぎる。水や食料を必要としているのはチームではなく、自分だ。

アルシエは、自分の冒険者としての経験と知識のなさを痛感する。そして、そういった長期間の行軍に必要な物を準備できるかも試されているのが、昇格試験なのである。他の冒険者などから情報収集をしつつも、どう決断を下せば良いのか迷う。どの決断にもメリット、デメリットが存在している。どのデメリットが致命的なことに繋がるか、自分の判断に自信が持てない。

アルシエは、メモ書きから顔を上げ、露店で商品を物色しているモモンを見つめる。

「これはどんなアイテムなのですか？」

「これは、"口だけ賢者"が発明した、この箱の中に冷気を発生させて、中の物を傷まないようにするアイテムだ」

「まさかこれは refrigerator "冷蔵庫" ですか？」

「いや、これは、“リフリτζジエター”というアイテムだ」

「なるほど……。なんとも言いにくい名前のアイテムですね」

アルシエは、モモンに相談をしようと思ったが、思い止まる。どうやら、モモンは北市場が初めてなようで、露店のアイテムを一つ一つ物珍しそうに物色している。アルシエは思い直した。流石に、テントは二張り買うということは了承してもらおうつもりではあるが、水や食料は自分だけの問題である。相談するのも気が引ける。

やはり思い切って魔法道具マジックアイテムを買うしか方法は残されていないのだろうか。皇帝からもらった報奨金。本心では、親の借金の返済に充てたいところだ。だが、冒険者としての必需品を買いそろえるという意味で、先行投資として思い切るか。

「お嬢さん……。何かお悩みなら、この水晶に尋ねてはいかがですか？」

アルシエは自分に話しかけられたと思ってメモ書きから目を上げると、露店の片隅で、地面に絨毯を広げ、目の前に大きな丸い水晶を置いた占い師の姿があった。紫色のシルクのベールを頭から被り、そして口にも白いフェイスベールで覆っていた。そして、その占い師は緑色の瞳でまっすぐアルシエを見つめている。

「この水晶が教えてくれます。あなたは、今、昇格試験に向けての旅の準備をしていますね。もし、困っていることがあったら……。『重爆』のレイナスを訪ねてみなさい。そうすれば、あなたの悩みは解決するでしょう。ただし、いま、彼女がどこにいるかは、

この水晶で占ってみなければ分かりません。それには、銅貨一枚必要です」とその得体の知れない占い師は言った。

「えつと……。あなたがレイナースさんですよね？」

「違います。私は、さすらいの占い師レイナです」

「そうですか……。」とアルシエは占い師に言つて、すぐさま「扇風機」という魔法道具の

「強」と「弱」の風の強さの違いを検証していたモモンを占い師の前まで呼ぶのであった。

昇格試験 5

モモンとアルシエは、占い師が勧めるままに、絨毯の上に水晶を囲むように車座になつて座っていた。露店が並ぶ北市場。怪しげな占い師の格好の女、漆黒の全身甲冑の男、そしてアルシエ。『釣りは要らないモモン』と『美少女』だ。あそこで何やつているのだ？』というような、露店の前を通り過ぎる冒険者が時折、呟く声が聞こえてきて、恥ずかしくなる。

「それで、あなたが今悩んでいることは何ですか？」と占い師はアルシエに話しかける。（今一番悩んでいるというか、知りたいのは、レイナースさん、あなたは何がしたいんですか？ つてことですけど……）

アルシエは、思つたが、それを口に出して言うことなどできない。

「ミスリルへの昇格試験に向けての準備について悩んでいました」とアルシエは困っていることの大枠を話す。

「準備か……。明日の早朝には出発だからな。話し合いをしておくべきだったな。大事な試験だし、ゆっくり落ち着いて話をしよう。二人とも、水で良いか？」

モモンは、おもむろに見事なグラスを取り出し、そして水差しでそのグラスに水を注

ぎ始めた。そして、「粗水ですが」と言つて、座っているアルシエと占い師の前に置いた。「ありがとうございます」と、占い師はその水を飲むためにあつさりど、顔を覆い隠していたフェイスベールを取り去る。やはり、間違い無く、レイナースの顔であつた。

昨日の皇帝の居城で行われた慰労会のように唇に薄い紅を引いたりなど、今日はしてない様子ではあるが、間違い無く同一人物である。

（正体を隠す気がないなら、なんで最初、占い師だなんて言い張つたのだらう……）

アルシエの疑問はますます大きくなっていく。

「冷たくて美味しいですわ。何となく、優しい味がします。舌に解けていくというか、体にスツと染み込んでいくような水ですね」とレイナースが一口飲んで驚きの声を上げる。アルシエも、一口飲む。

「本当だ、美味しい……」

「そうですか……。お口に合つて何よりです。お代わりは幾らでもありますから、遠慮しないでください」と水差しを水晶の横に置く。

「私、もう一杯飲みたい」と、アルシエは自ら水差しを手に取り、そしてグラスに注ぐ。そして、一気に飲み干す。本当に美味しい水だ。朝から、旅の準備のために必死に必要な物や数を計算し、そして悩んできた。自分が自覚している以上に、喉が渴いていたようであつた。

「冷たい水は、勢いよく飲み過ぎるとお腹を壊すからな、注意しろ。健康管理も冒険者の仕事の一つだろ。アルシエ」と、一気に飲み干し、更にもう一杯飲むと水差しに手を伸ばした時、モモンがアルシエに注意をする。

「分かっている。子供扱いしないで」と、アルシエはモモンの言葉を無視して、構わず水差しを傾ける。

「まだ、残っているなら、私ももう一杯戴いてよろしいですか？」とレイナースのグラスも、いつの間にか空になっていた。やはり、この水は美味しいのであろう。アルシエは、レイナースのグラスにも水を注いだ。

「アルシエさん、ありがとう。そして、モモン殿。つかぬ事をお伺いしますが、この水差し、相当高価な魔法道具マジック・アイテムではありませんか。水差しの中の水が減っている様子がありませんし、それにこのような美味しい水。今まで生きていて飲んだことがありませんわ。私を呪いから解き放つ薬を持たれていたり、モモン殿は実に珍しい物をお持ちですね」とレイナースが微笑むように言う。

「私が異国からの旅人ですからそう見えるだけでしよう」とモモンは答える。

「え？ ちよつと……。モモン。この水差し、魔法道具マジック・アイテムなの？ じゃあ、もしかして……」とアルシエは驚く。自分が先ほどまで悩んでいたことは一体……。

「ああ。アルシエ。俺も同じ事を考えていた。恐らく、帝都で皆が普段口になっているの

は、硬水なのであろう。この無限ピッチャー・オブ・エンドレス・ウォーターの水差マジック・アイテムの水は、この魔法道具が作られた国のお国柄からして、軟水だと容易に想像できる。二人が飲みやすいと感じた理由も軟水だからなのだろう。だが、残念ながら、私が持っているエンドレスウォーター系の魔法道具は全て、軟水だ。硬水を出すことは不可能だ。あまり美味しい紅茶が飲めなくなるが、それは我慢して欲しい」

「モモン……。なんの話をしているの？」とアルシエは首を傾げる。

「美味しい紅茶を淹れるためのお湯の話ですよ、モモン殿」とレイナースが二人の話に割って入る。

「そうだ。アルシエは、昇格試験の七日間、紅茶が飲めないのは辛いだらう？ いつも、アゼルシアン・ティーを飲んでいるようだしな。紅茶は硬水の方が美味しく淹れられるということを知っていたことがあってな」

「巡回任務の時に、紅茶を飲むつもりなんてさらさら無かった。むしろ、巡回任務の最中は、汗が出ることを計算して、砂糖と塩を入れた水を定期的に飲むうと思っていた。先輩冒険者から色々情報収集したんだよ」とアルシエは頬を膨らます。

移動や戦闘によって発汗した汗を補う際に、より効率よく水分補給をするために、今日の朝、冒険者組合で依頼を物色していた冒険者の一人に頼み込んで、レシピを教えてください。一キロの水に対して、塩を三グラムほど入れて飲む。冒険者秘蔵のドリンク

メニユーである。

苦勞して冒険者からレシピを聞き出したというのに、自分が紅茶を昇格試験で飲むつもりだとモモンに思われていたのであろうか。どこの我が儘娘であろうか。シヨックだ。そして、モモンは強いが、昇格試験を気楽に考えすぎているとアルシエは心配になる。無謀と勇敢は違うのだ。

「なるほどな。経口補水液（経口補水液）を作つて飲むと言うことか。なかなか考えているな」とモモンは感心したように言う。

（え？ モモンも知っていた？）

「帝国では、それにさらに砂糖を四十グラムほど入れる飲み物が、帝国兵士に配給される公式飲料となっていますね。リ・エステイーズ王国では、ただの水を兵士に配給しているようですが、それでは体内に水を吸収するまでに時間がかかります。それに、激しい戦闘によって失った水分を補給することはできても、発汗により失った塩分の補給ができません。長時間の戦闘で、王国の兵士が前線で力尽きる一つの要因になっていますね。恒例の王国との戦争では、王国側の兵士にいわゆる“熱中症”を引き起こす戦略を帝国ではとっているはずです。つと、これは帝国の極秘事項でしたが……。忘れてください」と、レイナースさんが、何でも無いかのように言う。

レイナースさん、何を口走っているのですか。それって、かなり危ない情報ではない

ですか？ とアルシエは、聞かなかった振りをしながらも内心で焦る。

「分かりました。水の問題はなんとか解決できそうですね。モモン、その水差し、巡回任務に持つていくことで良いよね？」とアルシエはモモンに尋ねる。自分でも、少し怒りが混じっているということが分かる口調だ。

「もちろんだ……。それに、炭酸水が良かったら、こう言ったものもあるぞ？」

ポトル・オブ・無限の

エンドレス・スパークリング・ウォーター
炭酸水 瓶というのだがな」と、また先ほどと同じように高級そうなグラスと

共に、今度は水差しではなく、透明な瓶を取り出す。

透明な瓶の中に、気泡のような物が浮かんで消えていく。アルシエが連想したのは、貴族のパーティーで飲まれる飲料であった。これはお酒だろうか、とアルシエは渡されたグラスに鼻を近づけてみるが、アルコールの匂いなどはしない。思い切つて飲んでみる。

口に含んだ瞬間に泡のような弾ける。また、飲み込んだ瞬間に、喉元から胃まで、シユワーという何とも言えない感覚が走り抜けていく。まるで喉に詰まっていた魚の骨が取れたような爽快感だ。

「凄い……。不思議な飲み物……」

「スパークリングワインともエールとも違い、あつさりした飲み応えですね」とレイナーズさんも感動したようだ。

「気に入ったようだな。そのの互換として、ポトル・オブ・エンドレス・スパークリング・ウォーター・レモン・ネースト無限の炭酸水（レモン味）と
 いうのもあるぞ。あと、ソルティーライチ味もあるな」と、モモンは次から次へと装飾
 が美しい瓶を出して行く。

「ソルティーライチの味？ 味見してみたいわ」と、レイナースはグラスに自ら注いでい
 る。

「つて、モモン！ さつきからあなた、どこから魔法道具を出しているの？ 手品師つて
 訳ではないでしょ？」とアルシエは疑問を口にする。

「ん？ インフイニティ・ハヴァザック無限の背負い袋だが？ アルシエは持つていないのか？ 必需品だと思っ
 ちな」マジック・アイテムとモモンは持つているのが当たり前かのように言う。

「そんな高いもの持つてないわよ」とアルシエは叫ぶ。

「それは大変ですね。アルシエさんさえよかつたら、私が帝国の倉庫から一個借りてき
 てあげても構いませんよ？ 帝都の出入りの際に、軍籍で無いものが軍の備品を持つて
 いることが発覚したら、ちよつと危ないけれど。あとは、売つたりしなければ大丈夫で
 すね。帝国騎士の魔法道具マジック・アイテムには、魔法省が不可視の魔法で、管理番号を刻印して、店
 に売つたりするとすぐに、皇帝直属の帝国四騎士がすぐさま飛んできて、アルシエさん
 の身に危険が迫りますけど。あつ！ 私つたら……。帝国が魔法道具マジック・アイテムを秘密裏に管理
 しているというのも、機密事項なので忘れてくださいませ」とレイナースは、右手の一

差し指を唇に当てて、空を眺めるように言う。

「レイナースさん……わざとやってみませんか？」とアルシエは目を細めて疑いの目でレイナースを見つめる。

「あら。なんのお話でしたっけ？」とレイナースは眩しい笑みを浮かべている。

「機密……。もういいです……。モモンインフイニテイ・ハヴァアザツクの無限インフイニテイ・ハヴァアザツクの背負い袋インフイニテイ・ハヴァアザツクの空きインフイニテイ・ハヴァアザツクってまだあるかな？」

「幾らでも入るぞ。無限インフイニテイ・ハヴァアザツクの背負い袋インフイニテイ・ハヴァアザツクは重量が五百キロと制限があるが、実は無限インフイニテイ・ハヴァアザツクの背負い袋インフイニテイ・ハヴァアザツクの中に無限インフイニテイ・ハヴァアザツクの背負い袋インフイニテイ・ハヴァアザツクを入れるということが可能なのだ。そして、無限インフイニテイ・ハヴァアザツクの背負い袋インフイニテイ・ハヴァアザツクはただの背負い袋インフイニテイ・ハヴァアザツクの重さインフイニテイ・ハヴァアザツクとしかカウントされない。実質的に制限は有って無いようなものだ。ただ、無限インフイニテイ・ハヴァアザツクの背負い袋インフイニテイ・ハヴァアザツクの中から無限インフイニテイ・ハヴァアザツクの背負い袋インフイニテイ・ハヴァアザツクを取り出して、さらに無限インフイニテイ・ハヴァアザツクの背負い袋インフイニテイ・ハヴァアザツクを取り出し、目当てのアイテムを取り出すという手間が増えるがな。そして、どこに何を仕舞ったかが分からなくなるという悲しい結末になることも多い」とモモンガは、しみじみとした口調で言った。

おそらく、そのような失敗を何処かでしたのだろうとアルシエは思った。

「はあ。じゃあ、荷物の運送に關しても問題無いみたいですね。あとは……。」とアルシエは、気を取り直してメモ書きを見つめ、「ポーションを沢山用意しておいた方が良くと思っんです。理由は二つ。一つは回復用に使える事。もう一つは、想定される敵がアンデッドだということです。カツツエ平野は、アンデッドの多発地帯だという情報を入力

しました。帝国騎士が定期的に巡回しており、大量発生する事態というのは稀ですが、昨今の死の騎士デス・ナイトが帝都に出現するという事態もあります。カツツエ平野に死の騎士デス・ナイトが出現するというのは心配のし過ぎかも知れませんが、骨スケリトル・ドラゴンの竜やエルダー・リツチなどが出現する可能性は、考慮に入れておく価値はあると思うんです。つまり、念には念を入れて、多めにポーションを持っていくべきだと私は考えています」とアルシエは自分の意見を伝える。

「理に適っていると思うぞ。安全を期することは良いことだ」とモモンはアルシエの意見に同意を示す。

アルシエは、モモンが自分の意見に賛成してくれたことに少しだけ安堵する。そして、問題点を切り出す。

「ですが、これには問題があるんです。それはポーションの時価です。いま、ポーションが帝都全体で品薄となっていて、値段が高騰しています。通常の五倍の値段です。北市場でも良心的な値段段で四倍。高い所では六倍です。中には、劣化直前のポーションを高値で売っている人もいました。はつきりと言ってしまえば、今、ポーションを多く揃えるのは、将来的に金銭的な損をする可能性がありません。ですが、万が一の時には、ポーションで命を拾える可能性もある。ですが、使わなかった場合は、やがてポーションの生産が追いつき、価格が下落して損になると思います。安全を期してポーションを高値

と分かっていても買うか、それとも買わないか。難しい判断です」

「それなら、簡単な解決策があります」とレイナースが言った。

「ほう。どんな解決策なのだ？」とモモンガは感心したように言う。

「え？ 本当ですか？」とアルシエは逆に驚く。

「モモン殿。お惚けにならないでくださいませ。あなたは、その問題を既に見越されていて、手を打たれていたのでしょうか？」とレイナースは納得顔で言う。

「さ、さあな……。お、思い違いかも知れないぞ？ 念の為、アルシエに説明をしてあげて欲しい」

「わ、私からもお願いします……。」とアルシエは、悔しそうに下唇を咬みながら言った。「アルシエさんには申し訳ないですが、カツツエ平野がアンデッドの多発地帯というのは、常識です。異国から旅をする者でも、カツツエ平野は迂回するのが当たり前。そして、帝都での死の騎士デス・ナイトの討伐。あれだけポーシオンを派手に使ったのであれば、ポーシオンが品薄になり、値段が高騰するのは道理というもの。そういった事を見越して、昨日の慰労会でのモモン殿の発言です」とレイナースがアルシエに対して説明をする。「昨日のモモンの発言……。つて、まさか」とアルシエは思い当たる。

「気付いたようですね。だからこそその、私……ではなくて、帝国四騎士“重爆”を冒険へと誘ったのです。帝国四騎士は、金貨千枚のポーシオンを携帯することが許されています

す。それも、今のように高騰した価格ではなく、平時の価格でのポーシヨンの量です。それを活用しない手はないですよね？」

「で、でも。冒険者になつたら、帝国のポーシヨンを使うことなんて……」とアルシエはレイナースの言に反論をする。

「だからこそ、『突然のお申し出。即答出来かねますわ。少し考える時間をくださいませ。』と『重爆』も判断を保留した形にしたのよ。冒険者としてではなく、帝国四騎士としてカツツエ平野の治安を維持する。そこに偶然、昇格試験を受けている冒険者チームがあつても、それはただの偶然。それに、アルシエさんは帝国市民でしょ？ 帝国市民を守るために、帝国騎士がポーシヨンを使って何か問題でもある？」

「そ、そういうことだったんですね……」とアルシエも納得する。そして、自分の思慮の浅さを痛感した。

「そういうことですよね？ モモン殿？」とレイナースは、モモンガに微笑みかける。

「まさか。そんなことなんて考えていませんでしたよ……。いや、本当に……」とモモンガは答えたが、アルシエにはただの謙遜にしか聞こえない。

「能ある鷹は爪を隠すとはこのことでございませうか。私も、少し縁があつて冒険者の溜まり場で看板娘をしていました折、『モモンと愉快な仲間達』が、カツツエ平野での昇格試験を受けるといふ情報を得ていなければ、モモン殿の真意を見抜くことなどで

きませんでした。私の方こそ、ただ偶然にモモン殿の真意を見抜いたに過ぎません」と
レイナースは答えた。

明日からの昇格試験、さすらいの占い師、改め、帝国四騎士、**重爆**「レイナースが
偶然を装い参加する」ということが決定した瞬間であった。

昇格試験 6

〈カツツエ平野東〉

「各員傾聴」

静かで平坦な声が全員の耳に滑り込む。

「獲物は檻に入った」

声の主は一人の男だ。

特別な特徴は無い。顔立ちも人ごみに埋没してしまうような平凡なもの。ただ、その男の黒い瞳は、自らの与えられた使命を全うしようという情熱で輝いていた。

「汝らの信仰を神に捧げよ」

全員が黙祷を捧げる。他国領内での工作任務を遂行するというのに、祈りを捧げる時間を必要とする。それは余裕ではない、彼らの信仰心の高さの表れである。

「開始」

たった一言。それだけで、全員が一糸乱れぬ動きで、カツツエ平野へと逃げ込んだ亜人の追撃を開始する。

亜人の村を襲撃し、故意に包囲網に穴を開けておく。亜人はその包囲網の穴から逃げ

出し、そしてこのカツツエ平野へと逃げ込んだのだ。それが、自分たちに用意された檻だとも知らずに。

彼らこそ、スレイン法国の中でも影のように付いて回る噂でしか存在を確認できない、非合法活動を主とする部隊。スレイン法国神官長直轄特殊工作部隊群、六色聖典の一つ。巫人の村落の殲滅などを基本的任務として担当する陽光聖典だ。

その、陽光聖典隊長であるニグン・グリッド・ルーインの心にあつたのは、任務の成功が手中に収まりつつあることに対する安堵。今回の任務は、飛竜騎兵部隊の住む山脈とカツツエ平野の間の地域に住んでいる巫人の村落の殲滅。それゆえ、厄介な任務であつた。巫人が、飛竜騎兵部隊の里、つまり山脈の方に逃げてしまうと追跡は容易ではない。最悪の場合、飛竜騎兵部隊を刺激してしまう。もちろん、飛竜騎兵部隊もいつかは滅ぼすべき相手であるが、今はその時ではないというのがスレイン法国の判断だ。

巫人たちは、ニグンの策略とも知らず、狙い通りにカツツエ平野の方へと逃げ出してくれた。計画の第一段階は成功だ。

だが、計画には不安要素も存在する。それは、リ・エステイーズ王国のアダマンタイト冒険者チーム、“蒼の薔薇”の存在だ。陽光聖典の任務のバックアップとして、巫人の村落やカツツエ平野を監視していた“土の巫女姫”からの情報だと、“蒼の薔薇”も別の依頼でカツツエ平野に来ているらしいのだ。

“蒼の薔薇”のガガーラン。彼女は、亜人擁護を主張して、陽光聖典の邪魔をしてきた存在だ。スレイン法国で既に抹殺対象リストに入っている。

そんなガガーランがチームとして加入している “蒼の薔薇”。それが、逃げる亜人と遭遇してしまった場合、陽光聖典と敵対行動を行う可能性が高い。

もちろん、亜人の味方について敵対した場合は、神の名のもとに、“蒼の薔薇”をも殲滅するが、とニグンは固く決意する。弱き人間は己を守るために様々な手を使わなくてはならない。亜人を殲滅するのも同じ理由だ。亜人に情けをかければ、いずれは人間の脅威となる。大局が見えない愚か者には、死を与えるべきだ。人間は、争うべきではなく、共に歩むべきなのだ。人間以外の種族やモンスターに対抗するために。

ニグンは、カツツエ平野へと歩み出した。

〈帝都：皇帝執務室〉

ジルクニフ皇帝の執務室に積み上げられた書類は天井まで届かんとしていた。原因は、死デス・ナイトの騎士の襲撃に関する報告書だ。ポーシオンなどの増産への対応。破壊された墓石の修復や、ポーシオンのガラス瓶の破片を墓地から撤去する作業。死デス・ナイトの騎士がどうして同時に五体も出現したのかの検証。帝都に入国した怪しい人物の洗い出し。 “死の螺旋”を目論むズーラーノーンが関与した可能性についての報告書。リ・エステイーゼ王国の関与の可能性。墓地を一度浄化するためのスレイン法国への協力依頼。

普段のルーティンワークに加えて、この作業量。忙殺されそうである。そして、死デス・ナイトの騎士の一件。帝国が利を得たものは何一つ無く、まるで天災にあつたかのような理不尽さ。

ジルクニフの頭を悩ませていたのは、死デス・ナイトの騎士が墓地に、悪夢のような奇跡的確率の偶然で自然発生したという可能性も捨てきれないこと。だが、王国、法国、ズーラーノーン、もしくはその他帝国への侵略を目論む勢力が行った可能性も依然として残る。いずれの可能性も否定できないし、再度の死デス・ナイトの騎士の出現の危険性を考えるなら、この問題を調査せずに放置しておくのは愚の骨頂である。だが、調査するには疑わしき容疑者が多すぎる。そして尻尾を掴める気配はない。雲を掴むような話であつた。

少し死デス・ナイトの騎士関連以外の報告書を読んで気分転換をしたくなつたジルクニフは、書類の山から目ぼしい資料を探す。

ん？ エ・ランテルの北東で、新たな遺跡が出現？ あの辺りは草原が広がっているだけの地域であつたはずだが……と、ジルクニフは頭の中で自国の地図を思い描いた。

報告書の内容では、その地域を巡回していた帝国兵士が発見したのは、200メートル四方、高さ6メートルの巨大な壁で覆われている遺跡。非常に見晴らしが良い場所にあり、規模からみて今まで発見されなかつたのがあまりに不自然で、突如として現れたと考へた方が自然だという報告である。

定期的に巡回をしているのに拘らず今までその存在に気づかない。隠蔽していて、その魔法の効力が切れたのか、もしくは突如、空からか、地中からか出現したのか。

その遺跡の立地からしても、帝国と王国の国境ラインだ。王国が新たに建造した要塞か？ 王国に新たな要塞を作る体力などないように思えるが……。

いずれにしる調査が必要な案件だ。

王国の要塞であるなら、帝国兵士や騎士を派遣するのは不味い。

それに、遺跡であつたならば、古くからそこを住処すみかとしている、その遺跡の主とも呼べる存在がいる可能性もある。山脈の洞窟であれば、竜が住処すみかとしている場合もあり、侵入者に対して報復をしてくる。

王国の新要塞にしる、新発見の遺跡にしる、一旦、秘密裏にワーカーに調査をさせた方が良いだろう。たとえそのワーカーが拘束され尋問されても、帝国が背後にあると足が付かないような依頼の仕方だ。なんなら責任を取らせるために貴族一人の首を王国なりに差し出しても良い。そのためのストックとして未だに地位を残している無能な貴族もいるのだ。

ジルクニフが新発見のその場所について思いを巡らせていると、自分の執務室をノックする音が聞こえた。

部屋に入ってきたのは、秘書官ロウネ・ヴァミリネンであつた。

「『モモンと愉快な仲間たち』の情報を集めてまいりました」

「それで、モモンはどこスパイの国の間者だ？」とジルクニフはロウネに結論を急がせる。

「申し訳ありません。モモンに関しては、新たな情報はありません。分かったのは、『美少女』の方です」

「フルーダの弟子であったな。それで？」

「没落した元貴族の娘でした。フルト家の長女、アルシエ・イーブ・リイル・フルトです。フルト家の当主は、お家取り潰し後も、いつか貴族に返り咲くことを夢見て、働きもせず貴族らしい生活を送り続けています。そして、性質の悪いところから金を借りていて、破産するのも時間の問題でしょう。魔法学院のアルシエの同級生に聞き込みした結果、魔法学院を退学したのも、親の散財を補うために金を稼ぐ必要があったからだとか」とロウネは淡々と報告書を読みながら説明をしていく。

ジルクニフは、魔法学院にまで聞き取り調査を行ったロウネの仕事ぶりに満足をしながら、その報告を聞く。

「フルト家？ 印象に無いな。それにしても、その当主は絵に描いたような無能だな。娘の将来にまで害を及ぼすとはな。かなりの貴族を肅清したつもりであったが、まだ血が足りなかったようだ。そうだ。そのフルト家の当主、この遺跡の調査に使えないか？」とジルクニフは、ロウネに遺跡発見の報告書を見せる。

「見事に遺跡の調査を成功させたら貴族への復位。そんなことを匂わせておけば上手く踊ってくれるのではないか？ 失敗して王国などとトラブルになった際には、肅清した家だし、帝国とは無縁。妄想に取りつかれた元貴族が、勝手に暴走しただけで、帝国に責任は無いと説明すれば良い。そんなシナリオでどうだ？ それに、その遺跡の調査が成功したら、そのフルト家の当主を飼い慣らして、『美少女』の首に鈴を付けられるだろ。金に困っているなら、それなりに援助してもいいしな。そして、『釣りは要らない』『モモンを身近な場所で監視させるようにこちら側に引き込めばよい』とジルクニフは自らのアイディアをロウネに語る。

「可能でしょう。遺跡の調査。金を用意して、それなりに腕の立つワーカーに依頼を出すだけですからね。このフルト家の当主も、それくらいのことではできるかと」

「決まりだな。では、そのように手配をしてくれ。フルト家に金は多めに渡して良いぞ。その調査が無事に終わったら終わったらで、それで恩を『美少女』に売れるのだからな」

昇格試験 7

帝都アーウィンタールの南門。交易都市エ・ランテルと帝都を結ぶ物流の大動脈。東西南北に設けられた帝都の出入り口の中で、最も人の出入りが激しいのが、南門である。門が封鎖されている深夜に帝都に到着した商人たちは、門の近くで開門されるまでの時間を待たなければならぬ。

早朝、開門と同時に、商人たちが荷物の検閲所へと行列を作っている。荷馬車いっばいに積まれている野菜や果物。それらの品は、検閲所を通った後、中央市場に向かい、そして帝都に住んでいる人々の食卓へと並ぶのであろう。

そんな光景を横目で見ながらアルシエは帝都を出て、現在は街道を歩いている。自分の身長よりも長い杖。前髪が視界を隠さないようにするヘアバンド。履きなれた靴。風よけにも防寒にも使えるマント。

これだけだといつものアルシエの依頼へと向かう格好だが、いつもと違うのは、今日のはアルシエの小さな背中に、大きく膨らんだ茶色いバッグがあることであろう。水や食料などの巡回依頼に必要な品々は、昨日のうちに北市場で買い込み、そしてモモンが所有していた無限の背負い袋に入れてある。

茶色いバッグに仕舞いこんであるのは、アルシエ自身の私物である。

カツツエ平野は、エ・ランテルに向かう街道を歩き、その街道の途中で道を外れ、南へと歩く。街道を外れると警戒が必要となるが、人通りが多く、帝国と王国の貿易を一挙に引き受けているこの街道は、帝国兵士の警備が行き届いていて安全だ。

その安全さは、各国を旅する商人達が冗談で、『王都リ・エステイーゼのスラム街の小道で寝たら、疫病にかかるか殺される。だが、アーウィンターⅡエ・ランテルの街道で寝たら、風邪を引くかもしれないが、無料で帝国兵士に護衛してもらえ』と言われているほどだ。魔物などが出現しようものなら、帝国兵士があつという間に倒してしま

う。

帝国は、商品を都市に持ち込む際の関税は王国に比べて確かに高い。だが、個別に護衛を雇う金額に比べたら安い。護衛の冒険者を確保できないことなども多々あるし、商人としては安定的な交易と、そして収益が見込める。結果として、帝国での商人の活動は活発になった。

ジルクニフは、王国の「黄金」のラナーが発案したこのアイデアを帝国にすぐさま取り入れ、帝国の都市を結ぶ街道などに帝国兵士の警備を強化した。結果として、警備に要する費用よりも多くの利益を帝国は関税として得る結果となった。

もつとも、この考えを発案した王国では、街道が複数の貴族の領地を跨ぐ関係上、街

道を警備するのならば、自分の領地を通過する際に個別に通行税を課す、という意見が出てしまい、結果として商人が個別に冒険者などを護衛で雇うほうが安上がりになるという結果になり、実現はされなかったが……。

「アルシエ。背中のバッグ、重くないのか？　まだ、無限インフィニティ・ハザッサツの背負い袋に余裕はあるぞ？」とモモンガは遅れながら後ろを付いてくるアルシエに声をかける。

モモンガは足幅も大きく、そして何より不労である。一定のスピードで歩いて何も問題は無い。レイナスも、帝国騎士として行軍には慣れている。問題はアルシエだった。足幅も小さいし、体力では二人に劣る。最初は三人で暢気に風景を眺めながら雑談をして歩いていった。だが、次第にアルシエの口数が少なくなり、やがて並んであるく二人の後に続くようになった。そして、時々小走りをして追いつかないと、モモンガとレイナスと距離が離れすぎてしまうようになっていった。

「大丈夫、重いという訳ではないから」とアルシエは答える。

アルシエが背負っているバッグの中身は、彼女自身の替えの下着などであった。重さとしては数キロ程度で、重くは無いが、疲れてくると体感として重さを感じるようになってきたのは事実だ。

だが、食料や水やテントなどは別として、自分の下着などまでモモンに預けるのにアルシエは抵抗を感じていた。何となく気恥ずかしい感じであったのだ。

そしてアルシエは、魔法学院時代、フルーダ先生のある時の講義を思い出し、後悔をしていた。

生活魔法。魔法の才能のない者でも使用することができる魔法。『生活に密着している魔法の方が人生を豊かにしてくれる。攻撃魔法というものは使い勝手が悪いのだよ。相手を致傷させるということ以外に、使う道がほぼない』

アルシエは、フルーダからこの話を聞いた時には、内心、何を馬鹿なことかと思つた。自分たち魔法学院の生徒は魔法の才能を認められ、この場で学んでいるのだ。魔法の才能がない人でも使えるような魔法を使つて何になると言うのだと。自分は既に第二位階の魔法が使える、もうすぐ第三位階をえるようになるだろう。誰でも使えるような魔法を憶えて何になろうか。より付加価値、希少性の高い魔法をえるようになってこそ、マジック・キャスター魔術詠唱者としての価値を高めることができるというものだ。

だが、改めて考えてみると、第三位階魔法ウォーター・ボール水 球の遙か格下の生活魔法ウォーター・ウォッシュ水 洗い

この魔法が使えたら、旅の途中でも下着などを洗うことは可能であった。また、ウィンド・カッター風

刃の格下の生活魔法ブリーゼそよ風を使えたら洗った下着を手早く乾燥させることも可能であったであろう。同じ学生であったジエツト・テスタニアはこれらの魔法は習得していた。魔法の才能が彼には無く、上の位階魔法をえる見込みがないから、生活魔法を必死に憶えているのであると密かに彼を見下し、同情していた。だが、もしかしたら

彼は、こういった現実の問題を既に見通していたのかも知れない。生活の場に密着し、地に足を着けていたのかも知れない。

「だが、きつそうだぞ? 無理はするなよ?」

「本当に大丈夫だから」とアルシエは答える。

「モモン殿。横から口を出すのは差し出がましいですが、アルシエさんの気持ちも察してやるべきかと。アルシエさんくらいの年齢の女の子は気難しいのですよ。きつとそのバッグの中身は、自分の下着とかでしょう。チームとはいえ、男性であるモモン殿に預けるのは気が引けるのか」とレイナースは口を開く。

アルシエは、凶星を突かれて黙って地面を見つめるしかない。

「そ、そうだな。済まない。気を回したつもりが余計なことだったな。すまないな、アルシエ。レイナースさんもありがとうございます」とモモンガは気まずそうに答える。

「いえ、私も出しゃばって申し訳ないです。ですが、ついでもう一言口を出すなら、テントもモモン殿とアルシエさんは分かれて寝たほうがよいでしょうね。私などは帝国騎士という職業上、特に気になりませんが、年頃の女の子は、そういったところにも敏感です。ですから、テントは大人用と子供用で分かれるのが、適切かと」

「レイナースさん、子供扱いはしないでください」

「あら。申し訳ありません。もしかして、一人でテントに寝るのは恐いのですか? 子

守歌など私は多少の心得はありますが……」

「そんなことはありません！ だから子供扱いしないでください」とアルシエは先ほどよりも大きな声で言った。

「このことでございませす、モモン殿」とレイナースは笑顔でモモンガに笑いかける。

「ありがたいございませす、レイナースさん。今回のような日帰りできない依頼は私達、モモンと愉快な仲間達」にとつて初めてです。いろいろ教えて下さつて助かりますよ。何せ駆け出しの冒険者で作つたチームですから」とモモンガは明るい声で言う。

ユグドラシルでは、寝オチするなど、一定の時間操作がされなかつたら、自動ログアウトする仕組みであつた。仮想現実の世界で寝るなどということなど想定したことがなかつた。

モモンガは、男女のパーティーで宿泊が必要になる長期依頼だと、いろいろと配慮すべきことが多いのだな。なかなか勉強になるじゃないか、と内心満足をした。

一行は、安全な街道沿いでキャンプをしながらカツツエ平野へと向かう。いよいよ明日の早朝から、カツツエ平野へと足を踏み出す。

昇格試験 8 【閲覧注意：残酷な描写有り】

「みんな怪我はないか？」と、モモンガは骸骨戦士スケルトン・ウオリアーを一刀両断したところで、全員の安否を確認する。

「大丈夫です。レイナースさん、ありがとうございます」とアルシエはレイナースに礼を言った。

モモンガたちがカツツエ平野で遭遇したのは、骸骨戦士スケルトン・ウオリアー、骸骨弓兵スケルトン・アーチャー、骸骨で構成された小部隊であった。

そして厄介なのが、骸骨弓兵スケルトン・アーチャーによる弓による遠距離攻撃。それも、全身甲冑で厚い装備をしているモモンを狙うことなく、軽装備であるアルシエや、兜を装備していないレイナースを狙ってくるという戦略を相手がとってきた。

レイナースは飛んでくる弓矢を、自らの槍を高速回転させて槍による円形状のシールドを作り、それによってアルシエと自分を守るということに徹する。アルシエは、レイナスに守られながらも、火球ファイヤー・ボールで応戦をする。そして、モモンがアンデッドとの距離を詰めて、アルシエやレイナースに近づいてくる骸骨や骸骨戦士スケルトン・ウオリアーを蹴散らす。

戦いが終わってみたら、怪我という怪我などなく、圧勝と評価しても良い戦いである。

だが、アルシエは、自分とモモンだけであつたら、先ほどの状況にどのように対応したであろうかと考える。

仮にモモン一人であつたら、飛んでくる弓矢などを歯牙にもかけないで、各個撃破して終わりであつただろう。

レイナースさん一人であつても、弓矢を防ぎながら戦つて、敵を全滅させていただけろ。レイナースさんが苦戦するイメージが湧かない。

だが、自分とモモンであつたらどうだろう。飛んでくる弓矢から自分を守るために、モモンは動けなくなってしまうのではないだろうか。

自分は、お荷物なのではないか……。モモンに守りに徹してもらい、自分の魔法だけで先ほどの敵を殲滅できたかといえば、答えはNOだ。

同じ実力で冒険者チームを組む、それが冒険者の常識であると聞いたことがある。実力が乏しいチームメイトがいると、それがチームの命取りになり、チームが崩壊する危険性が高まる。逆に実力が高いメンバーは、より高い水準のチーム、そして高い報酬を求めてチームを抜ける。

モモンは自分を置いて、どこかのチームへと移ってしまうのではないか。そんな不安をアルシエは覚えた。

「すまないな、アルシエ。それにレイナースさん。どうやら、装備の特殊効果で、アン

デッドは俺を感知できないようだ。アンデッドは、二人を狙ってくる。申し訳ない」とモモンは言う。

「そういうことでございましたか。アンデッドの動きに違和感があったのはそういうことでしたのね。そうすると、私とアルシエさんが同じ場所にいると、敵の攻撃が集中するばかり。また同じような敵と遭遇した場合は、モモン殿が壁役をしてもらってよろしいですか？ 私なら、弓矢を避けながら戦えますので」と、レイナースが次の戦いの基本戦術を発案する。

「了解した。あの程度の弓矢なら打ち払う必要もないしな」とモモンガもそれに同意する。

ねえ。二人とも、どうしてそんなに優しいの……。ねえ。どうして、私が足を引張っているって言わないの……。アルシエは、地面を見つめながら、自分の持っている杖を力一杯握りしめた。悔しかった。

「それにしても、このアンデッドの量と質。カツツエ平野で何か異常事態が起きているように感じます。帝都での死の騎士デスナイトの件といい、なんだか良くないことが起こっているのではないのでしょうか」とレイナースは、カツツエ平野を覆うドンヨリとした雲を見つめながら言う。

「アンデッドは死体が多い場所に発生するそうです。考えられるのは、王国との戦争で

すが、それには時期が開きすぎています。なにか、それ以外の大規模な戦闘が行われて死者が多く出たのかも」

アルシエは涙がこぼれないようにしながら顔を上げて言った。戦闘で役に立っていないなら、それ以外のことで役に立つしか無い。魔術詠唱者は、一般的に難解な魔術書マジック・キヤスターを読む関係上、様々な知識を持っているとされる。知識面で役に立とうと、アルシエは魔法学院で勉強したことを必死に思い出す。

「その可能性が高いかも知れません。アルシエさん、飛行で上空フライに昇り、周りを偵察してきて貰えませんか？ 何か異常事態が起きているかも知れません」とレイナスが言う。

「はいー」

アルシエはすぐに魔法を唱え、上空へと飛び立つ。アルシエは、モヤが滞留しているカッツエ平野を目を細めながら見渡す。そして、とある方角でまるで雷が落ちる前の雷雲のような光を見つけた。地上で火花をしているかのように、パアと明るくなり、そしてまたその光は消える。明らかに、地上で自然発生するような光では無い。これは、魔法だ。

急いで、急降下したアルシエは、地上で討伐部位の採集をしていた二人に伝える。

「彼方の方角。距離は十キロから二十キロ先。戦闘が現在行われているようです。魔法

が使われています」

「戦闘……。そして魔法ですか……。アンデッドに襲われていて交戦しているとも考えられますが、このカツツエ平野の異常の原因がそこにあるのかも知れません」とレイナースは言った。

「何にせよ、調査が必要だな。アンデッドが大量に発生しているという情報を持って帰るだけでも、昇格試験は合格できそうなものだが、どうする？ 最悪、その戦闘行為に巻き込まれるぞ？」 他の冒険者がアンデッドを討伐しているところかもしれない」とモモンガは口にする。

「近づいてみて、手に負えなさそうだったら逃げる、というのは駄目かな？」とアルシエは言う。

「俺はそれで良い」

「もちろん、私もそれでよろしいですわ。ただ、帝国兵士がアンデッドに襲われているのであれば、職務上助太刀に入らざるを得ませんが。その際は、手を貸していただけるとうれしいですわ」とレイナースは冗談のように言う。

「決まりだな。では、急ぐぞ。走れるか？」

「もちろんですわ。」

「飛行」
フライ

モモンガ、レイナースが走り、そしてアルシエは飛行^{フライ}でその後ろを追いかける。

アルシエは、その二人の走りを見て、二人が如何に肉体的に優れているかを痛感する。モモンガの走りは、ストライド走法で、全身甲冑を着ているとは思えない力強さで、まるでカツエ平野の地面が弾力のあるゴムにでもなつたかのように、モモンは全身の体を躍動させながら、大股でどんどん先に進んでいく。肉体的な強靱さがないと不可能な走り。このモモンの走りを見ただけでも、モモンが戦士として肉体的に優れているということは一目瞭然だ。モモンの鎧の下には、どれほどの筋肉があるのであろうと、アルシエは想像をする。

一方のレイナースさんは、右手を後ろに回し、その手で槍を持ちながらであるというのに、モモンのスピードに付いてきている。モモンが重心を前へ前へと持つて来ているのに対し、レイナースさんの走りは腰から上の体幹が左右にぶれることもなく、すり足をするかのよう足を持ち上げるのを最小限度にして、まるで地面を滑っているような走りだ。敵が突然襲つてきても、対応できるような走り方、ということであるのだろう。走っていたモモンとレイナースが突然、急ブレーキをかける。見つけたのは、平野に

横たわっている物体。

レイナースがそれに近づく。そして、それを動かす。それは、亜人族の死体であった。「既に息はありません。ですが、まだ温かい。死因は魔法ですね。傷を負ったままこの平野を歩き、そしてここで力尽きたのか」とレイナースが、死んでいる亜人族の、見開いている目をそつと閉じる。

アルシエは死体を見るのが初めてだった。そこに人である物体が少し前まで生きていたということ。アルシエは少し離れた所からそれを見つめる。

「前方を見ろ。どうやら、大変なことが起こっているな……」
「これって……戦争……」

自分たちが行こうとしている方向。その先に、同じような物体が平野に点在している。それも一つ、二つではない。有るところでは固まりとなって。そして、他と比較しても小さなものもある。

三人は、ゆつくりとその中を歩きながら、自分たちが向かうべき方向へと向かっていく。

アルシエは、出来るだけモモンの背中だけを見つめるようにして歩く。

母親に抱きかかえられるように息絶えている子供。魔法は二度放たれていた。逃げ
る母親の背中を火ファイヤー・ボール球で焼いた。母親は、命を失いながらもしっかりと子供を守ろう

と力強く子供を抱きしめ、なんとか子供の身を隠そうとしたようだ。だが、焼けただけの子供の頭部。魔法を放った者は、母親のその必死に思いを踏みつぶし、地面に倒れた母親に抱きかかえられている子供にも、魔法を放ったのであろう。この亜人族の親子を追撃した存在の残酷性が表れている。

な、なんて酷い……。あまりの残酷な光景。カツツエ平野に残っている人が焼けた匂い。アルシエは胃がひっくり返りそうであった。

「あそこでまだ戦闘が行われているな。この光景を見てしまったとあつては、退却など出来ないな……。止めに入るぞ！」とモモンガが叫び、再び走り出す。

「はいー」「ええ」とアルシエとレイナースは同時にモモンガの声に応答し、そして動き出す。

昇格試験 9

モモンガは走りながら、前方で戦闘を行っている集団を捉えた。五人組の集団と、一人が戦っているらしい。

五人組には、戦士、魔術詠唱者、後衛、そして、ん？ 二人は格好からして忍者か？ プレートを下げているということは、冒険者だな。

一人の男の方は、仲間が既に倒されたようだ。あの男と似たような服を着て死んでいるのが、仲間ということか？

「止めに入るぞー」とモモンガは少しだけ後ろを振り向き、ついてきているアルシエとレイナスに声をかけた。

そして、そのまま睨み合っている二つの集団の間に、モモンガは割って入った。

「私は、バハルス帝国冒険者、〃モモンと愉快な仲間達〃のリーダー、モモンだ。カッツェ平野で巡回任務をしている。任務の都合上、争いに割って入らせてもらった」とモモンガは叫ぶ。

「私達は、リ・エステイーズ王国のアダマンタイト級冒険者チーム〃蒼の薔薇〃。私はそのリーダーのラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ。私達もカッツェ平野での

依頼を遂行しています。怪しい者ではありません」とラキユースと名乗った女が答える。

「わ、私はスレイン王国の神官、ニグン・グリッド・ルーインだ。他の神官達と巡礼に出ているところを、この者達に襲われたんだ。他の者達はみんな彼奴らに殺された!」と、ニグンと名乗った男は叫ぶ。

「亜人を殺しまくって、何が神官だ! てめえは、亜人を殺戮する、*“陽光聖典”*の隊長だろうが!」と*“蒼の薔薇”* チームのゴリラのような大女が叫ぶ。

「何を訳の分からんことを! スレイン王国に問い合わせてみてくれ! 私はれっきとした神官だ! ん? あなたは帝国四騎士の*“重爆”*か? 中央神殿で火の神殿の神官長と、貴国の皇帝が会見をしたおり、私も後ろに控えていた! あなたが、皇帝の護衛をしていたのを憶えている! スレイン王国としてバハルス帝国に、救援を要請させていたください! 神官の帝国内での活動において、貴国は、最大限の便宜を図るという条約が締結されているはずだ!」とニグンは、レイナースの姿を見るなり、そう叫ぶ。「……。確かに、見覚えがある顔ですね。火の神官長の付き人をしていらしたくらいの方ですから、かなりの高位の神官。神官であることは嘘ではなさそうですね。帝国の外上交上の優先度は、スレイン王国の方が、リ・エスティーゼ王国よりも遙かに上位。帝国四騎士の立場で言うならば、ここは帝国領内ですし、私は、彼の救援依頼に応えなければ

ばなりません」と、レイナースはモモンガとアルシエにだけ聞こえるような声で言う。バハルス帝国は、スレイン法国の神官に、外国使節団と同様の外交特権を与える代わりに、緊急時には治癒関連の力を借りることができるといふ条約を締結している。そして、神官が帝国内を通行する場合における彼等の安全を守る義務が、帝国側には存在している。

モモンガは、悩む。冒険者は、国家間の争いには介入しない。だが、片方はスレイン法国の神官、そしてもう片方は、リ・エステイーゼ王国の冒険者。そしてスレイン法国側は、条約などということまで持ち出してきている。既に、介入してしまったという状況だ。

帝国領内で、王国と法国の人間が争っている。それに、巫人の死体が多数平野にあるという状況。『蒼の薔薇』は、巫人の殺戮は、法国がやったと言っているが、法国側はそれを否定している。逆に、『蒼の薔薇』がやったという可能性も残る。それに、この状況から考えて、『蒼の薔薇』が法国の他の神官を殺したということは間違いがないであろう。

ここは、中立であるべきだ、とモモンガは決断をする。

「私は、このカツツエ平野で魔物が出現していたらそれを倒すし、争いがあればそれを仲裁しなければならぬ。両者とも、このまま争いを止めて引いて欲しい」とモモンガは

言う。

「わ、私は、法国に無事に帰れるのであれば、それで異論はない」とニグンは答える。

「巫山戯るんじゃないぞ、銅^{カツパー}。このまま、あの外道野郎を見逃せつてことかよ！　ここ

であいつを逃がせば、今後も亜人の村が焼かれるつてことだ。悪いが、このまま、はい
そうですかつて、帰る訳にはいかねんだよ！」と、
「蒼の薔薇」の巨大な刺突戦鎧^{ウオーピック}を
持った大女が、殺気をモモンガにぶつけながら叫ぶ。

「これ以上、争いを持続するというのなら、私はそれを止めさせてもらうぞ？　もちろん、
殺さないようには手加減はするがな。戦闘が継続できないように多少痛い目にはあつ
てもらうぞ？」

「そうか。そうか。分かった。俺達は、
「モモンと愉快な仲間達」なんて奴らとは会わ
なかった。そういうことだ！」

「ちよつと、ガガーラン！」と、ラキユースはガガーランを呼び止めようとするが、ガガー
ランは止まらない。

「無駄。ガガーラン、亜人の死体を見てから、完全に頭に血が上りつぱなし」と忍者の一
人が言う。

「死ねや、空気の読めない銅^{カツパー}さんよ！」と刺突戦鎧^{ウオーピック}を容赦なくモモンガに向けて振り下ろ
す。

モモンガも背中ของバスタードソードを抜き、その刺突戦鎚ウオーピックによる攻撃を受け止める。「へっ。やるじゃねえか。俺の攻撃を受けきるとはな!」と、ガガーランは引き続き攻撃を開始し、モモンガとガガーランの応戦は続く。

「アルシエさん! 危ない!」と、レイナースはアルシエに向かって飛んできて飛び道具を地面に叩き落とす。地面に落ちていたのは、「苦無」であった。首という急所、そしてその速度。アルシエの命を狙つての一投であったことは明白である。

「油断してたし、一人片付けようと思つたのに……」と忍者の一人が残念そうに呟く。「テイナ! ガガーランに続いて何をしているのよ!」とラキュースが怒るが、テイナと呼ばれた忍者は「へいよ! 鬼ボス」と言つて、まったく反省をしている様子も無い。「リーダー、諦めろ。まあ、戦闘中と分かつていながら乗り込んできたあの冒険者たちが悪いということだ」と、アルシエと同じくらいの身長、仮面にフードを被つた者が呟く。その声は、少女の声であつた。

〈アルシエ VS イビルアイ〉

「あ、ありがとうございます、レイナースさん!」

「お礼は戦闘が終わつてからにしましょう。あちらの方々、やる気みたいですね。私が、あのリーダーと忍者二人は抑えます。もう一人の小さい子は、恐らく魔術詠唱者マジック・キャスター。お願

「いできますか？」

アルシエは、「蒼の薔薇」のその少女を自分の生まれながらの異能で見つめ、何かの間違いであるのではないかと、生まれながらの異能を疑ってしまった。その少女の魔力は、自分が今まで見てきた魔力を上回っている。フルーダ先生と比べても遜色のない魔力量……。第六位階の使い手？ 私と同じ背格好なのに……。自分が、「天才」と呼ばれていい気になっていたのが本当に馬鹿みたい。自分が「天才」であれば、同じ年齢くらいのその人は、何なのだろう……。

圧倒的な魔術詠唱者としての力量の差。勝てるか、と問われれば絶対に無理、としか言いようがない。だが、この状況で、そんなことは言えない。レイナースさんは、三人を抑えると言っている。

「やってみます」とアルシエは答える。

自分があの魔術詠唱者に勝てるとしたら、それは奇襲。通常の常識で考えるなら、自分が第三位階魔法を使えるとは相手は思わないはずだ。その油断を突く。意表を突いて、自分が使える魔法を間髪入れずに、叩き込むしか無い。

「では、私はあの三人を……」と言って、槍を構え、ラキユースに向かってレイナースは向かって走り去る。

私も、やれることをやらないと……。モモンは、ガガーランと一進一退の攻防を続け

ている。あの、死の騎士の時と同じだ。

「あ、あなたの相手は私よ！ 私は、『美少女』アルシエ」

「私はイビルアイ。『美少女』か……。恥ずかしい二つ名だ。その年齢で、飛行を使えるとは、希少な存在だろうに。殺すのには惜しいが、自分の才能を過信した者は早死にする宿命だ」

「うう……」とアルシエは一瞬怯む。

そういえば、ここまで飛行でやって来た。そしてそれを見られていた。自分が第三位階まで使えると言うことは既に敵は承知している……。当然、第三位階魔法への警戒はしてくるだろう……。

「だけど……!!」

飛行を唱え、イビルアイとの距離を詰め、アルシエは火球を唱える。

突如現れた直径一メートルほどの火球が、イビルアイに向かって飛んでいく。が、同じようにイビルアイの方からも、同じように火球がアルシエの方向に向かって飛んできた。イビルアイが生み出した火球は、直径三メートルを超えている。アルシエの生み出した火球を飲み込み、そして尚もアルシエに向かって飛んでくる。

「水球!! き、消えない。火属性防御」

イビルアイが放った魔法。水球によっても相殺することができず、アルシエの皮

皮膚を焦がす。火属性防御が間に合っていないければ、それで既に勝負は決していたかもしれない。

「すごい魔法。第六位階魔法？でも大丈夫。この程度なら致命傷にはならない。モモンから渡されている無限の背負い袋には、レイナスさんから渡されたポーシオンが沢山詰まっている。」

アルシエは、ポーシオンを一本取りだし、すぐさま回復を図る。大丈夫。あのときの死の騎士の時と同じ。ポーシオンはまだまだ沢山ある。致命傷を避け、適宜回復していけば、尽きるのは相手の魔力の方だ。

「ほう。耐えきったか。それに、まだまだやる気満々だった顔だな。やれやれ、レッスンだ。どうせ、私が先ほど放った魔法は、高位階の魔法だと思っただけであらう？だが、あれは火球だ。同じ呪文といえども、使うものの魔力の絶対量によってその威力は、大きく異なる」

「そ、そんな……」

「桁が違うということだ。身の程を知れ。小娘」

「こ、子供扱いしないで。あなたの方が子供でしょ！子供のくせに、大人ぶった口調して馬鹿じゃないの？背伸びしてる子供って、見ていて痛いわよ！ま、魔法の矢」とアルシエは魔法をイビルアイに向かって撃ち込みながら、誰もいない平野へと飛行す

る。

決して逃げているのではない。勝てないのであれば、時間稼ぎだ。相手を挑発し、自分を標的にさせながらも、飛行フライで逃げ回る。時間さえ稼げれば、きつとモモンが何とかしてくれる。あのゴリラみたいな女を倒して、きつと自分を助けに来てくれる。それまで、自分は時間を稼げばいい。最悪なのは、あの魔術詠唱者マジック・キャスターが、モモンやレイナースに對して攻撃を仕掛けてくること。自分にやれることは、魔術詠唱者マジック・キャスターを引きつけて、時間を稼ぐこと。

アルシエは、飛びながら後方を振り返る。ちゃんと、あの魔術詠唱者マジック・キャスターが自分を追いかけて来てくれているかを確認するためだ。

なっ！　いない？　どこへ？

「やれやれ、レッスン2だ」と自分が向かっている方向から声が聞こえる。イビルアイの声だった。

え？　いつ移動したの？　まさか……。アルシエは、嫌な予感と共に、確信をする。「教えてやろう……。私からは逃げられない……。それに、小娘に小娘扱いされるのは、いささか腹が立っただぞ」

そこには、転移して自分の前に立ちはだかるイビルアイの姿があった。

昇格試験 10

「レイナース VS ラキユース and ティア・ティナ」

「時の女神よ、我に時間の加護を与えたまえ。『流水加速』」

レイナースは、ラキユースへと向かって走りながら武技を使う。武技を用いて自らの反応速度を向上させ、帝国四騎士として所持している装備、グリープ・オブ・クイックマーチ風疾行軍の脛当によって向上している自らのスピードをさらに引き上げる。

レイナースが選んだのは、短期決戦。アダマンタイト級冒険者三人を相手にして、長く戦って勝てると思うほど、レイナースの経験は浅くはない。そして、レイナースに短期決戦を決断させた要因の一つが、『蒼の薔薇』がスレイン法国の神官との戦闘途中であつたということ。戦闘によって体力が消耗している間に、倒す。それも、相手を殺さないように。

「まったく。格上のアダマンタイトの相手をしながら、殺さないようにとは、モモン殿のなかなか要求が厳しいですわ」と、春の小鳥のさえずりのような独り言をレイナースは漏らし、槍を構える。

「槍よ。我が体の一部となりて、敵を貫き砕け。」

「バス・オブ・アイストランス・ブレイクシス水 槍 殲 破 突」

レイナースが武技を発動させると、穂先に冷気が帯び始める。冷気属性の追加ダメージを与える技だ。

「ティア、ティナ。距離を取って戦うわ!」とラキユースが叫ぶ。そして、彼女自身の後ろから、六本の黄金の剣が空中に浮く。そして、ゆつくりとその剣先はレイナースへと向けられる。彼女が装備している浮遊する劍群フロートイングソードである。近づく敵の攻撃を防ぐこともできるし、逆に使用者の意志によつて投擲するように剣を飛ばすこともできるマジックアイテムだ。

ティアとティナの両手には、いつの間に取り出したのか、手裏剣。

「発射」というラキユースの掛け声と同時に、黄金の剣六本と、八個の手裏剣がレイナースへと向かつて飛んでいく。

「やはり、近距離戦を嫌がりませんか。ですが、詰めさせていただきます」と、レイナースは、全力でラキユースへと向かつていたのをやめ、両足のヒールを地面に突き刺し、急ブレーキを自らの体にかける。そして、槍を両手で思いつきり大地に突き刺した。

「豊穡の大地よ。堅き岩となりて我を守れ。地ウァール・オブ・ジ・アース裂墳シ・アース盾」

レイナースの前方の土が突如として隆起し、それが土壁を作り出す。そして、そこにラキユースや双子の忍者が放った剣や手裏剣は突き刺さっていく。レイナースは、耳で土壁にぶつかる音を数える。十二、十三、十四……。黄金の剣六本と手裏剣八本が全て

土壁によって防がれた。耳では土壁の音を数えながら、両目では、モモンとアルシエの状況を観察する。

モモンが戦っている大女。彼女は明らかに戦士職。『蒼の薔薇』の前衛だ。そして、

あの小さい子は、火ファイヤー・ボール球を放つたことから、魔力系魔術詠唱者、つまり攻撃魔法担当。

双子の忍者は、『苦無』や『手裏剣』を投げつけてくることや軽装であることから、野伏レンジャーや盗賊ロブというような、偵察や斥候、罫の回避を担当している可能性が高い。

それならば、『蒼の薔薇』のリーダー、ラキュースと名乗った女は……。アダマンタイトにまで上り詰めたチームであるなら、バランスの良いチームであると考えられる。つまり、消去法で彼女の職業を考えるなら、彼女は回復職である可能性が高い。それならば予想される彼女の職業は、森司祭か、神官などの類。信仰系魔術詠唱者である可能性が高い。

彼女は、これ見よがしに大剣を持っているが、おそらく彼女の本職は剣を使うことではない。

そして、遠距離攻撃をしてきた理由。考えられる要因は、体力を消耗しているか、それか後衛であり近距離戦を苦手としているか。そしてこの状況であれば、両者とも当てはまっている可能性もある。

接近戦に持ち込むという方針は間違っていない、そうレイナスは確信する。

再びモモンの方をレイナースは見る。モモンは防戦一方になっているが、前衛を抑えていてくれている。

アルシエは……。残念ながら魔術詠唱者マジック・キヤスターとして、完全に実力が及んでいない。猫に弄ばれている鼠の状態だ。いつ殺されてもおかしくない。

アルシエさんは、危ないですね。相手のチームで一番の実力者は、どうやらあの小さな子であったということですか。私の読み違いですね……。

このままでは、短期決戦どころか、本当に時間がありません。考えられる最速の手は、“蒼の薔薇”のリーダーの首元に槍を突きつけ、戦闘行動を停止させることなのですが……。双子の忍者が邪魔ですね。それには、三手、いえ、四手ほど足りませんね……。

頭の中でどのようにラキュースを人質に取るか、その手順を、考えていたレイナースの視野に、ふっと、草原に、尻餅をついたまま動かず人形のように固まっているスレイン法国の神官の姿が映る。

「もし。法国の神官さん。この戦闘を止めるために、お手伝いをしていただけませんか？ あの忍者を何とか十秒ほど抑えていただけませんか？ このままでは、あなたを含めて、全員やられてしまうかもしれません」

レイナースは、その神官のズボンが濡れていることは気付かない振りをする。

ニグンと名乗った男は、コクリとだけ頷く。そして、天使が現れる。そして、その天

使がレイナースと双子の忍者に向かって突進していく。

それと同時に、レイナースは土壁の横から飛び出て、再び、ラキユースに向かって走り始めた。

昇格試験

11

【閲覧注意：鬱展開】

〈モモン VS ガガーラン〉

「本当になかなかやるな。剣の技量は全然だが、熟成されている感が半端ないぜ、お前。本当に銅か？」と全力で振りかぶった刺突戦鎧ウオービックをバスタードソードで受けきったモモンガを鏢カッパ迫り合いしながら称賛する。

刺突戦鎧ウオービックとバスタードソードを介した、互いの筋肉での押し合い。力比べだ。お互いの重心は低い。互いを押すのは、上半身の筋力。押し負けた方は、上半身が後ろに反れ、そのまま相手から無条件で攻撃を受けてしまう。

「逆に問おう。お前こそ、本当にアダマントタイトか？ 力任せに刺突戦鎧ウオービックを振り回すだけ。悪いが、死デス・ナイトの騎士の方が強かったぞ？」

「俺の鉄砕フェルアイアンきを受けられるお前が異常なんだよ！ よし決めた。お前の熟成させたもん、俺がもらう。イキながら逝かせてやるよ！」とガガーランの鼻息はより一層荒くなる。

「ふん。渾身の一撃防がれた状態で、よくそんな事が言えるな……。だが……。装備を奪う前提でのPVPというのも悪くはない。もつとも、お前の装備は大したものがないが

な」

「へっ。お前の装備は全て剥いてやるがな。こいつでも食らいやがれ！」

ガガーランは、自らの持っている武技をいくつも同時に発動させ、自らが必殺技と位置づけている超級連続攻撃を使う。

盛り上がった筋肉により、モモンガの上半身を後ろに反らし、そしてそれによって生じた隙、胸筋のあたりを刺突戦鎚ウォーピックで叩く。もちろん、それだけではない。英雄の領域へと迫りつく為に練り上げた十五もの連続攻撃を可能にした必殺技だ。

戦鎚の平べったい部分で胸に衝撃を与え、モモンガの体勢を完全に崩した後は、戦鎚の裏面。尖った刃がある部分で、容赦なくモモンガの急所を狙う。首元、右肘と左肘の鎧と鎧の可動部分。どのような頑丈な鎧であっても、人間が動くために作られている金属と金属の遊びの部分。人間で言えば関節の部分を狙っての攻撃。流れるように十四発の攻撃がモモンガを撃つ。そして、最後のトドメと言わんばかりに、最後は思いつきりモモンガの兜に向かってその鉄槌を振り下ろす。あり得ない硬度の金属で作られていない限り、兜を潰し、そして相手の脳天までも潰しきる威力の一撃。そして万が一、あり得ない硬度の金属によって作られている兜であっても、ガガーランの渾身の一撃の衝撃は、兜を通じてその相手の頭に伝わり、そして首にまで通じる。外を覆う兜が無事であったとしても、首の骨を砕き、頭を兜ごと胴体に沈み込ませることが出来る。このガ

ガーランの必殺技を食らって生きている人間など皆無だ。この必殺技を完全に食らった相手は、まるで甲羅に頭を引っ込めたかのような亀となる。

それが今までであつたが……。

「お前は、どれだけ頑丈なんだよ。お前、本当に人間か？」とガーランは、平然と立っているモモンガを見て呟く。この必殺技が全て綺麗に決まれば、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフにも勝つことができる。とガーランは思っていた。その必殺技が、まるで蚊にでも刺されたかのように、首のストレッチでもするかの如く、この漆黒の全身甲冑の男は首を左右に動かしているだけだ。

「もう終わりか？　王国のアダマンタイト。とんだ期待外れだ。次は、こちらから行くぞっ！」

その時、レイナースの悲鳴がカツツエ平野に響き渡った。

「お前等、俺のチームメイトに何をした？」とモモンガが静かな口調でガーランに問いかける。

ガーランは、その声を聞いた瞬間、体の筋肉が石にでもなつたかのように動かなくなつた。刺突戦鎧ウキービツクを持つ手の握力が失われ、それが地面にズトンと落ちるが、ガーランは何も反応が来ない。蛇に睨まれた蛙。自分が立っていられるのが不思議なほど、足が震えている。毛穴という毛穴が広がっている。突然、太陽が眩しくなつたように感

じるのは、瞳孔が開ききつているせいだ。

「約束通り、命は奪わないが、そこで芋虫のように寝ている」と、モモンガはガガーランの肩を触る。負の接触ネガティブ・タッチのスキルによつてガガーランの体に負のエネルギーを流し込んでいるのだ。ガガーランは、筋力の低下や俊敏性の低下など、バッドステータスに侵されていく。ガガーランの体中に、雷属性の魔法が直撃したような痛みが全身を駆け巡る。体が重い。自分が装備している鎧に自分が押しつぶされてしまいそうだった。

モモンガは悲鳴の声の主。レイナースの所に全力で疾走し始めたころ、ガガーランは、体のバランスを失い、受け身を取ることさえできず、地面にそのまま倒れたのだった。

〈アルシエ VS イビルアイ〉

「さあ、先ほどの言葉、撤回しろ。取り消すなら、これ以上は苦しめないぞ？」とイビルアイは飛行フライで空中に浮かび、アルシエを見下す格好で言った。

アルシエの左肩と両脚の太ももには、イビルアイが放った水晶短剣クリスタルダガーが刺さっていた。

アルシエはフラフラの状態ながらも、自由の利く右手で無限の背負い袋インフィニティ・ハザアザツクからポーシオンを取り出し、素早くそれを頭から全身にかける。ポーシオンが体の衣服を濡らしていき、アルシエの体中を走り回っていた痛みが和らぐ。

よし。まだ大丈夫。両脚の痛みは残っており走るのにはキツイが、飛行する分には影響はない。

相手は、自分が子供扱いされたことを撤回するようにと、自分に痛みを与えて、そして回復させ、また痛みを与えて、私の心がへし折れるのを待ってる。捨て身の戦いではあるが、挑発が成功している状況。ポジションに残りはまだある。このまま時間を稼ぐしかない。

この前の死の騎士の時だって、みんなそうやって戦い続けていたんだ。モモンも、レイナスさんも！ 私にだって出来る！ 絶対に私は諦めない。

アルシエは再度決意を固め、そして言葉を紡ぐ。選ぶべきは相手を挑発する言葉だ。「取り消さない。だって、本当にあなたは子供よ。今だって、意味なく空中に浮かんでいるのは、自分がおチビさんだからでしょ！」

「言ったな小娘……」

イビルアイの前に、先端の尖った水晶が無数に現れる。太陽の光を浴びて、その水晶が乱反射していた。

「第四位階魔法、水晶騎士槍だ。先ほどの水晶短剣より、格段に痛いぞ？ 最後通牒だ」

空中に浮かんでいる水晶がクルクルと空中を回り始め、やがて止まる。無数の水晶の鋭く尖った部分がアルシエに向けられていた。

あれは危険だ、とアルシエも直感的に悟る。だが、アルシエが知らない魔法。
クリスタルダガー水晶短剣のように無属性？ それだったら不味い……。

即死の可能性……。アルシエが、自らの死を予感した瞬間、レイナースの悲鳴がカツツエ平野に響き渡った。

へレイナース + α VS ラキユース and ティア・ティナ

ニグンが呼びだした天使。プリンシパリテイ・オプザベイシヨン監視の権天使。それが、戦局に与えた効果は劇的であつた。第四位階魔法で召喚される天使。プリンシパリテイ・オプザベイシヨン監視の権天使は、全身鎧に身を包んだ天使だ。片手には柄頭が大きいメイスを持ち、もう片方の手には円形の盾を装備している。そして、この天使の特徴は、同位階の魔法で召喚される権天使達の中でも最も防御に優れた天使だ。そして、ニグンの持つ生まれながらの異能ダレトによって、その防御能力は向上する。そのため、ニグンが召喚した監視プリンシパリテイ・オプザベイシヨンの権天使を倒せる者は相当限られている。

奇襲という形で「蒼の薔薇」に襲われず、ニグンが監視プリンシパリテイ・オプザベイシヨンの権天使を召喚できていれば、圧倒的に「蒼の薔薇」が不利になっており、陽光聖典がニグンを残して全滅するというようなことにも無かつたほどであろう。

その監視プリンシパリテイ・オプザベイシヨンの権天使が、盾役となつて、ラキユース達の所へと突進していく。

レイナースは、ラキユースに向かつて一直線に走る。忍者の双子も、天使の対応に追われている。今が、チャンス。

「魔剣を使うわ!」とラキユースは、魔剣キリネイラムに魔力を流し込んでいく。刀身に浮かぶ星のごとき輝きが巨大になり、刀身が膨れ上がっている。

「させません」と、レイナースは自らの槍で、ラキユースの剣を払う。そして、地面に突き刺さった剣を自らの靴で押さえつけ、穂先をラキユースの首元に突きつける。

「早く戦闘行動を停止させなさい。命は保障します。五秒だけ待ちます。五、四、三……」「分かりました……」とラキユースは魔剣を手放し、両手を上げる。

一瞬の戦いの中の静寂。聞こえてくるのは、モモンとガガーランが打ち合っている剣の音。そして、遠くの方で「刮目して見よ! 我^{われ}が召喚せし天使の力を」という声が聞こえるだけだった。

「では、早く戦闘停止を……」とレイナースが言いかけた瞬間、レイナースの背中を冷たいものが走る。この感じ……。まさか……。まさか……。そして……。完治したはずの自らの顔の右半分が熱くなるような感覚になる。レイナースは、持っている槍が震えるのを自分では制御できない。

こ、これは……。レイナースは自らの悪寒の原因を探る。そして、自らが踏みつけていた魔剣を見つめる。

魔剣キリネイラム。十三英雄の一人、黒騎士が所持していたとされる四振りの暗黒剣の一つ。

呪いの魔剣？ 呪い……。

幻なのか、レイナースは、魔剣キリネイラムから禍々しい邪悪なものが、ユラユラとまるで湯気のように出ているのを見た。

そしてその瞬間、レイナースは走馬燈を見ているかのように、過去の悪夢が甦る。死に際の魔物の呪い。優しかった両親が、手の平を返すように自分を腫れ物のように扱い、自分を実家から追い出したこと。心から愛していた婚約者の自分への態度の豹変……。突きつけられた破門状と、叩きつけられた婚約破棄の手紙。

レイナースは、槍を落とし、両手で頭を抱え、震える。そして叫んだ。
「イヤアアアアアアアア!!」

昇格試験

12

【閲覧注意：性的描写】

一体何が起こったの？ というラキユースの戸惑いと同時に、ラキユースの体に悪寒が走った。疾走してきた漆黒の鎧の男。その男の背後には、不気味な鎌を持った死に神がいる。そんな幻覚をラキユースは見た。

豊かに実を付けた麦を鎌で刈り取るように、自分の命も刈り取られる。そんな悪い予感。心臓が止まって凍り付いたかのようになっているのに、その鼓動は激しい。

体が思うように動かないのはティアもティナも同じなようで、全身甲冑の男にあっけなく倒される。

ラキユース自身も、モモンに右肩を掴まれる。その瞬間、全身の筋肉がだらりと動かなくなり、風邪を引いてしまったかのように全身が寒い。身震いが止まらない。だが、全身の毛穴という毛穴は開ききり、毛穴からは汗が噴き出している。

ラキユースは、地面に倒れながらも、目蓋を閉じる気力が無い。カツツエ平野に生えている雑草が自分の顔や首に刺さつてむず痒いが、それを何とかするだけの体の自由も、そして気力もない。ただ、目の前で動き続ける男の様子を見つめ続ける。

「大丈夫か？」と、モモンは優しくレイナースを抱き上げる。レイナースは泣いていた。

そして、抱きかかえられた瞬間、その両手をモモンの首に回す。そして、しゃっくりをしながら泣きじやくっている。

「ひつく……」

ただ、子供ののように泣くレイナースから返事は無かった。

「怪我は無いようだな……。アルシエも助けるぞ」と、モモンはレイナースを抱きかかえたまま、地面を蹴って進む。

〈アルシエ VS イビルアイ〉

イビルアイは、無数の水晶騎士^{クリスタルランス}槍を空中に浮かばせながらも、尚も戦意を失っていない少女の瞳を見据える。あの目は、まだ抵抗できる手段、勝てる手段を模索している目だ。目の前の少女は、諦めていない。

どこまでも向かってくるというのならば……。殺すしか無い。

イビルアイは、少女に向かって水晶騎士^{クリスタルランス}槍を飛ばすという決断をする。仲間の悲鳴ではない悲鳴。あちらでも決着がついたのであろう。

研ぎ澄まされた水晶がアルシエのもとへと一直線に向かっていく。

が、突如としてアルシエへと向かう軌道線上に、全身甲冑の男が現れる。アルシエを庇うように、自らの背中ですべての水晶を受け止める。

「モモン……」

「アルシエ、良く頑張ったな。後は任せておけ。レイナースさんを頼むぞ」と、モモンガは左手でレイナースを抱きかかえながら、右手をアルシエの頭に置き、そしてアルシエの頭を優しく撫でる。

「うん」とアルシエは答える。

体中に安心感が溢れ出す。アルシエにはまだポーシヨンでは回復できていない蓄積したダメージが残っている。だが、モモンが助けに来てくれたという安堵感で、イビルアイとの戦いで無理をしていた体とその意識の緊張と疲れは、どこか遠くの方へいつてしまったようだ。まるで、モモンの右手には癒やしの効果があるのではないかとアルシエは思う。

「すぐに終わらせるから、待っていてくれ」

モモンはレイナースを地面へと降ろす。レイナースは恐怖からか、そして寂しさからか、座られてもなお、モモンを求めて右手をモモンの方に伸ばすが、それよりも先にモモンはイビルアイへと突進する。アルシエは、相変わらずシャツクリをしながら泣いているレイナースを優しく抱きしめる。

「お前で最後だ。無駄な足掻きを止め、そこで大人しく横になれ。せめてもの情けに恐怖を味わわせないぞ？」

「物語の騎士気取りか！

ドラゴン・ライトニング
龍 雷」

イビルアイの右手から、地を這う蛇の如く電撃が波打ちながらモモンに迫る。だが、それはモモンへと届く前に霧散してしまった。

（私の魔法を無効化しただと?!）

ドラゴン・ライトニング

龍 雷が霧散した瞬間、イビルアイの体に今まで経験していたことの無い感覚が走る。イビルアイが生きていた二百五十年という人間種には考えられない悠久の時間。それの中でも、経験したことのない感覚。

イビルアイがその未知の感覚にたじろいだ瞬間、疾走してきたモモンによって左肩を掴まれる。

その瞬間、イビルアイの二百五十年の間鼓動することの無かった心臓が躍動したかのような感覚へとなる。

（なんなのだ、この感覚は!!）

イビルアイは、その感覚を避けようと、掴まれている左肩を振りほどこうと、モモンの右手を必死に叩くが、その右手から逃げる事ができない。

（こゝ、これは何のバッドステータスなのだ!）

突然動き出した心臓はまるで早鐘を打つようだ。しかも、体の異常はそれだけではなく。未発達であると自ら自覚している乳房の乳首。そこに、血が集まって隆起してい

る。服にその乳首の先端が擦れて、むず痒い。そして、勝手に、肛門が収縮と弛緩を繰り返す。いや、肛門だけではない。何物の通ったことのない未通の膣。そこも、痙攣を繰り返している。そして、新陳代謝が停止している筈の自分の秘部から何かの液体が流れ出している。灼熱の砂漠の真ん中で突如として湧き出るオアシスの水源のようである。

イビルアイには知る由もないが、モモンのスキル、負の接触ネガティブ・タッチの効果であった。接触した相手に負のエネルギーを注入しダメージを与えるスキルであるが、負のエネルギー故に、生者に対しては絶大な効果を発揮するが、アンデッドや吸血鬼ヴァンパイアにはダメージどころか、回復系の効果を与えてしまう。

（漏らした？ いや、違う……。そんな感覚では無い。一体、このバッドステータスはなんだ……。魅了系の類いか……。抵抗する気持ちが薄れていく……）

イビルアイが、なんとか振りほどこうと殴打し続けているモモンの右手。だが、その打撃は徐々に弱まり、イビルアイの抵抗が終わる。いや、自らの意志によつてその抵抗を止めてしまう。

（だ、駄目だ。こ、腰から力が入らない……。これは一体なんなのだ。指先から頭まで、電流が往復しているようだ……。なんだ……。私はこの感覚を自ら求めている？ あ、あり得ない……。私は吸血鬼ヴァンパイアだぞ……。精神作用無効のスキルを持つているな……）

ああああああああ

「これを耐えるとは、抵抗をある程度持つているようだな……。だが、完全には抵抗出来ていないな。それならば……」

モモンは、右手だけで無く、左手でイビルアイの右肩も掴んだ。

「うわああああああああ」

二倍の衝撃。イビルアイの腹筋は、まるで魚が地面で飛び跳ねるかのようになる。腹筋だけではない。

自分は吸血鬼となり、成長が止まった。初潮を永遠に迎えることがなく、ただ存在するだけとなった器官、子宮。その入り口の部分が痙攣を始める。そして、先ほどよりも強い波がイビルアイの意識を襲う。

（な、なんなのだ……。何も考えられなくなるぞ……。こ、恐い。なんだ、この感覚の先にある感覚……。）

「これでも耐えるか。ならば……」

モモンは、イビルアイの右肩と左肩を掴んでいる体をぎゅつと自分の体に引き寄せた。イビルアイを抱きしめるような格好だ。よりモモンとイビルアイが密着した体勢となる。

「うううううううううううわわわわああああああああああ」

より強い感覚がイビルアイを襲う。そして、その瞬間、イビルアイの何か弾けた。指先から秘部、腰、そして胸。首筋から耳の裏側。痛みとは対極の、自ら求めてしまいうような感覚。そして、イビルアイは意識を手放す瞬間、自らがコントロールできない、尿意とはまた違った感覚のものが、自らの秘部から噴き出ている。腰から秘部にかけての痙攣が限界に達すると同時に、何か噴き出る。そして、それが収まっても数秒すると、イビルアイの脳を焼き尽くすような感覚がまた襲い、また噴き出る。

その状態が四、五回行われ、やっとモモンはイビルアイが意識を失ったことに気づき、乱暴にイビルアイを地面へと転がしたのであった。

モモンは、イビルアイを地面に転がした後、アルシエとレイナースの所へと駆け寄る。

「二人とも大丈夫か？ ん？ アルシエ……。顔が真っ赤だが大丈夫か？」

「う、うん……。いや、あの子供に何をしたのかなあつて……」

アルシエは、地面に倒れながらも腰のあたりの痙攣を繰り返し、そして呻き声にしては艶っぽいイビルアイの声を聴きながら、モモンに尋ねる。

「ああ、あれは、籠手と鎧の能力で、相手にバッドステータスを送ってやったのだ。しばらくは動けないはずだ」とモモンは平然と言う。

「そ、そうだよね……」

アルシエは、これは戦闘なのだ、と納得する。その光景が、「縁談」の際に縁談相手から差し出された「媚薬」とそれを飲んだ後の自分に似ているというような考えは、すぐに棄て去る。

そして、「レイナースさん。ずっと震えて泣いているままなの！」とアルシエはモモンにレイナースの状況を伝える。普段のレイナースさんの態度からは考えられない。まるで、恐怖に脅える子供のようだった。

「何か、「蒼の薔薇」の連中にされたのか？ 毒などではないか？」とモモンも心配そうな声で言う。

「致死性の毒かな？」とアルシエが不安そうに言った時、「獅子ごとき心ライオンズ・ハート」と唱える神官の姿があった。それは、ニグン・グリッド・ルーインである。

ニグンのその魔法の効果が効いたのか、レイナースはその意識を正常へと戻した。

「せ、戦闘中に申し訳ありませんでした……。昔の……。悪い夢を見ていました……」

「気にすることはありません。我々は勝利したのですから。素晴らしい戦い振りでした。まさに、「帝国の戦乙女ヴァルキユリヤ」とニグンが言う。

「ありがとうございます。仲間がどういう状況であったのか、私達にも分かり兼ねていたところだったので。適切な対処をありがとうございます」とモモンはニグンにお礼を

言い、レイナスも「みつともないところをお見せしてお恥ずかしいですわ」と言う。「なあに、お安いご用です。あなた方が私を助けて下さらなかつたら、私の命も危ないところでした。世の中、持ちつ持たれつとは言うではありませんか!」とニグンは胸を張って答える。

「まったくその通りです。情けは人の為ならずというのはこのことです」

「ところで、『モモンと愉快な仲間たち』のお二人。そして帝国騎士の方。この『蒼の薔薇』の処遇ですが、どうなされるおつもりですか? 法国としては、彼等は危険な冒険者チームですので、動けないうちに息の根を止めたいというのが本音なのですが……」とニグンは真面目な顔をして言う。

「それは合意しかねますね。もともと、私達は争いを止めるためにこの場に介入しました。もし、神官殿が『蒼の薔薇』の息の根を止めるといふのであれば、今度は神官殿を止めさせていただきます」とモモンは答える。

「そう仰るであらうとは思っていました。では、私が信仰する神に誓って、今回は彼等に手を出さないということを誓いましょう」

「そうしていただけると助かります。二人も、それで良いか?」とモモンがアルシエとレイナスに問いかけ、二人ともそれに黙って頷く。

「そう不満そうな顔をするな、アルシエ。ちゃんと、あの大女と戦っている最中、装備を

奪って良いという約束はお互いにしておいた。
があれば言ってくれ」とモモンガは言った。

俺が欲しい装備はないし、欲しい装備

昇格試験 13

モモンは、倒れて動けなくなった「蒼の薔薇」の面々を一個所に運んだ。PVPの事後処理である。

「さて、どの装備がチームの強化に繋がるか。やはり、強化するべきはアルシエの装備だと思うのですが、レイナースさん、それでよろしいですか？」とモモンガはレイナースに言う。

「ええ。当然の判断だと思いますわ。私は帝国から支給された装備がありますし。私の装備は冒険者で言えば、オリハルコン、物によつてはアダマンタイトに匹敵する装備でしょう。例えば、これは魔抵抗リング・オブ・レジスタンスの指輪ですし、あとこれは、防御リング・オブ・プロテクションの指輪というマジック・アイテムです」とレイナースは左手の薬指と人差し指に嵌まっている指輪を見せながら説明をする。

「それと、法国の習慣とは違い、帝国では左手の薬指に指輪を嵌めていても、恋人がいるということをごさいますからね」と、モモンガを見つめながらレイナースは説明を補足した。

「感謝します、レイナースさん。では、アルシエ……どの装備が良い？」と、モモンガは

指輪の習慣については、法国の神官であるニグン氏に国家間の文化的差異についてレクチャーしているのだろうかと思いつつ、言葉を紡ぐ。

モモンの言葉を受けて、アルシエは、自分がどの部分を強化すべきかを考える。今回学んだことは、後衛でも攻撃を受けるときは受ける。場合によつては今後、今回のように自分が一对一、もしくは複数の敵を単独で抑えながら戦うという状況も想定される。その時に備えて防御面の強化が最優先だろう。それがまず、自分が足を引つ張らないための最優先事項だ。

「レイナスさん、モモンもありがとう。強化するなら、防御面だと思うけど……この人の装備は無理そう……」と、ガガーランの装備を見ながら言う。防御という側面で優れているように思われるのは、ガガーランの装備だ。だが、肩の部分に棘などあり見るからに重そうな装備だ。自分がこれを来たら、逆に身動きが取れなくなりそうであろう。「だけど……この忍者のは……逆に軽装すぎるかな」とアルシエは答える。そして口には出さないが、露出が激しすぎるとも思う。

「アルシエさんのチームでの役割や職業的に言えば、このリーダーの装備が良いのではないのでしょうか？ この黄金の剣は、攻撃にも使えるようですが、恐らく身を守ることも使えると思いますわ」とレイナスがラクキュースの装備を見ながら言い、「良かったら、私が鑑定を致しましょうか？」とニグンが申し出た。

「お願いします」

「道 具 鑑 定。」
アブレイサル・マジックアイテム

この装備の名前は、フロアテイニング・ソース浮遊する劍群。

レイナース女史のご推察通り、この黄金の劍六本は、使用者の意志によって、防御にも、そして攻撃にも使えますね。非常に高価なマジック・アイテムだと思います」とニグンが説明をする。

「神官様、ありがとうございます。ですが……。似たような効果の魔法を使えますので……わざわざマジック・アイテムで装備をする必要もないかもしれません」とアルシエは、自分の持っている手札と比較しながら答える。遠距離の攻撃を加えるならば、マジック・アロー魔法の矢でも良いし、防御をするなら防御系の魔法を展開させた方が効果がありそうだ。剣技の訓練を受けていない自分が、相手の攻撃をその黄金の劍を操作して受け止めることができるかという、疑問が残る。

「では、この鎧も鑑定します。」

アブレイサル・マジックアイテム道 具 鑑 定。

これは、ヴァージン・スノー無垢なる白雪という名の鎧で

す。無垢なる乙女のみが装備できるという限定がある分、防御力に優れた装備ですね。材質はミスリルなようですが、装備者の属性を限定させる分、その硬度が跳ね上がり、オリハルコンと比較しても遜色のない硬度になるようですね。これも一品ですね」

「えつと……。え、遠慮します……。なんか、で、デザインが可愛くないかなあって……。私、白色よりも……。茶色とかの色が好きですし……。そ、それより、この劍なんて凄いですね。レイナースさん、この劍、レイナースさんが装備してはどうですか？」

「……遠慮させてください。この剣は魔剣です。呪われた装備は、使いたくもないとい
いますか、近寄りたくもないですわ」とレイナースさんが言う。いつも柔和な笑顔であ
るレイナースさんの眉間に皺が寄っていて、不快感を露わにしている。

『歌う林檎亭』で見たレイナースさんの顔の呪い。それを考えたらレイナースさんが
呪いの武器を嫌悪する気持ちは分かる。

「そうですね……。レイナースさんの気持ちを考えず、軽率なことを言つてすみません」
とアルシエはレイナースに謝罪をした。

「いえ。分かっていただけで嬉しいですわ」とレイナースさんは再び笑顔で返答してく
れた。

「アルシエ。デザインなどにこだわるより、自身の安全を取った方が良い。弱い装備だ
と、いつか命を落とすぞ？」と、モモンはラキユースの下へと一歩近づく。

「ちよつと、モモン。待つて！ 冷静に考えてみると、鎧を剥ぎ取つたら、どうやつてこ
の人、このカツツエ平野から帰るの？ 下着姿で帰るのつて可哀想だよ！ 私の装備を
着せるにしても、私のはマジック・アイテムじゃないから、サイズが合わないだろうし
……女性を裸も同然な格好で歩かせるつて、酷くないかな？」とアルシエは言う。

アルシエとしても、自分が無茶苦茶な事を言っているのは分かる。モモンを責めるの
は筋違いだ。モモンは、自分の装備の強化の為に、装備を奪つても良いという約束を

蒼の薔薇”と死線をくぐり抜けながら、なんとか取り付けてくれたのだろう。だが……。装備できないものは装備できない……。

一方で、モモンガは思う。ユグドラシルでは、PVPの際には、アイテムが文字通り落とすドロップ仕組みだ。着ている物を直接剥ぎ取るといふようなことは無かった。それに、どんなプレイヤーも、破棄できないし奪うことの出来ない“冒険者の服”という初期装備があり、どんなに装備を奪われても、全裸等にはなることがないようなシステムであつた。

「確かに……。それは酷い行為か……。それならば、この仮面などは手頃じゃないか？」とモモンガはイビルアイの仮面を指差す。見たところ特殊な効果もない仮面だし、奪つても構わないであろうとモモンガは思う。

「その少女はなぜ仮面をしているのでしょうか？」とレイナスが口を挟む。

「ん？」とモモンガは首を傾げる。

「仮面をしているのは、顔を隠したいからです。例えば以前の私のように顔に呪いを負っているのであれば、仮面を奪うのは、同じ女性として賛成出来かねますわ。女性に恥をかかせるのは如何なものかと……。加えて、愚痴を言わせてもらいますと、カツツエ平野での野営をしている時から思っておりましたが、モモン殿は、”据え膳喰わぬは男の恥”という言葉をもっと重く受け止めるべきかと思えますわ。装備を剥ぐとい

うことに関して配慮は出来るのに、わざわざ「据え膳」を用意した女へと配慮が出来ないのは……まあ良いですが」とレイナースが少し怒ったような口調で言う。

モモンガはレイナースの顔の呪いのことを思い出し、自らの浅慮を思う。だが、その反面、「据え膳を食わない」という批判は、ちよつと酷いのではないかと思う。この巡回任務に出発する前に、レイナースさんにも、自分は飲食不要のアイテムを装備しているから食事は無用だと伝えている。確かに、アルシエやレイナースさんが作ってくれた食事に手を付けないのは、作った側からしたら失礼に当たるかも知れない。現実世界であつたら、女性の手料理など、鈴木悟は食べたことなどない。もし手料理を作ってくれる人がいたなら、涙を流しながら食べるであらう。だが、今の自分は、鎧の下はアンデッドだ。

な、なんだか、自分の出演しているアダルトゲームのタイトルを、ペロロンチーノさんに暴露された時の、ぶくぶく茶釜さんのような怒りようだが……。

「そ、そうですね。それは俺の配慮不足です。仮面を奪う代わりに私の手持ちの仮面を代わりにこの少女に渡しませう。一応、「蒼の薔薇」を倒したという証拠を持ち帰るのも必要ですからね」

そう言つて、モモンは無限の背負い袋から、怒りを露わにしている薄気味悪い仮面を取り出す。

「みんな少しの間、目を閉じていてくれ」と、モモンが言うとモモン以外のメンバーは全員、イビルアイに背を向け、そして目を閉じた。

この少女が着けている仮面も、なんの特殊効果もない仮面だな……と思いつながらイビルアイの仮面を外し、モモンはイビルアイの顔を見て、一瞬気が動転する。

イビルアイの口からは、だらしなく涎を垂れ流し、口から突きだした呂律の回っていない舌で、「も……もつと……」などと意味不明な言葉を発している。極めつけは、焦点の合っていない瞳は、上目蓋近くで激しく眼球運動しており、白目に近い状態であった。

これも何かの呪いなのか？ 確かにこんな状態が常につながるのであれば、仮面で隠したい気持ちがかかるな……。レイナスさんの言った通りだな。こんな表情を晒させるのは、敗者に鞭を打つような行為だった。みんなに目を閉じてもらって正解だったなど、モモンガも流石に同情しながら、手早く「嫉妬する者たちのマスク」をイビルアイに装着する。

「嫉妬する者たちのマスク」が、イビルアイの顔の表情にあわせてサイズが変わっていくことを確認し、「もう大丈夫です」とモモンガはメンバーに声をかける。

「さ、この仮面で、とりあえず手打ちとしよう。さて、では帝都に帰ろうか？」

モモンガは、不満そうな顔をしているレイナスや、複雑そうな表情を浮かべているアルシエを見ながら言った。

「あの……チームの複雑な事情を伺いながら、そして命を助けて貰いながらお願いするのも恐縮ですが……帝都へ帰還されるのであれば、私も一緒に行ってもよろしいですか？ 私は、帝都経由で、カルサナス都市国家連合に巡礼を行う予定でございました。帝都までご同行を許して貰えると、大変助かります。護衛料が必要であるなら、その分はもちろんお支払いします」とニグンが気まずそうに言う。

「リーダーの判断にお任せいたします」とレイナースはそっぽを向きながら答える。

「私のテントには余裕があるし……。モモンと神官様。私とレイナースさんが一緒に寝るといふ風にしたら、大丈夫だとは思うけど……」と、アルシエも現実的な提案をする。「構いませんよ。帝都に帰還するのは当然ですし、依頼料などは不要です」とモモンガは答える。

「ありがとうございます。そして……さらに凶々しいお願いではございますが、部下を埋葬する時間をもらってもよろしいですか？ ここはカツツエ平野。死んだ部下も、アソッドとしてこの平野を彷徨うということになってはうかばれませんからね。安らかに眠らしてあげたいのです」とニグンは言った。

「ええ、構いません」とモモンガは答えた。

ニグンが、命の火が消えた法国の神官達の亡骸を一個所に集めていく。

「俺達も手伝おう」とモモンは言つて、
「モモンと愉快な仲間達」の面々も動き始める。
だが、直ぐにトラブルが起きる。

「これは……。モモン殿。亜人の死体ではありませんか……」とニグンは、モモンガが抱きかかえて運んできた、母親であつたと思われる亜人の亡骸を抱えていた。その隣では、アルシエが、その子供であつたと思われる子供の亜人の亡骸を抱えている。

「一緒に埋葬して欲しいのだが」とモモンは言う。

「申し訳ありません。私には、亜人を埋葬するような術を知りません。亜人は、人間種の脅威です」

「神官様……。このような子供でもですか？」とアルシエは冷たくなつた亜人の子供を抱きかかえながら言う。

「今は子供でも、成長すれば人間の脅威になつたでしょう……。その子が大きくなり成長したとしたら、人間を何人殺すのか……。それを想像しただけでもおぞましいです。

私は、法国の神官。亜人を吊うことなどできかねます」とニグンは、明らかに亜人の死体を蔑むような目で答えた。

「ニグン殿。そこをなんとか……。人間だろうと、亜人であろうと、死は誰にでも平等に

訪れます。死を迎えた後では、もはや人間も亜人も同じではありませんか？ このまま平野に野ざらしにしては……」とモモンは深々と頭を下げる。

「モモン……。どうか、私からもお願いします。神官様」とアルシエも、モモンが頭を深々と下げるのを見て、同じように頭を下げる。

「頭をお上げください……。命の恩人の方々にそのようにされては……。確かに、死んだ今となつては、人間の脅威とはなりません。むしろ、その亡骸を放置すること自体が、将来の人間の命を脅かす火種となりましょう……。正式な埋葬をすることはできませんが、略式でよければ、我が神もお許しになるでしょう。分かりました。亜人の死体を……。いえ、ご遺体を集めてもらつてよろしいでしょうか。部下の弔いの後に、亜人達も埋葬いたしましょう」

「感謝する」とモモンは答えた。

ニグンが、法国の神官達の火葬を終え、そして、亜人達の火葬も終えた。その体が燃え、煙となり、カツツエ平野のドンヨリとした雲に混じっていくのを、モモン、アルシエ、レイナースはそれぞれ、厳粛な気持ちで見送るのであった。

昇格試験 14

あの頃の私には、冒険と恋の間に、はつきりとした境界線はなかった。あの頃の私は、恋というものは自分よりも幸せな誰かがするもので、自分には遠い夢物語のように思っていて、無意識のうちに諦めていたのかも知れない。もしかしたら、自分自身が経験した冒険というのが、こうして振り返って見ると、十三英雄の冒険譚に出てくる話のように、それが現実とは思えない話ばかりだから、冒険をしながら恋という名の白昼夢を見ていただけなのかも知れない。

まだ小さかったあの頃の私は、身の丈に合わない杖を持ち、大きなバッグを背負い、いつもモモンの後ろを歩いていた。

冒険者として私は駆け出しで、初めての昇格試験を受けた、その帰り道だった。カッツエ平野を抜けた場所を流れる溪流。透明な水が岩にぶつかり、白い水飛沫^{しぶき}。細かい粒子となった水が、木陰に冷たく心地よい空気を運んで来てくれる場所だった。

そこで、私達は野営をすることになった。

「これで良いだろう」と、モモンは持ち前の筋力で、河原に転がっていた岩から、座り易いのを運んできて、それを円形に並べて満足そうだった。

私とレイナースさんは、流れ着いた流木をその円形の中心へと運び集める。夜はそこで、火を囲んでの団欒だ。

「この流木は燃やすのに丁度良さそうだけど、これは漆うるしの木よ。アルシエさん、かぶれるかも知れないからこの木は触れては駄目よ」と、河原で流木を集めながらレイナースさんが言った。

レイナースさんは、いつも私が冒険者として必要な知識を教えくれた。

レイナースさん。私の憧れの女性。女性としての永遠の目標。私があ頃のレイナースさんと同じ年齢になり体も成熟し、レイナースさんに負けない魅力を備えたと思っても、レイナースさんは更に別の魅力を備えた女性へとなっている。

乳飲み子に乳を飲ませながら、自らの赤子を優しく見つめる聖母のようなレイナースさん。レイナースさんの流れるような美しい金色の髪が白く染まっても、レイナースさんは変わらず美しかった。

「テントも張り終わりました。水を汲んで浄化しておきますね」というニグンさんの声が聞こえた。私が振り返ると、ニグンさんはバケツを両手に持って川へと向かっていくところだった。

ニグンさんとは、帝国と法国という関係上、会える機会はそんな多くなかったけれど、巡礼などで帝都に訪れた際には、時間を見つけて訪ねてきてくれた。ある時期から、早

く最高神官長の座を息子に譲ってゆつくりしたいですよ、とお茶をする度に、同じ愚痴を言っていたけれど、ニグンさんはきつと、死ぬまですつと自分の理想を実現するために世界を駆け回るのだろうと私は思っている。ニグンさんはそんな人だ。

「野営の準備は終わりましたわね。まだ陽も高いことですし、戦いの疲れを癒やしますとしましょうか」とレイナーズさんが言った時だった。

「あ、魚だ」と私は、水面高く飛び跳ねた魚を指差した。

「ヤマメですね……。水面近くを飛んでいたカワゲラを食べたのでしょうか」とニグンさんが言う。

「あんな大きなヤマメ、見たことありませんわ。ここは、豊かな土地ですね」

「保存食だけでは何ですから、夕食に彩りを加えるのは如何でしょう。モモン殿、どうですか?」とニグンさんは、右肘を支点にして、腕を何度も前後に振る。

「釣りですか? 俺はやったことはありませんが……」

「大丈夫です。きつと釣れます。それに、法国神官としての私の腕を信じてください。一人一匹食べる分はなんとか釣ってみせますよ」と、ニグンさんは自信たっぷりだった。「神官様が釣りなのですか?」と私は尋ねたのを憶えている。

「スレイン法国の建国時の話ですよ。彼の六大神がこの世界に降臨し、人間を救い、そして、法国の礎を築いてくださった。そして、その六大神に最初に選ばれた弟子達。彼等

は、漁師であつたと伝えられています。神官は、その伝統にならつて、神官である前に一人前の漁師であることが求められるのです。何を隠そう、私も毛針フライ・キヤスター漁師です」とニグンさんは嬉しそうだ。部下を失つた哀しみを、釣りをすることによつて気を晴らそうとしているかのように私にも私には見えた。

「面白そうですね。やつてみましょう。ニグン殿、ご教授いただけますか？」

「もちろんです。どちらが大物を釣れるか、一つ勝負といきましょう！ この季節は、水面を飛んでいる水生昆虫が多いので、浮遊毛針ドライ・フライが魚を最も引き寄せると思っています」
「なるほど。では私も、釣りをしやすい格好にならせてもらいましょう。ちよつと岩陰で装備を変えてきます。ニグン殿、抜け駆けは駄目ですよ」

「もちろんです。同時に始めましょう」

ニグンさんの話では、フライ・フィッシングをする際に最も重要なのは、「川を読む」ことなのだという。そして、誰しもが、自分の人生を語るにおいては、同じように、流れ続ける止まることのない時間の中で、自分の人生を読まなければならないのだという。

濁つたまるで泥川のような人生であると読むのか、穏やかな平野をゆつくりと流れる川であると読むのか。それは人それぞれによつて違つてくる。だけど、人は、自分の人生を悲劇の川であると読んでしまいがちだという。

私も、モモンに出会わなければ、自分の人生は、水の流れさえも堰き止められて腐った川。そんなように自分の人生を読んでいたのかも知れない。

雨が降り、水かさが増して流れの強い、全てを押し流してしまいうような川。透明な水の中を、優雅に魚が泳ぐ川。

川も、その時々でその姿を変える。自分の人生というものも、同じようなものだという。たとえ真夏に干上がったとしても、水が堰き止められ異臭を放つようになって、また雪解けの冷たく清らかな水が、春の到来と共にその川底を潤すのだ。

「まったく、殿方はどうしてこう釣りの話となると子供みたいに熱くなるのでしょうか」とレイナースさんは二人が意気揚々と川へと向かっていくのを微笑ましく見つめながら言った。

「私達は手伝わなくていいのかな？」と、座るのに丁度良い木陰を探しているレイナースさんに尋ねた。

「アルシエさんは、元貴族でしょ？」

「え、ええ」と私は突然のレイナースさんの質問に驚く。

「やっぱり。死デス・ナイトの騎士の慰労会でのアルシエさんの所作を見て、そうだろうなあとは思っていたわ。釣りに出かけた際の、貴族の女性としての嗜みは教えてもらわなかった？」

「いえ……。私の父は、鷹狩りしけませんでした……」

「そうなのね。私の父は、いつも釣りばかりだった。じゃあ、私が教えますね。釣りに出かけていった殿方に対して、女の私達が出来る仕事は二つだけ。戻ってきた殿方に、『まあ、なんて美味しそうな魚』と喜んであげるか、『そんな日もあるわよ』と慰めてあげる。この二つだけなのよ？ だから私達は、こうやって木陰で休んで、彼等の背中を見つめているだけで良いのよ」

レイナスさんに言われて私はモモンの姿を目で探した。岩の上に立ち、フライ・ロッドをさつと持ち上げる。そして、ロッドの動きと共に、道糸ラインと先糸リーダーとフライが、空中で美しい弧を描き、水面へと静かに落ちていく。

その鮮やかに空中で弧を描いた糸は、まるで肖像画を描く油絵師の筆使いのようで、私の人生に確固として彩りを加えた。

私は、どんなに月日が流れても、あの時の光景は鮮明に思い出すことができる。

夜空が星で一杯になり、私達は焚き火を囲んで食事をする。

「いやあ、モモン殿もお人が悪い。釣りをしたことが無いだなんて。本当に参りましたよ」

「いや。本当に初めてでしたよ。実は……種明かしをすると、この箆手です。私のかつての仲間が作ったものですが、最高の投げキャストが出来るといふ特殊能力を備えた箆手なのです。この箆手の力を借りたのです」

「それは素晴らしい。見事な箆手だ。釣りを愛した方であつたのですね」とニグンが、焚き火の光で照らされた箆手を見ながら驚嘆している。

私は、モモンのかつての仲間、という言葉が気になつた。モモンは私と冒険者チームを組む前には、どのような冒険をしていたのだろうかと。

「釣りですが、自然全般を愛した男です。もし叶うなら、彼にこの満天の星を見せてあげたいですよ。それに、こうやって釣りができるといふことを知ったら、泣いて喜ぶでしょうね」

「そうですか。私はそのモモン殿のかつての仲間にもお礼を言わなければなりませんね。実は、モモン殿が今日使つた毛針フライは、今回の巡礼で亡くなつた部下の一人が作ったものでした。キャストの腕はイマイチでしたが、毛針縫フライタイイングいをさせたら法国一というような男でした。彼が手作りする毛針フライ以上の物を私は見たことがありますでした……。彼と一緒に休日休日に釣りをするのが本当に楽しかつた……」

「そうだったのでですか……それはとても残念な方を失いました……。ニグン殿。私のその仲間の受け売りですが、人間もまた、自然という大きな輪の中中にいる一つなのだそう

です。死んで土に還っても、またそれが新たな命へと廻る。そうやって命は受け継がれていくのだと、彼は言っていました」

「命は受け継がれていくですか……。そうであれば良いのですが、私は、時々、不安になります。人間はこの世界で命を受け継いでいけるのかどうかと。人間の生活圏を囲むように、その周りには強い種族が住み、人間を狙っている。竜が怒れば人間の都市が一つ消えて無くなる。良き夫、良き妻、未来ある子供、そんな何も罪のない人々が、無残にも人食い大鬼に喰い殺される。それが、私達の現状です。そのような中、なぜ、私の部下たちは同じ人間に殺されねばならないのか!! ……。す、すみません。折角の団欒の雰囲気……。少し夜風に当たってきます……。」とニグンさんは立ち上がり、川の方へと歩いていった。

「神官様、泣いていたね」と私が言ったのを、「アルシエさん。殿方が泣いているところは、見て見ぬ振りをするべきですわ」とレイナスさんが静かに私を叱った。

モモンも焚き火を見つめながら考え込んでいるようだった。

あの頃の私には、冒険と恋の間に、はっきりとした境界線はなかった。冒険と恋と、そして私という存在が融解し、融合して、たった一つの存在となつて、私の人生を確かに彩っている。

遺跡調査

遺跡調査

1

【閲覧注意：鬱展開】

〈帝都アーウィンタール、冒険者組合前〉

「命まで助けていただき、さらに帝都まで送っていただき、ありがとうございます。モモン殿、またいつかお会いできたら嬉しいです。レイナース女史も、アルシエ女史も、ありがとうございました」と、ニグンはモモンに続いて、レイナース、そしてアルシエと固い握手を交わす。

「こちらこそ、旅をしながら異国の話が聞けて大変有意義でした。それに、また一緒にやりましょう」と、釣り竿で糸と針を投げるかのような仕草を右手でする。

「ええ。喜んで」とニグンも満面の笑みである。

「それはそうと……。ニグン殿は、カルサナス都市国家連合に向かうとのことでしたが、これからどうされるおつもりですか？ 国家連合へは、山を越えねばなりません。街道が整備されているとは言え、お一人では危険ですよ」と帝国騎士として帝都地理に詳しいレイナースが言う。

「ええ。それでしたら、冒険者の護衛を雇おうと思っています。帝都の神殿も廻って、明

後日には連合国家へと出発します。お気遣いありがとうございます」

「ねえ、それだったら、私達が護衛を引き受けるというのはどうかな？ 昇格試験は、組合に報告して終わりだし。どうモモン？」とアルシエが提案する。

「俺もそれを考えていた。如何ですか、ニグン殿。私達を護衛で雇ってはいただけませんか？」

「願ってもないことです。依頼料はお札を兼ねて弾ませてもらいますよ」

「いえ。そんな心遣いは無用です。むしろ、国家連合への道すがら、ニグン殿が釣りを教えるというのはどうでしょう。良い川はあるのかな？」とモモンはレイナースに向かって言う。

「ありますわ。行程を上手に組めば、夕食はいつも美味しい魚が食べられる旅になりそうですね。もちろん、釣れたらの話ですが」とレイナースが言うと、全員が笑った。

「これはお互いに重圧がかかりますな。では、アルシエ。俺達はまずは昇格試験の報告を終わらそう」

「私とニグン殿も、組合で待機しておりますよ。王国の冒険者と法国の神官との戦いを止めたと言うのは、捉え方によっては国家間の争いに介入したなど、悪意を持って解釈すれば、いくらでも“モモンと愉快な仲間達”を貶めることはできますから……。モモン殿、話がややこしくなったら、私達を呼んで下さいね」とレイナースは言う。

「そうですね。モモン殿、アルシエ女史。必要があれば、私は、あなた達が冒険者として決して間違った行為をしていないと、私は証言しましょう」

「心強いです。お二人ともありがとうございます」

〈冒険者組合長室〉

冒険者組合に呼ばれたモモンとアルシエの報告を聞き、バハルス帝国アーウィンター冒険者組合長、デイス・ツバイザックは腕を組みながら難しい顔で天井を長い間見つめ、思案をしていた。

「討伐部位を拝見させていただいて、カツツエ平野での巡回任務。文句なく合格です。ミスリルへの昇格はまったく問題ありません。ですが……私が頭を悩ませているのは、リ・エステーゼ王国のアダマンタイト冒険者『蒼の薔薇』とスレイン法国の神官達の争いを止めたということです。これを冒険者組合として、追加の功績として認めるか、非常に微妙な判断が必要となります」

死デス・ナイトの騎士の一件から、二人の実力を考えれば、蒼の薔薇を撃退することは荒唐無稽な話ではない。

また、モモンが机においた仮面。『蒼の薔薇』のメンバーの一人は仮面で顔を隠しているという情報とも一致している。だが、国が違うとは言え、同じ冒険者と戦ったとい

うことを功績として認めては、将来の火種になる。『モモンと愉快な仲間達』の功績を認めるということは、逆に言えば『蒼の薔薇』の行動を非難するということだ。また、『蒼の薔薇』のこれまでの功績から判断するに、むやみに法国の神官を襲うとは考えられない。カツツエ平野にあつたという巫人の死体。それが争いの原因であるだろう。

そして、結果として助けることになったという法国の神官。受付の話では、冒険者組合を訪れているという。もしや、この神官……とデイス・ツバイザックは最悪の可能性を考える。バハルス帝国アーウィンタール冒険者組合長という情報網を以てしても噂でしか聞くことのないスレイン法国の暗部。その得体の知れない組織のメンバーの可能性もある……。

これは、偶然居合わせたから争いを止めた、で済むような話ではない。それが、デイス・ツバイザックの、冒険者組合長としての判断であつた。

「通常、依頼中に不測の魔物が現れ、討伐をしたのなら追加の報酬を支払うのが道理でしょう。ですが、今回の件、どこまでいっても、人と人の争いでしかないように思われます。冒険者組合としては、『モモンと愉快な仲間達』は、カツツエ平野での昇格試験を無事に終わらせて帰ってきた、と判断したいのですが、いかがでしょう？」

「『蒼の薔薇』と法国の件は、冒険者組合とは無関係。そういう判断ということですか？」とモモンは言う。

「ええ。直接的に言ってしまうえばそうです。もちろん、その件に関して、咎めるつもりもありません。そういった争いがあり、『モモンと愉快な仲間達』は最善を尽くした、ということとは私の心に留めておきます。ですが、それを表に出すつもりはないということです。その代わりと言ってはなんですが、すぐにオリハルコンへの昇格試験を受ける資格を与えます」

「分かりました。私はそれで異論はありません。アルシエはどうだ？」

「私もそれでいい。オリハルコンへの昇格試験を早く受けられるだけでも、嬉しい……です」とアルシエも答える。

「それでは、どうぞ、このミスリルのプレートをお受け取りください。『モモンと愉快な仲間達』のお二人、昇格おめでとうございます」とデイス・ツバイザックは言った。

「銅カッパのプレートはここに返却すればよいのかな？」と、受付に立っていた女性に、モモンはプレートを差し出す。首からは真新しいミスリルのプレートが下がっていた。

組合でたむろしている冒険者の視線が一斉に新たに誕生したミスリル冒険者チームへと集まる。銅カッパからミスリルという異例の昇格でありながらも、死デス・ナイトの騎士の事件での彼等の活躍を知っているだけに、この昇格はいわば当然のことであろうと受け入れているようであった。

「無事に昇格できたようですね。モモン殿、アルシエさん、おめでとうございます」と、丸テーブルの横に置かれた木椅子に腰掛けていたレイナースが、声をかける。

「レイナースさんのお陰です」とアルシエも笑顔で、レイナースによく見えるように服の中にしまっていたプレートを取り出した。新しいプレートが嬉しかった。モモンと同じミスリルのプレートである。アルシエは、普段は飛行フライの際にプレートが風で揺れて邪魔になる関係から、首から下げてはいた。

「さて、名指しの依頼を受付でしようと思うのですが、いつ出発にしたようがよろしいですか？」

「俺はいつでも結構です」

「私も」

「私は、明後日以降なら……。今日は、家族の顔が見たい」と、アルシエは家で自分の帰りを待ちわびているであろう妹達のことを思う。

ニグンの護衛依頼の出發は、明後日の早朝ということになった。

〈フルト家屋敷〉

アルシエは久しぶりに屋敷の敷居を跨ぐ。一週間以上家を空けるとするのは、人生で初めてのことであった。

屋敷の扉を開けて暫くすると、クーデリカとウレイリカが二階から駆け下り、そしてアルシエの胸に飛び込んだ。できた。

「お姉様。お帰りなさいませ」

「二人とも、良い子にしていた？」とアルシエは杖を床に置き、そしてしゃがんで二人の可愛い妹を両手で抱きしめる。

「私は良い子にしてたよ。ウレイリカは、お姉様がいなくて、夜泣いてたけど」とクーデリカが言う。

「私は良い子だったもん。クーデリカは、お姉様がいなくて寂しいって、ご飯を残してたんだよ」とウレイリカが言う。

お互い寂しかったことについて告げ口をしあう。だけど、そんな妹がアルシエにとつては堪らなく愛おしかった。

「ごめんね。二人とも。今日は一緒に夕ご飯を食べようね。それに、二人が寝るまで、子守歌を歌ってあげる——」

「アルシエ、帰ったのか」と、二階から父の声がエントランス全体に響く。上機嫌のような声。アルシエには不吉な予感しかしない。そして、階段を千鳥足で、そして時折手すりを掴みながら降りてくる父。右手には酒瓶を持っている。

酔っているの？ とアルシエは思う。

「首尾はどうだ？」

父の問いに、妹達の前でまさか死にかけたとは言うことはできない。

「無事に、昇格試験は合格できました」と、アルシエは自身のプレートを見せる。

「ご苦労だった。さつそくだが、明日から、遺跡の調査だ。お前が留守にしている間、私が依頼を引き受けておいてやったぞ。この依頼を成功させて、我がフルト家の名声を確固たるものにしろ。分かったな？ 詳細については、ジャイムスより聞け。フルト家の名に恥じぬ働きをしろよ」

フルト当主は、話は以上だ、と言わんばかりにそのまま階段を上がっていく。

「お、お父様？」とアルシエは状況を飲み込めない。遺跡の調査？ 依頼？ 話がまったく分からない。

「帝国領の西部に新たな遺跡が出現し、その調査指揮をフルト様が執っております。アルシエお嬢様が帝都にお帰りになり次第、偵察隊が出発する手筈となっております」と、執事であるジャイムスが説明をする。

「そ、そんな。お父様、お待ちください。私は、明後日から別の依頼があります。遺跡の調査など無理です」と、アルシエは階段を登っていく父を追いかける。

「なんだと？」と、父親もその歩みを止めて、アルシエを振り返る。父と娘、視線が交錯する。

アルシエは一度、深く呼吸をする。そして、「その遺跡の調査は受けられません。すでに、別の依頼を受けています」

「別の依頼？ そんなの取り消せば良からう」

「なっ……。それに、私は冒険者チームのメンバーです。チームの同意が無い限り、依頼を勝手に引き受けることなどできません！」とアルシエは父に詰め寄る。

「モモンとかいう冒険者だろ？ 素性も知れない下賤の者らしいではないか。それならば、屋敷に連れてこい。誇り高き帝国貴族の依頼を無下にするのがどれほど非礼か、私が直々に訓戒してやろうぞ？ 今や、あの生意気な金髪の小僧も、困難なことがあれば私を頼ってくる始末。私に逆らっては、帝国で生きていけぬと思いい知らせてくれる」

「お父様。何を訳の分からないことを……。酔っておられますね。こんな陽の高いうちから、お酒を飲むなど……」とアルシエは、父の酒瓶を取り上げようと父親に掴み掛かる。

「えい！ 離せ！」

酒瓶を取り上げようとした瞬間、フルト当主の右足が容赦なく、アルシエの右肩を強く押した。

え？ 上半身が後ろに反れ、アルシエの足まで空中へと浮く……。

そして、ゆっくりとアルシエの体は重力に従って落ちていった……。

「ふ、^{フライ}飛行！」

アルシエは、咄嗟に魔法を唱え、そしてシャンデリアの真下まで体を浮かび上がらせる。そして、父親をアルシエは睨み付ける。

「な、アルシエ！ 父を高い所から見下すとは、なんたる無礼だ！ 早く降りてこい！」
 「嫌です！ お父様。お父様がなんと言おうが、遺跡調査の依頼は受けることはできません。せめて……。せめて、引き受けた依頼が終わってからにしてください！ その後なら……」

「何を寝ぼけたことを！ 本来なら、すでに調査隊は出発しているはずだったのだ！ お前の帰りを待つていたから出発が遅れているのだ！ 昇格試験？ そんなものには手間取りおつて！ 他の者に遺跡を先に調査されたらどう責任を取るつもりだ！ 娘に花を持たせてやろうという父の気持ちも分からないのか、この愚か者！ もうよい！ お前には失望したぞ！ 遺跡調査の依頼の手付け金と、キャンセルの違約金。あわせて金貨百五十枚。耳を揃えて払え！ そしてさっさと消えろ！ お前の顔など二度と見たくないわ！」

そう乱暴に言い放つて、父は書斎へと消えていく……。

「じゃ、ジャイムス……。父が言ったことは……」

「昨日、美術品を多数お買い上げになられていたので……。恐らく、お嬢様の遺跡調査の

頭金を既に使つてしまわれたのではと……」

「そ、そんな……」

「アルシエお姉様……。お父様と喧嘩しちやヤダよう……。すぐに仲直りできるよね？ 私も、ウレイリカと喧嘩しても、すぐに仲直りするようにする……」

「わ、わたしも、悪いことしたら直ぐに謝るようになる……。アルシエお姉様も、すぐにお父様と仲直りしてくれるよね……」

妹達が、不安そうにアルシエの服の裾を掴み、目に涙を浮かべながら不安そうに自分を見ていた。

「ごめんね……。恐い思いをさせちゃったね。喧嘩は良くないよね。ちゃんとお父様と仲直りするから、安心して。だから泣かないの」と、アルシエは、精一杯の笑顔で、妹二人の頭を優しく撫でる。そして、妹二人をぎゅつと胸に抱きしめた。堪えきれなくなった涙が落ちるところを、妹達に見せるわけにはいかない。妹二人を強く抱きしめながら、新調されたばかりの赤い絨毯に、アルシエの涙の粒が、落ちるのであった。

遺跡調査 2

アルシエは重い足取りで帝都北市場へと向かっていた。モモンは、宿に一度帰ったが直ぐに外出したということだった。冒険者組合にもおらず、飲食をしないモモンが食事をしているということも考えにくい。それならば、北市場にいるのではないか。

カツン、カツンと自分の靴の踵が石畳に打ち付けられる音が、アルシエの気分を沈めていく。

ニグンさんがカルサナス都市国家連合に向かうという護衛依頼の出発は明後日だ。しかし、新発見の遺跡調査の出発は明日。

遺跡の調査隊の編成を任されたという父。執事のジャイムスの話では、この遺跡調査の話を持ちかけてきた人間は、どうも胡散臭いという。名前もおそらく偽名。だが、遺跡調査を見事に成功させたら、貴族の末席に再度名を連ねることを遠回しに匂わせてくる。

鮮血帝が帝位を継いで以来、貴族が減ることはあつても増えた試しはない。限りなく怪しい。貴族への復位が許されるという話は胡散臭い。

しかし、支度金としてその男が渡してきた帝国運営の銀行が発行の金券板は、金貨千

枚が払い込まれていた。遺跡の調査が成功し、遺跡での取得品の五割を渡せば、成功報酬としてさらに金貨二千枚を払うという破格の条件だ。

そして、父は、どうも金貨五十枚ほどは、フルト家への滞っていた支払用の金としてジャイムスに渡してきたという。フルト家で消費される高級食材や酒などの溜まり貯まったツケ、メイドや料理人などへの遅れていた賃金の支払い。

さらに、造園維持費のツケの支払いや、茶会用のガゼボを立て替えるとともに、庭園の植樹を充実させるという景気の良い話をしていたという。貴族に復位したあかつきには、茶会のホストを務めるつもりであろうか。

そして、肝心の調査に関しては、娘に行かせればよからうの一点張り。なんとか依頼の体裁を整えるために、ジャイムスが走り回って、馬車を手配し、現地までの足を留意し、そして移動中と滞在中の食料などを用意したということだ。

そして、問題は、*「モモンと愉快な冒険者たち」*に父が報酬を支払うつもりがないということだ。自分の報酬はまだしも、モモンへの報酬は払わねばならない。ニグンが、カルサナス都市国家連合への護衛で提示した金額は、金貨十枚。ミスリルプレートの間諜者に対しての依頼では妥当であろう。だが、それは安全な街道を行くという前提の報酬だ。

未発見の遺跡という危険性を考えれば、金貨百枚の報酬。それも、一人頭の金額とし

てそれくらい払うのが相場だ。

どうしよう……

帝都の北市場の露店の前。人の通りが疎らであり、大柄で、真つ黒な全身甲冑フル・プレートを着た男というのは嫌でも目立つ。

できれば、北市場にもモモンの姿は見えないで欲しかった。言いくいことを言わなければならぬ。

「アルシエも買ひ物か？」と、モモンもアルシエに気づいたのか、声を掛けてくる。

アルシエは無言で首を横に振り、「何を買うの？」とモモンの隣に立つて露店を覗き込む。

「無限のビクインフイニティ・クリールというマジック・アイテムで、釣った魚を一時的に入れておくことができそう。用途が限られるだけあって、金貨八枚という格安の値段だ。ビクはやはり必須だからな。それにしても、こんなアイテムまであるとは驚きだな」

モモンの楽しそうな声。連合国家への道中、きつと神官様と釣りを護衛中に楽しむつもりなのであろう。昇格試験で得た報酬で買うつもりなのであろう。

「分かっていると思ってるが、これは、一点物だぜ？ 職人が試しに一個だけ作って、売れないことが分かって作るの辞めたのだよ」と、露店に座っている男がモモンに声を掛ける。

「む？ レア物か……。少しばかり安くならないか？ 金貨七枚と銀貨五枚でどうだ？」

「馬鹿言っちゃいけねえ。さつき、スレイン法国の神官さんもそれを熱心に見てたからなあ。金貨七枚、銀貨八枚だ」

「金貨七枚、銀貨七枚。それに、銅貨十枚でどうだ？」

「釣りは要らない」つてのに、そこまで値切るのかよ。分かった。持っつけて泥棒」

「すまないな。ん？ ちよつとアルシエ。こちらに来てくれ」と、モモンは、アルシエとともに北市場のある通りを外れ、建物の影へと移動した。そして、モモンは露店の店主から見えないことを何度も確認し、右手で甲冑の後部を触りながら、「銅貨を2枚貸してくれないか？ あいにく、銅貨八枚しかなくてな……。金は持っている。だが、値切るのとは良いとして、さらに釣りをもらうのはな。流石にまずいだろ。だから、ピッタリで払いたいのだ」

「う、うん」とアルシエは、ポケットに入っていた硬貨から、銅硬貨二枚をモモンに渡す。

アルシエから銅貨二枚を受け取ったモモンは、小走りで先ほどの露店に行き、代金を払いアイテムを受け取って、再びアルシエの所へと戻ってきて、「助かったよ、アルシエ」とお礼を言う。

「お安いご用。もう買い物終わった？ モモンに相談したいことがある」

「そうか。もしかして、俺を探していたのか？ どうした？ 深刻な話か？」と、モモンはアルシエの顔を見ながら言った。モモンも、アルシエの浮かない顔に気付いたのであろう。

いざ、話そうとすると、アルシエは言葉にできない。モモンの顔を見て話をしようと思うのに、地面を見てしまう。

「お茶でも飲みながら話すか？ 冒険者組合に行くか」と言つてモモンは歩き出す。

冒険者組合で、アルシエが注文したアゼルシアン・ティーの砂糖多めがテーブルに置かれ、幽かにコップから湯気が出ている。

アルシエは、グツと握った拳を自分の両膝に置いた。

「実は、明後日の神官様の依頼……一緒に行けなくなつた」

「そうか……。それはニグン殿には話したか？」

アルシエは、ゆっくりと首を横に振る。

「護衛料は、チームとして二人分の報酬をもらつている。それは分かるな？」とモモンは言う。

「うん……」

「それに、依頼を数時間前に引き受けたばかりだ。もし、私達が護衛を引き受けられないの

であれば、ニグン殿は別の護衛を探さなくてはいけない。最悪、明後日の出発に間に合わなくなってしまう。それも分かるな？」

「う、うん……」

「冒険者として、一度引き受けた依頼を断るとするのは、信頼を損なうことだということも分かっているな？」

「分かっている。私だって、冒険者……」

「それならいいさ。ニグン殿を探して、二人で謝ろう。レイナースさんも一緒に行く気だったから、出来ればレイナースさんもだな……。ほらアルシエ、顔を上げろ。それに、紅茶が冷めるぞ」と、モモンはアルシエの頭をポンと軽く叩いた。

「理由を聞かないの？」

「やむを得ない事情があるんだろ？ 事情を説明したいのなら、俺にはなく、依頼主であるニグン殿にするべきだ」

「ありがとう。モモンって、時々すごく優しいよね」

「そうか？ 俺が理由を聞きたくないだけかも知れないぞ？ いや……きつとそうだとモモンは言った。

結婚をしたから……。リアルで残業が多くなって……。漫画の連載が始まって……。別のゲームに嵌まって……。子供が出来てき……。夜勤のシフトになって……。

「理由なら幾らでもあるさ……」

「ん？ ごめん。モモン聞こえなかった」と、熱い紅茶を飲んでいたアルシエには、モモンのその眩くような声を聞き取ることは出来なかった。

遺跡調査 3

「ごめんね、モモン。メッセージ 伝言スクロール」の巻物なんて、使わせてしまつて」と、『バツカスの酒蔵』でニグンとレイナースを待っているアルシエは言った。

「気にすることはない。帝都も広いからな。神殿関連の設備にニグン殿がいたのでは、探し出せないからな。あと、レイナースさんは所用で遅れるそうさ。食事も済ませてくるそうだから、ニグンさんが来たらまずは食事をしてレイナースさんを待とう」とモモンは丸テーブルに置いてあるメニューを眺めながら言う。

アルシエは、その光景を見ながら本当にモモンは優しい人だと思つた。モモンは食事をしていないのに、食事のメニューを見ている。それも逆さまにメニューを見ている。落ち込んだ自分の気持ちを少しでも明るくしようと、少し惚けたことをしてくれているのであろう。

そして自分も、帝国料理をあまり食べたことがないであろうニグンさんの為に、帝都グルメ情報誌を見ながらニグンを待った。

「遅くなって申し訳ない」とニグンが混雑している『バツカスの酒蔵』の中から、モモンとアルシエが座っている席を見つけ出し、そして席に座る。

席に座ったニグンは、モモンとアルシエの二人を見て、「何かありましたか？ 楽しい会食という雰囲気ではないようですね」とニグンはアルシエの緊張した顔を見て言った。それをアルシエは苦笑いで返すことしかできない。

「と、とりあえず食べましょうか。帝都グルメ情報によると、この店の人気メニューは、『牛ほほ肉の赤葡萄酒煮込み』だそうです。品数限定なようですけど、まだ時間も早しい注文できると思います」と、アルシエは法国出身のニグンに帝国料理を勧める。

帝都北部に広がる二つの山脈に挟まれた盆地。その盆地の寒暖差の激しい気候によつて、脂肪がたっぷりに乗った肉質の牛が育つ。そして、その二つの山脈から流れてくる豊富な水源を利用した農作物。それによつて牛が食べるのに必要な大豆、麦、コーンが栽培されている。

この地理的条件を満たした場所で栽培されるバハルス牛。帝国の名前を冠した特産品であり、リ・エステイーズ王国や聖王国などにおいても、身分の高い者によつて行われる晩餐会では必ず使われる食材の一つである。そしてそのバハルス牛の中でも、貴重な頬肉。それをゆつくりと赤葡萄酒で煮込んだ料理である。

「それはおいしそうですね。法国ではどちらかというと、肉料理は羊と魚が多いのでとても楽しみです。私はそれにしましょう」

「あと、皿に残ったソースも美味しくいただけるようで、パンも頼んでおいた方がいいっ

て書いてあった」とアルシエはさらに付け加える。

「そうですか。では……私はそれに、赤ワインを……」

「赤ワインは……飲んだことはないけど、アゼルリシア山脈は、冷涼な気候で葡萄の収穫を遅らせることができるので、糖度が高い葡萄が育つそうです。それで、アゼルシアン・ワインは上質だそうです」

「それは良いですね。瓶で頼むと私は飲みきれませんが……アルシエさんも飲みますか？」

「あつ。帝国では飲酒の年齢制限があるので……。私はアゼルシアン・ティーで大丈夫です」

食事がテーブルに運ばれてくると、ニグンは「込み入った話は、食事を終わらせて、レイナスさんが来てからということ。今は、美味しい料理を堪能しましょう」と言つて、目の前の食事に対して祈りを捧げ始める。

ニグンがいつも食事の前に行う祈りを捧げる習慣があるようで、カツツエ平野から帝都までの帰り道でも、食事直前にニグンが行っていた。アルシエやモモンにとつて既に見慣れた光景だ。そして、先に食べ始めるのも悪いので、アルシエもレイナスもニグンがその祈りが終わるまで、待っていることにしていた。

アルシエもニグンも、口の中に入れた瞬間に煮込まれたバハルス牛の頬肉が口の中に

溶けていくことに舌鼓を打ちながら食事を味わう。

そんな中、店内の永コンテイニユアル・ライト続 光の照明が暗くなり、室内にゆつたりとしたリユートの音が流れ始め、そして澄んだ歌声が響く。

夕暮れの アーウィンタール

家路へと急ぐ 行き交う人の長い影よ
遠くの空で 赤く染まったかすみ雲よ
私は一人 あなたがいない 帝都無情

沈みゆく I m in the tar

もがくほどに 私に絡まる蜘蛛の糸よ
出せない恋文 儚く消えたあの日の恋よ
羽切された 小鳥のような 帝都無情

歌い終わると室内に拍手が沸き起こる。モモンは両腕を組んでその歌を聞き、ニグンはワイングラスを傾けながらその歌に酔いしれていた。

「『さすらいの歌姫』 レイナさんの歌声と、『銀糸鳥』 フレイヴァルツさんのリユート

の演奏でお届けいたしました。さて、続きまして、*「銀糸鳥」* ポワポンさんによる、エキゾティックなトーテムシャーマン・ダンスをお楽しみください」と、『バッカスの酒蔵』の店員が舞台の司会進行してくる声が聞こえる。

「さすらいの歌姫」は、舞台から降り、食事席を巡りながら、おひねりを受け取り、そしてモモン達が座っている丸テーブルの椅子に座った。

「お待たせしましたわ。私の出番はこれで終わりなので、後はゆっくりお話をしましょう」と、歌姫レイナは席に着く。

『バッカスの酒蔵』を魅了した歌姫をテーブル席で独占するモモンとニグンに周りの男達から嫉妬の視線が集まる。容姿が平凡な二人の男に何故、という嫉妬の目である。だが、それを二人は気にしている様子はない。

「素晴らしい歌声でした。それに美しいです。レイナス女史」と、ニグンはレイナスの容姿を褒める。レイナスは、長い髪を降ろし、そして白く裾長のワンピースという格好だ。

「ありがとうございます。とある方に、馬子にも衣装と言われてから、少し女としての自信を失っていたのです。そう言って載けてうれしいですわ」と、髪をかき上げながらレイナスさんは笑顔で答えている。

「そうなのですか。そんな節穴のような男がいるとは驚きですね。そう思いませんか？

モモン殿

「そ、その通りだと思えます」と、モモンも苦笑しながらそれに同意した。

「さて、それで……。問題が起こったということでもよろしいでしょうか？」とレイナースも口を開く。アルシエの表情が浮かない顔であることにレイナースは気付いたのであろう。

「そうです。今回引き受けさせていただいた——」「モモン。私が自分で説明する」とアルシエはモモンの言葉を遮った。

「実は……。神官様の名指しの依頼なのですが、私はキャンセルしなければならなくなりました。ご迷惑をお掛けして申し訳ありません」と、アルシエはテーブルにその小さな額がぶつかってしまいうくらい頭を下げた。

「それは非常に残念というか……。寂しいですね。アルシエ女史の、ヤマメの塩焼きを美味しそうに食べる姿。釣った人間として、見ていて嬉しい光景であったのですが……。ですが、依頼のキャンセルに関しては問題ありません。そこまで急ぐ旅ではありませんからね……。ただ、アルシエ女史は何か問題を抱えていませんか？」

「え？」

アルシエはドキリとする。

「そのご年齢で第三位階魔法を使うということは素晴らしい才能をお持ちということは

分かります。法国には冒険者組合はありませんので詳しくは分かり兼ねますが、その年齢で命を落とすこともある冒険者をされている。それが帝国であろうと、普通のことだとは思えません。何かご事情があるのでしよう?」

「い、いえ……そんなことは……」

「アルシエさんは、魔法学院に通っていてよい年齢です。アルシエさん程の魔法の才能がある生徒なら、授業料どころか、一家が十分生活していけるほどの奨学金が帝国から支払われるはず。ですが、アルシエさんは冒険者をされている。何かご事情を抱えていらっしゃるのでしょうか考えられません。差し出がましいことは言うまいと思っておりますが、敢えて私もお伺いさせていただきます」とレイナースが緑色の瞳でまっすぐにアルシエを見つめて言う。

「実は、家に借金があります……。私の家は没落した貴族の家……。家の恥になるから言えませんでした……」

アルシエは話す。没落したにも拘らず両親は貴族的な生活を止めないこと。幼い妹がいること。自分が稼がねば一家が路頭に迷うことは分かりきっていること。遺跡調査の仕事を受けた父は、そのお金を使い込んでしまっていること。自分が遺跡調査に向かうしかないこと。

アルシエは顔を上げず、テーブルを見つめながらゆっくりと語る。そして時折、テー

ブルに涙が落ちた。

「アルシエ女史のご自宅はどこですか？ 聞けば帝都に邪悪なアンデッドが現れたばかりだとか……。それならば、今度は神聖な天使が帝都に現れて、悪を打ち砕く番です」とニグンが席を立てて言った。

「神官様。お待ちください」と、アルシエは慌てて、出口へと向かおうとするニグンの服の裾を掴む。そして何とかニグンを再び席に座らせた。

ニグンは「すみません。冷静さを欠いていました。ですが、何故、明るい未来を子供達に残そうとしないのか。私には理解できません」と謝罪の言葉を口にする。しかしニグンは納得していないのか表情は険しい。

「アルシエさんには申し訳無いですが、ニグン殿がされようとしていることに私は賛成です。もちろん、アルシエさんとお二人の妹さんの事を思っています。もしくは、妹さん連れて実家を出るべきでしょう。ご両親が夢見ている貴族としての栄光の日々が戻ることは、帝国の現状を見る限り無いでしょう。叶わぬ夢を追いかけるのに付き合つて、アルシエさんと妹さんの未来を潰すことはありません。個人的にも……やはり……はやく家を出るべきですね……。そうしないと……取り返しのつかないことになると思います。そして……実家や両親が憎くて憎くて堪らなくなりますよ。自分の手で復讐したいと毎日思うほどに」とレイナスも言った。

「このままの状況じゃあ駄目だということは分かっているの。だけど……私が守らないと……」

「アルシエ女史……。あなたも私達からしたらまだ小さい子供です。私達からすれば、あなたも守られるべき存在ですよ。あなたが妹を守りたいという気持ちと同じです。少し馴れ馴れしいかと思いますが、私だって妹を守りたい」というニグンの言葉にレインースも頷く。

「モモン殿。先ほどからずっと話を聞いておいでのようですが、どうお考えになられているのですか？」とレインースは先ほどから腕を組んで難しい顔をしているモモンに尋ねる。

「アルシエの実家の事は、今すぐどうにかできる問題ではないと思います。それは今後の課題として……。今は、差し迫ったその遺跡調査をどうするかということが問題でしょう。アルシエ。外見の様子は分かったが、念のために一つ確認をした。その遺跡は、周囲が草原の中にあるのだな？ 毒の沼地にあるということではなく」

「う、うん。何も無い草原の中に突如として出現したという情報だから」

「そうか……。では、その遺跡調査を成功させて、当座をしのぐ。まずはそれが現実的ではないでしょうか」

「分かります。ですが、残念ながら遺跡の調査へは、帝国四騎士の身分で行くのは難しい

ですわ。帝都内の巡回であればカツツエ平野であろうと連合国家周辺であろうと問題は無いのですが、遺跡の調査は具合が悪いです。それに……帝国四騎士という身分に未練はありませんが、四騎士でないことと果たせないことが私にはありますので現状、四騎士は辞められませんから……。ですが、遺跡の調査ではお力になれないにしても、それ以外のことは私の心に留めておきますね」

「私も残念ながら、流石に帝国の西部に足を伸ばすことはできません。せめて、連合国家への道すがらにあれば良かったのですが……。アルシエさん、遺跡の件は力になれませんが、ご実家と妹さんの件、神殿関係で何かお助けすることができないか方法を探ってみます」

「レイナスさん、神官様。ありがとうございます」

「では、遺跡の調査には私とアルシエ。レイナスさんは、ニグン殿の護衛をされるという形で良いですか？」

「え？ モモンも行ってくれるの？ さっき話した通り……報酬は……」

「構わない」とモモンは強く言い切る。

「ニグン殿の護衛の件。分かりましたわ」

「それでは、しばしのお別れですね。連合国家から法国に帰る際、また帝都に滞在しますので、その際はまたお会いしましょう」とニグンが言う。

宿の部屋に帰ったモモンは、その甲冑の姿のままベッドに腰掛ける。ベッドが全身^{フルプレート}甲冑の重さで軋んだ……。

思い出すのは、ユグドラシルでの孤独の日々だ。

「今日も誰もインしてこないか……」

モモンガは、地下第九階層の円卓^{ラウンドテーブル}の前で呟く。

「じゃあ今日は、維持費を稼ぐかな……。宝物殿に金貨あるけど、仲間が集めた金貨を目減りさせるのもなあ。ソロでも倒せて、金貨の取得が大きい魔物は……。今日はヨトウ
ンヘイムまで足を延ばすか」

独り言のようなモモンガの言葉。

ひたすらにモンスターを狩り続けるモモンガ。当然一人だ。

「ひとまずはこれでギルドの資産は減らないか……。ん？ この光は？」

突然、モモンガの周りに発生した魔法のエフェクト。聖属性の魔法の光だ。そして、モモンガは自分のHPのゲージが減っていくことを確認した。

「あつ、あれDQNギルドのギルド長だ」

モモンガが知らないプレイヤー達だ。モモンガに攻撃してきた時点でPプレイヤー・Kキラーであることは明白。

「二人っばいし、畳み掛けろ!!」

モモンガは反撃するも、相手もレベルカンストのプレイヤー。そして、相手は何より、パーティーを組んでいる。

「あああ。死に戻りしちゃった……。アイテムは、奪われていないか……。明日は、またレベルカンストまでレベル上げだなあ……。ナザリック大墳墓に攻め込む勇氣は無いくせに、外ではPKだもんなあ……」

モモンガは、ホームポイントに設定されている円ラウンドテーブル卓のある部屋で、四十一脚の椅子を眺める。空席。

特に、自分の席というような明確な決まりは無かったが、なんとなく全員が自分の指定席であるかのように座っていた椅子だ。

モモンガは全員が揃っていた円ラウンドテーブル卓の光景を思い出す。

ここは、たつちさん。そして、巨大な黒曜石のテーブルの円の反対側。一番たつちさんから遠いところ座っていたのがウルベルトさん。

館ころもつちもちさん、ぶくぶく茶釜さん、やまいこさんは、三人並んで座っていた。武人建御雷さんと式式炎雷さんも隣同士で座っていたなあ。

「こつちもパーティーだったら、簡単に撃退してたのになあ……」

モモンガは索敵能力では劣る。だが、たとえ相手が隠蔽魔法を使っている、式式炎雷がいれば、発見できた。

さきほども、先制攻撃をされることなんてなかったはずだ。いや、むしろ最強の魔法職であるウルベルトが先に先制攻撃をしかけていたはずだ。近接戦となっても、たつちさんや、ぶくぶく茶釜さんがいたら、モモンガ一人に手こずっていた拙い連携のあいつ等なんかに負けなかった。

「そうだな……。今から、化身アヴァターラの作成の続きでもしようかな……」

モモンは、宿屋のベッドに仰向けになる。さらにベッドが軋んだ。薄汚れた天井のシミが今日は余計に気になるモモンであった。

モモンは、今日のアルシエの言葉を思い出す。

『実は、明後日の神官様の依頼……一緒にに行けなくなった』

「何回言われても、嫌だよなあ。狩りの約束とかが反故にされるのって……」

モモンのその言葉は、薄汚れた天井へと消えていく。

『ご両親が夢見ている貴族としての栄光の日々が戻ることは、帝国の現状を見る限り無いでしょう。叶わぬ夢を追いかけるのに付き合っ、アルシエさんと妹さんの未来を潰すことはありません』

レイナースさん、たまにキツイこと言うよなあ。

『このままの状況じゃあ駄目だということは分かっているの。だけど……私が守らないと……』

俺だって、このままの状況ではいけないって分かっていたさ。

あの栄光の日々が戻ってくるなんて思ってたさ。俺だって、辞めようと思ったさ。

だけど、みんなで築き上げたアインズ・ウール・ゴウンを守りたかっただけなんだ。

ユグドラシルのサービス最終日。それが過ぎたら、何かが変わるんじゃないかって思ってたさ。

しがみ付いているだけだと分かっていたさ……。

眠らないモモンの眩きを聞いているのは、天井のシミだけであった。

遺跡調査 4

〈蒼の薔薇〉

「み、みんな大丈夫？」と、やっと体の自由を回復し、起き上がったラキユースは全員の安否を確かめる。

「まだ体が痺れている……」と、地面に横たわりながら、右手だけを上げてなんとか意識があるということだけをティナがアピールしている。

「と、とりあえず、ありったけの解毒剤出すからみんな飲んで……」と、持っている数十にも及ぶ数の解毒剤をラキユースは少しずつ仲間達に飲ませていく。

ラキユースの処置により、ガガーラン、ティア、ティナは、なんとか自らの両脚で立つことができるようになった。

「イビルアイは？」と地面に倒れているままの彼女を見つめながら心配そうにガガーランは言う。

「イビルアイは、どうやら私達とは違うやり方で倒されたみたいなの……。私達にとっては解毒の作用のある薬でも、イビルアイにとってはダメージになるかも知れないし

……。一応、体力的なダメージは無いようだから、ダメージ覚悟で解毒剤を飲まそうとしたのだけど、ちよつと様子が変で……」とラキユースが微妙な顔をする。

「どういうことだ？」

「解毒剤の入った瓶を口の近くに持つていて飲まそうとするのだけど……、その……瓶の飲み口に舌を絡ませて……瓶口をなめ回すだけなの……。強引に喉に流し込もうとしても、ちよつと様子がおかしくて……」

「くんかくんか、よいにほい。私が口移しで解毒剤飲ませてみる」とティアは率先してイビルアイを介抱しながら言う。

ティアによる必死の介護が続いているが、イビルアイの容態には改善の兆しが見えない。ラキユースは、これは死に至る病の類いではないかと、不安になる。

ガガーランはイビルアイの様子を眺め、「いやあ……もしかして……なんというか……。噂に聞くアレな状態かもしれないな……」とガガーランは言う。

「アレって？」

「いや、俺もはつきりしたことは分からない。俺って、初物喰いが主だから……。往々にして相手はちよつと腰を振っただけでアレしちまうからなあ……。俺自身は経験ないのだが……。いや、すまん。忘れてくれ。軽々しい推測で判断してはダメだな。軽率なことを言った。そういうのって、ティナは詳しくないのか？」

「まだ剥けてない子って敏感。コス、コス、アウって感じ。私もアレな経験は無い。私もはつきりとは、アレとは言えない」とティナも困り顔で答えた。

「ねえ、だから二人とも、アレって何？ 今は、一刻も早く帰って、冒険者組合に報告すべき事態。毒とかに詳しいイビルアイの意識が朦朧としている今、私達が持っている知識を出し合ってこの状況を打開するしかない。そうでしょ？」とラクユースは、歯切れの悪い二人に対して怒りを露わにする。

「いや、そう怒らないでくれよ。そうだな……。そうだな……。ラクユースのそのヴァージン・スノー無垢なる白雪が装備出来なくなる行為の……。凄い良いって感じか？ おい、ティナ。説明してやれよ。俺に言わせるなよ。恥ずかしい」とガガーランはティナを、怒って両手を腰に置いているラクユースの前に連れ出す。

「つまり……。イツタってこと……。」と両手をモジモジさせながらティナは答える。

「行ったって、何処に？ “アレ”の次は“行っただけ”？ 全然意味が分からないわよ。ちゃんと説明してよ……。」と怒る気も失せたのか、ラクユースは呆れたように肩を落とす。

「ティア。イビルアイの様子はどうか？」とラクユースは、解毒剤を口に含んでは飲ませているティアの元へと行く。

「は、歯の裏の歯茎まで舐めてくる……。これは……。本格的にテントを張って介抱し

ないとダメかもしれない」

「そう……。根気よく続けて。あと、解毒剤がイビルアイには毒になる可能性があるから、イビルアイの体力には十分に注意を払ってね」

「了解！」と機敏な動きで、テントを張りその中にイビルアイをティアは連れ込んでいく。

“蒼の薔薇”の旗揚げ以来、順風満帆だった冒険。初めての圧倒的敗北をラキユースは噛みしめる。歯を食いしばりながら、カツツエ平野のドンヨリとした雲り空を見つめ続ける。そして、尊敬する叔父の言葉を思い出す。“負けたこと。それがいつか大きな財産になるさ”

“蒼の薔薇”がカツツエ平野から帰還するには、まだまだ時間がかかりそうな状況であつた……。

〈モモンと愉快な仲間達〉

執事のジャイムスが用意した幌馬車は、お世辞にも上等な馬車とは言えなかつた。なけなしのお金でなんとか遣り繰りしながら手配してくれた馬車であることはアルシエ

には分かるし、文句は言えない。だが、車輪が若干歪んでいるせいか、上下に揺れる。それに、御者の座る席は板張りで、長時間座っているとお尻が痛い。

アルシエは御者台に座り、馬車を操り、モモンは歩く。

踏み固められたエ・ランテルへと続く街道は良かった。だが、草原の中を馬車で進むとなると、容赦なくガタン、ガタンと揺れる。アルシエの小さなお尻はその反動に耐えかねて、馬の餌である藁を座席に敷き詰めてクッション代わりに使うなど工夫をすれど、痛いものは痛い。

時々歩いた方がマシなのではないだろうかとさえアルシエは思う。だが、どうやらモモンは、どうも馬に嫌われてしまう性質なようで、モモンが馬車を操ろうとすると、馬はしやがみ込んで動かなくなるか、激しく暴れる。アルシエがずっと馬車を操るしかないという状況であった。それに、馬車は揺れ、馬車酔いになる。

「ごめん。少し休憩をしたい」

「ああ。構わない」とモモンも答える。

草原には涼しい風が吹いている。風が草原の中を走ると、それに合わせて背の低い草も揺れる。そして草が揺れるのに合わせて太陽の光の反射の仕方が変わっていき、それによって草原では風が見える。波のように草が揺れて、草原の中を風が走っている。

アルシエは、荷台に積んである水を桶に移し、藁と一緒に馬に与えた後、草原に胡座

をかいて座っているモモンの正面に座った。

「飲むか？」と、モモンは無ヒツチャー・オブ・エンドレス・ウオーター限の水差しから注いだ水をアルシエに渡す。

「ありがとう」とそのグラスをアルシエは受け取り、ゆっくりと飲んでいく。

「カツツエ平野とは違い、空も澄んでいるな。それに同じような光景ばかりでつまらないかと思つたが、似たような景色でも微妙に違っている。時折、咲いている花などもあるしな。見たことの無い花だ」とモモンはモモンの隣に咲いていた紫色の花に視線を送る。花の群生地が草原にぽつんとあつて数十の花が咲いている。

「この花は、紫苑かな。普通よりちよつと背が低いけど。草原は夜、強い風が吹くからあまり背の高いようには育たないのかも」とアルシエは答える。

「それぞれの環境に応じて成長していくのだろう」とモモンは咲いていた一本の紫苑の手折つてそれを観察している。

黄色の雄しべと雌しべ。そしてそれを囲むように細い紫色の花びら。

「人工では無い花をじっくりと眺めるのは初めてかもしれない」と、その花の茎を親指と一差し指で挟み、クルクルと回転させながらモモンは言った。

アルシエは、「人工」という言葉に一瞬疑問を憶えたが、貴族などは自らの屋敷に庭園を持ち、そこで薔薇などを栽培することを思い出した。庭園などで人工的に植樹されたような花や木々ではない野生の花ということをもモンは言っているのだろうと納得

する。そして、モモンはどこか遠くの国の身分の高い人間なのではないだろうかと改めて思う。

装備品は一級品。舞踏会で帝国流のダンスは踊れないものの、慰労会でダンスがある可能性を思い付くあたり、場慣れしているように思える。物腰も柔らかく、荒っぽい冒険者などのそれではなく、貴族の振るまいのようにアルシエには思える。

「モモンの国では、どんな花を育てたりしていたの？」

「花自体が普通には育たない場所だ。カッツエ平野よりも暗くてぶ厚い呪いの雲が空を覆っている。花は全て……そうだな、表示する内容を瞬時に変えることが出来る紙に描かれた花ばかりだったな」

「表示する内容を瞬時に変える？ 例えば自画像が描かれているのが、突然、このような草原の風景が描かれたものに変わったり？」

「まあ、そういったものだ」

「不思議なマジック・アイテムだね。帝国ではそんなアイテムは無いかも知れない」

「だろうな……。 案外、 “口だけの賢者” がそんなマジック・アイテムを考案しているかもしれないがな」

「そうかもね。そういう、珍しいマジック・アイテムを探して旅をするのも楽しいかも知れない。そういうえばモモンは、何でも願いを叶えてくれるという指輪を探して帝都まで

冒険者になりに来たんだつたよね。モモンにとっては不意かも知れないこの遺跡探検だけど……その指輪がその遺跡にあったら、ラツキーかなあつて」とアルシエは、飲みかけでまだ水の入ったグラスを両手で力一杯握りしめて言う。

「まだ、遺跡調査に向かう事、気にしていたのか？　もう気にするな。ニグン殿はレイナスさんが連合国家まで送っていくことになったし、遺跡の調査など案外、何とかなるものさ。そう下を向くな。ほら」と、モモンは自分が持っていた花をアルシエへと差し出す。

「私に？　ありがとう……。そういえば、私、花を男の人からもらったの初めてかも」「そうか……。それは悪いことをしたな。俺なんかで悪かつたな……。取り消すか？」

「ううん。嬉しい。だけど……。貰うなら両手に抱えきれないくらいが良かったな」とアルシエはわざと頬を膨らます。

「ははは。そうか。そうか。いつか貰えるとよいな」とモモンが笑う。

「どうして笑うかな……。私だつて成長すれば、レイナスさんみたいな美人になるかも知れないじゃない。そしたら、きっと沢山の男が花束を私に贈ってくれる……。かも。それに、私の二つ名『美少女』なんだよ？　一応だけど……」

「二つ名は、他人に言われてこそその二つ名だ。自分で言うものじゃないぞ。自分で言っていて、恥ずかしくないか？　いや、良いんだ。俺の知人に、自分で二つ名を考えて、自

分で広めていた人もいたからな。定着しなかったようだが……」とモモンは更に笑い出した。

「釣りは要らない」って二つ名のくせに、お釣りが出ないように仲間から小銭を借りた人もどうかと思うけどなあ」

「そ、それもそうだな……。よし、そろそろ出発しようか」

「あつ、話変えた……。まあいいけど……」とアルシエは立ち上がり、モモンかもらった花を大切にしまう。そして、両手を空に伸ばし、ストレッチをした。心までも晴れ渡りそうな蒼穹が見渡す限り広がっている。

「あとどれくらいで遺跡に着きそうなのだ？」

「今から休憩無しで日暮れまで移動すれば、明日の昼には遺跡が見えると思う」とアルシエは地図を見ながら場所を確認している。

そして次の日の昼。視界に入ってきた遺跡を眺めながら、立ちすくんでいるモモンの姿があった。

「あ、あれって、どう見てもナザリックだよな……」

遺跡調査 5

アインズ・ウール・ゴウンのギルドホーム。ナザリック地下大墳墓。見間違うはずも無い。本来あるべき筈の沼地ではない。だが、モモンガが自分のホームを見間違うはずもない。あり得ないと思いなながらも、これはナザリックだと確信をしている自分がいる。

アルシエから聞いた情報では、この遺跡を発見したのは帝国内を巡回していた兵士達だ。定期巡回をしているの発見。

定期巡回が行われる頻度から逆算すると、おそらく自分がこの世界にやって来た時期とほぼ同じであろう。いや、同時にこの世界に転移か何かしてきたと考える方が自然だろう。

それにしても、まさか新発見の遺跡というのがナザリックだったとはなあ、とモモンガは思う。そして、その遺跡攻略の難易度に思いを巡らす。

ナザリック地下大墳墓に張り巡らされた陰湿な罠。ユグドラシル最終日と同じであるなら、モモンガの頭の中に罠がある場所は全て頭に入っている。侵入者の侵入を感じて自動でアクティブ化される罠は別としても、床の特定の部分を踏むなど、特定の条

件を満たすと発動する罨は、すべて回避できるであろう。遺跡に罨しか残っていないのであれば、ナザリックの踏破は可能だ。

だが、ナザリックに配備したモンスター達は一体どうなっているのだろうか？ フレンドリー・ファイヤーが解除されているのは、自らが召喚した死の騎士^{デス・ナイト}を攻撃できた時点で、解除されていると考えて間違いがない。つまり逆に言えば、ナザリック内のモンスターも自分に対して攻撃が可能ということ。

それならば、まず最初の難関が、第一から三階層まで広がる墳墓。その階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールン。

複数のプレイヤーでナザリックに攻め込むのであれば、シャルティア・ブラッドフォールンは倒すことは容易だろう。だが、現状では自分とアルシエの二人。第三位階魔法までしか使えないアルシエでは、はつきり言って頭数に入れることさえできない。

実質、自分がソロでシャルティア・ブラッドフォールンを倒さなければならぬ。一対一の戦闘では、ギルドメンバーを除けば、シャルティア・ブラッドフォールンが最も強い。しかもモモンガとは相性が悪い。出来るなら遭遇しないでやり過ぎたい相手だ。

もしシャルティア・ブラッドフォールンを倒すか、遭遇しないで四階層に行けたとしても……。ガルガンチュアは、第四階層のフィールドの大きさからして稼働できるよう

にはなっていない可能性が大きい。だが、もしガルガンチュアが起動していて、戦うことになったらはつきり言って勝ち目は無い。

それをやり過ぎせたとして、地下五階層のコキュートス……。

モモンガは、遺跡がどのようなにしたら攻略できるか、というシミュレーションをするのを止めた。

かつて、アインズ・ウール・ゴウンの初のギルドイベントとして、初見攻略したナザリック。だが、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーの長きの努力によって、さらに攻略の難易度は上昇している。

アインズ・ウール・ゴウンのプレイヤーがナザリックに待機していないことを前提としても、レベルカンストのプレイヤーを最低でも百人は集めないと攻略できないであろう。

モモンガ一人での攻略は不可能である。

「モモン、ぼおつとしてどうしたの？ 怖じ気ついちゃった？」とアルシエが冗談交じりに立ちすくむモモンガに話しかけてくる。

「アルシエ……。この遺跡の調査は断念すべきだ。最悪、遺跡の入口に到達する前に死ぬぞ？」

「うん……。危険だということは分かっている。本能って言うのかな、それが、近づく

なつてずっと頭の中で叫んでいる感じ」とアルシエも答える。

「その感覚は正しいぞ。いや……アルシエ、お前が感じている危険を一万倍したほどに危険だと断言しよう」

「モモンがいても？」とアルシエは寂しそうに呟く。

「俺がいてもその脅威は変わらない。あの遺跡の難しさを喩えるなら、半分居眠りしながらでも死の騎士^{デス・ナイト}千体相手に出来る実力の奴らが百人必要だ」と、モモンガは言つて、来た道を引き返そうとする。

「ねえ……。モモンに一つお願いしていい？」とアルシエはナザリツクを見つめながら言う。

「なんだ？ この距離からでも監視されている可能性が高い。早くここを離れた方が良い。帰り道で聞こう」

「違うの！ これが私の家の住所。帝都に帰ったら、この家の主人、つて私のお父さんなのだけど、その人に、調査の依頼は失敗したつて伝えて……。あと、妹達に、愛しているつて……」と、四つ折りにされた羊皮紙を懐からアルシエは取り出す。そしてそれをモモンへと差し出した。

「それは自分で伝えるのだな。まさか……遺跡に侵入する気か？ 正気か？ アルシエ」

「私は行かなければならない。だって、遺跡調査依頼を受けて、その報酬を父がもう使ってしまったのだから……。依頼が失敗しても受け取った前金は貰えるという契約だから。だから、最低でも私は行かないといけない。モモンは、遺跡の調査が失敗したって、父に伝えて。お願いできる？」

「アルシエ。遺跡の調査を行ったという証明……。人柱にでもなるつもりか？ 安易な自己犠牲は止めろ。それは自殺と変わらない。それに、レイナースさんやニグンさんになんて説明しろというのだ。アルシエ。行くというのなら力尽くでも止めさせてもらう」

「それに、万が一成功するかも知れない。私は飛行フライが使える。それで、遺跡の中を一つ飛び……。遺跡に眠っている宝を持ち帰って、みんな幸せとか？ 返せないかも知れないけど、無限インフイニティ・ハヴァザツクの背負い袋を一つ貸して欲しい。お宝を詰め込んで帰れるように……。」とアルシエは笑顔で言う。無理に笑っているのは、モモンガにも分かる程、不器用な笑顔だ。

「自分でもそれが無理だと分かっているのに、そんなことを言うものじゃない」
「でも、可能性はゼロじゃない。やってみなければ分からないことだってある」

「今回の件に限って言えば、ゼロだ。あれは、そんな甘い遺跡ではない」

「私、決めたの。今回の遺跡の調査の依頼を成功させたら、妹達と家を出るって。妹達には苦勞をさせるかも知れないけど、私は頑張る。親には、成功報酬の金貨を渡す。そ

れで、私達姉妹を産んでくれて、今まで育ててくれたという恩は返せたと思うことにする。モモンには、私が遺跡で取得した品の売却代金を渡そうと思っていた……それで借りていた金貨二百枚と今回の報酬に充てられればと思つてた……」

「俺の報酬の話などはどうでもいい。レイナースさんやニグン殿、そして俺にその問題は任せておけ！ お前が背負い込むことじゃない！ それに……家を出るとは言つてもな……。それで現状より状況が良くなるという保証が何処にある？ アルシエ……。今が自分の不幸のどん底だと思つているかも知れないが、もつと不幸になるかも知れないぞ？ 妹達もより大きな不幸に巻き込むかも知れない……。現状を変える。お前は、現状よりももつと幸せな未来が待つているとしか思つていない。だが、現状よりももつと不幸に、もつと孤独になつたらどうする？」

《モモンガさん、お久しぶりです》

《お久しぶりです。今日はどうしたんですか？》

《いやあ。実は、新しいゲームのギルドの勧誘ですよ。ユグドラシルよりも、もつと自由度が高くて、グラフィックとかもよりリアルなゲームがあるんです。ユグドラシル、過疎つてつまらなくなつたでしょう？ モモンガさん、ユグドラシル辞めてこつちに来ませんか？ モモンガさんなら大歓迎ですよ。それに、レベリングとか私が手伝いますの

で

《そうですね……。考えておきますね》

《是非。その際は、リアルのアドレスにメールください。それじゃあ、あっちのゲームのギルド戦に参加しなきゃいけないので……。それではまた……》

《また……。つて、一年ぶりにログインしてきてくれたと思っただら勧誘かあ……》

「そ、そんなのやってみなくちゃ分からないじゃない。それとも……。何よ！ 冒険者として働いて、お金を親に渡して、でもそれが浪費されて、借金がまた膨らんで、それを返すためにまた冒険に出て……。そんな蟻地獄のような生活をずっと続けて我慢しろつてモモンは言うの？ 親が死ぬまで！ 私はそれでもいい。だけど、クーデリカとウレイリカにはそんな生活させたくない！」

《やばい。まじで金欠だ。今回のナザリックの維持費払えない。こうなったら、思い切つて使わない装備売るかなあ。だけど、引退組の装備品が流れてて、装備品の値段も下落傾向だしなあ。一時期は十億したのに、いまじゃ五百万とかそんなのだし……。しょうが無い。今日は徹夜で狩るか……。寝落ちしないように、珈琲風味のカフェインでも買ってくるか。それにしても、なんでここまで拡張しちゃったのかなあ……。ナザリック。学校施設とか作ってたらほんと破産してたかも……》

「現状維持というのも、一つの選択肢だ。親を見捨てる……。それで後悔しない保証などあるのか！ 一度捨てたら、また戻ろうと思っても戻れなくなる。後悔しないと絶対に言い切れるのか！ 親が恋しくなる、思い出が沢山つまった家に戻りたい。そういうことだってあるだろう！」

「そんなの分らないよ。だけど、自分が踏み出さないと……。このままだと……」

「一緒に冒険者をつけよう。冒険者組合長の反応も良いし、このまま順調に実績を積みばアダマントタイトだ！ アダマントタイトになれば報酬は高いだろ？ それならなんとか出来るのではないか？ なんなら、俺の報酬は宿代くらいを貰えばそれで良い。一緒に冒険者をつければいいじゃないか……」

《モモンガさん、この装備、どうか有効活用してください》

《え？ って、これ……フル装備じゃないですか。ど、どうして？》

《ユグドラシルを引退しようと思うんです。せつかく作った装備品やアイテムのデータが消えてしまうのは勿体ないですから……それならアインズ・ウール・ゴウンの仲間に有効活用して欲しいなって……》

《そうですか……。寂しくなります……》

《いままでありがとうございます。モモンさんがギルド長をしてくれていたおかげで、ユグドラシルを楽しめましたのだと思います》

《いえ……。そんなことはないですよ。みんなの力です……》

《本当にありがとうございます。では……失礼します。アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ!!》

《アインズ・ウール・ゴウンに……栄光……あれ……》

「そんなことなんてできないでしょ！ モモン！ あなたは、何でも願いを叶えてくれるという指輪を探してずっと一人で旅をしてきたのでしょ？ 出会った日、冒険者組合で、多くの時間と労力を費やしたって自分で言ってたよ？ 黒髪……遠い異国の地から帝都まで来てしまうくらいに……。叶えたい願いがあるのでしょ？ 指輪の所在についての情報があつたら、そこへ向かうのでしょ？ ずっと帝都で冒険者をするつもりなんて無いくせに、そんな気休め言わないで！」

「……。今回の遺跡調査の成功の可能性は無い。別の機会を待つべきだ。それだけは分かってくれ。アルシエ……」

「モモンなんて大嫌い……」

アルシエは、両膝をまげ、そして両手で顔を隠しながら泣き始めた。

いつからだろう……。

ギルドメンバーがログインしてくる事より、他のプレイヤーがナザリツクに侵入して
くることを心待ちにするようになったのは……。

いつからだろう……。

スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン
ギルド 武器

器が侵入者の手によって破壊されることを夢見ていたのは……。

どうしてだろう……。

ユグドラシルのサービス終了が公式発表されて、ほっとしたのは……。

どうしてだろう……。

最終日に、カウントダウンをしながら、寂しさよりも安堵感の方が大きかったのは

……。

どうしてだろう……。

みんなユグドラシルを辞めていくのに、自分だけ辞められなかったのは……。

どうしてだろう……。

ユグドラシルが現実になったような世界に転移してきたのは……。

どうしてだろう……。

自分だけではなく、ナザリックも……そしてアインズ・ウール・ゴウンも一緒にやって来たのは。

どうしてだろう……。

現状を変えようと藻掻く少女と出会ったのは……。

どうしてだろう……。

出会ったその少女が、始まり？ρ？μ？という意味を持つ名前であるのか……。

どうしてだろう……。

目の前に、既に終わった筈の、ナザリックが、アインズ・ウール・ゴウンがあるのは……。

どうしてだろう……。

ナザリックへと侵入する立場になったのは……。そして、もはや、フレンドリー・フア

イヤーは解除されている。スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンギルド武器を自らの手でたたき割る事が出来る

……。

「運営の悪戯か、神の悪戯かは知らないが……性格が悪いな……。まったく……冒険者の昇格試験の次は、俺の卒業試験のつもりか？ ユグドラシルから……そして、アインズ・ウール・ゴウンからの……」とモモンガは呟き、そして意を決したようにアルシエに叫ぶ。

「アルシエ！ 何を泣いている！ 遺跡へと向かおう。遺跡の奥深くに眠っている武器。それを壊せば、俺達の勝ちだ。それに、天高くまで積み上がった金貨もある。高価なマジック・アイテムもな。どれだけ浪費しようが、決して使いきれないほどの宝が眠っている。一緒に前へと進もう！」

モモンガはそう言つて、泣いているアルシエに向かって手を差し出したのだった。

遺跡調査 6

新たに発見された遺跡は、まるで墓所のようにであった。

地上には、乱雑に墓石が並んでいる。帝都の墓所の方がまだ、整然と墓石が並んでいるようにアルシエには思える。そして、この遺跡で奇妙なのは、すべての墓石には、十字が刻まれていたり、十字を象った石が墓石の上部に設置されているということだ。

「ねえ、モモン、この十字の模様。どの墓石にもあるけど、何かの意味があるのかな？」とアルシエは尋ねる。

「十字架だろう?」

はりつけ

「十字架? 磔はりつけに使うあれだよね……」とアルシエは怪訝そうに、その形を思い出す。確かに、言われてみれば形はまさしくそれだ。しかし、処刑の道具を象つたものを墓石に付けるというのは、どうもアルシエには不可解であった。

「あ、ああ……まあ、死者の安らかな眠りと救いのシンボルなのだろう……。帝国では珍しいかもしれないな……。それより、地上には、見張りはいないようだな。進むぞ……」墓所内の東西南北の四カ所に建物があり、中央にはさらに巨大な建造物がそびえ立っている。

モモンは、四方に点在している建物には見向きもせず、中央の建物へと墓石にその姿を隠しながら進んでいく。

アルシエもモモンの動きを真似しながら、同じように身を隠しながら進む。そして、自分が中央の建物の入口から死角になるようにと姿を隠した、悪魔の彫刻を見上げる。アルシエは唾をゴクリと飲み込む。禍々しい翼を広げた悪魔の彫像。口を開けて覗いているその牙は今にも自分に噛みついてきそうだ。アルシエは、その彫像から視線を外し、そして今度は右手で芝生を触る。高さが一定の長さに切りそろえられている。家の庭園のように、手入れをする者がいなくなつて、草が伸び放題の状態とは違う。何者かが手入れをしているということは明白だ。

誰かが絶対にいる……。

モモンは、巨大な石像の下へと移動していく。そこならば自分も一緒に姿を隠すことのできるスペースがあると判断し、アルシエもその後について移動をした。

「Ver2. 0か……」と、石像の前に置かれた石碑を見ながらモモンが呟くのが聞こえ、そしてアルシエも石碑に刻まれた文字らしきものを見つめる。

アルシエは、2. 0という数字しか読めない。その前にも文字が書かれているが、古代の魔法書に書かれているような文字とも違う。当然、いま帝国で使われている文字と

も違う。

「なんだろう？ この数字……何かの謎リドかけかな？」

「いやそれは違う……。本来この石像は、侵入者が現れると迎撃に動き出す仕組みだ。いや、そのように思える……。これが動かないということは、遺跡トラップの罠の機能が停止している？ もしくは、奥へと誘い込むつもりか？」

「罠が作動しないのならラツキーだね……。だけど……。誰かが定期的のこの場所を掃除しているのは間違いないみたい。完全に無人つてことはないと思う」とアルシエは自分の意見をモモンへと小声で伝える。

「そうだな。もしかしたら、パーフエクト・アンノウアップル完全不可知化の効果で反応しないだけかも知れない……。完全不可知化。パーフエクト・アンノウアップル足音や人の息遣いなどの気配を消すという効果があるらしい。

遺跡に侵入する前に、草原でモモンが、『目をしばらく閉じてくれ』と言われて、目を閉じていた時に付与してくれたマジック・アイテムの効果であろう。

アルシエはモモンに言われた通りに目蓋をしっかりときつく閉じた。だが、その閉じた目蓋からでも分かるような、暖かな光をアルシエは感じた。木漏れ日の間をすり抜けたような優しい太陽のような光でもあり、大地を白く染めた雪に反射した目を差すような光でありながら、冬の暖炉のような温かい光だった。

そして、アルシエはその光は、希望の光のように感じた。そして、自分を守ってくれ

る光だとアルシエは思った。

「考えても仕方ないな……。侵入を開始するぞ」と、中央の大きな建物の入口へ、隠れる場所を探しながらモモンは移動していく。

中央の建物の石の扉をゆっくりと開ける。扉は施錠などされていないことにアルシエは驚く。建物から噴き出してくるヒンヤリとした空気。そして、腐臭。死の匂いだ。

「ここは霊廟？　だとしたら、アンデッド系のモンスターがいる可能性が高いと思う」とアルシエは小声で呟く。

「ああ。進むぞ」とゆっくりとモモンは長い廊下を進んでいく。コンティニューアル・ライト 永続 光の白い光で映し出される薄明るい廊下はどこか不気味だ。

廊下の壁に掛けられている旗や絵画。どれも高級品でありそして額縁などに埃が一切付いていない。やはり中も誰かが定期的に清掃を行っている。しかも、かなり念入り、かなりの頻度でだろう。

アルシエは建物の廊下を観察しながらも、モモンの背中へと常に注意を払う。はぐれてしまつては危険だ。

「地下があるなんて……」とアルシエは建物の最奥部。地下へと続く階段を見つめながら呟く。地下からはさらに鳥肌が立つような地下の冷え切った冷気。そしてさらに強

い腐臭が流れ出している。

「降りるぞ……」

地下一階。それはまるで迷路だった。壁は特殊なレンガが積まれ、床は、四角い敷石が敷き詰められている。

アルシエは、帰り道が分からなくならないように、一定の距離ごとにアルシエは紙をちぎって通路へと置いていく。『彷徨える者の紙切れ』だ。それを千切った者だけに薄らと輝いて見えるという性質を持ったマジック・アイテムで、迷宮や森などで目印に使う探索用のアイテムだ。

広大な迷路だ。どこまでもこの迷路が続いているようにさえ思う。『彷徨える者の紙切れ』は大量に用意してあるが、それが足りなくなってしまうかもしれないアルシエは不安になる。

「アルシエ。ここから先は罠がある。踏んだら即死だ。俺が踏んだ場所以外は踏まないようにしてくれ。飛行にも反応する罠だ。ゆっくり一步一步行こう」

変哲もないように思える通路。アルシエには今まで通ってきた道と何も変わらないように思える……。自分には罠を見抜くことはできない。モモンは、盗賊の職業も取得しているのであろうか。

モモンは、通路に敷き詰められた敷石を踏んでいく。通路の右側の敷石を分だと思っ

たら、左の敷石。アルシエもモモンが踏んだ敷石を記憶しながら、その後が続いていく。

通路を右に折れ、左に折れる。そして通路に現れたのは、大地の裂け目のような深い絶壁。モモンは、足の筋力を活かして、大きく跳躍をした。裂け目の幅は、距離にして五メートルくらいであろうか。モモンは容易に飛び越えてしまった。

「モモン、ちよつと待つて……」とアルシエは更に先へ進もうとするモモンを後ろから呼び止めた。

「ごめん。私は、その距離を跳べないかな……。飛行フライを使つちやだめだね?」

アルシエの筋力では、その距離を助走も無しに跳ぶことは不可能だ。

「そうか……」とモモンは振り向き答え、そして再び跳躍をしてアルシエがいる側に戻つてくる。

「アルシエ、しっかりと掴まってるよ。落ちたら串刺しになるからな」と言つて、アルシエを両手で抱きかかえる。

「え?」

「ほら、しっかりと掴まれ。あと、空中で暴れるなよ? バランスを崩すと厄介だからな」

「分かった」

遠慮しがちにアルシエはモモンの首に自らの両手を回す。

「行くぞ……」

助走もせず、モモンはその裂け目を飛び越えた。そして、難なく向こう側へと着地する。

ふわっと自分の身体が浮いているような感覚。飛行とは違った、アルシエが今まで感じたことの無い感覚であった。

「大丈夫だったか？」

「う、うん……」

「冷静に考えたら、この体勢の方が効率がいいな。アルシエ、この体勢はきつくはないか？」と、モモンガは相変わらずアルシエを抱きかかえながら尋ねる。

「大丈夫……」

「そうか。それなら、このまま翼を突っ切るぞ。しっかりと掴まっていてくれ」

そう言って、モモンは通路を疾走する。通路の右へ跳び、左へ飛ぶ。モモンの移動に合わせて、アルシエの身体も揺れる。

「アルシエ。すまないが、もつとしつかりと掴まってくれないか？　しっかりと掴まっけてもらわないと、重心がぶれてしまっけて安定しない」

「ご、ごめん。これでいいかな？」とアルシエは尋ねる。

「ああ。これならなんとか大丈夫だろう」

顔と顔が近いとアルシエは思う。当然、モモンは甲冑を着けている。気にすることな

どないのかも知れない。この遺跡の踏破に集中すべきなのだろう。モモンは気にしている様子はない。

自分の頭も動いたりしないほうが良いのだろう。アルシエは自分の頭をモモンの鎧に密着させる。モモンの肩に頭を乗つけるような形だ。

『これは、モモンの移動の邪魔にならないようにしているだけ』と、自らの心臓を落ち着かせるようにアルシエは心の中で何度もそう念じる。

モモンは、遺跡の通路を走っていく。アルシエも、モモンの移動の邪魔をしないように、必死にモモンを抱きしめる。

「ここならば少し落ち着けるな。魔物が出現しない前提でだが……」とモモンは言って、アルシエを地面へと降ろす。

「あ……」

何故だかは分からない。何故か寂しい気持ちへとなった。

「どうした？ ん？ 顔が赤いようだ……。疲れているのか？」

「大丈夫……。馬車酔いしたのと同じみたい」

「そうか。では少し休んだほうが良いな。暫く休めなくなる可能性があるからな」と、モ

モンは地面に胡座をかいてドシンと座った。休憩をするつもりなのであろう。

アルシエも、通路の壁を背もたれにして腰掛けようとしたとき、見慣れない文字らしきものに気付く。

「モモン、また地上の石碑に刻まれた文字と同じような文字が壁に……」と、アルシエは通路の左側の刻まれてた文字らしきものに気付き、そしてそれをモモンに伝える。

「ああ……。それは気にしなくて良い……」

「モモンはやつぱり読めるんだ……。一応、なんて書いてあるか教えて……。この遺跡攻略のヒントかも知れない！ 二人で考えれば、何か分かるかも知れない」

「そこには、『右の壁を見ろ』と書いてある」とモモンは言った。アルシエが、右側の壁に視線を移すと、右側の壁によく見ると文字が書いてある。

「モモン、右にも何か書いてある……」

「気にしないほうがいいぞ？ ただ、『上を見ろ』と書いてあるだけだ」とモモンは少しうんざりしたような口調で言った。

「え？ 本当だ……。上には何て書いてあるの？ この迷路を抜けるヒントとかじゃないのかな？」

「いや……。それはないさ。これは、この遺跡に侵入した者の精神を削る罠だ。これ以上は気にしない方が良さぞ。それより、この先にある罠にわざと引っ掛かるぞ。地下六階

まで転移する仕掛けになっている……。本来は、パーティー分断用の罠なのだがな……」

「地下六階……そんなにこの遺跡は深いのか？」

「ああ……。もつと奥深くまであるだろうな……。侵入者が誰も到達したことはない場所がな……」

モモンはそう呟いたのであった。

遺跡調査 7

モモンとアルシエは、なんの特徴もないただの敷石の前に立っていた。外見上はただの敷石だが、そこには転移の罠が仕掛けられている。

「俺から踏むぞ。後に続いてくれ。だが、もし、このトラップを踏んでも何も起きなかつたら、即刻それを使ってこの遺跡から脱出しろ」とモモンはアルシエに言った。アルシエは、スクロール巻物を強く握りしめながらそれに頷く。

アンフィテートルム円形劇場の闘技場内にまで飛ぶように仕掛けられた罠。本来は、侵入したパーティーを分断するために設置されたものだ。この罠で転移を可能なのは、二人まで。二回転移を行うと、その罠はロックが掛かり作動しなくなる。そして、チームを分断した後は、各個撃破していく。

まさか、この転移の罠を移動手段として逆利用することになるとはなあ、とモモンは心の中で呟く。

千五百人のプレイヤーが押し寄せてきた時などは、相手も数の暴力で押ししてきた。それだけで対策が出来る。

もしかしたら、ナザリック地下大墳墓をパーティー単位で、気長に攻略するプレイ

ヤーがいたら、状況は変わっていたかも知れないとモモンは思った。

パーティーが何度も全滅する覚悟で、マツピングをしながら進んでいく。全滅しても、またレベルを上げてからまた再挑戦をし、諦めないパーティー。

そんなパーティーが一番やつかいだったかも知れないと思う。アインズ・ウール・ゴウン側としても、一度設置した罠トラップを別の罠に変更するのには、新しい罠を設置するのとはほとんど同じ分の金と労力がかかる。

『あのパーティー、なかなか諦めないね』などと会話を円ラウンドテーブル卓でメンバー達と眺めるのも楽しかったかも知れない。

そして、そのパーティーが、最終的に玉座の間まで辿り着く。そしてそれを、アインズ・ウール・ゴウンのメンバー全員で相手をする。

そんなことになれば、攻める側はもちろん、守る側も楽しかったかも知れない。

ウルベルトさんなど、プレイヤーを玉座の間で迎え討つことを楽しみにしていたのかも知れない。

だが、ユグドラシル時代、そんなプレイヤーはいなかった。

千五百人のプレイヤーが押し寄せてきて全滅。その際の、ヴィクティムのスキルを使った殲滅の映像がネットに流れてしまい、他のプレイヤー達から攻略不可能というよ
うな認識を持たれてしまった。

ユグドラシルのギルドの中でもワールド・アイテムの保有数はずば抜けていた。遺跡攻略のメリットは大きいはずだが、苦勞してアインズ・ウール・ゴウンのホームを攻略するくらいなら、別のワールド・アイテムを探して入手した方がまだ良いと、他のプレイヤー達から思われていたのかも知れない。

攻略しようとするパーティーは現れなかった。最終日までずっと……。

モンスターが出現しないという不可解な点はあるが、もしかしたら自分と、そしてアルシエが、アインズ・ウール・ゴウンのギルド拠点になって以降、初めて、ダンジョンとして攻略しようとしているのではないかとさえ思う。

この迷路に大量に設置された罠。アインズ・ウール・ゴウンのメンバーで知恵を出し合って、一つ一つ設置していった罠だ。

この第六階層まで転移するトラップを踏まなかったら遭遇するのは、ゴーレムの置物の罠だ。

『ぬーぼーさん、これは、魔法耐性に特化したゴーレムですか？』

『ええ。まあ、見せトラップというような、罠役のゴーレムですが』

『罠？ 魔法特化のパーティーにとっては強敵ですよ……？ 少し勿体ないような気

がしますが……』

『そういう使い方も出来ませんが、今回のは別です。これを、見晴らしの良い通路に設置するつもりなんですよ』

『ん？ どういうことですか？』

『いやあ、これは、*ぶにつと萌え*さんのアイデアなのですが、明らかに魔法耐性を備えた、もう物理で殴るしかないっていうゴーレムが、通路の先にあつたら、モモンガさんはどうしますか？』

『私は物理はダメなので、他の仲間任せ……でしようか？』

『それも選択肢ですね。あと、装備を変えたりしませんか？ そのゴーレム対策の装備に』

『ああ。それもしますね。このゴーレム、魔法耐性に隙があつたり？』

『ええ。閻属性魔法への耐性を意図的に下げてます』

『へえ。それも探知可能なら、閻属性装備に変えますね。あの場所なら、アンデッドばかりなので、聖属性の方に装備や魔法を傾けているはずですから……』

『見晴らしの良い通路の先に置かれたゴーレム。当然、侵入してきたプレイヤー達は、その対策を考えて進むでしょう。そして、ゴーレムに接近した瞬間、ゴーストや死霊系のモンスターが出現して、そのプレイヤーを襲う……』

『うわあ……。そこで、物理が効かないモンスターを出しますか……。魔法職としても、閻属性に装備変えてしまっていたら、嫌ですね……。ゴーストや死霊系レイスに閻属性を使ってもって感じですからね……』

『そういうことです。だから、プレイヤーが対策用に装備を変えたくないような囷のゴーレムを作っているんですよ』

『今度、侵入者が現れたら、是非、その惨状を一緒に拝見したいですね！　ぬーぼーさん。楽しみにしています！』

『なんなら、試運転するとき、モモンガさんがプレイヤー役されても良いですよ？』
『それは遠慮します……』

ぬーぼーさん、一生懸命作っていたなあ。一度くらい、あの罠に引つ掛かってワタワタする人がいてもいいのかなあ……。ギルド武器壊したら、動かなくなっちゃうし……。

ゴーレムを抜けた先は、たちちさんが作った設置した罠があるゾーンかあ……。あの、罠がここにありますが、誰が見ても明らかに分かっちゃう罠……。あの正々堂々とし過ぎた罠を見た時は笑ったなあ……。いかにも“たちちさん”らしいって

「大丈夫？」

「ああ。では、先に行くぞ……」

敷石を踏んだ瞬間、モモンの身体が発光し、そしてその姿が消える。アルシエも、同じように敷石を踏む。眩しい光……。

そしてアルシエが目を開けたそこは、帝都の闘技場を思わせるような建物。その闘技場の真ん中に立っていた。モモンの姿も確認したのもつかの間だ。

観客席を埋め尽くす程の魔物……。アルシエが見たことも無いような魔物がほとんどだ。それに、向かい会うように闘技場に立っている人物……。いや、異形の者たち……。

うう……。何……。あの、日傘を差している女……。凄い魔力量……。あつちの闇妖精はもつと凄い……。しかも、男の子なのにどうして女性の衣服を？ うっ！

生まれながらの異能で見た、対峙している異形種達の魔力量。それは、自らの師と尊敬するフルーダ・パラダインの魔力量を遙かに凌駕している。

化け物だ。勝てない。逃げるべき……。幸いなことに、ここは地下では無く、地上のようだ。空には星が見えている。

アルシエは、逃げようとモモンに声をかけようとした瞬間、ハッと異形の者たちの異様に気付く。

兄弟姉妹なのか、抱き合ってウオンウオンと泣き始めた闇妖精^{ダーク・エルフ}。

日傘を落とし、そしてハンカチで涙を拭く女の子。

両手をワナワナと震わせながら、空を見上げている悪魔。その頬からは涙が地面へと落ち続けている。

闘技場の観客席からも、啜り泣く音が聞こえてくる……。

どうしてみんな泣いているの？ アルシエはその異様な光景に息を飲んだ……。

遺跡調査 8

第六階層の円形劇場アンフィテートルムの闘技場内に集まっている守護者達。

待ち伏せをされていたということは間違いない。だが、デミウルゴス、コキユートス、シャルティアがいるというのは一体どういふことだ？

アウラとマールがいるということなら理解できる。ここは彼等の守護階層だ。だが、コキユートスは地下五階層の守護者で、デミウルゴスは地下第七階層の守護者であったはずだ。

観客席にも、配置した覚えのないモンスターがいる。本来のナザリックではあり得ないことだ。NPCは、その場に有り続けて、侵入者が来たら設定されたAI人工知能に従って戦う。自動人形のような存在であったはずだ。

そして、なぜ、泣いている？ いや、泣いているように目から液体が流れている？ そんな機能はNPCに無かった。いや……。ユグドラシル自体にそんな機能は存在しなかったはずだ。

一体、何が起こった？

ふっと、モモンガはユグドラシルの最終日のことを思い出す。ユグドラシルのサービ
ス最終日にログインをしていたことが、自分がこの世界に来た原因であろう。強制ログ
アウトされるはずだったユグドラシル最後の時。あのときにユグドラシルにログイン
していたからこのような世界にいることになった……。

もしかして……。

へろへろさんもこちらの世界に来ている？ てつきり終了前にログアウトしたの
かと思っていたが、そうではなかった？ へろへろさんも、こっちの世界に来ていた？

へろへろさんなら、NPCの行動プログラムを組み立てることができる。この世界
は、嗅覚が再現されているなど、ユグドラシルよりも自由度が遙かに高い。へろへろさ
んは、凝った作りの行動プログラムも実装させていた。感情豊かなNPCを、人間のよ
うなNPCを作りたいと言っていた。

この世界では、そのへろへろさんの夢が実現できる世界であろう。NPCは、目から
液体を流す。いや、NPCは泣いているのだろうか。

「へ、へろへろさんですか？ 何処に隠れているんですか？ いやあ、脅かされましたよ
！ 涙まで実装しちゃうなんて！ 凄いいじゃないですか！」

モモンガは、あたりを見回しながらへろへろの姿を探す。

「モモン、何を言っているの？」と、モモンの後ろでアルシエは胃の中の物が逆流しない

ように口元を押さえながら、誰かを呼び探すモモンに声をかける。

モモンの声は、敵を前にした緊張した声ではなく、喜びに溢れたような明るい声だ。敵に囲まれた状態で発するには暢気すぎる声であった。

モモンは、アルシエの言葉が耳に入らなかつたのか、『へろへろ』なる人物を呼び続けている。

「へろへろさん〜！ 何処ですか？」とモモンは、観客席に向かって叫び続ける。だが、そのモモンに対する呼びかけの応答はなく、モモンの声は、天井に輝く星に吸い込まれていく。

へろへろなる人物を呼び続けるモモンの姿を見て、アルシエは、モモンは何か混乱しているかと判断した。魅了系の魔法か混乱系の魔法が使われたのであろうかとアルシエは推測するが、アルシエには状態異常を回復する魔法が使えない。

幸いにも、目の前の敵たちも自分たちを襲おうとしてこない。このまま、モモンが正気に戻るのを待つ。それが最善の手だ。

外見は、日傘を持った貴族の少女である女。魔力量がおかしい。闇妖精ダークエルフの少年の魔力量も……。あんなの絶対に勝てない。直視するだけで、気持ちが悪くなる。

アルシエは、現状での最善の手は、相手を刺激しないこと。そしてモモンが正常に戻るのを待つことであると判断した。

アルシエがそう判断した時、「へ口へ口様は、このナザリック地下大墳墓には現在おられませんか」とスーツを着た悪魔が、重い口を開いた。

「じゃあ、何処にいる？」

「私には分かり兼ねます。私の無知をお許しください」と、悪魔はそして右手を胸の前に回し、そして慇懃な態度で片膝をついた。

「嘘を吐くな！　じゃあ、お前達は一体なんなんだよ！」

円形劇場の中にモモンの怒声が響いた。その怒声を向けられていないアルシエでさえ、背中が一気に凍り付きそうな声だ。

目の前の異形の者達の表情が凍りつき、そして絶望の色へと変わったのが、アルシエにも分かった。闇妖精ダークエルフの二人は、息をするのを忘れてしまったかのようである。

「私達は、……至高の御方がたに創造された……階層守護者でございます……」と、悪魔は震えた声で、途切れ途切れながらも、アルシエにもはつきりと聞こえる声でそう答えた。

後ろに控えている、闇妖精の姉妹やドレスを着た少女は不安そうな顔をしてモモンを見つめている。表情などは一切分からないが、白い鎧のような者を着た化け物も、カタカタと震えている。

アルシエはその様子を見ていて、もしかしてあの異形の集団は、敵対する意志は無い

のではないかと思う。敵対するならば、すでに襲ってきていてもおかしくはない。

おそらくこの遺跡は墓所。眠りについた墓の主を見守る墓守。それが、この異形の者達ではないのか？

私たちはこの遺跡に侵入したが、幸いなことに墓荒らしのようなことはしていない。無断でこの遺跡に侵入したということは、こちらに非がある。だが、そこを謝罪して許してもらえれば、友好的に撤退ができるのではないだろうか。

「へロへロさん……いらっしやるんですよね……。いるなら早く出てきてくださいよ……」

先ほどの怒声と打って変わって弱々しい声で呟くようにモモンが言う。地面を見つめながら、モモンは何かを呟いている。

モモンはまだ混乱状態が続いているようだ。アルシエは判断する。

今は、私がしつかりとしなきゃ！ そうアルシエは自分の心を奮い立たせる。正直、あんな化け物じみた魔力を持っている魔物と向かい合いたくない。モモンの背中に隠れていた。

だけど、今は、自分がしつかりとしなければならぬと、アルシエは、奥歯を噛みしめながら、前に進み出た。

「私たちは、バハルス帝国冒険者チーム“モモンと愉快的仲間たち”。私は、アルシエ。

そして、このチームのリーダー、〃モモン〃です。まずは、無断でこの地に足を踏み入れてしまったことを謝罪させてください」とアルシエは、異形の者たちに向かって頭を下げる。

「ん？ 冒険者？ もう一度、その御名をお伺いしてもよろしいでしょうか？」と、スーツを着た悪魔がアルシエの言葉に反応し、問いかける。

「私は、アルシエ。〃美少女〃アルシエです」

「いえ、あなたの名前などに興味ありません。全身甲冑フルプレートを着ている方のご尊名を伺っているのです」

「モモンよ。〃釣りは要らない〃モモン!!」とアルシエは答える。

「モモン？ 様……？」と悪魔は呟いた後、右手を顎まで運び、考え込み始める。

「無断でこの地に足を踏み入れてしまったことを謝罪します。速やかにこの場を去りますので、どうか見逃してください！」とアルシエは再び大きく頭を下げた。

「へ口へ口様をお探しに……。バハルス帝国。冒険者……。なるほど……。そういうことでございましたか。流星は至高の御方がたを纏められていた方。そして、最後まで残ってくださった慈悲深きお方……。私たちが守護者の無能を深くお詫びいたします」と、悪魔は体を地面に五体投地した。

「いえ、謝罪するのは私たちの方です……」

「何を謝罪することなどございましょう!!」と、悪魔はアルシエの方をまっすぐに見つめてきた。

態度は柔らかく丁寧だが、アルシエは悪魔の視線を感じて、背中が冷たくなる。冷や汗が流れ始める。魔力量もさることながら、死デスの騎士ナイトよりも遥かに恐ろしい気配だ。

「私? 私は、バハルス帝国冒険者チーム“モモンと愉快な仲間たち”のアルシエ。美少女“アルシエ!”と、アルシエはもう一度名乗った。

「そうですか……。それで、“アルなんとか”さんは、このナザリック地下大墳墓に何をしに来たのです?」と、悪魔は優しく問いかける。

アルシエには、“ナザリック地下大墳墓”という単語は聞きなれない名前だった。だが、それがこの遺跡の名前であることは分かった。やはり、ここは墓所だった。

「この調査に来たのが目的です。ですが、直ぐに撤退します」

「それで問題ないのですか? 調査であるなら、何か成果が必要なのではありませんか?」

「……」

アルシエは悪魔に凶星を突かれて沈黙する。遺跡調査をしたという証拠を持ち帰らなければならない。遺跡の中には、想像を絶するような魔物が住みついていると報告しても、無事な状態で帝都に帰っても、まったく説得力がない……。

「必要なのは、マジック・アイテムですか？ それならばこれをお持ちください」と、悪魔はアルシエに歩み寄り、禍々しい悪魔の像を手渡してきた。

「こ、これは？」と、アルシエは強引に渡されたそのアイテムを訝しげに見つめる。何かとてつもない魔法が込められているように思われる。悪魔の像を模ったアイテム。造形だけでも、非常に手が込んだ作りであるのは分かる。悪魔の像を飾りたいと思うかどうかは別として、美術品としても価値が高そうであるとアルシエは思う。そして、遺跡から持ち帰った品としては十分であるように思われる。

「これは、私のもつとも大事にしている大切なアイテムです……が、どうぞお受けとりください。……シャルティア。外までお送りして差し上げなさい」と悪魔はそのままアルシエに背を向けた。

「え？ お送りするでありませんか？ どうして？」

「後で説明します。思う所はあるでしょうが、お願いしますね」

「了解でありんす」と、今度は、ドレスの少女がゆっくりとアルシエへと近づいてくるが、その少女の視線はモモンを見つめながら歩いている。

アルシエは、その少女の真つ赤な瞳。その少女が吸血鬼であるとその時気付く。

そして、その少女は魔法を唱えると、門が出現した。門の中には、暗黒の空間が広がっている。フルーダ先生が使えるという第六位階魔法 テレポーターシヨ 転移。それよりも高位と思

われる魔法を呼吸をするかのように使う吸血鬼。戦うことにならなくて良かったとアルシエは心底思う。第六位階魔法より以上の魔法を使う……。もしかして、伝説の吸血鬼「国墮し」なのではないかとさえ思う。

「これを通れば、地上であんす」

「い、行こう。モモン！」と、アルシエは棒立ちしているモモンの腕を強引にひっぱり、その門まで連れていく。そして、先にモモンの背中を押して、そのゲートを潜らせた。

そして、自分もその門を通ろうとしたとき、アルシエは「またどこかでお会いしんじょう。尻尾が似合いそうなお嬢さん」と、少女が呟くのが聞こえた。

地上は、太陽が沈みかけていたところであった。遺跡の地上にあつた墓石の影が長く伸びていた。

あの遺跡の中では、夜空であつた。夕方と夜。時間さえくるっている遺跡。それだけでも、あの遺跡の恐ろしさが理解できる。

そんな遺跡から、どうやら無事に生きて帰って来れた。

「モモン、馬車の所までまずは帰ろう……」

アルシエは、モモンの手を取りながら馬車へと向かう。そして、ときどきモモンの様子を振り返り見る。地面を見たまま、とぼとぼと力なく歩いているモモン。

アルシエは、モモンに話しかけることができなかった。

モモンが言っていた『へろへろさん』という人。モモンはその人を探していた。それはきつと、モモンの大切な人なのだろう。そうでなかったら、モモンがこんなボロボロの精神状態になるわけがない。

アルシエには、『へろへろさん』という人が誰かは分からない。そして、その人が、モモンと離れ離れになってしまっただけなのか、それとも、もう既にこの世にいないのかも分からない。

だけど、モモンにとっては大切な人なのは確かだ……。何故だか、心がチクリと痛い。モモンが探しているのは、何でも願いを叶えてくれるという指輪。それをモモンが探している理由が、分かった気がした。

金貨も二百枚くらいポんと出せるくらいお金も持っていて、高価なマジック・アイテムもたくさん持っている。そんなモモンが、叶えたいと思うような願い。

『ねえモモン、へろへろさんって、誰なの？ モモンの仲間？ ……もしかしてモモンの恋人？』

気軽な雑談を装って、聞いてみたいと思いつつも、モモンの様子を見る限りそんなことを聞ける雰囲気ではない。それに、どうしてそんなことが気になるか自分でも分からない。冒険者、たとえチームであろうとも、素性を聞いたりするのとはご法度である。でも、そんなことは分かっているが、聞いてみたくなる。

なんなんだろう。遺跡から生きて帰れて、気が抜けてるのかな……。アルシエは、夕陽の眩しさに、少しだけ目を細めた。

帝都は燃えているか

帝都は燃えているか 1

アルシエは、久しぶりに実家に帰った。家の庭園は様変わりしていた。見慣れない庭園は、なんだか自分の家では無いように感じられる。

庭園の中央にある、真新しい真つ白な石造りのガゼボ。新しく植えられた見慣れぬ木々と花々。

以前の家の庭園は貴族の庭として、手入れの行き届いていない見苦しいものであった。だが、子供の時から思い出が詰まった庭園であった。

まだ貴族であった幼い頃。

自分が最初に二本足で立ったのは、庭園の芝生であったそうだ。転んでも危なくない芝の上で、幼い自分は必死に二本足で立とうとしていたらしい。そして、それを優しく見守る、貴族の頃の父と母。

庭の生垣は子供にとつては壁のようであり、その入り組んだ生垣はまるで迷路のようだった。身長も高くなかった自分にとつては、その生垣と空しか見えない空間だった。

庭の端に植えられた生垣。ちよつとした冒険のつもりでその生垣の迷路の中に入り、

入口も出口も分からなくなり、怖くなって大泣きしたのを憶えている。

私の泣き声を聞きつけて、慌てて父がやってきて自分を抱きかかえてくれた。怖かったと泣きつづける自分を、母がガゼボで抱きかかえながらあやしてくれたのを憶えている。そして、そのガゼボは木製のガゼボだった。木の色合いの地味なガゼボであつたけれど、あたたか温かみがあつた。それは木の温もりであつたのか。

思い出が心の中に宿るのではなく、モノに宿るのだとしたら、かつての庭園は自分の思い出が宿つた大切な一つであつた。だが、その一つが失われてしまった。

「ただいま戻りました……」

アルシエは、暗い気持ちで屋敷の中へと入る。

「お帰りなさいませ、アルシエお嬢様。ご無事でお帰りになられてなによりでございます」

「ありがとう、ジャイムス。それで、お父様は？」

ジャイムスの困つた顔。良くない話があるのだろう。

「本日は、パーティーに出席されております。奥方様も、クーデリカ様もウレイリカもご参加されています」

「そう……。この家の人間を誘う貴族がいるとは思えないけれど……」

「おそらくですが、招待を受けるために多額の贈り物を先方にしたようです」

「そう……。疲れているから、部屋で休むね」

新しく改装された庭園。そして玄関のエントランスにはまた見慣れない彫刻が置かれていた。自分の家であるはずなのに、自分の家ではないかのように見える。

「お食事をお持ちしましょうか？」

「大丈夫。打ち合わせを兼ねて、仲間と夕食を食べることになっているから……」

子供の時に与えられた部屋。その部屋は相変わらず自分の部屋であった。自分が遺跡調査に出発してから何一つ変わっていない。そこは変わらない部屋で、確かにここは自分の家なのだと思えた。

アルシエは自分の机に座る。机の前の棚には、帝国魔術学院で教科書と、そしてノートとして使っていた羊皮紙が置いてある。アルシエはその教科書と羊皮紙を棚から持ち上げ、そして部屋の奥の衣装室に乱雑に投げ込んだ。衣装室にも、もう二度と着ることのないドレスがたくさん眠っている。中には、一度も袖を通していないドレスもある。母親がアルシエの為に買ったのは良いが、招かれるパーティーが無く使い場所が無かった。そしてすでに、アルシエが成長し、寸法が合わなくなってしまっている。捨ててしまいたいが、クーデリカカウレイリカがいつか着ることになるかも知れないと思うと、アルシエには捨てることできなかった。

赤や淡い青、純白。色とりどりのドレスが衣装室には並んでおり、色彩は豊かなク

ローゼットとなつてゐるが、心が躍るような色ではない。心なしか色褪せて見える。

アルシエは、そつと衣裳室の扉を閉める。そして、机に座り、遺跡調査、そしてその行程で使つた道具の手入れを始める。

調理に使つたナイフ。目を細めて、刃こぼれが無いかを丁寧に確認する。そして、布で綺麗に汚れをふき取り錆びることが無いように油を塗る。

使つた食器。汚れた衣服。次々と背囊から取り出していく。中身が空になつた背囊。その底に、丁寧に羊皮紙の切れ端で包んだ花をアルシエは取り出す。モモンからもらつた紫苑の花だつた。

花卉が壊れてしまわないようにゆつくりと包みを丁寧に外していく。薄い紫の花びらと、黄色い雄しべ。

花卉の何枚かは落ちてしまつてゐる。折れ曲がつてしまつた花卉もある。だけれど、この紫苑の花は色褪せていないように思える。衣裳室の鮮やかなドレスとは違う、心が温まるような色彩であつた。

〈バッカスの酒蔵〉

『薄い生地の上に敷しかれた酸味の利いたトマトソース。その上に霜降りのおき脂の

乗ったバハルス牛が敷き詰められている。そして、その上にたつぷりとかけられたチーズ。どうぞ、熱い内にお召し上がりください。トマトの酸味と牛肉の甘味、そしてチーズの苦さ。それがピッツアの上に輻輳し、最高の味を生み出しています。バツカスの酒蔵の「バハルス・ミート・ピッツア」。石竈で焼かれた贅沢な一枚。旬のトマトを使った一品です。ぜひ、お見逃しなく』

約束の時間になっても現れないモモンを待つ手持ち無沙汰を、アルシエは帝国グルメ情報誌を読んで過ごしていた。

いつも時間には正確で、遅れることなど無かった。むしろ、約束の時間よりも前に来て、アルシエを待っていることが多かった気がする。

モモンはまだ、本調子ではないのであろう。地下大墳墓からの帰り道。モモンの様子はおかしかつた。昼は地面を見つめながら歩き、夜は星ばかり見ていた。帰り道、会話らしき会話もしなかつた。

もしかしたら、今日の約束も上の空で聞いていなかったのかも知れない。モモンと明日からも一緒に冒険が出来るのであろうか。

「すまない。遅くなっちゃった」

「うん。私も今来たところだから」とアルシエは答える。モモンは約束を忘れてしまったしまったのではないかと思い、諦めて帰ろうとアルシエがしていた矢先だった。

「モモン、大丈夫?」

席に座つても、腕を組み無言のままだ。

「ああ。大丈夫だ。ちよつと考え事をしていてな」

「あの『ナザリック地下大墳墓』のことだよな?」

「ああ。一体、ナザリックは、何だつたのだろうな……」

モモンが発する『ナザリック』。その言葉に、何処か親しみの感情が入っているようにアルシエは感じる。それこそ、もしかしたら、いや、自分の勘違いなだけかもしれないが、自分の名を呼ぶ時よりも、親しみがあるように聞こえた。

突如現れた奇妙な墓。そして、地獄まで続いているような地下。異形の化け物達。二度と足を踏み入れたくないという恐れや恐怖の感情は抱くが、親しみなどは決して湧いてこない。未発見の遺跡、前人未踏の遺跡として、冒険者として心躍るものかも知れない。けれど、モモンの発した言葉は、決して楽しい感情の類いではない。

「ねえ……。あのナザリック地下大墳墓つて、モモンと何か……」

アルシエが意を決して、モモンに尋ねようとした瞬間、食器がぶつかり合う硬質な音が、バツカスの酒蔵の中に響いた。

「なんなのよ、この料理は!」

バツカスの酒蔵で食事をしていた客は、その声のした方向へと視線を向けた。

帝都は燃えているか 2

甲高くヒステリックな叫び声が響き、遅れて食器がぶつかり合う硬質な音がバツカスの酒蔵に広がった。

アルシエは、その女性の顔立ちに息を飲んだ。その女性の顔立ちは、美しいという言葉すら霞むほどだ。アルシエが美人であると思っっている女性、レイナス。そのレイナスさんとは違ったタイプではあるが、その違いを差し置いても、その女性とはびつきの美人である。

騒ぎを起こしているのにもかかわらず、その動きは優雅であり、気品すらあった。帝都で少なくなつた貴族。それも高位貴族の令嬢であろう彼女は、長い縦ロールの髪をわずらわしげに掻き上げながら、前に置かれた料理を不満げな表情で睨み付けていた。

他のテーブルの男達も、騒ぎの主が絶世の美女であると認識すると、その騒ぎの主を責めるような視線から、欲望の色を含んだ眼差しへと変わる。

若い男性だけのテーブルなどでは、『確かに今日の料理はいまいちだな。料理人が代わつたのかな?』『素材の鮮度が落ちていた。保プリザーベーション存をかけ忘れていたのではなからうか?』などと、既に平らげている料理の皿を前にしながら料理を批判していた。騒ぎ

の主である彼女に迎合し、そしてあわよくば彼女の気を引こうとしているのがアルシエには透けて見えた。

彼女の座っているテーブルには、所狭しと食事が並べられていた。アルシエが注文をして平らげてしまった、『バハルス・ミート・ピッツア』も、そのテーブルには載っている。しかも、アルシエの注文したミディアム・サイズではなく、ラージ・サイズである。「美味しくないわ!」

優雅にフォークを口に運び、そして続けて放たれた台詞。彼女の不満そうな表情。彼女に注目していた誰もが予想した通りの発言であった。

「場所を変えるわよ。こんな料理、食べられたものではないわ!」と乱暴に椅子から立ち上がる。

「今からだと、おそらく他の所も満席で入れない恐れがございます。それに、帝都に着いたばかりで、この店以外を存じあげません……」

彼女の後ろに控えていた老人の執事が頭を下げながらそう言った。

「黙りなさい! 私は美味しいモノを食べたいの。分かったかしら!」と、彼女は執事を叱責している。

アルシエの耳に、先ほどの若い男だけのテーブルで、小声で『おい。食事に誘うチャンスじゃないか?』という若い男達のひそひそ話が耳に入ってきた。美しい女性を食事

に誘うチャンスであるとその若い男達は認識しているようだった。

「早く行くわよ！」と彼女は乱暴に立ち上がり、椅子が倒れた。

「初めまして。麗しきご令嬢。良かったら、お口直しに行きませんか？ 美味しい食事

処を知っています。『食事処 舌鼓』という所でございます」

「あら、願ってもみない申し出ですわ。それに、まあまあ美味しそう」と、その令嬢は先ほどの不機嫌そうな表情から打って変わって、満面の花が咲いたような笑顔を、話しかけた小太りの男に向ける。

「では！ ご案内させていただきます」と、美女の満面の笑顔を受けて、興奮しながら男はすつと令嬢に対して手を差し出す。この場からエスコートをするつもりであるのであろう。

「ですが、下等な存在に触れられるのはごめんです。セバス、行くわよ」と、差し出された手を、まるで汚物を見るかの如く見下し、そして踵を返して外へと出て行ってしまった。

バツカスの酒蔵に広がったのは、その令嬢を非難する声と、その無様に振られてしまった若い男に対する嘲りの笑い声。

「お騒がせしました、皆様」

嫉妬、怒り、嘲り、失意。さまざまな感情が交錯していたバツカスの酒蔵に、よく通

る声が響いた。老執事の声であった。

老執事は、立ち上がった際に倒れ掛かった椅子を戻すと、執事はゆつくりと食堂にいた他の客に頭を下げる。非常に品のいい老人の完璧な謝罪を、バツカスの酒蔵で食事を楽しんでいた人々は受ける。

「——主人」

「はい」と、バツカスの酒蔵の主人らしき男が老執事の呼びかけに答えた。

「失礼いたしました。お騒がせしてしまつたお詫びというほどでもありませんが、この場にいる方々のお食事代は私の方で支払わせていただきます」と老執事は金貨の入つた袋を店主に渡して、バツカスの酒蔵を後にした。

そして、老執事の姿が見えなくなつたあと、バツカスの酒蔵に歓声が響いた。何処かの貴族の令嬢が騒いだが、それは気にすることでもない。それに、いかにもワガママに育つたというような令嬢。その令嬢の美貌だけに惹かれて無様に振られた男がいる。

食事の席で楽しむ余興と考えれば、それは痛快である。ただ、その令嬢に手ひどく振られた男は、怒りと羞恥で体が震えていた。

「こういうことなら、もつと料理注文しておけばよかつたかな」と、アルシエも、食堂の雰囲気が一気に明るくなつたので、そうモモンに話しかけた。家に持ち帰るようにもう一枚、ピッツアを頼んでおいても、それは無料になつていたのであろう。もしくは、ミディ

アム・サイズではなく、ラージ・サイズを注文しても良かったかも知れない。まだお腹は七分目と言ったところだ。

「ああ。そうだな……あれは家令のセバスか？」とモモンはぼんやりと口を開いている。
「ん？ モモン、聞いている？」

モモンは上の空であるようだった。先ほどの令嬢が座っていたテーブルをぼおつと眺めている。

「モモン、話聞いてないよね？」

「ああ。そうだな」

「モモンも、あの綺麗だけど性格悪そうな女性に心奪われたの？」

「ああ。そうだな……あれはプレアデスの……」

——ドン——

今度は、アルシエが両手で机を叩いた音が、バツカスの酒蔵に響いた。

「モモン、最低。明日の早朝、冒険者組合で待ち合わせ。明日は遅れないでね。今日はお帰るから！」とアルシエも、先ほどの令嬢ほど乱暴にはないが立ち上がり、バツカスの酒蔵を後にした。

アルシエは、バツカスの酒蔵を出たあと、そこから少し離れた噴水に腰を掛けて座つ

ていた。その噴水からは、バツカスの酒蔵の入口がよく見える。バツカスの酒蔵への出入りする人影はあるが、モモンの姿はその中にならない。まだ、食堂にいるのであろう。

アルシエが噴水の淵に座って、足をブラブラさせること十分。モモンが美しい女性に見惚れるのは別に自分が責めることのできることはなかったと反省をしながらも、モモンが自分を追っかけてきてくれないことに寂しさを感じていた。

帝都の夜風に乗って、打ち上げられた噴水の水が、霧状になって自分の体に掛かる。肌寒い夜だ。

バツカスの酒蔵に戻って、カツとなつてごめんとモモンに謝ろうか。だけど、それはなんだか負けた気がする。自分が謝るのではなく、モモンに謝ってほしい。だけど、モモンに何を謝って欲しいのか、自分が何に怒っているのか上手く分からない。

「散歩しながら帰ろう。明日、顔を合わせるのだし」とアルシエは、帝都の街並みから漏れる灯りを見ながら独りごとを言う。

モヤモヤとしたはつきり分からない感情を断つことはできそうにない。そしてまっすぐ家に帰る気にもなれない。

アルシエは、帝都の街並みを歩き始める。野良犬の声だろうか。遠くで犬の遠吠えが聞こえた。

冒険者組合や魔術組合がある区画。帝国魔法学院の大きな正門の前。遊郭などがあ

る地区など治安の悪い場所を避けながら、アルシエは帝都の中を歩き続ける。

もうすぐ貴族の屋敷が集まっている区画に差しかかる頃、男の怒声がアルシエの耳に飛び込んできた。

バハルス帝国ではすっかり珍しい光景となってしまうが、貴族が平民を叱責するようない方の口調だ。幸い父の声ではない。もっと若い男の声である。

「さっきはよくも恥をかかせてくれたな！」

争いごとを避けて回り道をするのも億劫だし、貴族の区画へ続く道の幅は広い。アルシエは、街灯の下で叫んでいる男達を避け、面倒事を避けるために、道の反対側を進んで自宅へと向かう。

「なんとか言ったらどうなのだ？」と言う再びの怒声。

横目でアルシエが観察した限り、薄暗い街灯に照らされているのは、三人組の男。そして、その三人に囲まれているのは、まっすぐと背筋を伸ばした老人と女性。

バツカスの酒蔵にいたワガママな令嬢とその執事。そして、令嬢に冷たくあしらわれた男とその仲間であることにアルシエは気付く。若い男三人で、老人と女性を脅す。まったくもって褒められた行為とは言えないが、あの美しかった令嬢の事を考えると助ける気持ちに何故だかならない。その令嬢の自業自得だというようにさえ、アルシエには思えた。

そのまま無視して進もう。

「あれだけ威勢が良かったのに今度はだんまりかあ？」

若い男の、先ほどの令嬢と老執事を詰るような声がアルシエの耳に届く。無視しようと決めていた心が揺らぐ。

「老いぼれは帰んな！ 御嬢さんは今晚付き合つてもらおうぜ？」

アルシエは、その言葉を聞き、さすがに捨て置くことは人として間違つているであろうと思ひ直す。そして、飛行の呪文を唱え、若い男と女性と老執事の頭上へと飛ぶ。

「若い女性と老人を、みつともない！ 止めなさい」とアルシエは、杖を若い男の一人に向けながら言う。

「予定外ですが、調査対象その一と接触」と、令嬢のまったく感情を伴わない淡々とした声が響く。

その言葉の意味をアルシエが考えている間もなく、老執事が神速のようなスピードで、若い三人を気絶させた。アルシエは何をしたのか見えなかった。老執事が動いたということだけしか分からなかった。だが、その執事が何かをしたということは間違いが無かった。

固い石畳に受け身もせず倒れる三人。完全に気絶していることは確実であった。

「通りすがりの方。ありがとうございます。動こうにもこの三人、中々隙が無く、困つて

いたところでした。万が一にも、主を危険に晒すわけには行きませんでしたからね。申し遅れました。私はセバスと申します」と、セバスと名乗った執事は、空中に浮かんで呆気を取られているアルシエを見上げながらそう言った。

帝都は燃えているか 3

アルシエは、セバスと名乗った老人を見下すような場所から挨拶をするのは失礼だと思ひ、飛行の魔法を解除して、石畳の上へと降り立った。

「私は、冒険者のアルシエと申します。もしかしたら余計なことをしたかも知れません。あんなにお強いとは思っていません……。」とアルシエはセバスという老人に挨拶をした。もう一人の令嬢に挨拶をしようかとも思ったが、その女性は不機嫌そうに腕を組み、アルシエを睨みつけている。

アルシエに対して負の感情を抱いているのは明白であった。助けに入ったことを、この令嬢は余計なことをした、と思っているのかも知れない。令嬢から、目には見えない圧力をアルシエは感じていた。

「いえ。本当に助かりました。お嬢様に万が一があつてはいけませんからね。今はこれと言ったものを持ち合わせていないのですが、後日必ずお礼をさせていただきます。ご連絡先などを教えていただいてもよろしいでしょうか？」

令嬢の硬質な態度とは裏腹に、セバスという老人は物腰が柔らかく好感をアルシエは持てた。

「いえ。お礼を頂くようなことではありません。お気遣いは結構です」とアルシエは片手を振りながら、セバスの申し出を固辞する。

「あなた、助けてもらってお礼をしない恥知らずに私をさせるおつもり？」

冷たい声が響く。令嬢からの声だった。

「いえ、そういうわけではないです。本当に大したことをしていません……。それに私も先ほどバツカスの酒蔵で食事をしていて……ご飯をご馳走になったので」とアルシエは委縮しながらもお礼の申し出を固辞しようとする。

「そうでございましたか。それは奇遇でございますね。思い出しました。黒い甲冑を着た男性と一緒に食事をされていた方ですね。お食事の時間を騒がしてしまった上に、助けていただいた。ソリュシャンお嬢様もお礼がしたいと思っていらっしゃいます。私たちの顔を立てると思って、お礼を受け取ってくださいませんか？　そうですね……。冒険者の方であれば、装備でしょうか？　それとも、マジック・アイテムでしょうか？　失礼ですが見たところ、あなたの装備は冒険者として些か粗末すぎるように思われます」とセバスはアルシエの着ている服、持っている杖を一瞥してから言った。

セバスという老人は、話を一方的に進めていく。

だが、セバスが言った通りであった。アルシエは現状、ミスリル級冒険者。しかし、ミスリル級の冒険者の装備品としては、いま自分が着ている服などは見劣りする。同じ

チームのモモンの全身甲冑などは、アダマンタイト級冒険者が装備していてもおかしく無いような装備だ。それに比べて自分の装備は、駆け出しか、鉄の冒険者の装備であろう。この先、より強い魔物と戦うことになるのであれば、装備品の強化は絶対に必要だ。だが、そんな装備を変えるだけのお金は無い。ミスリル冒険者として相応しい装備。それにそんなお金があつたならば、借金の返済を少しでも進めておきたい。

「この女にいくら強い装備を渡しても、無駄ですわ。弱すぎてゴミにしかみえません。もう一人の御方と、どうして同じチームを組んでいるのか。あなたは、まったく相応しくないですわね」

「なっー!」

ソリユシャンと呼ばれた女性。その女性ของあまりに失礼な物言い。花よ蝶よと育てられて我儘に育つた貴族の令嬢に、弱いと言われたくはない。その色白の肌にか細い腕で何ができるというのか。

それに、赤の他人にチームの事を批判されるのは、あまりに筋違いだ。

やっぱり無視して通り過ぎれば良かったという後悔がアルシエの中に生まれる。

「不満そうな顔つきですね。まさか、自分がゴミだという自覚のないゴミですか?」

“モモンと愉快な仲間たち”。自分とモモンの実力が伴っていないのは自分でもよく分かつている。自分で痛いほど分かつている。だけど、それを見知らぬ赤の他人、そ

れも温室育ちの貴族風の令嬢に言われ、そしてそれが凶星であるということがアルシエには堪らなく悔しい。

モモンと実力が伴ってない。どれだけ背伸びをしても追いつけない、圧倒的な実力差。自分は、モモンにも、レイナースさんにも、そしてニグンさんにも、圧倒的に実力で負けている。自分は、愛する妹達の未来を守るために冒険者になった。自分は、クーデリカとウレイリカの姉なのだ。妹達を守るべき存在なのだ。それが自分なのだ。モモンにも、レイナースさんにも、ニグンさんにも、守られるべき存在ではない。自分だけで、大切な誰かを守る存在なのだ。そうありたいと願っている。

この令嬢は、自分の存在を根本から馬鹿にしている。

「ソリュシャンお嬢様……。恩人に対して少し言葉が過ぎるか。それに、鷹は爪を隠すもの。そうですね？ アルシエ様？」とセバスと名乗った老人は令嬢を諫めながら、優しくアルシエを見つめる。

「ゴミにゴミと言って何が悪いというのです！」

「……。私は第三位階魔法を使えます」とアルシエは答える。馬鹿にされて黙ってはいられない。自分の年齢で第三位階魔法を使える人間などそうはいない。それに、第三位階魔法、それだって才能を持っているという動かぬ証拠でしか無い。このまま鍛錬を積んでいけば、いずれは帝国最強の魔法使い、フールーダ師匠にならぶ第六位階魔法を使

える可能性だつてある。

「第三位階………?」

ソリュシャンと呼ばれた令嬢の目が、鳩が豆鉄砲を食つたように点となつた。そして、

「おほおほほほおほ」という甲高い笑い声が響く。ソリュシャンの笑い声であつた。その笑い声は嘲笑であり、明らかにアルシエを侮辱する笑いであつた。

「な、何が可笑しいんですか!」

「第三位階魔法……。下等な存在が自らを下等だと胸を張つて表明する。これを笑わずしてどうしろとおっしゃるの?」と、もはや令嬢は、アルシエをなにか、汚物を見るかのようにしか見ていないようだ。

「今は第三位階までかもしれないけど、このまま成長していけば——」

「——心苦しいのですが、それはありませんね。見たところあなたは才能の限界に達している」とセバスがアルシエの言葉を遮つた。

「え?」

我が儘な令嬢の失礼千万な態度とは正反對で、この老執事は自分に対して少なくとも礼儀を持つて接してくれていた。それが突然、自分の才能がすでに限界であると言う。それに、この老執事の瞳からは嘘を言っているような雰囲気はまったく無い。ありのま

まの真実を言っているようにすら見える。

「私達を助けてくださった。あなたには好感が持てます。だからこそ、敢えて厳しいことを申し上げます。限界に達しているということは事実です。あなた自身がその壁に気付いていないのであるとすれば、それこそ、あなたが未熟だという証拠に他なりません」

やはり、老人が嘘を言っているようには感じられない。アルシエの頭の中が真っ白になった。モモンの足を引っ張っているだけの自分ではなく、モモンには出来ないことができる、チームの仲間として支えていける冒険者。自分の掲げていた目標が、目指す冒険者としての理想像。その理想像も、軋み、音を立てて崩れそうになる。持っていた杖を地面に落としてしまいそうだ。

「そこで話は戻りますが、助けていただいたお礼の件です。もしよろしかったら、私が訓練を付けて差し上げるというのは如何でしょうか？」

「え？ 訓練ですか？」とアルシエは突然の老執事の提案に戸惑う。そういえば、助けたお礼をするという話であった。

「はい。端的に言えば、火事場の馬鹿力と言ったものでしょうか。あなたの本能が無意識にかけているリミッターを、無理やり外す訓練です。ただし、はつきり言います。死ぬかもしれません」

老人は冗談を言っているのではない。

アルシエはそう直感する。死ぬのは嫌だ。怖い。だけど、自分は強くならなくてはならない。唾を飲み込み、アルシエは迷う。

暫しの間、静寂が辺りを支配する。令嬢が自分を冷ややかな目で見つめている。躊躇っている自分を心の中で嘲け笑っているであろうか。

カツツエ平野からの帰り道。レイナスさんとニグンさんは、モモンを真ん中にして、楽しそうに会話をしながら平野を歩いていった。その三人は、対等な立場の人間同士として並び立っていた。自分は、その後ろを、背中を見つめながら歩いていった。

レイナスさんやニグンさん、時にはモモンが時折、自分がちゃんと自分たちに付いてきているのか心配そうに振り返る。自分は、クーデリカとウレイリカの姉なのだ。妹達を守るべき存在であるべきなのだ。守られる存在ではいたくない。もう、守られるだけの存在では駄目なのだ。

「死ぬかどうかはあなたの心次第です。……もしあなたに大切なものがあるのならば、大丈夫でしょう」

アルシエは決心した。

「どうか、お願いします」

大切なもの。それは、愛する妹達だ。そして、モモンの横に立てる自分になりたいと

思う気持ち。自分には大切なものなら、たくさんある。失った大切なものの方が多くも知れない。だけど、まだ、大切なものが自分には残っている。そしてそれを自分は手放したりはしたくない。

アルシエの目を覗きむことで思いを読み取ったのだろう。セバスは大きく頷く。

「了解しました。ではここでその稽古を行いましょう」

「ここで、ですか？」

「ええ。時間もほんの数分もかかりませんよ。構えてください」

一体、何をするのか。未知への不安と困惑。アルシエは、杖を構える。そして、いつでも魔法が使えるように自らの体に魔力を循環させ、杖にも魔力を込めていく。

「では行きますよ。意識をしつかり持つってください」

そして次の瞬間――

――セバスを中心に全方位に氷の刃が射出されたようだった。

アルシエにはもはや言葉は無い。老執事を中心に渦巻くものの正体は殺気だ。アルシエの心臓と内臓が一瞬で握りつぶされるほどの、色の付いたように濃い気配が、怒濤の如く押し寄せてくる。

殺気の黒き濁流に翻弄され、アルシエは自らの意識が白く染まりだすのを感じる。あまりの恐怖を、意識を手放すことで受け流そうとしているのだ。

「前準備でこの程度。御方を疑うわけではないですが、この女が何かの役に立つとは到底思えませんね」と令嬢の怒りが混ざった声がアルシエの耳に薄らと届く。

「役に立つとは到底思えない」。妹達の役に立たない。モモンの役に立たない。アルシエはそう言われたような気がした。そしてその言葉は刃よりも深くアルシエの心に突き刺さる。

そんな自分は嫌だ！

「いへん」

アルシエは大きく唾を飲み込む。そして、胃から逆流しそうになり、喉のところまで上がって来そうになっていた、さきほど食べたピッツアを強引にまた胃袋にまで戻す。

死の騎士デス・ナイトの比ではない。あまりに怖くて、逃げ出たくて。でも、涙目で必死に耐える。杖を持つ手は震え、杖先に滞留させている魔力は掻き消えそうになる。

それでも、アルシエは胃袋から逆流してきそうなものを抑え、セバスの恐怖に耐えようとする。

そんな無様な姿を令嬢は鼻で笑う。

老執事は、目の前で上げた右拳をゆっくり握りしめていく。

そして、その拳がゆっくりと弓を引き絞るように、後ろへと下がっていく。何が起るのか悟ったアルシエは震えながら、顔を左右に振る。

「どうやら怖気付いたみたいね」と令嬢が口を挟むが、アルシエはその言葉に反応する余裕はない。老執事も、その令嬢の言葉に耳を傾けていないようだ。

「では……死んでください」

限界まで引き絞られた矢が放たれるように、ゴウツ、という風を引き裂く音を立てて、セバスの拳が放たれる。

当たったら死んでしまう。だが、体は動かない。あまりの緊張状態に置かれたことで体が硬直している。

——目の前の死から逃れるすべはない。

「だけど……そんなのは嫌だ。クーデリカとウレイリカを幸せにするんだ。いつか、モンの隣に立つんだ！」

手は動かない。

足も動かない。

だが、閉ざされようとしていた目はしっかりと見開かれ、超高速で迫る拳を肉眼で捉えようと必死に動く。

私はこの拳を防いで生きるんだあ
!!!!

まったく自分のいう事を聞かない筋肉とは裏腹に、激しくアルシエの体の中を躍動する存在があった。

それは、アルシエの魔力であった。突然、温泉が地中から噴き出したような魔力。コントロールをされていけない、形にもなっていない魔力の源泉。それがアルシエの体全身から溢れだした。

だが、そんな発散された密度の薄い魔力。セバスの攻撃はその魔力の濁流を容易に切り裂きながら迫ってくる。

もつと固く圧縮された密度の濃い魔力を……。私と拳の間に……。

極度に圧縮された時間の中で、アルシエは必死に暴れまわっている魔力を制御しようとする。だが、それよりも拳のスピードは速い。

そして――

ゴウツ、という音を立てて、セバスの拳はアルシエの顔の横を通り過ぎる。通り過ぎた風圧で、アルシエの前髪を留めていたヘアバンドが空中へと舞い上がる。

カツンとヘアバンドが路上の石に落ちる音が響いた後……

「どうでした、死を目の前にした気分は？　そして死力を尽くされた感想は？」

アルシエは全身の力が抜けてしまった体を必死に自分の両足と、そして杖で支えながらセバスを見上げる。

先ほどの殺気は嘘のように無い。アルシエは安堵と共に足の力が抜ける。路上の石畳にそのまま尻餅をついた。

「……シヨック死しなくて良かったですよ。時にはあるんです。死力を尽くしてしまうと、そのまま命が燃え尽きてしまうことが」

アルシエは先ほどの魔力の総量。自分自身の最大値だと思っていた魔力よりも遥かに大きな魔力の量だった。これが、自分の死力……。フルーダ師匠と比較しても遜色のない魔力量であった。

「あと数度繰り返し、体から絞り出した魔力を制御できるようになれば、より強力な魔法が使えるようになるでしょう。ですが、注意をしなければならぬのは、これは自らの命を削っている行為だということを自覚すべきです。乱用は避けてください。もつとも、使われるべきときに出し惜しみすることもお勧め致しません……」とセバスはアルシエに手を差出し、アルシエを起こしながら言った。

「あなたの力が必要とされたときは、自らの命を喜んで捧げなさい。自分の命欲しさに力を出し惜しみしたと私が知ったら、殺すわよ？」と腕組みをしていた令嬢がそう口を開いた。

「それはどういう……」とアルシエは令嬢の殺気交じりの言葉。その意味がアルシエには分かりかねた。

「死力を出しつくしてでも守りたいとあなたが思う存在。その存在のために、その力を使ってください、というソリユシャンお嬢様なりのあなたへのアドバイスですよ」とセバスは微笑みながらアルシエに優しく語りかけた。

そして、「さて、訓練の続きをしましょう。先ほどの魔力の発露で、今はあなたの体には意識的に使える魔力は残っていないはずですよ。空の状態です。その状態から、死力を尽くして魔力を引き出す。自らの生命から魔力を絞り出すと表現しても良いですよ。先ほどよりもきついですよ？ 続けますか？」

「も、もちろんです。お願いします」とアルシエは頭を下げ、そして杖を構えた。

「では、行きますよ……」

再び、アルシエに、恐ろしい程の殺気が浴びせられた。

帝都は燃えているか 4【閲覧注意：グロ描写有り】

ナザリック地下大墳墓。モモンガがナザリックから離れていくのを、守護者達は遠隔視の鏡で見守っていた。

「行ツテシマワレタ」と、白い息がコキュートスの口から洩れる。それは、冷たい冷気だけではなく、寂寥の感情もその吐息と共に吐き出されている。

「それで、デミウルゴス。どうしてモモンガ様と人間の女をナザリックの外へとまた送るようにシャルティアに指示したの？ 後で説明するといっていたけど」とアウラは、遠隔視の鏡を少し離れた場所から観ているデミウルゴスに尋ねた。

モモンガ様が再びこの栄光あるナザリック地下大墳墓に戻ってこられた。その喜びも束の間、モモンガ様は再びナザリックの外へと出て行かれてしまった。守護者達の寂寞とした思いは募るばかりだ。

その結果が、守護者たちは自分たちの守護領域へとは戻らず、闘技場で、遠隔視の鏡でモモンガの姿をずっと見つめ続けているという結果となっていた。

モモンガ様はナザリックを振り返られたりしない。すでにナザリック地下大墳墓に

なんの価値も見出されなくなったように守護者たちには思えてきて、不安が募る。

「転移門ゲートでお送りしたことも疑問でありんですが、そもそもどうして闘技場に守護者を集合させたであんすか？ それに、どうしてモモンガ様は尊いお名前を名乗られなかったでありんしょうか」と、遠隔視ミラー・オブ・リモート・ビューイングの鏡から視線を話さず、デミウルゴスにシャルティアがたずねる。

「最初カラ説明ヲシテモラオウカ」

「僕も聞きたいかな。モモンガ様、お怒りになられてもいたし……。ナザリックにお帰りになられたのであれば、やっぱり入り口でお迎えをするべきだったんじゃないかな……。」とマールも心細そうに言った。

不安そうな守護者達。だが、デミウルゴスは怪しげな笑みを絶やさない。デミウルゴスの顔には、不安や絶望ではなく、喜色が浮かんでいる。

「モモンガ様の御心に沿って私は行動をしただけです。最初から順に説明をしていきましよう。ですが、その前に、アルベドを呼び出しましょう」

「アルベドを？ 大丈夫でありんすか？ モモンガ様の部屋に閉じこもって、ぶつぶつ言っているだけでありんしたけど？」

アルベド……。モモンガがいなくなったことを知り、悲しみに暮れていた。お隠れになったのか、それとも、自分を見捨てたのか。最後まで残ってくださっていた慈愛に溢

れた至高の御方々のまとめ役であつたモモンガ様が……。

モモンガを喪失したアルベド。

至高の御方々が不在であれば、守護者統括という立場を授かつたアルベドは、ナザリックを指揮しなければならぬ。守護者統括という地位も、至高の御方から与えられた役職である。その与えられた役職を放棄することは不敬。

普段であれば、その不敬を他の守護者たちが見過ごすことなどあり得ない。場合によつては、アルベドを誅していたかもしれない。

だが、他の守護者たちにそれは出来なかつた。悲しみに暮れるアルベドの姿があまりに憐れで。

忠義を捧げる相手を失つたという喪失。それに加えて、アルベドには、「愛する人」を失つたという喪失、もしくは、「愛する人」に捨てられたという絶望。

守護者は、創造主がそうあれ、と命じになつたことを尊重すべきだ。アウラとマーレが男女逆の服装をしていたとしても、創造主がそうあれとしたのだから、それに異を唱えるものなどナザリックにはいない。

守護者統括という地位にふさわしい働きをしなくなつたアルベド。不敬である。だが、『モモンガを愛している。』と、アルベドにそうあれとお命じになつた。

それならば、アルベドが愛する存在の不在を嘆き、悲しむのも、ある意味、そうあれ、

と創造主がお命じになったことではないのか。

アルベドが絶望と悲しみで狂う。狂気に身を委ねる。それも、創造主が守護者にそうあれとお命じになったことではないか。

シャルティアも、アウラもマーレもデミウルゴスもコキユートスも、その他ナザリツクの者たちは、そう無理やり納得することにした。

いや、無理やりそう自分自身を納得させて、壊れてしまったアルベドから目を逸らした。

忠誠を捧げるべき相手を失ったのは同じである。他の守護者たちにも、アルベドに構うほどの、余裕がなかった。それに、アルベドが失った存在の代わりなどあろうはずがなかった。

守護者達は慰める言葉など持たない。アルベドを立ち直らせることができる。そう考える事もまた、不敬である。自分が至高の御方々の代わりになれると言っていることに等しい。

至高の御方々のためであれば、自らの命を惜しむことなどありえない。それほどに、至高の御方々は代えがたい存在であるのだ。アルベドを慰めること、立ち直らせることなどは、至高の御方々以外に出来ることではない。アルベドの愛する人を失ったという絶対的な空白。それはモモンガ本人でしか埋められない。

「大丈夫です。アルベドも、モモンガ様のご威光が届いたはずですよ」とデミウルゴスは自信に満ちた声で言う。

「そう？　じゃあ、私が呼んでくるのでありんす」とシャルティアが立ち上がったとき、「その必要は無いわ」と透き通る声が響く。

「あ、アルベド！」とアウラは驚く。そのアルベドの格好を見て。

艶やかで長い髪。輝く宝石のような瞳。淑女のような優しげな笑み。それは以前のアルベドの姿であった。

モモンガを失ったと知った時のアルベドの姿ではない。

自ら掻き筆り、引き抜いた髪も、以前の艶やかな髪へと戻っている。

せめてモモンガ様と同じ姿であろうと、自らで両目を抉りだし、眼窩をさらけ出したアルベドの姿ではない。生きているのが不思議であるほど、漆黒のバルディツシュで自らの肉という肉を削り取り、自らの腸をはらわた投げ捨て、骨という骨が露出するようになったアルベドではない。

創造主であるタブラ・スマラグデイナに創造された通りの美しい悪魔の姿であった。

「モモンガ様は？」と穏やかな口調でアルベドが尋ねる。その声には、守護者統括としての地位と威厳が満ちていた。

「再び、ナザリックの外へと旅立たれました」

「そうですか……。御姿を一目見たいと思いましたが、身だしなみを整えるのに時間をかけ過ぎてしまったようですね」とアルベドは言う。

無論、ドレスの着付けや化粧に時間がかかったからではない。モモンガの御前に出ても恥ずかしくないような格好。自ら欠損させた自身の体を、配下の者に回復させるのに多くの時間を要したからであつた。

「アルベド。待つていましたよ。立ち直つていただけで何よりです。それに、冷静さを失つてモモンガ様を追いかけるようなことをしないでかど内心不安でしたが、良くぞ耐えてくださいましたね」とデミウルゴスがアルベドに向かつて答える。

「ええ。本当は、私の愛するモモンガ様の胸に今すぐ飛び込みたいのだけれど、愛する男がこれから成そうとしていることを邪魔するのは無粋だわ」

「ええ。その通りです。これから、忙しくなりますよ?」

「ちよつとデミウルゴス。それにアルベド。モモンガ様はお隠れになりんしたわけでも、私たちをお見捨てになりんしたわけじゃありませんということはわかるのでありませんが、モモンガ様は何をお考えになられて、御一人で行動されているのでありませんか?」

「そうですね。今から今後私たちが何をすべきかを含めて、説明しましょう。今後、失敗は許されません。私たちはすでに、大きな失態を演じてしまったのですから……。慈愛に満ちたモモンガ様は、私たちに再度のチャンスを与えてくださっているのですから

……」とデミウルゴスはハンカチで自らの涙を拭き、残ったモモンガの寛大な心に身を震わしながら言った。

帝都は燃えているか 5

「まず、大きく分けて二つのことを説明しなければなりません」とデミウルゴスは、自らが掛けているメガネを拭きながら話し始めた。

「一つ目は、偉大なるモモンガ様が為そうとしてしていること。そう……世界征服です」

「世界征服？」とデミウルゴスとアルベド以外の守護者達から驚きの声が漏れる。

「ええ。その通りよ。かつて、至高の41人の御一人。『るし★ふあー』様は、『世界の一つくらい征服しようぜ』と公言されていましたわ」

「私を創造してくださった『ウルベルト・アレイン・オールド』様も、そうおっしゃっていました」とデミウルゴスもアルベドの言葉に付け加えた。

「あー！ 『ベルリバー』様も、ブループラネット様と大浴場を制作されるということで、地下六層のジャングルを散策されているときに、そう呟いていらつしやったよ。そうだよね！ マーレ」

「うん……。巨大樹を見上げられながら、そうおっしゃっていたかな……」とアウラの言葉にマーレも同意する。

「『ばりあぶる・たりすまん』様も、ペロロンチーノ様にそう言っただのを私も

記憶しているでありんす」

「我ヲ創造サレタ武人建御雷様モ、来ルベキ日ニ備エテ劍ヲ日々磨カレテイタ。世界ノ頂点ヲ目指スト言ワレテイタノハ、世界征服ノ事デアツタカ……」

守護者たちが口々にそう言っているのをデミウルゴスは満足そうに頷く。

「みなさん、思い当たることがあるようですね。そうです。世界征服です。モモンガ様は、その至高の御方々の宿願を果される為に、動かれているのです」

「おお」と守護者達から歓声が上がった。

「モモンガ様だけではありません。ヘロヘロ様も、世界征服のために秘密裏に動かれているようです」

「ヘロヘロ様も？ 中々『リアル』なる世界に行かれていて、ナザリツクに居られる時間が少なかったようにおもえんすが？」

「シャルティア。おそらくヘロヘロ様は、その『リアル』で世界征服の準備を着々と進められていたのです。そして、世界征服の悲願を成就する時がついに訪れたということなのです。モモンガ様は、ナザリツクからお出かけになられる前、ヘロヘロ様と円卓でお打ち合わせをされていたと、メイドの一人が言っていました。そうですね、セバス」とデミウルゴスは後ろに控えていたセバスに話を振る。

「はい。それに、ヘロヘロ様だけでなく、久しくナザリツクを訪れていなかった方々五名

とも、モモンガ様はお打ち合わせをされていたようです」

「そうでしたか！　へ口へ口様だけでなく……。至高の御方々が世界征服に向けて動き出されているということですね」

「それならさあ、デミウルゴス。至高の御方々が世界征服の為に活動されているというのに、私たちはナザリツクに居ていいのかなあ」

「で、でもお姉ちゃん……。ナザリツクを守護するよう守護者として僕たちは創造されたのだし……。それに、外は怖いかなあ……」

「我々が此ノ地を守ツテイルカラコソ、至高ノ御方々ハナザリツクヲ離レテ動クコトガ出来ルノデハナイカ？」

「確かにそう考えることができます。しかし、そうではありません。モモンガ様は私たちに酷く落胆されたご様子であられました。最後まで残ってくださいましたと私たちが思っていたモモンガ様が突然、ナザリツクから御姿が見えなくなる。私たち守護者が、いえ、ナザリツクの全存在が不安と絶望に打ちひしがれているであろうとモモンガ様は、わざわざ、このナザリツクに足をお運びくださったのです！　しかし、私たちの状態、そしてナザリツクの惨状を見て、落胆されたのです！　そして私たちを、『お前達は一休なんなんだよ！』と私たちを叱責されたのです……。セバス！」

「はい。なんでしよう」

「ナザリックの随所で、掃除が行き届いていない場所が散見されますが、それは一体どういうことでしょうか？」

「申し訳ありません。プレアデス、エクレア、一般メイドたち、ついに自分達が至高の御方々に見捨てられたのではと思いい、机を拭くにも、自らの瞳から落ちる涙を拭くような状態です……。掃除が行き届いていないことは承知してはいたのですが、あまりに気の毒で無理を強いるのができずにおりました」

「つまり、至高の御方々が滞在されるに相応しい準備が出来ていなかったと？」

「……その通りでございます」

「セバスが悪かったということでありんすか？」

「いえ。そうでははないわ。私も、守護者統括という地位に預かりながら、御身自ら冒険者に扮してナザリックに来られたのに拘らず、防衛体制が万全であることを示すことができなかつた……。セバスだけを責めることはできないわ」

「私も、恥ずかしながら現実逃避のように、グリフォンやワイバーンの骨で、玉座を作っております」

「私も、守護領域の巡回をしないで、ペットたちと遊んでいることが多かつたかなあ」と
「気まずそうにアウラが口を開く。」

「私も、ヴァンパイア・ブライド達とベッドに入りびたりでありんした」

「ぼ、僕も巨大樹の家の中で、本ばかり読んでいたかなあ……」

「我モ訓練ニ身ガ入ッテイナカタ。主君ニ捧ゲルベキ剣ヲ錆ビツカセテシマツテイ
タ」

「上に立つべき私たちが、このようになっていたらくであつた。それを知つたモモンガ様は、
落胆され、そして叱咤されたのです。そして、モモンガ様は、私たちに『お前達は一体
なんなんだよ!』と問いかけられたのです」

「私の愛するモモンガ様から、自分自身は何かと問われたら、答えは一つしかないわ」と
アルベドは遠隔視の鏡に映っているモモンガに向けて膝を折つた。

「守護者統括、アルベド。私は至高の御方々、特に愛するモモンガ様に絶対の忠誠を捧げ
る存在でございます」

「第七階層守護者、デミウルゴス。失態の汚名を灌ぐ機会をお与えになる慈悲深きモモ
ンガ様。私は至高の御方々に自らの忠義すべてを捧げる存在でございます」

「第一、第二、第三階層守護者シャルティア・ブラッドフォールン。私は、私の全てを至
高の御方々に捧げる存在」

「第五階層守護者、コキュートス。我ハ至高ノ御方々ノ剣」

「第六階層守護者、アウラ・ペラ・フィオーラ。私は、絶対の存在であられる至高の御方々
の手足となつて働く下僕です」

「お、同じく、第六層守護者、マール・ペロ・フィオーレ。お、お姉ちゃんと同じです」
 「ナザリック地下大墳墓の家令バトラ。セバス・チャン。至高の御方々に忠義を捧げる犬でございます」

守護者達、そしてセバスは遠隔視ミラー・オブ・リモート・ビューイングの鏡に映っているモモンガに対して、それぞれ自分自身が何者であるか、それを次々と表明をしようとした。

「皆がそれぞれ自分の存在意義raison d'êtreを確認できてうれしく思います。さて、それでは、もう一つの大事な事をお伝えします。モモンガ様は、私たちに、その汚名を雪ぐ機会をお与えになってくださっているのです。至高の御方々の宿願を、我々にも参画を許してください。これほどの喜びがありませんか！ 場所は、モモンガ様と一緒にいた小娘が言っていた国。バハルス帝国でしょう……」

「バハルス帝国……聞いたことのない国ね。どのあたりにあるのかしら？」とアルベドは少し思案した後、デミウルゴスに尋ねた。

「私にもバハルス帝国の詳細は分かりません。何処にあるかもです。至高の御方々がどのように世界を征服されるご計画なのか、それも私たちは理解する必要があります。ですが、モモンガ様が私たちを導こうとしてくださっているという事は間違いがありません！ 皆さん、可笑しいと思いませんか？ 遠隔視ミラー・オブ・リモート・ビューイングの鏡で簡単にモモンガ様の

御姿を見ることなどできるでしょうか？ モモンガ様なら、阻害魔法など容易のはずで

す。しかし、我々はモモンガ様の御姿を見ることができない。つまり、モモンガ様は、我々に後を追ってこいと命じているのです！」<input name="nid" value="91825" type="hidden"><input name="volume" value="40" type="hidden"><input name="mode" value="correct" type="hidden">

帝都は燃えているか 6

バツカスの酒蔵。アルシエが出て行ってしまった後も、モモンガは思索に耽っていた。いや、悩んでいた。思考が迷路の中を彷徨っていた。

悩んでいたのは、アインズ・ウール・ゴウンの仲間の事。そして、ナザリック地下大墳墓のことだった。

そして、その答えは出ない。

モモンガは杯のぶつかる音と笑い声が響くバツカスの酒蔵で、テーブルを見つめ続いていた。

「モモン殿！ やはりこちらでしたか」と、バツカスの酒蔵の入口から声が響いた。ニグンの声であった。そして、隣にはレイナースが右手で小さくモモンに向けて手を振っていた。

「急いで帝都に帰ってきてみたら、既にモモン殿とアルシエさんが今日帝都に戻ってきていると聞きました。宿にも居られないようだったので」と、ニグンはモモンの座っているテーブルに座る。

「ニグン殿。それに、レイナースさん。カルサナス都市国家連合に行っただけでは？」と

モモンは隣に座ったニグン、そして正面に座ったレイナースを交互に見つめながら言った。

「種明かしをすると、レイナース女史のご提案です。レイナースさんが、帝国の八足馬スレイブニールを二頭用意してくださったのです。移動時間を出来るだけ短くし、帝都に戻ってくるのを早めたのです。馬車で移動する時間の半分でした」

「新発見の遺跡。二人だけのパーティーでは心許ないと思い、後からでも追いかけてよと思っていたのですが、私達が帝都に戻る前にすでに遺跡調査を終わらせていたというのは流石ですね」とレイナースが、店員からエールを二杯受け取りながら言った。

「ありがとうございます。お気遣いいただいて……」

「モモン殿？ 何かあったのですか？ 新発見の遺跡調査を成功させたという割に、お元気がないご様子ですね。二人とも無事に帰ってきたと聞いていたのですが……」とレイナースの顔が曇るが、それをモモンは「アルシエは先に家に帰りましたよ」と打ち消す。

モモンは飲食をしないが、ニグンとレイナースは夕食がまだであったようで、二人は食べ、そして飲む。

食卓の席は、都市国家連合へと向かう道中に遭遇した魔物や都市国家連合の盟主たる都市の賑わいであった。

「魔物に囲まれたという危ない事もありませんでしたが、ニグン殿が召喚された
プリンシパリティ・オブザベインシオン
 監視の権天使に救われました。私、天使の手の平に乗ったのは初めてでしたのよ」
 「いやいや。レイナース女史が、スレイブニール八足馬で駆けながら魔物を突き殺していく。かの伝説
 の戦乙女を連想するような雄姿でした」

「そうそう。都市国家連合での出来事と言えば、オクトパス蛸という食べ物でしょうか。海産物
 ではあるのですが、その姿が何とも言えない奇怪な姿でした。頭部の大きな軟体生物
 で、八本の足には吸盤がある奇妙な生物です」

「恥ずかしながら私もニグン殿も、調理された蛸を食べたときには、歯ごたえのある美味
 しい食材としか思っていなかったのですが、調理前のあの姿を見て、恥ずかしながらい
 ささか驚いてしまいました」

『いささか』では無かったですでしょう。お盆の上に載せられた蛸を見て、魔物が忍び込ん
 だのだと、レイナース女史は槍を構えて……」

「私の早とちりでございました。時折、口よりも先に槍が出てしまうことがございます
 ので……」

モモンとアルシエが無事であり、また自分たちも無事であり、再会できた喜び。カル
 サナス都市国家連合の往路での魔物での戦い。海が近いという風土から来る食文化の

違い。

モモンは、相づちをうちながら終始、聴く側に徹していた。

二人の食事も終わり、塩で炒めた銀杏の実を酒の肴として談話が續いていた時、「モモンさん、何か悩み事や心配事があるのですか？」とレイナースが口を開いた。

その言葉に呼応するように、ニグンも頷いた。

食卓の席に流れる一瞬の沈黙……。モモンは口を開いた。

「私にはかつて、多くの仲間がいました。大切な仲間でした。ですが、その仲間はもういない。彼等と冒険をしている時、それは私の人生でもっとも輝いていた時だと思いません。ですが、彼等は私を見捨てて、遠い所へ行ってしまった。いつかきつと、また仲間は戻ってきてくれる。そう信じていました。しかし、仲間が戻ってきてくれることはないでしょう。」

私を見捨てたことに関して、私は仲間を恨むつもりはありません。いえ……。正直恨んだときもありましたが……。仲間達は次々と私を見捨て、そして残されたのは私一人でした。

そのことはもう良いのです。それぞれ自分の人生があるのですから……。

ですが、問題は、その仲間達が残していたモノです。仲間達との思い出と言ったような抽象的で曖昧なものではなく、もつと具体的なモノです。そして不思議でした。その

残されたモノは、以前よりも輝きを放っているように思えました。

私はそれをどうすべきか、その答えが出ないのです。かつての仲間達が残っていたモノ。それは仲間達が私に押し付けていったものともいえるし、託していったものともいえるかも知れない。

私は一度、それを捨てて、新しい人生を生きようと決心しました。ですが、また迷っています。かつての仲間が残っていたモノ、それを守るのもまた、意味があるのではないかと……」とモモンはゆっくりと語った。

「私の勝手な意見を言わせてもらおうと、新しい人生を生きるべきだと思います」と、レイナスが口を開いた。

「少し……私の身の上の話をさせていただきますね。

私は、貴族の娘でした。私には領地があり、守るべき領民がいました。そして、その領民を守る事が、私の誇りでした。私の矜持でした。

しかしある時の魔物との戦いで、私は顔に呪いを負いました。今考えても、震えてしまふほどの呪いです。その呪いのことを考えるだけで、頭が真っ白になってしまふほどです。

そうです。モモン殿から戴いた治療薬で癒していただいたあの呪いです。ご覧になったでしょう。あの醜悪な呪いを……。

呪いを負った私を、実家は捨てました。今まで、私を慕ってくれていた領民も、私に近寄らなくなりました。そして、ついには互いに愛を誓い合った婚約者まで、私を捨てました。私は、領地を追い出され、そして、今の皇帝に拾われて四騎士となったのです……。

私は、四騎士になるとき、自らに誓いを立てました。三つの誓いです。

一つ、自らの呪いを解く

一つ、自分を追放した実家に復讐する

一つ、自分を棄てた婚約者に復讐をする

最初の一つは、モモン殿のおかげで果たすことができました。あと、残り二つです。

実家と婚約者に復讐をする。

私を見捨てた実家と婚約者に復讐をします。

恨みがあるから復讐をする。そう思われるかもしれませんが、それだけではありません。私は、それによって、自分の過去を断ち切ります。

呪いを受け、私の人生はめちゃくちゃになった。悲しい思い出ばかりが残っています。私は、その過去と思い出を断ち切ると自らに誓いました。

そして、私は新しい人生を始めたいのです。

それは、占い師という人生でも、看板娘という人生でも、歌姫という人生でも、良い。

過去のことは過去の事です。私は過去を清算し、新しい人生を生きたい。そのために私は生きています。

モモン殿。自分の生きていた過去を捨てるというのはとてもキツイことです。私がいまだに実家と、そして婚約者に復讐をしていないのは、過去を断ち切る躊躇いがあるからでしょう。

ですが、モモン殿に呪いを解除していただき、これからの人生にもたくさん良いことがあると強く実感できました。

ですから、私は、モモン殿も過去に縛られるよりも、新しい人生を生きたほうが良いと思います。きつとモモン殿にも、新しい仲間、楽しい思い出ができると思います。

モモン殿は、新しい人生を切り開いていく力と、そして「強さ」を持つていると私は思います。ですから、私は、モモン殿も新しい人生を生きるべきだと思います。もちろん、これは勝手な私の意見ですが……」

レイナースは、そう言い終わると、杯をぐつと傾ける。

「レイナース女史の意見と私は違います。私もモモン殿やレイナース女史の話を聞かせていただいたので、私も自分のことを話させていただきます。」

今から六百年前に、この帝都の神殿にも祭られている六大神様が、『人類よ、繁栄せよ』と言われ、そして法国の建国を宣言したのは人類史であまりにも有名な話でしょう。こ

れは、神話ではなく、まぎれもない事実なのです。

この六大神様のこの宣言は、燃えさかる不正義の炎に焼かれていた何千万人も人類に希望を示す、偉大な光でした。

それは、人類に長い夜の終わりを告げる喜びの夜明けでした。

しかし、あれから六百年たった今、人類は未だ安全はないのです。

六百年経った今でも、人類の生活は、閻妖精の手かせと獸人の足かせに縛られています。

六百年経った今でも、人類は、他種族の繁栄の広大な海に浮かぶ貧困という孤島に暮らしているのです。

六百年たった今でも、人類はいまだにこの世界の片隅で苦しんでいて、この世界の中で漂流しているのです。

私が神官となったのは、この人類の悲惨な状況を改善するためでした。

ある意味で、私は金板を金貨に替えるために、私はこの身を捧げてきたのです。六大神様が、『人類よ、繁栄せよ』という崇高なる言葉を人類におっしゃられたとき、六大神様は、人類が継承すべき金板に署名してくださいましたのです。

この金板には、『生命、安全および幸福の追求』は、決して侵されることのない、すべての人類に保証されると記されているのです。

しかし、人類はまだこの金板を、金貨に替えることが出来ていません。この六大神様の宣言はまだ実現していません。この金板を金貨に替える銀行が存在していません。

ですが、私は、この六大神の宣言が、実現することはないと諦めたことはありません。

私は、この世界に今、緊急性を思い出させるために神官として働いてきました。今は、人類同士が争ったり、麻薬によって現実を忘れるような悠長な時ではないのです。

今こそ、六大神の宣言を成就させる時です。

今こそ、隔離され暗く荒涼とした谷から人類の陽の当たる道に登っていく時代です。

今こそ、スレイン法国は、人類を泥沼から揺るぎない岩へと引き上げる時なのです。

今こそ、六大神の『人類よ、繁栄せよ』という宣言が実現される時なのです。

この思いは、スレイン法国に伝えてきた六百年に及ぶ神官達が受け継いできた思いです。建国当時の神官達も、百年前の神官達も、三百年前の神官達も、五百年前の神官達も……そして、カツツエ平野で帰らぬ人となった神官達……一緒に釣りをするのが何よりの私の楽しみであった大切な仲間達……。

彼らが実現することはできなかつた。けれど、いつか実現できると信じ、信じ抜いて死んでいった……。

神官として辛いことは多々あります。亜人は強く、人類は弱い。そして協力すべき人

類同士が争いを止めない。獣人に食い殺されて無人となった村々。

正直不安です。こんなことを言つては神官失格ですが、六大神様の宣言が実現する日は来ないのではないかと思つてしまう時があります。神官という職を投げ出したくなるときだつてあります。辛いことばかりかもしれませんが。

ですが、私はそのスレイン法国の六百年の間に及ぶ歴史と、そして散つていった神官達の思い。それを投げ出すことは許されないと思つています。そして、それを投げ出したら私はいつかきつと後悔するという確信があります。

モモン殿。あなたのかつての仲間達が残っていたモノ。それがどんなものであるかは分かりません。ですが、あなたが辛いのは、それを大切に思っているからに他ならないでしょう。

かつての仲間達が残っていたモノ。モモン殿が仲間から、託された、とそう少しでも感じているのであれば……その託されたモノをモモン殿は大切に守るべきだ。

そして、モモン殿は、その託されたモノを守りぬく力とそして“強さ”を持っていると私は確信しています。

私は、モモン殿とレイナーズ女史の話を聞いていてそう思いました」と、ニグンは口を閉じた。

「ありがとうございます。お二人とも……」

「いえ。正反対の意見で混乱させてしまったかも知れませぬね」とレイナースは笑う。

「そうですね。ですが、正解などありませんからね。強いて言えば、モモン殿がご自分でお決めになったこと。それが、正解なのでしょう」

「そうですね。ニグン殿、まだ飲まれますか？」とモモンは空になったニグンの杯を見て、そう尋ねた。

「いいですね。今夜はとことん飲みましょう。再会と、それぞれの人生を祝して」

「ありがとうございます。うわあ。俺も酒、一緒に飲めたらいいのになあ……」とモモンが残念そうに呟くと、「それは仕方がないですよ。ですが、飲めなくとも、今晚はとことん付き合ってもらいますよ？」とニグンが杯を高く掲げた。

「私も、ご要望があれば、酔いますよ」とレイナースも言う。

バツカスの酒蔵での祝宴は、深夜を過ぎても続いたのであった。

帝都は燃えているか 7

「こんな屈辱を受けたのは初めてだ！」とイビルアイは、カツツエ平野で曇り空に向かって叫び、そして地団駄を踏んでいた。イビルアイの右足で何度も踏みつけられているのは、怒りの形相をした仮面である。

連日に及ぶティアの必死の看病の末、バッド・ステータスから解放され、正気を取り戻して気が付いたことは、長年自分が愛用していた仮面がなくなっていること。そして替わりにあつたのは怪しげな仮面。カツツエ平野で遭遇をした、〃モモンと愉快な仲間たち〃の誰かが自分の仮面を持ち去り、そしてこの怪しげな仮面を置いていったことは明白であった。

当然、冒険者として警戒すべきことは、その仮面が何かの罫である可能性である。装備をすれば弱体化する効果のある可能性。追跡の魔法が付与されていて、それを持ち運ぶだけで〃蒼の薔薇〃の居場所を知られてしまう可能性。魔物を呼び寄せるマジック・アイテムである可能性。

それらの可能性を警戒しながらも、この仮面が優れたアイテムであれば、有効に活用したい。

結果として、アブレザー・マジックアイテム道 具 鑑 定で判明したのは、仮面の名前とその説明。

『嫉妬する者たちのマスク』

寂しい独り者に贈られる仮面

「誰が独り者だ。馬鹿にしているのか！」とイビルアイは鑑定の結果を見て激しく憤っていた。

「でも事実。二百五十年恋人無し。年季が入り過ぎ……」とティナがぼそりと呟き、「大丈夫。私がまた看病してあげる」とティアが熱の籠もった声で、イビルアイの耳元でささやいた。

「違うのだ！ リグリットと出会う前は、私はアンデッドしかいない死都に長く滞在していたのだ。スケルトンとかしかいなかったのだぞ！ その期間は、ノーカウントにすべきだ！」

「吸血鬼なんだから、別にアンデッドを恋人にしてもよかったじゃねえかよ」とガガーラ
ンが笑いながら言った。

「会話もできない……いや、そもそも理性の無い奴とどうやって恋仲になれというのだ
！」

「まあそれはそうだな……。よし、じゃあ、カツツエ平野でリッチでも探すか？ リッチ
なら理性があるだろう……。カツツエ平野でイビルアイの恋人探しだ」

「ちよつと待てガガーラン！ どうしてアンデッドに限定しているのだ？」

「リグリットの婆さんが、昔言つてたぞ。自分が操っている死者の一人とインベルンの嬢ちゃんは、親しげだったって」

「違うわ！ あの壁役は、自分を守ってくれていたから、死者と言えどそれなりに礼と敬意を尽くしていただけだ！」

「そつかあ。その死者が滅んだ時は、イビルアイは泣きじやくつたつて聞いたけどなあ……」

「リグリットはそんなことまで話したのか！ 今度会つたらとつちめてやる！ いや、その前に、こんな舐めた仮面を寄越した奴等から私の仮面を取り返すぞ。こんな恥ずかしい仮面を付けてられるか!! 帝都はあつちの方角だな」とイビルアイは、怒りながら帝都の方角へと歩いていく。

「まあ、アダマンタイトが銅カッパーに負けつばなしというのは不味いよなあ。リベンジ・マツチは必要だ。それに……あのモモンつてやつ、童貞だぜ。間違いなくな！ 俺も追いかけるのに賛成だぜ？」

「はい。ストップ。チームの方針を勝手に決めない。元はと言えば、ガガーランが無用な戦闘を招いた。あの場では話し合いが最善だった」とティアがイビルアイの後に続くうとしたガガーランの前に立ちはだかった。

「それは反省しているよ！ 濟まなかつたよ。巫人と法国絡みになるとついな……」とガガーランはきほど反省している様子もない。

「リーダー。イビルアイとガガーランは追いかけてみたいだけだ。どうする？」

「そうねえ……。私も、少し『モモンと愉快な仲間たち』で気になることがあつたの……」と、ラキュースは魔剣キリネイラムを両手で持ち、真剣な顔つきで言つた。

「気になること？」

「気になるのは、あの槍使いよ。武技とか使う前に、『槍よ。我が体の一部となりて、敵を貫き砕け』とか、『豊穰の大地よ。堅き岩となりて我を守れ』とか、前口上を言つていたけれど、すつごく効果がありそうじゃなかつた？ 威力が倍増してそんな感じ」

「いや、そんなことはないと思う。鬼リーダーの勘違い」

「そうかなあ。私も、魔剣を使う時に何か言つた方がよいのかなあつて……。あの人、」
パス・オブ・アイスランス・ブレイクシス

氷 槍 殲 破 突 〃 とか言つていたから、私は魔剣を使う時…… 秘剣 ダーク・スラッシュ 暗黒斬

〃 とかかなあ。いや、でも何かこう……しつくりこないのよねえ。今度はできれば友好的に接して、技を出す時のネーミングについて意見を聞いてみたいかなあ。その前に、いろいろと自分でも技の候補を考えておかなければならないわね。それならこの日記に……いえ、アインドラ家に伝わる、森羅万象の全てが記されている、この『禁断の書』にね……」

「リーダー？ もしかして、戦いで頭とか打った？」とティアはラクユースの顔と緑色の瞳を心配そうに覗き込む。

「え？ 大丈夫よ。ん？ でも……頭を打ったとかじゃなくて……もしかしたら……このカツツエ平野の呪いの霧が、もしくは、魔剣キリネイラムの中に封じ込められている邪悪な怨念が、囁いているのよ……私の魂ゴーストにね……。この邪悪な怨念に対抗するには、新月の光によって清浄化された魔封じのアイテムが必要になる、ということね。そう……それはきつと指輪やネックレスでなければならぬはずだわ。それが無ければ、私の中に眠る暗黒面ダークサイドラクユースが深淵の闇より覚醒してしまうかも知れない……。ただ私はその戦いから逃げることはしない。だって、それは私の宿命なのだから……」

「リーダー！」と、訳の分からないことをニヤケ顔で呟いているラクユースに、ティアが大声で呼びかけた。

「え？ ええ。大丈夫よ。少し考え事をしていただけ。そ、そうね……。王都に急いで帰らないというわけではないし、彼らを追いかけましょう。いろいろ聞きたいことがあるしね。そうと決まれば、急ぎましょう。イビルアイのバッドステータスの解除で、かなり距離を離されてしまっているわ」とラクユースは、ガガーランとイビルアイの考えに賛成の意を示した。

アダマンタイト級冒険者『蒼の薔薇』。それぞれの思いを胸に、カツツエ平野から帝

都の方角へと出発したのであった……。

帝都は燃えているか 8

帝都アールウィンタールの貴族が住む一角。真つ暗な屋敷の門の中へ、貴族風の令嬢と年老いた執事が入っていく。

鮮血帝により粛清された貴族が住んでいた館。その主だった貴族や一家は既にこの世にはおらず、廃墟であるはずの屋敷。

綺麗に植樹されていたであろう木々は掘り返されている。庭園に置いてあつたはずの彫像なども、転売が可能な品は既に夜盗の類に持ち去られている。

そんな閑散として庭を抜けて、斧か何かで破壊された屋敷の扉を老執事が開けた。

真つ暗なエントランスホール。貴族が自らの財力を示すために飾り付けた場所。かつては輝いていたであろうシャンデリアも、埋め込まれた宝石等はすでに取り外されている。

「ただ今戻りました」とセバスは口を開いた。

そう口を開いた瞬間、深淵を思わせるエントランスホールに、赤や緑などに輝く宝石が浮かび上がる。だが、それは宝石では無く、それは魔物たちの妖しく光る瞳である。「貴方たち以外は全員戻っているわ。さあセバス、集めてきた情報の共有を始めましよ

う」という声がエントランスホール正面にある階段の高い所から響く。山羊のような角。大きく広げられた漆黒の翼。守護者統括、アルベドの声であった。

「まず、モモンガ様に私達が帝都に來ているということ伝える任務は成功したと愚考します。そして次に、モモンガ様と行動を共にしていた人間と接触をいたしました。結論から申し上げると——」

「第三位階魔法しか使えない屑でした」とセバスの後ろから声が響く。

ソリュシヤンのその声に反応してか、エントランス中に存在していた魔物たちから隠しきれない殺気と嫉妬が漏れる。

御方が一人で出歩くのに警護が一人もいない状況。その人間が、万が一の敵の強襲に備えて盾になるには物足りない。モモンガ様が退避する時間すら稼げないような自分より遙かに弱い存在がなぜ、至高の御方の傍に控えているのか。

「ソリュシヤン。少し落ち着きなさい」

「申し訳ありません……」と洗練された所作で頭を下げる。

「能力的には、先ほどのソリュシヤンが言った通りです。また、潜在的な能力を秘めてもいないようです。訓練と偽り、何度も死の寸前まで追いつめてみましたが、特筆すべきような力を発揮することはありませんでした。モモンガ様のために、仮にあの少女が力の限りを尽くしても、高が知れています。私たちが持たない力を持つているとは考えに

くいでしょう」

「そう。ありがとう。情報収集、もしくは、冒険者モモンという存在を周囲に溶け込ませるために、モモンガ様はあの人間を利用してという線かしら？ あなたはどう思う？ デミウルゴス」

「モモンガ様は、至高の御方々のまとめ役であられる方。私達にその英知は計り知れるところではありません。きつと私達では思い付きもできないような深きお考えがあつてのこと……。あの人間ではなく、それと繋がりのある人間をモモンガ様は有効利用しようとしてきている可能性もあります。結論を出すには早計。引き続き調査をすべきです」

「では、引き続きセバスとソリュシヤンはその人間の調査を継続してちょうだい。それに、彼女の関係者にも調査を広げなさい」というと、セバスとソリュシヤンは畏まりましたと答えた。

そして、アルベドの次の報告を、という声。その声に答えたのは、マーレであった。「えつと、じゃあ僕が報告しようかな。えつと、お姉ちゃんからの情報だと、モモンガ様は今、ご飯を食べる場所で、人間二人と接触しているみたい。男と女。何やら楽しげな感じ……。ださそうです」と、銀色のどんぐりの形をしたネットクレスを触りながらマーレが報告する。

「流石ハ至高ノ御方々ノ纏メ役テアルモモンガ様ダ。潜入調査ハ、式式炎雷様ガ得意トサレテイタコト。人間ニ友好的ニ接シテ、有用ナ情報ヲ引キ出シテオラレルトハ」

「潜入任務まで完璧。流石はモモンガ様でありんす。すべてが完璧。しかし……それだと、私達守護者は何でお役に立てばよいのか……」

「それを私達は必死に考えなければなりません。これ以上失態を私達は演じるわけにはいかないのです」と気落ちした様子の子のシャルティアをデミウルゴスが叱咤激励をする。

「マール。アウラに引き続きモモンガ様の傍にるように伝えなさい。ニグレドとの連携も怠らないように。また、その二人の人間も監視する必要があるわね。必要な人選を考えておくわ」

「つ、次は私が報告するでありんす。人間を何人か眷属にして情報を聞き出した結果、このバハルス帝国では、“皇帝”というのが一番偉いらしいでありんす。その“皇帝”がバハルス帝国を支配しているということでありんした」

「一番偉く尊いのは至高の御方々でしょ？ それに世界を遍く支配するのものとアルベドの冷たい声がエントランスホールに響く。

「あくまで、人間の中で、でありんす。それに……」

「それに？ どうしたの？」

「その皇帝は『鮮血帝』と呼ばれているとのことでした。下等な人間風情が名乗るには分不相応の名前。『鮮血帝』の称号は、至高の御方々にこそ相応しいと思います。その称号は、死の支配者たるモモンガ様にこそ相応しい称号。人間が名乗つてよい称号ではない」とシャルティアは廓詞くわくわしごではなく、普通に話した。

「まったくその通りね。それに、世界征服を成し遂げるには、人間の取るに足りない王などは不要。人間は等しく至高の御方々の下僕であるべき。人間の社会構成がどうあれ、その頂点は至高の御方々でなくてはならないわ」

「私からも報告をしてよろしいでしょうか」とナーベラルが口を開いた。彼女は、セバスやソリユシヤン同様、外見上は人間に近いため、直接人間と接触して調査をするという任務が与えられていた。そして彼女に与えられている任務は、主たるモモンガが現在、その身分を偽って活動している『冒険者』というものであった。

「冒険者組合に所属して、冒険者となり、冒険者の概要などの聞き込みを開始しました」ナーベラル・ガンマの報告は多岐にわたる。よくこれだけ短時間で調べ上げたものであると、守護者達も感心するほどである。ナーベラルの至高の御方々への忠誠心が如何に高いかを示すには十分なほどだ。だが、実は、ナーベラルの調査が容易だったのは、人は、美人に弱いという事実であった。

整った顔立ち。そして、珍しい黒髪。ナーベラルが傲慢な態度で質問をしようとも、

ナーベラルに話しかけられた冒険者の男達の口は、驚くべきほど軽かったのだ。

「最近、この都市で起こった事件に、死の騎士^{デス・ナイト}が発生したという事件があります。人間たちでは死の騎士^{デス・ナイト}に歯が立たず、討伐したのは、冒険者モモン、他ならぬモモンガ様であるということでした。そして、モモンガ様が一挙に冒険者として頭角をあらわされたそうです」

「流石はモモンガ様です！」とデミウルゴスの声がエントランス・ホールに響いた。

「デミウルゴス。死の騎士^{デス・ナイト}程度であれば、モモンガ様は余裕でありんす」

「違いますよ、シャルティア。私が称賛しているのは、そのモモンガ様の智謀にです。少なくとも、モモンガ様は三つ以上の狙いがあるでしょう。一つ目が、敵の実力を測るためでしょう。その死の騎士^{デス・ナイト}はモモンガ様が生み出されたもの。敵の力量を調べるのは当然です」

「ソウナノカ。流石ハモモンガ様ダ。今後、モモンガ様ヨリ指令ヲ与エラレタラソノヨウニシヨウ」

「二つ目が、冒険者モモンという、世界征服の足掛かりとなるアンダーカバーの存在を作り出すこと。そして最後の三つ目です。ここまでの流れが全て、モモンガ様のご計画の内であるということですよ」

「まったくその通りだわ」とアルベドがデミウルゴスの言葉に同意をする。

「ど、どういうことかな？　ぼ、僕にはちよつと言っている意味が分からないかな。モモンガ様が凄いつてことは分かったけど……」

「私が、ナザリックに来た人間に渡したのは、ウルベルト・アレイン・オードル様がお造りになられた魔像。即座に無数の悪魔を出現させると言うマジック・アイテムです」

「ウルベルト様がお造りになられたものを人間風情に渡したのでありませんかー」

シャルティアが驚いたのは、尤もである。デミウルゴスを創造したのは、ウルベルト・アレイン・オードルその人である。自分の創造主が下賜してくれた物であるならば、後生大事に持っていたいと思うのが守護者の心境と言うものである。

シャルティアは、自分であれば、ペロロンチーノ様が自分に下賜してくださった数々の衣装。たとえば、スクール水着（旧旧型）の一着であろうと、手放したくない。

創造主が下賜した物を渡す。それだけで、デミウルゴスが今回の作戦にかける意気込みが分かるというものだ。

「私が、あの魔像を渡すことすらモモンガ様の手の内。なんと慈悲深き方。私達守護者の失態を拭い去るためにここまでお考えであったとは……」とデミウルゴスはポケットからハンカチを取り出し、あふれ出る涙を拭き始める。

「詳しく説明シテクレ。デミウルゴス」

「私が説明をしましょう。この都市に、悪魔が突然出現する。その際に、人間がどのよう

な対応をするのか、モモンガ様は事前にそれをお調べになられたのよ。今回、悪魔がこの都市の中に出現する。似ていると思わない？ 突然、死の騎士^{デス・ナイト}が現れるのと、悪魔が突然、天国の蓋が開いたかのように都市に溢れだすという状況と」

「つ、つまり、私達がこの都市に来ていて、今からやろうとしていることも、モモンガ様のご計画の一部ということでありんすか？」

「そうとしか考えられません。モモンガ様が私達のために、すべてのレールを敷いてくださっているのです。後顧の憂い無し。私達に残されているのは、モモンガ様のお役に立つために各々、力を尽くすことです！」

蒼の薔薇の一行は、帝都から燃え上がる炎を見つめていた。

「おいおい、ありやあ一体何なんだ？ 帝都が燃えているようだぞ？」

「私にも分からん。あんなのは初めてだ」とイビル・アイがガガーランの問いを切り捨てるように答えた。

「帝都で何か異変が起こっているのは間違いない。何者かが帝都を襲撃しているという線が濃厚ね。帝都アーウィンタールには、多くの市民が住んでいる。救援に向かいましょう」とラキュースが「蒼の薔薇」のチーム方針を素早く決定する。

「急がないと」

蒼の薔薇が帝都アーウィンタールの南門の近くまで来た時、その異様さに気づく。帝都が異常事態、大火災が起こっている。しかし、それにも拘らず、帝都から逃げ出して来ている人がいない。一人もいない。城門は開いているのに拘らず、誰も帝都から離れ、その炎から逃げようとしている人がいないのは、異様だ。逃げる際には、炎から遠ざかるうとするのが人間の本能である。

「様子がおかしすぎる。むやみに帝都の中に入らない方が良いわ。これは、エ・ランテルに戻って報告すべき事態かも知れない！」とラキュースは、帝都へと急ぎ、城門を通ろうとする仲間達を呼び止める。

「貴方たち、逃がしませんよ」と帝都アーウィンタールを囲む城壁の上から声が響き、次の瞬間、落下音と大きな土埃が舞い上がる。

そして、土埃の中から声が響く。

「この南門を任せられた、ナザリック地下大墳墓戦闘メイド、プレアデスが一人、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ。帝都から一人も逃がさないよねえ」

帝都は燃えているか 9 【閲覧注意：鬱展開】

全身の疲労。強烈な眠気。お腹が空っぽになったかのように胃が痛い。それに、心臓の鼓動は収まらず、鳥肌が立っているというのに、汗も止まらない。

アルシエは、自分の屋敷へと、何とか帰ることができた。

「アルシエお嬢様、お帰りなさいませ」と執事のジャイムスがアルシエを出迎える。

「ただいま。妹達は？」

「既にお休みになられています。お疲れのご様子で大変恐縮ですが、旦那様がお待ちです」と、ジャイムスは気の毒そうな目でアルシエを見つめている。

「遺跡調査の件ね……。分かった。ありがとう」

玄関ホール階段を登り、父の部屋をノックする。部屋の中から父から入室許可の声が届いてきた。声の調子からすると、あまり機嫌が良くないようであった。

「お父様、ただ今帰り——」

「——遺跡から持ち帰ったのは、この像だけか？」

「はい……」

「この禍々しい像一つ持ち帰って、遺跡の調査が成功したと言えるとお前は思っている

のか？」とアルシエの父は、像を執務机に置き、その像をステツキでコツン、コツンと叩きながら言った。そして、その父の口調には、「愚か者」という言葉が含まれているようにアルシエは感じた。

「申し訳ありません。ただ、あの遺跡の中には、恐ろしい力を持った魔物たちが住みついています。これ以上あの遺跡を刺激するのは、ドラゴン竜の巢に入つて、わざわざ尻尾を踏みに行くようなものです」

「帝国貴族の娘が臆したか！」と父親は一喝した。「容易なことを成し遂げても意味は無い。困難なことを成し遂げてこそ、フルト家、帝国貴族ではないか！ 困難であれば困難であるほど、それを成し遂げた時、榮譽、尊敬、力、それらを一身にフルト家が受ける。そんな簡単な道理も分からんか！」

父親の怒声が執務室の中に響く。

「しかし……」

「まあ良い。この像も美術品として価値があるであろう。それに、多少苦勞をしているところを見せた方が、皇帝に恩を大きく売れるというものだ。アルシエよ。小さなものを大きく見せて利を得る。大きなものを小さく見せて、実を取る。貴族として出来て当然の腹芸よ。娘の失態など、フルト家当主の儂の力量でどうとでもできるわ。話は以上だ。話がまとまり次第、また遺跡に行つてもらおうぞ。しっかりと準備をしておきなさい

「い」

「お父様！」

「聞こえなかったのか？ 話は以上だ。それになんだ、こんな夜分に帰ってきて。貴族としての自覚はあるのか？」

「私は冒険者です！」とアルシエは声を張り上げて反論をした。

父親は、そのアルシエの言葉を聞き、大きくため息を吐く。

「それならば、冒険者らしく、遺跡の調査一つ、依頼主の満足のいくような結果を持ち帰ることだな。そう、冒険者といえば、貴族の娘が冒険者の真似事をしているということ、何人かの貴族が興味を持ったようだ。ぜひ、縁談をしたいという申し出があったぞ。遺跡の調査に行く前に、見繕っておくから、体に傷など負わないように気を付けておきなさい」

「縁談……。縁談はもう嫌です！ それだけはもう嫌です！」

「我儘ばかり人一倍言うようになりおつて……。だが、アルシエ。妹達に先を越され、売れ残った姉というのは、貴族の世界では良い笑いものだぞ？」

「それはどういう……。まさか、クーデリカとウレイリカにも!? そんなことは絶対に許しません！」とアルシエは思わず、杖先を父親に向ける。

妹達。アルシエは、たとえ父親であろうとそれだけは譲れない。

「家長の決定に異を唱えるな！ それに、杖を向けるとは何事だ！」と、父親も椅子から乱暴に立ち上がり、アルシエの下へと歩く。

「クーデリカとウレイリカは私が守る！ ファイヤー・ボール……まっ、魔力が……」

老執事との訓練。アルシエの体には火ファイヤー・ボール球を放つ魔力が残っていないかった。アルシエの膝が崩れ、地面へ座り込む。

「この痴れ者があ！」

父親の振り上げたステツキの音が、大きく執務室に響いた。

帝都は燃えているか 10

モモンとの待ち合わせの場所。冒険者組合。その場所にアルシエは向かっていた。昨日はよく眠れなかった。老執事との訓練によつて、身体は疲れているはずなのに、眠ることが出来なかった。額にできた一筋の傷。

アルシエは、いつもしているヘアバンドをせず、前髪を下ろしていた。

「どうしたら良いのだろう……」

自分の家から冒険者組合までの道のり。ずっとアルシエは、何度もそう呟いていた。

「おはよう。モモン」とアルシエは先に冒険者組合のテーブルに座っていたモモンの背中に声をかけた。モモンはいつも通りなようだ。約束の時間の前に待ち合わせの場所にいる。アルシエも時間に余裕をもって出てきたつもりであったが、いつもより時間がかかってしまったようだ。

「おはよう。アルシエ。今日の依頼は……。どうした？ 疲れているのか？ ポーシヨン飲むか？」

金色の前髪は、アルシエの両目を覆い隠すほどの長さであるが、どうやら真つ赤に充

血した瞳を隠し切れていなかった。そして、両目の下には、隈が出来ていた。

「ううん、大丈夫だよ。問題ないよ。それより、依頼を選ばなきゃね」とアルシエは足早に組合の奥の揭示版へと向かう。ミスリル級冒険者。魔物の討伐、採取、護衛。ミスリル冒険者が受注できる依頼は多岐にわたる。

『エ・ランテルまでの護衛。食住及び移動の実費、依頼主負担。金貨五枚』

アルシエは、この依頼に惹かれた。帝国兵が警備し、整備されている街道。帝国と王国の貿易の大動脈であるエ・ランテルと帝都間の護衛の任務というのは珍しい。それに、条件も良い。きつと、依頼主は高級品を輸送する算段なのだろう。護衛を付け、万が一でも運びたい品があるのだろう。

『復路も、上手くエ・ランテルで帝都までの護衛の任務を受注できたら、二度美味しいよね……それに』とアルシエは揭示版を眺めながら思う。

それに……帝都に居たくなかった。家に帰りたくなかった。エ・ランテルと帝都の往復。最短でも、十日は家を離れることができる。だけれど……。朝、アルシエがベッドでまだ眠っていた時、自分の部屋に飛び込んできた妹達。自分が家に帰ってきたと知って、嬉しそうに自分の寝ているベッドに飛び込んできたクーデリカとウレイリカ。

遺跡調査に行っている期間、妹達に寂しい思いをさせていた。嬉しそうに自分の胸に飛び込んできてくれた二人。妹達は間違い無く自分の宝物だ。

妹達も一緒にエ・ランテルに……。活動拠点を帝都からエ・ランテルに移すというのはどうだろうかと思案する。ミスリル級以上という依頼の条件であるが、妹達の分は、自分で負担すれば良い。それがダメでも、モモンを説得して、妹二人を冒険者に登録させ、モモンと愉快な仲間たち〃に加えてもらう。そうすれば、一緒にエ・ランテルに行くことだってできる。エ・ランテルは貿易が盛んな都市だと聞く。物や金が集まるどころであるなら、冒険者としての腕があれば生活していくことはできるだろう。

「目星しい依頼が無いのか？」とモモンが掲示版を眺めながら考え込んでいたアルシエに声をかけた。どうやら依頼を選ぶのに時間をかけすぎてしまったようだ。

「う、うん。ごめん、どれにしようか迷ってた。もう少し待って。良い依頼を選ぶから」
「そうか。慌てることはないぞ。依頼は吟味するべきだからな」

「うん。もう少し待っていて」

「ああ。それとだ……。やっぱり、ポーションを飲んでおいた方が良いと思ってな」

モモンの右手には、ポーションがあった。

「いや、いいよ。勿体ないし。大丈夫だよ」

「飲んでおくべきだ。それと、昨日は済まなかったな。考え事をしていて、会話に集中できていなかった」

「あ……。うん。私こそごめん……。怒って席を立ったりしちやつて……。最近、モモ

ンが何か悩んでいるということは分かっていたのに。自分勝手にごめん……」

「いや。俺の方こそ悪かった。お詫びの印という訳ではないが、ポーシオン、受け取ってくれないか？」

「そんな、ポーシオンを貰うようなことではないと思うけど……。でも、ありがとう」

アルシエは、ポーシオンの栓を開け、そしてそのポーシオンを飲む。さっぽりとした味。そしてほんのりと甘い味。

「ポーシオン、ありがとう。元気が出てきた」

「足りないのなら遠慮しないで言ってくれ。もう一本飲んでおくか？」

「大丈夫。十分だよ。それに、元気が出たつというのは、心の元気だから……」

「心の元気？ 何かのバッド・ステータスだったのか？ ポーシオンは、傷を回復するという効果以外もあるのか？」とモモンは首を傾げながら言った。

アルシエは笑った。

「そうかもね。モモンがくれるポーシオンには、そういう効果があるのかも知れない。珍しい色のポーシオンだし。ありがとう、モモン。モモンは優しいよね！」

「そうか……？ 仲間として当然のことをしているだけだが？」

「そっか。だけど、嬉しいよ。さっ！ モモン。もう少し待ってて。依頼、直ぐに選ぶから」

「今日の依頼は、採取依頼はどうか？ 帝都の北の群生地は、魔物が多く出沒する。特

に、^{ホーン・ウルフ}角 狼の縄張りの中にある群生地だから、採取と同時に周りを警戒しながらになる。

^{ホーン・ウルフ}角 狼も、子供が産まれて間もない時期だから、攻撃的になっている。だけど、その分、

貴重な薬の原料が取れるし、報酬も高い。私が定期的に飛行で周囲を見ながら警戒する

ようにするよ。あと、^{ホーン・ウルフ}角 狼の角も、薬の材料になって、討伐した分だけ報酬も増える」

「^{ホーン・ウルフ}角 狼か……。囲まれてしまっても敵ではないな」

「うん。私も、危なくなったら、飛行で空中に退避できるから、思いっきりモモンは剣を

振り回して大丈夫。それに、^{フライ}フルーダ先生がやっていた、^{フライ}飛行と火 ^{ファイヤー・ボール}球の併用の練習

も出来るだろうし」

「決まりだな。帝都の北口から出発ということだな？」

「うん」

「モモン、大分採取できたから、これくらいで帰ろうか？」

「ああ。こちらにも、角ホーン・ウルフ狼の角の回収は終わったところだ。群れ一つを討伐したところだろうか。だが、これ以上角ホーン・ウルフ狼の群れを狩ってしまうと、生態系に影響が出てしまうかも知れない」

「生態系って？」

「かつての仲間が言っていたことだ。採取だって、来年もまた採取が出来るように、根こそぎ採取したりしないだろう？ 食料だって、来年に種を蒔く分を残しておき、全部は食べてしまわないようにする。それと同じことだそうぞ。角ホーン・ウルフ狼も、全部を狩ってしまったら、この地域にいなくなってしまう。そうしたら、予想もできないようなことが起こりえるということだ。たとえば、この薬草の群生地が、草食動物に全て食べ尽くされてしまつて、来年は採れなくなつてしまつたりとかな」

「ふくん。不思議な話だね。だって、角ホーン・ウルフ狼が居なくなれば、この辺り一帯で、安全に採取が出来るようになるのに。あ、でもそうしたら、依頼の難易度が下がつて、報酬も下がつてしまうかも知れないけど。そしたら、困る……ということかな？」

「それとは違うな。食物連鎖ということなのだが……。まあ、俺も詳しくは知らない。仲間からの受け売りだからな」

「仲間からのかあ……。そうだ……。モモン。モモンが最近、何に悩んでいたのか。聞いてもいい？ きつと、仲間のことで悩んでいたんだよね？ 良かったら、聞いてもいい

かな？ モモンの旅の目的とかも……。願いを叶えてくれる指輪を使って、モモンは何を願いたいのかなあつて……。もちろん、駄目だったら、全然良いけど！ あと……。実は、私も悩みがある。それは、モモンに相談したい」

「構わないぞ。昨日、ニグン殿とレイナスさんには話したことだしな。帰り道がてら、ということでも良いか？」

「うん！」

帝都は燃えているか 11

「何から話をしよう。仲間達の一人一人の事を語っていても良いのだが、一人目の仲間の話で、帝都までたどり着いてしまいそうだ」とモモンは、太陽を見つめながら言った。『正義降臨』という後光エフェクトが射していた仲間の事を考えながら。

「え？ 帝都に着くまでまだ三時間は掛かるけれど……。もしかして、仲間って女の人だったりするのかな？」

「仲間の三人は女性だったな。だが、残りの三十七……八人は男だったぞ？ 女性の話が聞きたいのか？ 三人と冒険した話ならいくらでも話せるが……そうだなあ。三人はいつも、固まって大樹で女性だけで話をしていくことも多かったな。もしかしたら、不満とかあつて愚痴を言い合っていたのかも知れない。輪に入りづらかったのだが……勇気を出してその輪に入っていたら、何か変わっていたのかも知れないな……」とモモンはため息を吐いた。

アルシエはモモンの両肩が僅かに落ちたのを見逃さなかった。モモンが両肩を落とした理由。それは、後悔であろうとアルシエは思う。

「ごめん。やっぱりモモンが話をしたい仲間のことから話をして。で、でも……一つだ

け聞かせて。モモンが探している、何でも願いを叶えてくれる指輪。探し出して、何を願うの？ その仲間の女性が亡くなって……甦らせたいとか……かな？ こんなこと聞いて良いのか分からないけど」

「何でも願いを叶えてくれる指輪か。そんなのがあったらいいな」

「え？ 無いの？ それを探し出すためにずっと冒険をしているってモモン言っていたよね」

「すまん。あれは嘘だ。まあ、正確には、そのような指輪は存在するのだが、俺の願いは叶えられない。絶対にな」

「嘘だったんだ……」

「気を悪くしたか？」

「ううん。考えてみれば、初対面同然の私に、そんなことを打ち明ける方が不自然だったかなって。でも……今なら話してくれる？ モモン、言ったよね、『信用とは実績によって積み上げられるものだ。信用できるできないは今のことではない。これからのことだ』って。あのときの『これから』は、『今』でもまだ足りないかな？ いや、ごめん。なんで私こんなこと聞いてるんだろ。冒険者のマナー違反だよな」

「いや。話していいと思ってる。だが、俺はなぜ今、冒険者なのか。なぜ冒険をしているのか。実は、今の俺自身にもはつきり分からない。最初はこの世……いや、帝都に来

て楽しかった。浮かれていた。新しいことばかり。アルシエとパーティーを組み、冒険し、レイナスさんやニグン殿とも出会えた。もう一人じゃないって思えて、嬉しかった。楽しかった。だけどな……」

「あの遺跡、たしか、ナザリック地下大墳墓だっけ？ あの遺跡と関係があるんだよね？」

モモン、仲間のことを探してた……。呼んでた……」

「気が付いてたのか？」

「私もモモンの仲間だよ。気が付かない方がおかしいよ。それに、冷静に振り返ってみれば、モモンはあの遺跡に詳しくすぎる。罠を見破っているというより、罠があることを初めから知っているみたいだった」

「アルシエに隠し事や嘘をついてばかりだな。そうだ。あのナザリック地下大墳墓は、俺と……その仲間達が協力して築き上げた拠点だ。あの遺跡をみんなで攻略して手に入れた。そして、罠も設置したのも仲間たちや俺だ……」

「たくさんお墓があった。あそこにモモンの仲間達が眠っているの？」

「いや。それは違うぞ。仲間は、一人、また一人と去っていった。遠い場所へな。そして、もう二度と帰っては来ない。俺を捨てたんだ……」

「酷い……」

「いつか戻ってきてくれるのじゃないかって。俺は信じて待ち続けた。また仲間と集

まっつと一緒に冒険ができるのじゃないかって。また、一緒に楽しいことができるのじゃないかって。たとえ喧嘩をして揉めることがあっても、また上手くやれると思っただけ。だけど、そんな日は来なかった。だから……壊してやろうと思っただけ。戻ってこない仲間を待つ場所なんて、もう俺には不要だと思っただけ。だけど、そういうのって、壊せないものだな。思いつきで詰まり過ぎていて。壊そうと……新しい一步を踏み出そうと思っただけ。けれど、立ち往生さ。それが今の俺だ。済まなかったな、心配をかけて……」

アルシエはナザリック地下大墳墓の光景を思い出す。贅沢の限りを尽くした装飾。今にも動き出しそうな彫像、ふんだんに使われていた宝石や貴金属。どれほどの財と時間を費やして作られたのか。

「全然いい。心配はしていたけど、迷惑だなんて思っていない。モモン！ 私も話している？ もしかしたら、お願いになってしまいかも知れないけれど！」

アルシエは、とぼとぼと地面を見つめながら歩くモモンの前に立ちはだかる様に。そして、モモンをまっつすぐに見上げる。

「私、妹を連れて家を出ようと思う。親は、貴族に戻ることを夢見て、散財をして借金をするばかり。このままだと、妹達も嫌な目にあつてしまう。それで、ここからお願ひになるのだけど、妹達が安全に暮らせる場所に、冒険者チームの拠点を移したい。もちろん、妹達の生活費とかは、私が何とかする。モモンには迷惑かけないようにしよう」と

思っている」

「親を捨てる、ということか？」

「そういう風に言われると、少し辛い……」

「すまない。言い方が悪かった」

「でも大丈夫。それは事実だから。後ろめたい気持ちもある。でも、このままだったら絶対にダメだと思う。私が冒険者になってお金を稼ぐ。それだけじゃ無理。モモンが言ったように、これは親を捨てるという決断。散々迷った。だけど、私は踏み出さなければならぬ。また、厳しいけど優しい父と、いつも優しい母。そして今よりもっと幼かった妹。自分は世界一幸せな子供なんだって思っていたあの頃が戻って来てほしい……。だけど、もう、戻らない。だから……」

「分かった。それ以上言わなくてもいい。泣かなくてもいい。拠点を移すくらい構わないさ。俺たちはパーティーの一員。『モモンと愉快な仲間たち』じゃないか」

「ありがとう……。こんなにあっさり、承諾してくれているとは思わなかった。パーティーから外されてしまうかと思ってた……」

「そんなことするわけないだろう。だから、アルシエ。もう泣くな」

「そうだよね……。『モモンと愉快な仲間たち』だもんね。泣いているのは変だよ。愉快に、楽しく、いつも笑って……。ずっとモモンと冒険したい……」

「ああ。だから泣くな。アルシエ」

「え!?! あっ……………鎧…堅くて冷たい…………」

「死の騎士デス・ナイトの攻撃でも傷一つつかない鎧だ。それは硬いし冷たいさ」

「でも…………暖かい」

「気のせいだ」

「うん。だけど、少しこのままでいい?」

「ああ…………それに、ありがとうな、アルシエ」

「ありがとうを言うのは、私だよ」

いつからだろう…………。

ギルドメンバーがログインしてくる事より、他のプレイヤーがナザリックに侵入してくることを心待ちにするようになったのは…………。

いつからだろう…………。

ギルドスタッフ・オブ・アイズ・ウィル・ゴウン武器器が侵入者の手によって破壊されることを夢見ていたのは…………。

どうしてだろう…………。

ユグドラシルのサービス終了が公式発表されて、ほっとしたのは…………。

どうしてだろう…………。

最終日に、カウントダウンをしながら、寂しさよりも安堵感の方が大きかったのは

……。

どうしてだろう……。

みんなユグドラシルを辞めていくのに、自分だけ辞められなかったのは……。

どうしてだろう……。

ユグドラシルが現実になったような世界に転移してきたのは……。

どうしてだろう……。

自分だけではなく、ナザリツクも……そしてアインズ・ウール・ゴウンも一緒にやって来たのは。

どうしてだろう……。

現状を変えようと藻掻く少女と出会ったのは……。

どうしてだろう……。

出会ったその少女が、^始 $\rho \times$?^{まり} という意味を持つ名前であるのか……。

どうしてだろう……。

既に終わった筈の、ナザリツクが、アインズ・ウール・ゴウンがあるのは……。

どうしてだろう……。

ナザリツクへと侵入する立場になったのは……。そして、もはや、フレンドリー・ファイヤーは解除されている。^{スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン}ギルド武器器を自らの手でたたき割る事が出来る

……。

「いや、礼を言うのは俺だな。アルシエが仲間で良かった。過去の思い出に縛られて、新しい一步を踏み出せない。仲間が新しい一步を踏み出すのだ。俺も、踏み出さないといいけないな。帝都に戻ったら、もう一度、ナザリツク地下大墳墓の攻略に挑戦したい。今度こそ、俺も新しい一步を踏み出す」

「手伝うよ」

「ああ。頼りにしているぞ。アルシエ……」

「……長い時間、胸借りちゃってごめん。もう大丈夫……」

「気にするな。それに、採取に行くときには気付かなかったが、ここは別れ道になっていくのか?」

「うん。ここから東へ行けば、カルサナス都市連合国家の領土へと行く道。西に行くと、帝都の都市があるんだ。帝都よりは規模は小さいけど、それなりに栄えた都市なんだって。帝都の穀倉地帯の真ん中にある都市だから、食事は帝都よりも美味しいって聞いたことがあるよ。アゼルシアン・ティーに使われる紅茶も、バハルス牛も、全部、この道から帝都へ来ているのだと思う」

「そして、南に行けば、帝都アーウィンタールへとたどり着く。道は無数にあり、またたどり着くべき場所も無数に存在している、かあ。カルサナス都市連合国家もいつか行ってみるか。ニグン殿とレイナースさんは行ってきたみたいだしな」

「カルサナス都市連合かあ。北方だから、寒さが厳しそうだよな」

「ああ。だが、海産物が美味しいとニグン殿が言っていたぞ。お得意のグルメ情報誌には載っていないのか？」

「あれは、帝都の料理店しか紹介してないから……。でも、食べてみたいかなあ。だけど、行くのなら南方かな……。寒いより暖かい方がいい。法国とかかな？ 帝国よりも温暖だろうし」

「ニグン殿を頼って法国に行くというのも手か。そういえば、レイナースさんをパーティーに誘った返事、まだもらっていないな。レイナースさんも誘って、法国に行ってみるか？ 冒険の合間の休息は、釣りということになるだろうかな」

「れ、レイナースさんは……。だ……。で、でもそうだよな。みんなで行けたらいいよね。あ、でも法国って、冒険者組合ってあるのかな？ で、でも、きつとかなるよね」

「ああ。なんとかなるさ。お互いまずは果たすべきことを果そう」
「そうだね！ まずは、霊薬と角を冒険者組合に納品だね」

「見て。モモン。帝都の様子がおかしい……。帝都が燃えてる？」

帝都を守る強固な城壁。その城壁は高く、そして厚い。攻城梯子を架けても城壁を越えることは難しい。そんな帝都の城壁を悠々と超える程の大きな炎。帝都が燃えているようであった。

「あれは、ゲヘナの炎……?」

「ゲヘナ? アレが何か知ってるの?」

「いや、此処からでははつきりとしたことは分からない。だが、帝都で不味いことが起こっていることは確かだ」

西日を浴びて、真っ赤に染まる空と風景。しかし、それよりも真っ赤な炎が帝都を包んでいる。世界が血で染まったようであった。

「うん。急いで帰らなきゃ。飛行!」

「ああ。ニグン殿やレイナスさんが心配だ」

モモンとアルシエは、帝都アーウィンターの北門に向かって、全力で移動し始めた。

帝都は燃えているか 12 【閲覧注意：残酷な描写有り】

帝都アーウィンタールの商業街。果実を荷台に満杯に乗せている二輪車を汗をかきながら引き、その果実を売り歩いている人。樽に詰められた上質のアゼルシアン・ワインが積み重ねられた馬車を引く馬とその御者。

人を運んでいる幌馬車。その幌馬車に乗っている人は、心なしか下を向き、疲れているようだ。

軍馬に乗って帝都の中を見回している帝国兵士は背筋をピンと伸ばし、帝国の威厳を見せつけながら、盗人がいないか目を光らせている。

様々な種類の馬車が行き交い、そしてその間を通り抜けるように、多くの人々が往来している。そんな石畳の大通りから一つ道を外れた小道。

真新しい馬車がその小道を塞ぐように止まっていた。その小道を通ろうとする人は、通行の邪魔となつている馬車を、迷惑そうに避けながら通り過ぎていつている。

その馬車の客車の部分には、家紋が彫つてあつた。それは、既に存在しない貴族の家紋。行き交う人々は、その家紋がどこの家紋か分かる者などいない。ただ、貴族の家紋

であるのであろうということしか分からない。

「ようこそ、フルト様。こんな汚い場所までわざわざ足を運んでくださって誠にありがとうございます」と、ロウネ・ヴァミリネンはフルト家の当主が部屋に入ってくると、立ち上がりそれを丁寧に迎える。ただ、ロウネは深いフードを被り、自身の顔が見えないようにしている。それは、遺跡調査を依頼した時と同様だ。

フードを取らないという非礼な行為をフルト家当主は気に留めている様子はない。むしろ、自らの両手で抱えている、布に包まれた品に自分の注意を払っているようだった。

「いえ、そのようなことはありません。帝国貴族として、帝国内に現われた未知の遺跡。危険なものであるならば、貴族が率先してその問題に対処すべき。ここへ来ることなど、労の一つに数えるまでもないことです」

「誠に。誠に。貴方様ほどの報国の士が、貴族の位をはく奪されてしまった。我が主君も、なんともつたいないことをしたかと、このマーベリック、悔やまれるばかりです」とロウネは恭しく頭を下げる。フルト家の当主に対して名乗っているマーベリックという名。それは、当然、偽名である。

「我らが皇帝。マーベリック殿、皇帝の決定に異を唱えるのは、些か不敬でしょう。あれほど若くしてこの帝国を纏め上げておられる。稀代の名君と呼ばれるに相応しい方。

ただ、その若さは時として危険なこともありうるのもまた事実でしょう。巷で、不敬にも我らの敬愛する皇帝を「鮮血帝」などと呼ぶ輩もおりますし。まさに邑犬群吠ゆうけんぐんばい。嘆かわしいことです。だが……血氣盛んであられることもまた事実。時として皇帝を諫めるべき貴族もまた必要でしょう」

「然り。然り。このマーベリック。皇帝を補佐し、助言を与える貴族。相応しい方は、フルト卿。貴方様しかいないと思っておりますぞ。推挙する機会があれば、是非、貴殿の名を……」

「感謝。感謝。されど、私など浅学菲才の身。ただ、その忠義は誰にも劣らぬという自負があるだけの者。ただ、敬愛する皇帝から補佐役を求められるようなことがあれば、粉骨碎身の所存」

「我らの皇帝に代わってその忠義に感謝を……。ところで、遺跡の調査の方のご進捗は如何でございますか？」

「うむ。遺跡の中は、まさに奸知術数かんちじゆつすうの渦であった。おぞましき魔物の棲家。藪を突いて蛇を出す必要もないかと。これが、その遺跡から持ち帰った品です」

フルト家当主は、机の上に置かれていた品を包んでいた布を仰々しく外す。現れたのは、足が一本しかない三匹の悪魔が背中を合わせて、鼎かなえのように立っていた。それぞれの悪魔の右手の掌には、生々しく造形された心臓が乗っている。そして、その悪魔の像

は黒曜石のように黒光りしている。

「なんともおぞましい!! 何かのマジック・アイテムでしょうか? これはお渡しいただいても?」

「もちろんです。マーベリック殿。そういうお約束でございましたので」

「感謝致します」と、マーベリックはその像をこれ以上見たくないのか、再び布をその像に覆い被せた。そして「ですが、これだけだと我主君も遺跡をどう扱うべきか、判断ができないように思います」と口を開き、懐から皮袋を取り出した。

机と皮袋の底がぶつかり、カチリという硬質な音が響く。

「左様でしょう。引き続き、遺跡の調査は実施致しますので、続報をお待ちください」

フルト家当主は、机の上に置かれた袋を自分の懐へとさも当然のようにしまい込むと、椅子から立ち上がり部屋から出ていった。

「頼みましたぞ」

「ロウネ、あれだけ金と時間を使って、この趣味の悪い像一つが成果とはな。無能は無能ということか」と、バハルス帝国の皇帝、ジルクニフは、執務机に座りながら、不満そうに自らの金髪の前髪を掻き揚げた。

遅巧よりも拙速。自らの軍隊を派遣した方が、実りは多かつたであろう。それに、どこからともなく現れた冒険者モモンの正体を、遺跡調査を通じて探るといふ目的に関しては、まったく無意味だったと言える。

若き皇帝は苛立ちながら、一差し指で机をトントンと叩きながら次の策を巡らしていた。

その時、執務室の隅から、「御機嫌よう」という声が響いた。皇帝の執務室に突然現れた悪魔は笑っていた。右腕は大きく半円を描き、やがて右手が彼のお腹の所へと置かれる。そして、腰を曲げた。

皇帝ジルクニフとロウネは、突然現れた不審者の存在よりも、その彼の礼の優雅さに目を引かれた。

「貴方がた二人は、私が名乗るほどの者ではないようですね。さて、君たちが何者か、喋りなさい」。簡潔にね」

「ロウネ・ヴァミリネン。皇帝の秘書官です」と、直立不動したロウネは答える。

何を正直に答えている。そんな暇があるのであれば、近衛兵を呼べ、とジルクニフは内心舌打ちしたが、ロウネの身体が小刻みに震えている。極寒の中にいるように唇が震えている。

ジルクニフは、この悪魔は人を言葉で操ると悟った。

「私の『支配の呪言』に抵抗しましたか。魔法ではなく、マジック・アイテムですね。おや、あなたが左手で大事そうに握りしめている物は何ですか？ 亡くなった母親の姿絵が描かれているロケットペンダントということではないようですね」

人間とは思議である。危機に陥った時、不安になった時、自らが頼みとするモノに無意識にしがみつこうとする。幼い子供は、恐怖を感じたとき母親の名を呼びながら泣き叫ぶ。母親が頼むべき存在であるからだ。

ジルクニフもまた、同じであった。無意識のうちに左手で握ってしまったペンダント。それは、精神操作を無効にする効果のあるマジック・アイテムだ。それを無意識のうちに握ってしまっていた。

そして、その人間の弱さを悪魔が見逃すことはない……。

「シャルティア」

「はい、でありんす」

ジルクニフの耳に女性の声が、甘い薔薇の香水の香りが鼻腔に届くよりも早く、ジルクニフの首筋に刺されたような痛みが届いた。真紅の色に染まった唇が、不吉な三日月のような笑みを浮かべていた。

ジルクニフの首筋に突き刺されているのは、鋭く伸びた爪であった。

「選ぶでありんす。このまま首を斬られるか。大人しくそのペンダントを渡すか」

「ちよつと触っただけでありんすのに、壊れてしまいありんした。堪忍でありんす。わざとではありんせん」

「さて、君が何者か、喋りなさい」

左腕を切断され、その痛みから地団駄を踏んでいたジルクニフの動きが止まった。まるで痛みなど一切感じないように大人しくなり、そして悪魔の問いに答える。

「ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス。この帝国の皇帝」

「流石はモモンガ様。この国を統べている人間の所にこの像が運ばれることを予期されていたのですね。そして、モモンガ様は、私とそのタイミングを、見誤ることがないと信じてくださっていた。守護者としてこれほどの幸福はありません……」

悪魔は、ハンカチで涙を拭く。

「さて、この国を至高の御方がたに捧げなさい。そして、あなたは冒険者モモン……様というアンダーカバー同様、この国を表で治めるアンダーカバーとなってもらいます」

「仰せのままに。何なりとご命令ください」

左腕からボトボトと血を落としながらジルクニフは無機質な表情を浮かべながら答えた。

「では、まず、全兵士に絶対遵守の待機命令を出しなさい。冒険者モモン……様の活躍の

場を奪うようなことはなりませんよ」

悪魔は、城の一番高い塔の頂上に立ち、帝都を見下ろしていた。悪魔を中心にして、空中に魔法陣が描かれていく。

「モモンガ様。まずはこの都を献上致します。『ゲヘナの炎』」

また、デミウルゴスが両腕で大事そうに抱えていた像が光の粒子となり空中に霧散していき、黒い裂け目を生み出していく。そこからは無数の羽の生えた悪魔が顔を出し、そして帝都中に飛び去っていく。

帝都は燃えているか 13

〈帝都北門〉

「モモン、人が襲われている！ 妹を助けに行かないとー」

アルシエは、帝都北門の前で人を襲っている悪魔を指し示し、そして自らは加速していく。

北門では、黒い翼に、ドラゴン竜の牙を思わせる鋭い二本の角を持った悪魔が、逃げ惑う人々に襲いかかっていた。聞こえてくるのは、人々の悲鳴。そして、悪魔がケセラセラと笑っている。

「雷撃効かない！ ファイヤーボール火球——モモン、私の魔法では効果は薄いみたい」

アルシエの雷撃ライトニングが直撃したにもかかわらず、悪魔はアルシエに見向きもしない。いや、攻撃されたのかどうかにも気付いていないかのようだ。そのまま人を襲っていた。ファイヤーボール火球は、少しかだけ悪魔の注意を向けることはできるようだ。だが、ダメージを負っているような気配はない。悪魔は、鼠をいたぶる猫のように、悪魔は人間を生命の極限状態に追い込んで遊んでいるようであった。

「任せておけっ」

アルシエに追いついたモモンは、両手のバスタードソードを抜き、一匹の悪魔に斬りかかる。

一刀両断。

頭から真つ二つに割れた悪魔は、その身体の色が、黒から白へと変わる。そして、塩の柱のようになり、そして崩れ去っていく。さらにモモンは、北門にいた悪魔を葬り去り、持ち前の脚力で家屋の屋根へと跳んだ。屋根の上からどの人間を襲おうかと物色をしていた悪魔を次々と消し去っていく。

「地面から現れているみたい」とアルシエが叫ぶ。

墨汁が落ちたような黒い点が石畳に出現する。その墨汁を落としたようなシミは直ぐに直径一メートルほどの円となり、まるでタールの沼地のようになる。そしてその沼地から二本の角が現れる。

「地面から……地獄から湧いてきているようだな！ これでも喰らえ！」

モモンは、タールの中心にバスタードソードを突き刺す。その暗黒の円から上半身を出した悪魔は、白い砂粒となり息絶える。暗黒の円は縮小してやがて消え、元の変哲の無い石畳に戻る。

「三途の川を渡る船賃にしては、十分な攻撃だな。だが、釣りは——」「モモンの右方向に三つ。前方に四つ！ 後方に二つ……数が多すぎる!!」

自分の攻撃魔法が効かないことを理解したと同時に、アルシエは飛行で北門前の広場の上方へと飛び、一帯の全体を把握する位置へと移動した。モモンに攻撃役を任せ、自分分は状況把握に努め、どこに悪魔が現れたかを的確にモモンに伝えるためだった。

冒険者チームとして、自分のできることをしなければならぬ。そして、上空からモモンに的確に悪魔出現の場所を伝えていく以外にもアルシエがしなければならぬことはあった。

「私達が時間を稼ぎます！ 早く避難をしてください！」とアルシエは逃げ惑う人々に声を掛ける。背中から血を流す女性。既に両足を切り落とされ、匍匐ほふくをしながらなんとか悪魔から逃げようとする男。地面に倒れた女性の傍らに立ち『お母さん』と泣き叫ぶ子供。阿鼻叫喚という言葉がふさわしい光景であった。

「避難してください！ モモン、後方からまた五つ！」

「避難してください！ 北門向かって左側！ 屋根に悪魔が複数集結！」

逃げ惑う人々にアルシエの声は届いているかは分からない。だが、モモンは確実にアルシエの声を聞いているようで、アルシエの届ける情報に従って素早く悪魔を葬り去っていく。

「だめ！ そつちに逃げても、建物の影に悪魔が待ち構えている！」

アルシエが必死に声を掛けるが、冷静さを失いながら逃げる人々にはその声が届かな

い。そして、無我夢中で逃げているためか、悪魔が物陰に潜んでいることに気付く余裕もないようだ。

「モモン、悪魔を倒しているだけだと焼け石に水！ 避難誘導をしながらじゃないと意味がない!!」

「了解だ。アルシエ、逃げ道を確認するように悪魔を倒すように指示をくれ！ こつちは悪魔の数が多すぎる！ 悪魔を一匹一匹倒していくだけで精一杯だ！ 全体を把握している余裕が無い！」

「了解。まず、南の大通りの屋台の影に数人の人が隠れている。その人達と合流して！ 私の持つてるポーシオン、ありったけ使うから！ 傷ついて逃げられない人達が多すぎる！」とアルシエは叫びながら、見当違いの方向に逃げていく人々の後を追った。

「こつちに逃げても悪魔が待ち構えています！ 一旦、北門に戻ってください」とアルシエは、帝都の西の方角へ走っていく人々の前に立ちはだかり、避難の指示をする。

「だが、北門から帝都の外へ逃げようとしても悪魔が立ち塞がって逃げられなかったんだ！ 北門から逃がさないように悪魔が密集している！」と、傷を負いながらも剣を握っている中年がアルシエに反論をする。

その中年の男はおそらく元冒険者で、北門あたりの市場で露店を営んでいた人であろう。以前、アルシエがモモンと帝都の北市場で買い物をしたときに聞いた憶えのある声

だった。

「大丈夫です。私達が退路を確保します。私達〃モモンと愉快な仲間たち〃を信じてください」

「あの死の騎士討伐の……分かった」

「任せてください。まだ動ける人は、重傷の人の手助けをしてあげてください。できるだけ見捨てないでください！」

アルシエは、火球を悪魔に放ちながら、北門への退路を切り開き、人々を誘導していく。どうやら、悪魔は炎に関しては一定の警戒を示す傾向にあるらしい。火球を上空で放ちながら、悪魔が逃げる人々に近づかないように牽制する。

グゴガアガアガアゴアゴア

北門を守る頑丈な金属製の扉が動き始め、門を封鎖した。城門の両脇にある城壁塔の中にも悪魔は侵入しているらしい。門の開閉を司る機能を有しているのも城壁塔だ。そして、城門の扉は、閉める時にはレバーを動かせば、扉自らの重さによつて扉が閉まる仕組みになっている。敵が攻めてきたときに備え、たとえ一人ででも扉を閉め、敵の侵入を防げるという工夫がされている。しかし、逆に扉を開ける場合には、重力に逆らうため、多数の人間でキャプスタンを回し、分厚く重い扉を持ち上げていかなければならない。

「帝都の外へは逃がさないつもり……」

「アルシエ、救出してきたぞ」とモモンは、四人の人間を抱えながら北門でアルシエ達と合流した。

「皇帝の城へと避難しよう」とアルシエは切り出す。帝都の外へ逃げる事ができないなら、帝都でもつとも安全と思われる場所。それは城だ。帝都の中に敵が侵入されても、バハルス帝国の最終防衛戦となるのが、皇帝の居住地だ。

「そうだな。城なら、守りやすく攻めにくい。よし、俺が血路を切り開く。アルシエは誘導を頼む！俺は群がってくる悪魔を切り倒すことに専念するぞ！」

「分かった！でも、少しでも遠回りだけど、私の家にも寄らせて！妹たちを助けないとー！」

「ああ、もちろんだ。まずは、アルシエ、重傷患者にポーシオンを。見捨てるには忍びないだろう」と、モモンは持っていた自分の無限の背負い袋インフイニティ・バックをアルシエへと投げる。

帝都の北側の城壁に身を擦りつけるようにしながら震える人々。ゆつくりと迫ってくる悪魔をモモンは切り倒し、そしてアルシエは傷が浅い人にポーシオンを手早く配り、重傷患者に飲ませるように指示をしていた。

「避難を開始します。できるだけ、密着するように動いてください」

団子のように固まって移動する人々。包囲されながらもモモンが悪魔を牽制し、着実に進んでいく。途中で生存者を見つけた場合は、その人もその輪に加えていく。

北門から、アルシエの自宅経由、王城への避難が始まったのであった。

北門の城壁の上から、完全不可視化の魔法を行使しながら、北門を離れていくモモンを熱い眼差しで見つめている存在があった。

「人間を生かし過ぎたつす。悪魔たちに手加減させ過ぎたつすかねえ。モモンガ様が忙しそうな感じになってしまったつす。もうちよつと数を減らしておくべきだったすかねえ。でも、モモンガ様を冒険者の英雄にするためには、目撃者は多い方がいいつす！ きつとそうつす。さて、わたしも玩具で遊ぶことにするつす」

ルプスレギナ・ベータは自らの身体を狼へと変化させていく。

「玩具で遊ぶときは、たしか、『悪Trickか or 癖 Biteき』って言うらしいつすね！」

その独り言のような呟きは、不気味な人狼の雄叫びとともに、帝都に充満する悲鳴に溶け込んでいった。

帝都は燃えているか 14

多勢に無勢。モモンとアルシエ。そして、傷ついた人々を形容する言葉は、その言葉がもつともふさわしい。

帝都の中を移動する。怪我人も多く、また高齢の人も多く、早く移動することができない。固まって避難する人々に悪魔がどんだん群がってくる。

そして、悪魔を倒すことができるのもモモンだけであった。アルシエは、ファイヤーボール火球で人を襲おうと忍び寄ってくる悪魔をけん制することしかできない。

そして、問題なのは、囲まれていること。そして、助けるべき人々がどんだん増えていくことだ。

人が団子のように固まって輪になる。それは、人が多くなればなるほど、その人の輪の直径が広がっていく。

そうになると、守るべき円周も必然的に長くなっていく。モモンが一つの方向の悪魔を倒している間に、その円の反対側で悪魔が人を襲おうとする。

小さな円であれば、モモンも素早く円の反対側に移動してカバーすることができ。しかし、円が大きくなるにつれて、移動距離が増加し、人々を守るのが厳しい状況になっ

てくる。

アルシエが空中から悪魔の動向を目配りし、ファイヤーボール火球でなんとか悪魔をけん制できて
いるから、人々を守れているというギリギリの状況だった。

敵に囲まれる。それは、古より敗北か死を意味する。

「頑張りましょう。城に着けば安全です。足を止めないでください」とアルシエは懸命
に励ましながら防戦を続ける。もう、自分自身が火球を何度放ったかを憶えていない。
それに、飛行フライを維持しながらの防戦。

バハルス帝国最強の存在。フルーダ・パラダインであれば、アルシエと同じことを
楽に何時間でも続けることができるかもしれない。しかし、まだアルシエはフルーダ
の領域に達してはいない。また、フルーダであれば、転移によって逃げるといふ、ヒッ
ト&アウェイが可能である。しかし、今のアルシエにはそれはできない。魔力を回復し
ている時間など悪魔は与えてはくれない。

移動は遅々として進まない。

これ以上人を救出しながら移動すると、逆に守りきれなくなる。見捨てる人が出てく
る。それに、こんなところで愚図愚図していたら、自分の妹達が……。アルシエの脳裏
に、そんな暗い思考がよぎったとき、奇跡は起こる。

その奇跡は、帝都にある法国の神殿の前で起こった。

「こちらです！ 神殿の中に避難してください！ 神殿の中は安全です」
それは、ニグンの声であった。

「ニグン殿！」

「ニグンさん！」

モモンとアルシエは、声を揃えて喜びの声をあげた。

「皆さん、神殿の中へ！」とアルシエは思考を切り替え、そして、モモンと共に神殿の入口へとたどり着く。

「モモン殿、アルシエさん、御無事で何よりです」とニグンは笑顔で言った。しかし、着ている服は悪魔の鋭い爪によって所々切り裂かれ、服からは血が滲み出ている。満身創痍である。

「ニグン殿もご無事でよかった。それで、この状況は？」とモモンとニグンは再会の握手を固く交わし、手早く情報交換を始めた。

「まったく分かっていません。突然悪魔が帝都に現われ、そして人命救助に追われて今に至るといふ状況です」

「私達も、帝都に戻ったら悪魔が溢れていたという状況で、まったく何が起きているかわかりません……ですが、助かりました。城なら安全であろうと城に向かっていたのですが、人を守りながら戦うという状況がかなり限界に近かったところですよ」

「そうでしたか。神殿の前を通ってくださったのは祝福でしょう。城はダメです。皇帝が勅令を発し、帝国兵は全員城の中の守りを固め、その城門は固く閉ざされています。城に逃げ込もうとしても、その門は開かないと神殿に逃げ込んだ方が口々に言っていました」

「酷い……帝都の中の人を見殺しにしているのも同じ……」とアルシエは厳しい顔で呟く。

「あのイジメ好きの皇帝か……。あの死の騎士デス・ナイト事件のことのだが、やることが卑劣だな。人あつての国だろうに」とモモンも呆れたようにつぶやく。

「全くです。しかし、我々は皇帝の愚痴を言ってる場合ではありません。目の前に助けなければならぬ人がいます。モモン殿、お願いがあります。私の推測ですが、この惨劇の元凶となるものがあると思います。その元凶を貴方の力で断ち切ってください。おそらく、それは貴方にしかできない」

「分かりました。ニグン殿」

「お願いします。私は悪魔が神殿に雪崩れ込まないようにここで悪魔を食い止めるのが精一杯です。この場を離れるわけにはいきません」

「ですが……ニグン殿も傷だらけではないですか。治療を受けては？」

「傷など私は負っていませんよ。人間を守るために負った傷は傷ではありません。我々

法国神官の間では、それを勲章と呼ぶのですよ」とニグンが笑う。

「余計な心配だったようですね」

「いいえ。お気遣い感謝です。それに、私にはこれがあります。最高位天使が封印されているマジック・アイテムです。いざとなったらこれを使ってでも悪魔を神殿の中に入れてさせませんよ」と懐から第7位階魔法を封じた「魔法封じの水晶」を取り出す。

「最高位天使ですか……頼もしい限りです」

「ええ。法国に伝わる貴重な物ですが、六大神様が残してくださいとはいえ、所詮はアイテム。人の命には代えられません。むしろ、六大神様はこの時のためにこのアイテムを残してくださいだったのでしよう。この神殿の宝物庫に秘蔵されていたのを神殿長が私に託してくださいました」とニグンは大事そうに輝く水晶を懐にしまう。

「では憂いなく前だけを向き、元凶を断つことに専念させてもらいます」

「お願いします。また、逃がっている人がいたら、神殿へ逃げるようにと伝えてください」「了解した」

「では、行くぞ！ アルシエー！」とモモンが神殿の入口から帝都へ再び飛び出そうとしたとき、「モモンさん、アルシエさん」という声が神殿の入口の扉付近から聞こえる。

「レイナースさん！ 帝国の騎士は、皇帝の勅令で、城にいるということじゃないのですか？」とアルシエがその姿を見て驚きの声をあげる。白い帽子に真っ白な服を纏ったレ

イナースの姿だった。白い服には所々血が染み込んでいた。

「私は、かつて、領民を守ることを誇りとする貴族でした。貴族という地位を追われましたが、帝国四騎士となってもその誇りは失いません。私は、守るべきものを間違ったりはしませんよ」とレイナースはアルシエに微笑む。レイナースは優しく微笑むが、その顔には疲れが滲みでいる。

「白衣の天使レイナースさん！ また怪我人が運び込まれてきました！」と神殿の中から、声が響く。

「直ぐに行きます！ 緊急を要する怪我を負っている人の右手には、赤いスカーフを巻いてください。そして、ポーシヨンか回復魔法を！ 緊急を要しないが治療が必要な人には黄色のスカーフを。傷の浅い怪我の人には青色のスカーフを巻いてください。緊急を要する方を優先的に治療を！ そして、青色のスカーフを巻かれた方には、怪我人であることを承知の上で、手伝いの方に回るようお願いしてください。人手がいくらあっても足りません」

レイナースは、手早く指示をし、「私は、モモンさんがこの厄災の元凶を止めてくださる。そして、ニグンさんがこの神殿の入口を守り抜いてくださると信じて、怪我人の介抱に専念します」と言った。そして、兜で覆われているモモンの頬と、ニグンの頬に軽く口づけをする。

そして、「モモンさん、ニグンさん、ご武運を」と言い残し、レイナースは慌ただしく神殿の中へと走り去っていった。

「女神からの祝福でしょうか。これは力が漲ってきますね」

「そうですね。それにしても、女神の祝福とは、ニグン殿は神官の割に俗っぽいことを言いますね」

「まあ、私も人間ですからね。間違いを犯しますし、鼻の下も伸ばしますよ」

「あの、私もでしょうか？」とアルシエは、両手をモジモジとさせながら言った。アルシエは、レイナースがモモンとニグンの頬に口づけしたのを見て、顔を真っ赤にしている。

「五年後くらいでしょうか。再び共に死線を越える時があれば、そのときに是非お願いします」とニグンはアルシエの頭に手を置き、逆にアルシエに神の加護があるように祈った。

「ニグンさん、ありがとうございます。モモンは要る？」

「そうだな……まだアルシエにはそういうの早いんじゃないか？」

「もう！ また子供扱いだ」とアルシエは口を膨らまし、それを見てモモンとニグンは笑った。

「さて、悪魔がまた群がってきましたね」と束の間の団欒を終え、ニグンの表情は真剣な

ものへと変わる。

「アルシエ、ここから二手に一旦別れるぞ。アルシエはまず、妹たちの救出を優先してくれ。俺はその間に、帝都でこの事件の原因を探す。それで大丈夫か？」

「問題ない。妹二人なら抱えながら飛行^{フライ}で飛べる。妹たちをこの神殿に預けたら、モモンを探して合流する！」

「ああ。では行くぞ！」

モモンは、帝都の大通りを疾走する。悪魔を斬り、生き残った人々がいた場合は、神殿への避難を呼びかける。

アルシエは、自らの家へと飛行^{フライ}を使い、全力で移動し始めた。

帝都は燃えているか 15

アルシエは最短距離で神殿から自宅へと向かう。平時の帝都であれば屋根よりも高い空間を跳べば、帝都の空を守っているロイヤル・エア・ガードの警戒網に引つ掛かり、すぐに事情聴取されてしまう。だが、今の帝都の上空は赤く染まっていた。

草原で傷を負った旅人を見つけた禿鷹が、上空で旋回をしながら旅人の命が尽きるのを待つように、ロイヤル・エア・ガードは帝都の上空と帝都周辺に目を光らせている。だが、帝都上空には、飛竜の姿はまったく見当たらない。

アルシエは屋敷の扉の前に降り立った。そして深呼吸をした。それには二つの理由があつた。

一つ目の理由が、屋敷へと飛行^{フライ}で全力で移動したため、アルシエの心拍数は上昇していた。アルシエは精一杯胸を膨らませ、自らの肺に空気を満たす。そして、それを大きく吐き出す。深呼吸をアルシエは二度繰り返した。

アルシエが深呼吸を二度した理由の二つ目は、恐かったからだ。悪魔が怖いのではない。悪魔が帝都に出現してからどれくらいの間が経ったのだろうか。アルシエが帝

都に戻ってきた後も、逃げ惑う人々を神殿まで送り届けるのに時間がかかってしまっている。妹達の救出が間に合わなかったなら……。妹達が悪魔の手にかかっていたら。

そんな恐怖がアルシエに深呼吸をさせたのであった。

扉を開けたアルシエの目に飛び込んできたのは、エントランスの真つ赤な絨毯の染み。黒っぽい赤色の染み。疑いようも無くそれは血が流れた跡だった。だが、亡骸がエントランスには無い。血の染みは階段に続いている。

血を流したのが誰であるか不明ではあるが、その人は血を流した当初生きていた。

お願い、間に合って……。そして、妹達の部屋があるエントランスを登って左側から、叫び声が聞こえた。それは父の声だ。深呼吸をして失った時間を取り戻すかのように、アルシエは階段を登る時間を惜しみ、飛行で二階の高さまで上昇し、そして廊下を進んでいく。

叫び声と金属音。それが聞こえて来るのは、妹たちの部屋だ。

「クーー！ ウイーー！」

アルシエは妹たちの名前を呼びながら部屋へと飛び込む。

部屋の中には悪魔が一匹、そしてその悪魔に向かつてサーベルを振り回す父。部屋の間ではクーデリカとウレイリカが母の手に抱かれながら泣いていた。母も顔面蒼白で震えながら悪魔を見つめている。執事のジャイムスは、悪魔から母と妹を守るように

立っているが、ジャイムスの左腕からは血が流れつつけて、紺色の絨毯を赤く染めていた。

「ファイアーボール
火球！」

アルシエの渾身の火球は、あつさりと悪魔の右腕によつて塞がれる。しかし、室内という近距離から放つたためか、悪魔にもダメージがあつたためか、悪魔の右腕は黒く焦げ、室内に焼けた匂いが漂う。そして、悪魔は、母親や妹たちがいる隅とは対角の隅へと退く。

そしてその隙にアルシエは、妹たちの所へと移動する。

「退治は出来ぬのか！」

「出来ない……」

「冒険者の真似事をしていて、その様か！」と父親はアルシエに言いながらも、悪魔をサーベルで警戒しづつつけている。

「お母様……」とアルシエは父親の言葉を無視して、部屋の隅にいた母親のもとへと駆け寄る。

アルシエが駆け寄るなり、「アル、クーとウィーだけでも連れて早く逃げて」と母が口を開く。

——もとよりそのつもりだった——

そんなことをアルシエは言うことなどできない。

「心配しないで。私も昔、護身術を学んでいたのよ。後から追いかけるからね」と母がアルシエに言う。母が両手で握りはじめたのは、ペーパーナイフであった。そんなもので悪魔に対抗することなどできるはずがない。それに、母が大切に育て、咲き誇った冬薔薇ふゆそうびを悪戯で全て切り落としてしまったときも、母はアルシエに手を挙げることもなかった。そんな優しい母が、戦えるはずなどない。仮に戦えても、歯が立つわけが無い。

母は死を覚悟している。それをアルシエは悟る。

「私の愛する子どもたちには、私のように恵まれた子ども時代を送らせることができなかったわね。許してね」と母は言つて、泣いているクーデリカとウレイリカをアルシエに託した。

「お母様……」

「でも、私は可愛い三人の娘に囲まれて幸せだったわ。でも、最近、あなたは家を留守にしがちで寂しかったのよ。クーとウィーにはこれからそんな寂しい思いをさせないでね……」

魔法学院の生徒であった時は、授業が終われば家に帰ってきていた。冒険者となつてからは、連泊して冒険に出ることが多くなつていた。そして、カツツエ平野から帰つて

きた時も、遺跡調査から帰ってきたときも、妹たちには会いに行っていたが、母親に顔を見せに行ったりはしていない。母に寂しい思いをさせていた。いや、母が寂しい思いをしてくれていた……。

「アルシエお嬢様。悪魔が回復しています」とジャイムスが苦しそうに右手を脇腹を押さえなが言った。ジャイムスは脇腹も負傷しているのであるうか。

アルシエの火ファイアーボール球によって焦げた右腕の部分は、再生をしてまた元通りになつてた。

「火ファイアーボール球！ 火ファイアーボール球！ 火ファイアーボール球！」

アルシエの火ファイアーボール球は、悪魔の皮膚を焦がすだけの効果しかなかった。そして、焦げた皮膚は直ぐに再生して元通りとなる。ダメージはあるものの、足止めの効果しかない。

「アルシエ。クーデリカとウレイリカを連れて早く逃げろ」と父は悪魔にサーベルの刃先を向けながら言った。そして、スツとアルシエに左手で何かを投げて寄越した。

アルシエはそれを咄嗟に受け取る。アルシエの右手の手の平に載せられていたのは、指輪だった。

「お父様……これは……？」

「愚か者！ そんな簡単なことも分からぬか。フルト家には男子はおらぬ。それならば嫁いでいない最年長のお前がフルト家の当主となるに決まっておろうが！」

父親がアルシエに投げて渡した物。それは、フルト家に代々受け継がれてきたフルト家当主であることを示す指輪であった。

父の形見。それが貴族の当主の証である指輪とは、皮肉なことだと思いつながらアルシエはその指輪をポケツトへと滑り込ませる。

「すまなかつたな……」

アルシエの父親は、悪魔を警戒しつつそう呟いた。

「え？」 父が謝罪の言葉を口にしたようにアルシエには聞こえた。一度も家族に対して、母にですら謝罪をしているところをアルシエは見たことがなかった。家族や自分に対して酷いことをしたとしても、それが当然だというような顔をいつもしていた父だった。

「すまなかつたな。当主の指輪だけでなく、爵位も一緒に譲って然るべきなのだがな。私が父から受け取った爵位。それをお前には渡せなかった。当主失格だ。許せ」

父が謝罪している。指輪と一緒に爵位を自分に譲ることが出来なかったこと。謝って欲しいことはそんなことじゃない。フルト家の当主であることを証明する指輪なんて自分はいらない。貴族の爵位だつて自分から願ひ下げだ。もつと謝って欲しいことは別にある。指輪と一緒に爵位が譲れなかった。そんなことはどうでも良いことだ。ポイントがずれている。

「だけど……。父が謝った……。」

「お父様……」

アルシエは、悪魔と対峙している父の背中を見つめる。父の姿を直視したのはいつ振りであろうか。自分が思っていたよりも父の背中は小さかったのだとアルシエはその時気がついた。

父親の後ろ髪。金髪の髪には白髪が交じっていた。悪魔の爪によって受けた傷であろうか、母やクーデリカとウレイリカを身を挺して守ろうとしたのであろうか。

「早く行け！ 当主は、時として残酷な決断をしなければならぬ。家を守るためにな……」

「貴族狂いの父親だけど……」

「世間知らずな母親だけど……」

それに、長年、すでに破綻しているフルト家に仕えてくれていたジャイムスもいる。

また、あの幸せだった頃の家族を取り戻せるかもしれない。諦めるのにはまだ早いかもしれない。それに、ここでクーとウィーだけを連れて逃げたら、その機会は永遠に失われる……。

私は……見捨てられない……。そんなこと、やっぱり出来ないよ……。

ごめん……………モモン……………。

妹を連れて家を出る……………。

妹達が安全に暮らせる場所に、冒険者チームの拠点を移す……………。

そして、モモンと一緒に新しい拠点で一緒に冒険をする……………。

ごめん、モモン……………。私から言い出したことだけ……………やっぱ私、そんなこと出来ないや……………。

「お母様、クーとウィーをお願いします。お父様、お父様もお母様の所へ。ジャイムスも……………」

あのバツカスの酒蔵で出会った老執事が教えてくれたこと。自分の限界を超えると
いうこと。

かつて、フルーダ師匠が見せてくれた魔法。自分の今の實力では到底使うことはできないだろう。だけど……………やるしか無い。いや、やらなければならない。悪魔を倒さなければならぬ……………。自分の全てを絞り出してでも。

『ブロウ・アップ・フレイム
吹き上がる炎……………!!』

モモンは、帝都の大通りを北から南へと悪魔を切り倒しながら駆け抜けていた。

「どんどんPOPしてくるな……。第十位階の最終戦争・悪で召喚される悪魔と似てはいるが、微妙に違うしな……。悪魔を無限に召喚し続けるワールド・アイテムか？ それだったら、やっかいだな。それに、ゲヘナの炎……。ゲヘナの炎を使うほどの相手ならば、この姿では勝てないな。それに、相手がワールド・アイテムを他に持っていたら、こちらワールド・アイテムを持ち出さないと勝てないぞ……」

モモンはそう呟きながら、悪魔を一匹、また一匹と倒す。

「む？ 爆発音？ 戦闘か？」

その戦闘音は、帝都の南門の外から聞こえてくるものだった。モモンは、その音がする方向へと急いだ。

「む？ 戦っているのはプレアデスのエントマ・ヴァシリツサ・ゼータか？ セバスやソリュシャン・イプシロンが帝都にいたのも意味がわからなかったが、エントマまで何故帝都に？ それに、相手は、*“蒼の薔薇”*だったか？ 王国の冒険者と言っていたが、なぜバハルス帝国の、しかも帝都にきているのだ？ まさか前回の戦いの復讐か？ まったくわけがわからんな……。俺の敵は、どちらなのだ？ どちらも敵という方がよっぽ

ど分かりやすいな……」

“蒼の薔薇”とはすでに一度戦闘をしている。敵である可能性が高いであろう。エントマ・ヴァシリツサ・ゼータは、ナザリック地下大墳墓の九階層を守護する役目を持っている。当然、自分がギルド武器であるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを破壊しようとするのなら戦闘になる可能性はある潜在的な敵と言える。

問題は、帝都に現れている悪魔たちをどちらが召喚しているかということであろう。もちろん、この両者が悪魔の召喚とは無関係ということも有り得る。

とりあえず……様子見か？ それにしても、セバスやソリュシャン・イブシロンとい、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータの戦闘といい、これは本当にAI人工知能か？ フェイントなどをかわしつつ、的確に防御をしている。まるで自分の意志があるようじゃないか……。

モモンが、エントマと蒼の薔薇の戦いを物陰から隠れて観察してすぐのことであった「む？ 見たことのない魔法だな……」とモモンは呟く。

イビルアイが放った魔法で、メイド服を着た蟲使いは、顔中から蒸気を上げてもがく。その様は、酸を浴びたかのようなであった。

「一体、何の魔法？」

ティアの質問にイビルアイが答える。

「殺虫魔法（ヴァーミンベイン）へ虫殺しだ。二百年前に蟲の魔神がいてな。そいつが使役する蟲などを退治するために開発したものだ。まあ、私のオリジナル魔法だ」

「勝負あつたな。『蒼の薔薇』のあのイビルアイだったか。エントマの属性に効果的な魔法を使える。蟲という種族の弱点属性だから、さすがの源次郎さんもその弱点を装備で埋められなかったはずだ」

イビルアイの魔法を受けたエントマはもがく。エントマの整った顔がどろりと垂れ下がり、ぺちやりと地面に落ちた。顔の皮膚が剥がれたような光景であるが、それは違う。地面に落ちた顔の皮膚、その裏には蟲の足がびっしりと生えていたのだ。

「まさか、仮面状の蟲だというのか……」

「ゴボオオオ！」

エントマの喉が晒される・ひどく固そうな喉の中央には一本の亀裂のようなものが走っており、そこから粘着質の大きめの固まりがこぼれ落ちた。

嘔吐物のようなのであるが、それもまた地面の上でうねっている。

「——口唇蟲（コンシムチュウ）。人間種などの喉の声帯をむさぼって、その犠牲者の声を出す蟲」

肌色の蛭の先端部分は人間の唇を思わせる外見であり、ヒューヒューと先ほどまでの

メイドの可愛らしい声を上げています。

「ヨクモオ……ヨクモオ……絶対二殺ス」

「無理だ、エントマ。今ならまだ逃げられるだろ？ お前だけではこいつらに勝てない

……」

「可愛らしい声になったじゃねえか。俺はそっちの声の方が好きだぜ？」とガガーランが刺突鉄槌をエントマへ振りかざしながら叫ぶ。

エントマは、それを後ろに跳んで回避する。

イビルアイは、エントマが離れた隙に、地面をうねっていた口唇蟲こんしんちゆうを自らの足で踏みつぶした。

「キ、貴様アアアア!!! 私ノ御主人様カラ頂イタ声ヲ!!!!!!」

「主人だど？ 笑わせるな。お前のような醜いメイド!!!!!!・モンスターを側において喜ぶ者がいるとは思えないが」とイビルアイは冷淡にエントマを見下しながら言った。

「ソナハズハ無イ！ 至高ノ御方ガタハキツト私達ノモトヘト戻ツテキテクダサル！

私達ハ見捨テラレタンジヤナイ！ ソナハズハ無イ！」

エントマは悲痛な叫び声を上げる。

「ごめんな、エントマ……。もうナザリックは、アインズ・ウール・ゴウンは俺には重すぎなんだ……」

「よく分からないけど、敵は冷静さを失っている！ 一気にたたみかけるわよ！」とラキユースがチームに号令をかける。

「了解だ。〈虫殺し〉」
ヴァーミンベイン

「爆炎陣」

「砕けやあ」

〈早く逃げろ……エントマ。勝てないことくらい分かるだろ？〉

「雷鳥乱舞符！」

「水晶騎士槍」
クリスタルランス

「我が意志で動く黄金の剣よ！ 我、古の契約に基づいてここに命じる。敵を切り裂く

刃となれ！ 浮遊する劍群!!」
フローティング・ソールズ

〈どうした……エントマ。早く逃げろ……。源次郎さんがこんな光景をみたら悲しむぞ

……〉

「爆散符」

「鋭斬符」

「さすがタブラさん……。そこにギャップ萌えを見出すとは……」

「あの……。私の種族も昆虫系なのですが……」

「いやいや、たっちさん。地味に凹まないでくださいよ。たっちさんは、フル・プレート全身甲冑着てるので、大丈夫ですよ。それよりも、『正義降臨』のエフェクトをなんとかした方が……」

アシッド・スプラッシュ
「酸の飛沫」

「衝風符」

「何故逃げない！ 早く逃げろエントマ！ 本当にやられてしまうぞ！」

「私ハ負ケルワケニハイカナイ。帰ッテキテ頂クノダ！ モモンガ様ニナザリックヘ

戻ッテキテキタダクノダ！」

「バケモノめ。最後のトドメだ……」

「アルシエ……。すまないな。約束を守れそうにない……。俺は過去の思い出を捨てる
ことができそうにない。俺は前に進めそうにない……。やつぱり俺にとつて、ナザリッ
ク地下大墳墓は宝なんだ。アインズ・ウール・ゴウンは俺の大切な場所なんだよ……」

「装備解除……。」タイム・ストップ「時間停止」。時間対策は必須なのだがな……。」「魔法遅延・グラスフ・ハート心臓掌握」、魔法遅延・デイレイマジック心臓掌握」、魔法遅延・グラスフ・ハート心臓掌握」、魔法遅延・デイレイマジック心臓掌握」、魔法遅延・グラスフ・ハート心臓掌握」、魔法遅延・デイレイマジック心臓掌握」、魔法遅延・グラスフ・ハート心臓掌握」

イビルアイ、ラキユース、ガガーラン、ティア、ティナへと、時間が停止した世界の中で、モモンガは次々と魔法遅延・デイレイマジック心臓掌握グラスフ・ハートを放つていくのであった。

「モモンガ様……御手ヲ煩ワセテシマイ申シ訳アリマセン……」

時間停止への耐性を備えたマジック・アイテムを装備しているエントマ・ヴァシリツサ・ゼータは、地面に横たわりながら、自らの忠誠を捧げる至高の存在に向かってその口を開いたのであった。

帝都は燃えているか 16

〈神殿前〉

ニグンの戦いは続いていた。

プリンシパリテイ・オブザベイシヨン
監視の権天使を一日に召喚した最高記録。その記録を更新し続けている。

ニグンの召喚している天使、監視の権天使は全身鎧に身を包んだ天使だ。片手には柄頭が大きいメイスを持ち、もう片方の手には円形の盾を装備している。そして長いスカートのような直垂^{ひたれ}で足をすっぽりと隠している。

プリンシパリテイ・オブザベイシヨン
そんな監視の権天使は、攻防の能力値の割合が三対七であり、同位階の魔法で召喚される権天使達の中で最も防御に優れた天使である。ニグンが召喚できる天使の中で、神殿を守るには最も適した存在である。

だが、悪魔数匹に徒党を組まれると、監視の権天使は徐々にダメージを受け、体力が削られていく。そして、光の粒子となつて消えてしまう。

悪魔と天使との戦い。まるで最終戦争^{アルマゲドン}のような光景であった。そして、天使を憎む悪魔は、容赦ない攻撃を加えていく。

プリンシパリテイ・オブザベイシヨン
監視の権天使を召喚し続けること。それはニグンにとって、神殿の中に悪魔を踏

み入れさせない時間稼ぎである。ニグンはそれを自覚していた。そして、自分の友であるモモンが、この悪魔を呼び出し続けている元凶を断つてくれていると信じきっている。

自分ができることは、神殿へと逃げ込んでくる人々に手を差し伸べ、安全な神殿の中へと招き入れること。それと、悪魔を足止めすること。神殿に逃げ込んでくる人々を、身を挺して守る。

法国の複雑で小難しい教義はそこにはなく、自分がやるべきことはたった二つ。逃げ込む人に救いの手を差し伸べること。悪魔を足止めすること。そのシンプルさがニグンには不思議と心地よかった。

神殿に逃げ込んでくる人々の多くは怪我を負っている。ニグンは神殿の中へと誘導しながらも人々の傷が気になる。だが、ニグンは安心できる。レイナース女史が神殿の中で治療行為を懸命に続けてくれているからだ。自分がいま、できることをやればよい。

悪魔がいつ退散するのか。いつまで守り続ければ良いのか。それは、自分には分からない。けれども自分は、この事件の首謀者を倒す必要などはないのだ。神殿の前で悪魔を足止めする。

それだけをやっていたらよいのだ。あとは、レイナース女史が、モモン殿が何とかし

てくれる。

ニグンは、陽光聖典の隊長である。陽光聖典は、軍隊式の垂直な組織で明確な上下関係が存在している。部下が死ぬのも生きるのも、ニグンの決断や判断に拠るところが大きい。隊長とは孤独で重圧のある仕事だ。誰もが出来る仕事でないこともニグンは自覚している。

ニグンは若くして陽光聖典の隊長へと抜擢された。第四位階魔法を使う事ができるという魔法の才能に恵まれた。そして、『自身が召喚したモンスターを強化する』という生まれながらの異能を持つて生を受けたという幸運。そして、ニグン自身の希有な信仰心を持つていたからだ。

陽光聖典の隊長という裏の顔だけでなく、スレイン王国の神官としても厚い信頼と尊敬を集めている。スレイン法国で誰もが認める次世代を担ってくれるであろう神官。

しかし、そんなニグンも順風満帆であったわけではない。竜王国の救援としてピースト・マンの群れと戦う。ニグンは陽光聖典を指揮して毎年のように戦った。

ニグンは陽光聖典の隊長として孤軍奮闘していた。

自分の判断の誤りによって、死んだ部下もいる。自分の潜入ルートを選択ミスと、判断の遅さによって、撤退が遅れ、“蒼の薔薇”に自分以外が殺されてしまった。

ニグンは陽光聖典の隊長として孤軍奮闘していた。

任務を遂行していくたびに、自分が背負って歩き続けなければならぬ命が増えている。法国が建国されて以来、散らされていった神官の命が、食い殺されてきた罪無き人々の命が、自分の肩に、自分の背中へとズシリと乗ってくる。

その重荷から逃げるほど、ニグンの信仰は軽薄では無い。だが、その重みでやがて自分が潰れてしまうのではないかと不安にもなる。

だが、今は少なくとも違う。レイナース女史は、今、自分ができていることをしている。それは、ニグンが命令した訳でもなく、レイナース自身が自分で決めて行動したことだ。そして、レイナースが行っている治療行為は自分には出来ないことだ。

自分とレイナースの間には、陽光聖典のように上下関係がある訳でもない。レイナースが自分と同じ信仰を持っているのかも分からない。だが、レイナースは自分と同じ目的を持って、お互いができることをやっている。帝都の人々を救うという同じ目的をもって行動をしている。

モモン殿も自分が出来ることをやっている。モモン殿は黒髪の異国の人だ。自分とは同じ信仰は持っていないだろう。だが、同じ目的のために行動している。

ニグンはどうしても許せない存在があった。それは、“蒼の薔薇”のラクユース・アルベイン・デイル・アインドラであった。仕える神が違うものの、蒼薔薇あひめも神官である。

神官でありながら、巫人種を殲滅しようとしていたニグンたちの攻撃を食い止める。まるでそれが善であるかのように勘違いをしている大局が見えない愚か者のようだ。

なぜ、神官であるのに、蒼薔薇あさむらぎは自分たちに協力をしないのか。それがニグンには理解できなかった。それが憎かった。

しかし、この状況はどうであろう。神官でもない、帝国四騎士のレイナス女史が自分と志を同じくして戦っている。異国の冒険者であるモモン殿が、自分と志を同じくして戦っている。

スレイン法国の秘密部隊の人間でなくても、神官でなくても、協力できるではないか。どうしてこんな簡単なことに気付かなかったのだろうか。

思い出すのは、共に冒険をしたアルシエのことだ。自分と同じように魔法の才能に恵まれていたアルシエ。まだ未熟で圧倒的に経験が不足していることは一目で分かる。だが、不足している知識や経験を補おうと、モモンやレイナス、そして自分の後ろを金魚の糞のようにつついてきて、必死に学び取ろうとしているところが微笑ましかった。

まるで、自分が見習いとして神官となった時のようだった。先輩神官の後ろを同じように金魚の糞のように纏わり付き、多くを学び取っていく。少しでも知識を技術を吸収しようと必死だった。乾燥させた携帯食料が、水をどんどん吸収していくように、知識

を吸収していったものだ。

アルシエも、一緒に野宿をしたときはまだ、テントを張るのも、ニグンとモモンが釣ったヤマメを調理するのも下手くそであった。岩の上で飛び跳ねて川に戻ろうとするヤマメを抑えることすらできなかった。それが、帝都に着く頃には、少しは様になっていった。小さな一歩ではあるのだろうが、目を見張るべき成長だ。アルシエのその姿は、次の世代の人間を守らなくてはと、自分の決意を新たにしてくれた。

だが、ふとニグンは思う。自分は、いつからアルシエのように、貪欲に知識を吸収しようとするのを止めてしまったのか。

いつの間にか自分は凝り固まっていた。

『自分たちスレイン王国の神官は、選ばれた存在。人間の守り手である』
いつからその言葉が身体に、頭に染みつき、その言葉を疑わなくなっていた。

だが、目の前の現実が違う。

レイナースが、モモンが、共に戦ってくれている。守り手は、自分たちスレイン王国の神官だけではなかった……。

自分だけが背負う必要はない。陽光聖典を失った隊長であるニグン。もはや、ニグンは陽光聖典の隊長として孤軍奮闘する必要はないのだと知った。レイナース女史が、モモン殿が、自分にはできないことはやってくれる。自分だけが全てを背負う必要なんて

なかつたんだ……。自分がここでたとえ倒れ朽ち果てようとも、アルシエのように才能に恵まれた次の世代がきつと、六大神が約束して人間に渡してくれた金板をいつの日か、金貨に替えて遍く人々に行き渡らせてくれるだろう……。

「もはや後顧の憂い無し！ 私は前のみを見て進めばよい」

ニグンは懐から魔法封じの水晶を取り出す。

「悪魔よ、刮目して見よ！ 最高位天使の尊き姿を！ そして地獄へと舞い戻るが良い

！
威光の主天使」

ドミニオン・オーソリテイ

〈神殿前付近〉

「お、お姉ちゃん、あの人間、別の天使を召喚したよ？」と、神殿の屋上からニグンを観察していたマーレが不安そうにアウラに言った。

「ん？ ああ。別に雑魚じゃん。いま神殿に群がってる弱い悪魔だと勝てないけど、直ぐに別の悪魔が来て倒すんじゃないかなあ」とアウラは神殿の屋上の縁に腰掛け、つまらなそうに両脚をぶらぶらさせながら弟に答える。

「そ、そうだけど、あの人間、死んじやわないかな？ さつきから、自分からダメージを負いに行ってるよ？」

ニグンは、モモンガ様を利用しようとしている人間の可能性が高い。守護者を始め、悪魔たちもニグンなどモモンガ様の関係者を殺さないようにという厳命を、デミウルゴスから受けていた。しかし他の人間は別である。モモンの活躍を目撃し、証言する人間も必要であるため、全員は殺さないようにしつつも、半分程度は間引きするように指令を受けていた。

ニグンは、悪魔から殺されようとしている人間を、身を挺して守っていた。

「ほんとだよね……。じつとしていれば安全なのに、何やってんだろう。あ、あの天使、死んだ」

ドミニオン・オーソリテイ
威光の主天使は、同じく召喚されていた上級の悪魔によつてあっさりと光の粒子となつて消滅していた。

「モモンガ様に怒られないかなあ……。あの人間つて、利用価値があるかも知れないんでしょ……」

「できる限り接触は控えろつてデミウルゴスが言つてたし……。だけど……。ああ、しょうが無い。行くよ、マーレ!!」

アウラは、神殿の屋上から飛び降りた。

「お、お姉ちゃん……。こんな高い所から無理だよ……」

「天河の二射！」

無数の光り輝く矢が空から舞い降り、悪魔たちを串刺しにして消滅させていく。

「え、援軍か……。だ、闇妖精！ どうして帝都に！ まさか、お前たちがこの事件の首謀者かつ!!」とニグンはアウラに向かって叫ぶ。

「五月蠅い人間だなあ。マーレ！ 早く降りてきなさいよ!!」とアウラはニグンの言葉を無視して、神殿の屋上にいるマーレに呼びかける。

「む、無理だよお……。お姉ちゃん……」

はあ、とアウラはため息を吐きながら鞭を後ろへと振るう。鞭は、アウラが後方を見ていないにもかかわらず、まるで蛇がうねっているかのように、次々と悪魔を消滅させていく。

「とつとと来なさい！」

「わ、分かったよお……。え、えい！」

気合いを入れたにしては抜けたような声と共に、ぴよんと何かが飛び降りる。

マーレも闇妖精である。両足で着地する。落下のダメージを受けた様子もない。落下による衝撃は単純な肉体力で中和したのであろう。ただ、その落下の衝撃を受けた神殿の大理石の板はひびが割れ、粉々に砕けていた。

「さあ、戦うよ！」

「え？ あの悪魔怖いよお……。あ、あのボク、しなくちやいけないことを思い出した……」

「この任務以外にしなきゃならないことなんて有るわけ無いでしょ!!」とアウラはマールを叱る。

「うっ……。分かったよ。えい！ アース・サージ 大地の大波」

悪魔が土の津波にのみ込まれ、そして地面の下へと消えていく。

「き、君たちは……ダイクエルフ 闇妖精……。だが、手を貸してくれるのか？」とニグンはアウラに尋ねた。

「あんたはこの神殿の中に悪魔を入れさせたくないんでしょ？ 私たちがそれはやっておくから！ あんたは邪魔だから、そこに座つて。動くとこの鞭の手元が狂ってしまいかも知れないからね！ それに、それ以上動くと、あんた死ぬからね！」

アウラは器用にニグンの周りに鞭を打ち、ニグンの周りの大理石に亀裂を生じさせる。亀裂は四角形を描いていた。その四角形の範囲から出るな、ということだ。

「あ、あとこれを使ってください……」とマールは恐る恐るニグンに回復アイテムを差し出す。

「マール！」とアウラはマールの行動を先ほどとは比較にならないほどの怒りを込めて

叱る。マールがニグンに渡した回復アイテム。それは、自分たちの創造主である“ぶくぶく茶釜”様が自分たちに授けてくださったアイテムであった。単なる消費アイテムと言つてしまつてはそれまでだが、自分たちにとっては至高の宝だ。自分が死にそうない時にも、使うのを躊躇つてしまふであろう。いや、使う事などもつたいなくてできないかもしれない。

「で、でも……」

マールも、“ぶくぶく茶釜”様が自分に下賜してくださつたアイテムを下等な人間になど渡したくない。それは、創造された者として当然の思考である。だが、マールも、今回の任務の重要性は理解している。自分たちの忠誠を捧げるべき至高の方に、ナザリックに戻つてきていただくことが今回の作戦だ。ナザリックにモモンガ様に戻つてきていただく。そのためならば、自分の大切に行っている宝物を差し出す覚悟がある。

「か、感謝する。気持ちだけ受け取ろう。そしてもし、もし私に渡すつもりならば、神殿の中にいる怪我をしている人達に使つて欲しい」とニグンはマールが震えながら両手で差し出したポーションを固辞した。

「ああ、頭悪すぎ……。とりあえず、あんたはそこに座つてて。動かないですね。死んだら許さないからね！ マール！ あんまり強力な魔法を使うと、巻き添えでコイツが死んじゃうからね！」とアウラは言つて、鞭を悪魔に向かつて振るつていく。

「う……うん。植物トワイン・プラントの絡みつき」

マーレは、植物のツタを悪魔に絡みつかせ、その身動きを封じる。そして、悪魔一匹の頭部を、シャドウ・オブ・ユグドラシルで粉碎していくのであった。

「闇妖精ダークエルフに助けられるとは……。だが、感謝する！」とニグンは言った。

帝都は燃えているか 17 【閲覧注意・残酷な描写有り】

〈帝都南門前〉

金と紫色で縁取られた、豪華な漆黒のアカデミックガウンを羽織った、剥き出しの頭部には皮も肉も付いていない骸骨。ぽっかりと開いた空虚な眼窩には、赤黒い光が灯っている。頭の後ろには後光が射している。

その姿は、ユグドラシルでその名を轟かせていたギルド“アインズ・ウール・ゴウン”のギルド長、モモンガの姿であった。そして、ナザリツク地下大墳墓に住まう全ての被造物の忠誠をその身に一身に受ける存在の姿であった。

そして、“タイム・ストップ時間停止”の効果時間が経過する……。動き出した時間の中で、ラキユース、ガガーラン、ティア、ティナが生まれてから今まで、一度もその鼓動を止めることの無かった心臓が、その形を失った。握り潰され、ただの血塊となって、血を全身へと行き廻らせるというその機能を失う。

スツと、突如として眠気が襲い眠ってしまったかのようにイビルアイを除いた“蒼の薔薇”のメンバーは眠りについた。永遠の眠りに……。

「ま、まただ……。こゝ、こゝのか、感覚だあ……」

吸血鬼として即死耐性を備えたイビルアイの心臓を、誰かががちりと握り掴んだ感覚。イビルアイはこの感覚に憶えがあった。カツツエ平野で冒険者モモンにされた攻撃と同じだ。握られた心臓。カツツエ平野のように服の上からではない。直接肌に触れられるということを通り越して、自分の臓器を直接触れられる。

時間が流れ始め、イビルアイの身体に一気にその快感が押し寄せる。

未発達の乳房の乳首に血液が集まり、隆起する。胸当ての下に柔らかい布を当てているにも拘らず、乳首が布と擦れて心地よい。未通の膣穴は、何かを招き入れようと、何かを奥へ誘おうとするが如く、伸縮を繰り返しながら液体を分泌し続ける。子を孕むという機能を失った子宮は、第二の心臓になったかのように鼓動を始め、その鼓動と同時に腰に電気が走り立っていることができない。

イビルアイの理性を焼き切りそうであった。イビルアイも、他の“蒼の薔薇”のメンバーのように地面へと俯きに倒れた。他のメンバーと唯一違う点は、他のメンバーは微動だにしないが、イビルアイは頭から爪先まで痙攣し、まるで陸に揚げられた魚のようであることであろう。

「大丈夫か……。エントマ？」

倒れているイビルアイとそして亡骸となった“蒼の薔薇”をまったく相手にせず、モモンガは傷つき倒れたエントマを抱きかかえる。

「アア、御手デ抱キ抱エラレルナド……」

昆虫の表情となつてモモンガには理解出来ないが、今のアントマの表情は、吟遊詩人バの歌に出てくるような、騎士に危機を救われた姫君のような顔をしていた。

「いや、助けるのが遅くなつてしまった。済まないな」

「モモンガ様ガ謝罪サレル事ナドアリマセン!!」

「いや……。遅かつたさ。それにその声……。源次郎さんから貰つた大切な声だつたのだらう?」と、モモンガはイビルアイによつて踏みつぶされた口唇蟲を悲しそうに眺める。

モモンガは、源次郎さんが数千種類もあるVOICELOIDの音声を聞き比べて、どの声がアントマ・ヴァシリツサ・ゼータのイメージにピッタリであるか、試行錯誤を繰り返していたのを知っていた。それに、NPCであればナザリツクに戻れば復活は可能であろう。だが、口唇蟲は復活などの対象に含まれているか分からない。自分の決断の遅さによつて、大切な仲間が選り抜いて作つた口唇蟲が永遠に失われてしまった可能性がある。

「コノ声ハ才耳障リデシヨウカ」

「ははは。そんなはずないだろう? 私はその声も嫌いではないぞ?」

源次郎さんが作つたNPCの声。それをモモンガが不快だと思はずもなかった。

「アリガトウゴザイマス!!」

「エントマ……。お前には償いをしないとイケないな。望む物を言え……。できる限りで応えよう……」

「モツタイナキ御言葉……。出来レバコノ子娘ノ声ヲ私ニ……」

「ん？ こいつか……。確か、イビルアイだったな。死んでいないのは、吸血鬼だったからか……。だが、こいつの声なんかで良いのか？ 源次郎さんお手製の口唇蟲と、こいつの声では釣り合いが取れないように思うのだが？ 遠慮することはないぞ？」

「遠慮ナドシテオリマセン。モモンガ様ガ戻ツテキテ下サツタ。ソノ事ダケデ至高ノ喜び……。欲深イ私ヲオ許シクダサイ……」

「そんなに畏まるな。私から言い出したことだ。だが、それがお前の望みならばそういう。エントマ、口唇蟲を出せるか？」

「ハイ」

モモンガは粘着質の液体を纏ったくねくねと動く口唇蟲をエントマから受け取り、声を奪うべく俯せになっているイビルアイを乱暴に仰向けにさせた。

イビルアイは、粗雑に仰向けにされたことに快感を感じつつ、虚ろな瞳でモモンガを見つめる。自分では勝つことができない圧倒的な存在。邪悪なアンデッド……。そして……イビルアイはそのモモンガの姿に見蕩れる。

《な、なんて立派な頭蓋骨……。それに肋骨なんだ……》

自分が「国墮とし」という二つ名を背負うことになった事件。すべてがアンデッドとなつた国で百年以上過ごしたが、これほど見事な骨は見たことがなかった。

「しゅ、しゅごい………」と、呂律の回つていない舌でイビルアイはそう呟く。さらなる快樂を期待しながら……。もはや、他の仲間の事などイビルアイの思考の片隅にも存在してはいない。

「ちっ！ こいつ、舌をネチヨネチヨと動かして、口唇蟲が入るのを抵抗している……。しぶとい奴だな。それに、口唇蟲が咬みきられてしまうのも問題だな……。エントマ、俺が顎を押さえておく。口唇蟲を入れてくれ……」

「ハイ。モモンガ様」

口唇蟲。声帯を奪う蟲。その蟲には生物として生き抜く為の特質が存在している。それは、その声を奪う主が抵抗をしないように、口唇蟲は常にその身体の表面に粘着質の物質を分泌している。その粘着物質の性質は、——媚薬に例えられるが——たとえ声帯を奪い取られるという激しい痛みが伴うものでさえ、快感として感じてしまうのだ。それによつて、一旦口の中に潜り込んだ口唇蟲は、抵抗を受けることなく難なくその宿主から声帯を奪えるのである。

そして、モモンガは、イビルアイの抵抗力を奪うために、負の接触を発動させる……。

モモンガによって顎と額を押さえつけられたイビルアイ。そして押さえつけられているモモンガの両手からはイビルアイへと負のエネルギーが流し込まれていく。

吸血鬼といえど、全身の感覚を司っているのは脳であった。その額と顎から負のエネルギーを同時に流し込まれたイビルアイの脳は、その快楽を全身に伝えていく。

イビルアイの脳天から股間の辺りまで背筋を伝って電流のようなものが連続的に走り抜け、大きく身を震わす。子宮頸が伸縮し、膀胱を容赦なく圧迫していく。子宮からの圧迫と膣の痙攣。その刺激を同時に受けた膀胱と尿道から液体が押し出されていく。尿道括約筋まで緩みきってしまったイビルアイはそれを防ぐ手立てはなく、膣液でネットリとした下着をさらに濡らしていく。生理現象が止まっていたイビルアイにとつては、数百年ぶりの刺激であった。

「れろれろろろおおおおおおおおおおお《私の喉が犯されている。き、気持ちが良い……》」

口唇蟲は、すぐに自らが食す対象である声帯を発見し、イビルアイの器官へとうねりながら進んで行く。口唇蟲はうねりながらも、イビルアイの口蓋垂のどちんこを食す。

「いひひひひひひひひひひ《波、波がきたあああつああつあああ》」

口唇蟲が蠢いたことによつて腔内に撒き散らされた粘液。口蓋垂のどちんこを食いちぎられた痛みは、既にイビルアイにとつて快楽以外の何物でもなかった。もし、この状態で破瓜はか

を迎えたとしても、その痛みはイビルアイを絶頂へと誘っていたであろう。

口蓋垂のどちんこや声帯を食い尽くされていくイビルアイは幸福の絶頂であった。

「すびいいい……。すびぶ——」

喉元を食い破って外へと出てきた口唇蟲によって大きな穴が開いている。空気から外へと送り出される空気は、口へとは向かわず、その穴から漏れ出す。そして、北風が窓の隙間から吹き込むときのような音がイビルアイの身体から漏れる。

「モモンガ様、この声は如何でしょうか？」と、エントマはイビルアイの声の口唇蟲を自らに装備して満足そうに言った。

「お前の声なら、どんな声でも好きだぞ、エントマ」

「……。ありがとうございます……ぐううううううう」

敬愛するモモンガに“好き”と言われてしまったエントマ。喜びと緊張のあまりお腹を鳴らしてしまった。

「気にすることは無いぞ、エントマ。こいつらアダマンタイト冒険者だ。死体が発見されるよりは、行方不明の方がなにかと都合がよいだろう」

「で、でも、腐肉はちよつと……。眷属たちなら喜ぶと思うのですが」

「吸血鬼はそうか……。あつちのも好きにすると良い……。あいつらは人間だろう」

「感謝致します。あつちの死体は冷めないうちに皆で食べさせていただきます」

アントマがモモンガに対して、アントマの足下から溢れ出した蟲が、イビルアイに群がる。腐乱した肉を特に好むアントマの眷属たちだ。

「シユプ。シユピー、フウー——」

蟲たちが最初に群がったのは、真紅の瞳が特徴的なイビルアイの眼球であった。柔らかくゼラチン質で、蟲たちが好む場所だ。そして、目に埃が入れば涙が出るように、眼球は痛みに対して敏感な部位である。今のイビルアイにとつては、痛みが感じやすい場所は、陰核や乳首のように性的な感覚が敏感な場所と同様、いや、それ以上の効果があった。

「シユプ。シユぽつ。しゅしゅしゅうぽうぽうぽ」

眼球を無数の蟲たちによって削り喰われていく快感にイビルアイの理性は悶絶する。むしろ、視覚が遮断されたことにより、快感に対する感覚が鋭敏になったと脳内で喜び踊る。出遅れた蟲たちは、耳の穴から入り込み、鼓膜を破り渦巻き管を食し、イビルアイの聴覚を奪う。上質な生の舌も残つてはいない。鼻の穴から侵入した虫は既に鼻を食い尽くし、鼻骨が剥き出しとなっている。

イビルアイは、幸せであった。視覚を失い、快樂により身を委ねられる。味覚を失い、快樂という名の極上の美味を味わうことができる。聴覚を失い、自らの快樂に心から耳を傾けることができる。嗅覚を失い、快樂の花園から漂う香りを堪能することができる。

る。

眼球を食い尽くした蟲、舌を、耳を、鼻を食い尽くした蟲たちが次に食する所は、柔らかな脳みそであった。数百年という長い歳月を生きて溜め込んだ知識。発達した大脳新皮質とシナプス系統。蟲たちにとって最高の食事であった。

そして、イビルアイは意識が途切れる最後まで、快樂の絶頂の中にいた。イビルアイが生きた二百数十年という長き歲月。楽しいことばかりではない人生であったが、自分の人生は、この悅樂の為にあつたのだと焼き切れた理性はそう最後に結論を下したのであつた。

弱肉強食という自然の摂理を眺めていたモモンガの背後から透き通る美しい声がかこえた。

「お帰りなさいませ……。モモンガ様」

モモンガが振り返ると、そこには角の生えたクローズド・ヘルム面頬付き兜の騎士が、膝を突き、バルディツシユを地面に置いていた。

「アルベドか？」

「左様でございます。尊きそのお声でまた私の名前を呼んで戴ける日を心待ちにしてお

りました……」

帝都は燃えているか 18

「階層守護者統括アルベド……。いくつか聞きたいことがあるのだが、構わないな？
アルベド」

「はい。私が応えられる事でございましたらなんなりと……。エントマ、ナザリックで
治療を受けなさい」

エントマは黙ってモモンガに一礼し、そしてナザリックへとスクロールを使って帰還
する。

「帝都に現在出現している悪魔は、ナザリックの仕業なのか？」とエントマを見送りなが
らモモンガは尋ねた。

「はい。その通りでございます。全てはモモンガ様に偉大なるナザリック地下大墳墓へ
と戻ってきていただくためでございます。ナザリックの被造物全てが、モモンガ様に、
忠誠を捧げるべき御方をお待ち申し上げておりました。そして私も……。身を焦がすほ
どに、身を引きちぎる程に……。狂うほどに……。モモンガ様をお待ち申し上げておりまし
た」

「アルベド……。俺は……」

「ナザリツクの全ては、そして私は、モモンガ様を必要としております。どうか、私達をお捨てにならないでください。も……もし、私達を見放されるのでしたら、どうか……どうか……その前に私に自害をお命じになってください」

アルベドは両膝を地面につける。そして、頭を地面へと擦りつける。土下座であった。

「やめるんだアルベド。タブラさんが造ったお前にそんなことをさせるわけにはいかない。顔を上げてくれ……いや、早く立ってくれ」

「ご命令に背くことをお許しください。ナザリツクに戻つてくると私とお約束してください。さるまで、私は顔を上げません。ご不快でしたら自害をお命じください……」

「いや……アルベド」

モモンガは、アルベドの上半身を無理矢理起こそうとするが、アルベドは岩のように動かない。

「ナザリツクを去られた至高の御方がた……。私を創造されたタブラ・スマラグディナ様……。どうして私をお見捨てになったのだとお恨み申し上げます。でも、どうして私があなたをですがモモンガ様……。モモンガ様が私を捨てられたとしても、どうして私があなたをお恨みすることができませんでしょうか……。モモンガ様……。深く、深く、心の底からお慕い申し上げます……。そして、どうか私をお見捨てになるのであれば、どうか

あなたの所有物であるうちに、どうか私に自害をお命じください……」

ナザリックを去った……。捨てた……。NPC達も俺と同じだったんだ……。そんなNPC達を俺は、捨てようとしていたのか……。それがどれほど辛いことなのか、知っているはずなのに……。

「モモンガさん……俺の装備、どうか有効活用してください」

「あつ……。いえ……。つて、これはゲイ・ボウじゃないですか！ 属性ダメージを与える弓……。これを造るための材料集めをみんなでしたの懐かしいですね……」

「だからこそ、モモンガさんに持つていて欲しいんですよ。このままデータが消えてしまおうと思うとやるせないんです。どうか、有効活用してください！ 他の装備の材料にしちやつてもよいですから」

「いや、そんなことしませんよ。でも……。ほら、引退するとか言って、結局引退しない人も多いじゃないですか。また、ペロロンチーノさんの気が変わってログインした時、初期装備だと気分がでないんじゃないですか？ だから、ペロロンチーノさんが持つてい

るべきですよ！ それに……」

「だからこそ……！ モモンガさんに俺のゲイ・ボウを託したいんです。どうか、有効活用してください……金貨もアイテムも全部渡しておきますね」

「ペロロンチーノさん……」

「どうぞ受け取ってください。ちよつと蘇生アイテムだけ別で使う予定があるのですが、それ以外の全部です」

「蘇生アイテム？ もしかして、引退前のお祭りとして、どこかのギルドに特攻をかけたりまするおつもりですか？ それならば、付き合いますよ？ ペロロンチーノさんが超々

遠距離攻撃をして誘き出して、そしてプレイヤーが群がってきたところで、
The goal of all life is deathと嘆きの妖精の絶叫
あらゆる生者の目指すところは死である

のコンボなんてどうでしょう？」
「この前は大成功でしたもんね！ ですが……ちよつとNPCの装備とかを最後に整えておきたいので……」

「そうですか……」

「あと、これですね。リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン……」

そつと、ペロロンチーノはその指輪を外す。

「それは別に……」

「いや、百個しかないのですから……。もしかしたら、ギルドメンバーも今後増えるかも

知れませんし」

「それは考えにくいと思いますが……」

ペロロンチーノは、その指輪をモモンガに差し出し続ける。モモンガは、諦め、そしてしぶしぶながらそれを受け取る。

「本当に、モモンガさんがギルド長でよかったです。それに、最後だから言いますが、もし俺に、姉だけでなく兄もいたなら、モモンガさんのような兄がいたらよかつたな、とずっと思っていました。ユグドラシルでも、モモンガさんが目標で、いつかモモンガさんを倒したいなんてちよつと思っていました」

「な、なんか照れますね……」

「ほんと、ずっとそう思っていました。……って、俺までなんか恥ずかしくなってきた……。じゃあ、そろそろ、第二階層に行きますので！ モモンガさん、お元気で！」

「ペロロンチーノさんも！」

ペロロンチーノがホームポイントである円ラウドテンプル卓の部屋から出て行った後、モモンガは宝物殿の奥へと向かう。そこには、他のメンバーがモモンガに託していった装備が安置されていた。モモンガは、ゲイ・ボウ、その他のペロロンチーノが愛用していた装備もそこに並べていく。

「最後にそれはずるいですよ、ペロロンチーノさん……。それに……。魔法職の俺が
 ゲイ・ボウを活用できるはずなんかないじゃないですか……。完璧なる戦士」
パーフェクト・ウォリアー

モモンガは、コンソールを操作し、ゲイ・ボウを装備し、弓を構える。

「やつぱり骸骨にこれ似合わないですよ……。パンドラ、ペロロンチーノさんの姿に
 ……。そしてこれを装備しろ」

モモンガの横に黙って立っていたパンドラズアクターは、その指示に従う。

「やつぱり、ペロロンチーノさんじゃないと似合わないよな……」

みんなが去っていく……。置いて行かれる……。残された者がどれだけ辛いか、充分
 過ぎるほど知っていた、体験していたつもりだったのにな……。あんな寂しい思いは、
 させられない……。

「アルベド……。約束しよう……。俺は、ナザリックを見捨てたりはしない。不安にさ
 せてすまなかつたな」

「モモンガ様……。心より感謝申し上げます」

「よし。そうと決まれば、まずは撤退だな……。悪魔たちを撤収させろ」

「畏まりました……。それと、すでにデミウルゴスから、この帝国の皇帝とやらを支配したという報告が既にございましたが……」

「あの皇帝か……。性格がねじ曲がっている感じだったな……。もつと市民思いの皇帝の方がよいんじゃないか？」

「その点に関してはご心配ないかと。すでに、デミウルゴスが人格を矯正済みとのことです」

「そうか……。それなら良いか……。あと、俺は世話になってる人達に、世話になったお礼と別れの挨拶をしなければならぬな……」

ナザリックに戻る。それは、冒険者モモンとしての生活が終わりを告げたことを意味している。

「お供してよろしいでしょうか？」

「ああ、構わないぞ、アルベド」

・
・
・

モモンガはモモンの姿へと戻り、そして神殿へと向かった。妹を助けにいったアルシエも神殿に行くはずである。また、神殿の外を守っていたニグンも、神殿の中で治療

を続けていたレイナースは神殿にいるはずであるからだ。

悪魔が消えた帝都の大通りは、喜びの歌で一杯であった。だが、神殿は怪我人の治療で大忙しであるようだ。モモンは、神殿で忙しそうに働いている人に、ニグンの居場所を尋ねる。

「そうか……。アルベド、ここで待っていてくれ」

モモンは、神殿の前で待機するようにアルベドに伝え、そして神殿の奥へと入っていく。

ニグンは、重傷で有りながらもベッドで治療を受け、一命を取り留めたところであった。

「ニグン殿、ご無事で！」

ナザリック地下大墳墓の者たちが引き起こした事件であるというに後ろめたさを感じつつも、モモンはニグンが生きていることにほっとした。

「モモン殿も！ 悪魔は去ったようですね！ 私はなんとか命を持ち堪えることができましたよ。それに……。多くの人の命が失われたとは言え、私には、進むべき道が見えた気がします」と、ニグンは瀕死の重傷人とは思えない、輝いた目でモモンを見つめる。「進むべき道ですか……。奇遇ですね……。私も見つけました……。ニグン殿の進むべき道を、よろしかったら聞かせていただけませんか？」

「もちろんです。私がこの道を見つけることができたのは、モモンさんのお陰でもありますからね！」

バツカスの酒蔵で、私達法国の神官は、六大神様たちが言われた、『人類よ、繁栄せよ』という言葉を実現するために命を捧げているという話をしましたが、憶えていらつしやいますか？」

「もちろんですよ」

「しかし、今回の帝都の出来事で、私は、正義の殿堂にいたる情熱的に働くスレイン法国の仲間と言わなければならぬことができました。

実は今回、神殿に逃げ込んだ人々を悪魔から守る際に、ダイク・エルフ闇妖精に助けられました。私が召喚した最高位天使もあつけなく倒され、私一人では神殿に逃げ込んだ人々を守ることはできなかつたでしょう。あの闇妖精ダイク・エルフの二人が助太刀に入らなかつたら、私も、そして神殿の中の人々は残らず殺されていたでしょう。

私は自分の無力に打ちのめされました。人間とはかくも儂く弱い存在なのかと。ですが、希望はあります。

私は気付きました。モモン殿が気付かせてくれました。

確かに六大神は、『人類よ、繁栄せよ』とおっしゃられました。しかし、果たしてそれは『人類』だけの繁栄であるのでしょうか。『人類よ、繁栄せよ』と六大神は確かにおつ

しやられた。しかし、『他種族を滅ぼして、人類が繁栄せよ』とはおつしやられてはいない。

スレイン法国は、そして私は、六大神の言葉を誤解し、誤った方法で、神の言葉を実現しようとしていたのかも知れない。

私はそう思うようになりました。

すべての種族と敵対する必要ありません。

他種族の運命は、私たち人類の運命と結び付けられているのかもしれない。

そして、人類の安全は、他種族の安全と分かちがたく結びついていると認識するようになりました。

私たち人類は、単独で歩くことはできないのではないか。

他種族と共に歩いてこそ、『人類よ、繁栄せよ』という六大神の言葉を実現できるのかもしれない。

そして私は、そんな世界を夢見るようになってしまいました。

私には夢ができました。

私には夢がある。

アペリオン丘陵の赤土の丘の上で、人類と亜人種が、同じ同胞として同じテーブルにつき日が来るという夢です。

私には夢がある。

アゼルシア山脈の高き頂^{いただ}きで、人間とドワーフが、共に地平線から顔を出す朝陽を共に眺めるといふ夢です。

私には夢がある。

今、抑圧の炎で焼かれるこの世界が、安全なオアシスに生まれ変わる日が来るといふ夢です。

私には夢がある。

いつの日か、目下のところピーストマンに侵略されようとしている竜王国でさえ、将来いつの日か、若い人類の少年少女たちが、若いピーストマンの少年少女たちと兄弟姉妹として手に手を取ることができるようになるといふ夢です。

私には夢がある。

リ・エステイゼ王国とバハルス帝国が互いに手を取り合い、そして貴族同士の争いや麻薬の販売などではなく、人類の安全という崇高なる目的に向かって共に歩むといふ夢です。

私には夢がある。

アーグランド評議国とスレイン法国がお互いを信じ、共に協力体制を築いていくといふ夢です。か弱き人間と最強の種族である竜^{ドラゴン}とですら、共に手を取り合うことがきつと

できます。

これが私の夢です。そして、消えることのない希望です。

この信念を持って、私はスレイン法国に戻ります。

この信念をもってすれば、絶望の山からも希望の石を切り出すことができると思います。

この信念をもってすれば、スレイン法国とエルフ王国との間に鳴り響く不協和音を取り除き、素晴らしいシンフォニーを生み出すことができます。法国はエルフ王国との争いをやめるべきです。互いに長く戦争をし、不毛な消耗を続ける必要などありません。

この信念をもってすれば、いつの日か安全な世界が来るのだということを信じて、人類と他種族は共に働き、共に祈り、共に闘い、共にお互いの繁栄のために立ち上がることができます。

無謀な夢だと人は私を笑うかも知れない。けれど、幸いなことに前例もあります。「口だけの賢者」は、食料としか見なされていなかった人間の地位を向上させた。単なる食料から労働奴隷階級という、人間にとっては不満が残る結果であるかも知れません。しかし！ それは大きな一歩です。そして、対等な関係として共に手を取り合える可能性を示す希望の光です。「口だけの賢者」は便利なマジック・アイテムを我々に伝えてくれた。しかし、それらのアイテムよりも、もっと大いなる遺産を、私達人間に残してく

れていたのです。

この夢は、決して夢物語ではない。

そしてその日が来れば、その日が来れば！ 六大神の宣言された『人類よ、繁栄せよ』という言葉は成就し、その言葉が書かれた金板は金貨となり、すべての人類、いやこの世界の生けるすべての種族にその金貨が遍く行き渡るでしょう！

私は、この自分の夢を信じて、進んで行こうと思います。困難な道なのは分かっています。ですが、諦めずにこの夢を実現するために歩んで行きます。

モモン殿！ この夢のきっかけをくださったのは貴方です。あのカツツエ平野で私は命を助けられた。そして、亜人の人々も共に埋葬した。モモン殿は私に問いかけました。

『人間だろうと、亜人であろうと、死は誰にでも平等に訪れます。死を迎えた後では、もはや人間も亜人も同じではありませんか？』と。

まさしくその通りです。そして、私は気付きました。死が誰にでも平等に訪れるのであれば、命もまた平等ではないのかと。そして、人類だけではなく、山小人^{ドワーフ}にも、亜人種にも、森妖精^{エルフ}にも、そして亜人にも繁栄をする権利があるのではないかと。モモン殿、ありがとうございます」

「お礼を言われるようなことはありません。当たり前のことと言っただけです。ほん

とうに……」

「流石はモモン殿だ。私たちスレイン法国の人間が、六百年の間、気付けなかったことを、当たり前とおっしゃる！ やはり貴方はすごい人だ」

「いえ、恐縮です……。ですが、ニグン殿。一つ、お願いがあります」

「お願いですか？ 私の出来ることなら何でもしますよ。他ならぬモモン殿の頼み事です」

「人類種、亜人種に加え、異形種もニグン殿の夢に加えていただけでないでしょうか。人間種と亜人種だけが手を取り合うのではなく、人間種と異形種も共に手を取り合うことができる。異形種という理由だけで、殺され、追われる者もやはりいるのです」

「人間種と異形種ですか！ やはり、モモン殿は大きい人だ。悪魔にこの帝都が襲われたばかりだというのに、遙か先の人類の希望を見つめている……。分かりました。亜人種とよりも遙かに困難な道なのですが、私はその夢を夢見しましょう。時間がかかり、私が生きている間には実現できないかもしれないけれども、私はそれを夢見て諦めません。モモン殿、約束します」

「ありがとうございます。ニグン殿が夢を実現する日を私も心待ちにしています」と、モモンはベッドに横たわっているニグンの手を取り、固い握手を交わした。

「ニグン殿。そんな壮大な夢があるなら、いつまでもベッドに寝ていて良いのですか？

そろそろ包帯を替える時間ですよ。それに……できれば、ポーションを飲んで早く元気になってくださいな」と、包帯などの医療道具を抱えたレイナスさんが言った。ニグンとモモンの話を途中から聞いていたのだろう。

神殿の中にはまだまだ怪我人が溢れている。レイナスさんは未だに多忙だ。

「レイナスさん、ありがとうございます。ですが、帝都では死の騎士^{デス・ナイト}事件以来、ポーションは品薄と聞きます。私に使うくらいなら、他の傷ついた方を優先させてください。怪我を負った人たちはまだまだたくさんいるはずです。私がポーションを飲むとしたら、それは最後であるべきでしょう」

「ニグン殿は、頑固者ですわね」とレイナスは、ニグンの上半身を起こし、服を脱がす。そして、血の滲んだ包帯を外し、そして清潔な布で一旦身体を拭く。そして、真新しい包帯をニグンの身体に巻いていく。

「頑固者ですか……。しかし……。それに……。もしかしたら、〃白衣の天使〃レイナスさん。いや、レイナス・ロックブルズ女史！ 私は……あなたにこうやって看病される……。いや、ずっと一緒にいたいという気持ちがあるのにも知れませんが……。それがポーションを飲むことを避けさせているのかも知れません。こうやってあなたに手当される。それが嬉しくないと言ったら嘘になります。

崇高な夢を説きながらも、なんと身勝手な自分なのでしよう。己の小ささを思い知る

ばかりです……。ですが……レイナース・ロックブルズ女史！ 私と結婚していただけないでしょうか？ 法国の神官は給料も低い。

私は法国の考え方を変えます。その為に、私は神官長を目指します。神官長になったら、給金などあつて無いようなものとなるでしょう……。あなたに楽な生活をさせることなど、それこそ夢のまた夢です。そして私はこれから世界を飛び回るようになるでしょう。そんな私ですが、結婚をしていただけでいいでしょうか？」

包帯を巻いていたレイナースの右手をニグンは両手で握りしめる。そして、ニグンはレイナースを真つ直ぐ見つめている。

レイナースはモモンを見た。

モモンは、レイナースは結婚の申込をされて恥ずかしがつてニグンを直視できないのだろうかと思う。また、自分がこの場においては返事がしにくいのだろうかかと心配になる。自分はお邪魔虫で、この場を早く立ち去ったほうが良いのか、と思索する。

モモンは、俺がこの場にいることは気にしないでくれと、首を縦に必死に振る。

沈黙が続いた。

「条件があります……。」とレイナースは数十秒の沈黙の後、口を開いた。その間、ニグンは真剣な表情でレイナースを見つめていた。

モモンは、自分がこの場について良いのか、立ち去った方が良いのか、どうすれば良い

のか答えが出せないままその時を過ぎた。

「たまにはで良いですから……私を連れて釣りに行くこと。そして、私たちに子供が出来た時は、子供にもちゃんと釣りの仕方を教えること。毛針フライの作り方も！」

「ええ。もちろんです！ 私の名と私の信仰する神にかけて誓わせていただきます！」

「それでは……。私も、喜んで『Yes』と答えさせていただきますわ！」

モモンは、固く抱き合い、熱い接吻をしている二人に小声で、「お幸せに。心から祝福しますよ」と言つて、静かにその場を立ち去つたのであつた。

神殿の外へモモンが出て、神殿の外で待機していたアルベドに「待たせたな」とモモンが言つた時、ちょうどアルシエが右肩を父に、左肩をジャイムスに貸しながら、神殿の入口を登る階段を登つているところであつた。

怪我人がいると気付いた人々が、アルシエに手を貸し、父やジャイムスに治療を受けさせるべく、神殿の奥へと運んでいく。そして、父が心配なのか、母も妹たちもその後が続いていった。

モモンとアルシエ。そして、静かにモモンガの背後に立つアルベドだけが残された。

「アルシエ、無事だったか」

「うん……。モモンも無事で良かった。悪魔、退治してくれたのはモモンだよ。神殿に向かいながら、〃釣りは要らないモモン〃が悪魔を追い払ったって、みんなが口々に喜びながら言っていたのが聞こえたよ。凶悪そうな悪魔と一騎打ちして、悪魔を追い払ったって……。モモンはやっぱり凄いよ」

アルシエは、神殿の入口へと登る階段の途中で足を止め、階段の上にいるモモンを見上げながら言った。

「まあ、運が良かったということだな……。それでだ、アルシエ、お前に謝らなければならないことがある……。」

「私も、モモンに謝らないといけないことがあるんだ……。」とアルシエも口を開いた。

帝都は燃えているか 19

神殿で、階段の上に立つモモン。その背後に立つアルベド。バルディツシユの刃が太陽に照らされて輝いていた。

「謝ること？ 何かあったのか？」とモモンがアルシエに尋ねる。

「モモンの方こそ……。何かあったの？」

アルシエは、モモンと同じ全身甲冑を身に纏った見知らぬ人物を見上げる。

その人物は、胸の部分が突き出たような鎧の形状。それに、モモンの肩幅に比べて随分と細い。全身甲冑を装備している人物が、女性であることは一目瞭然である。フル・プレート
全身甲冑を見ても、その装備は大変高価であることが分かる。そして、どこことなくモモンが装備している甲冑に近いように感じる。

「いや……。実はな……」

モモンガは、一緒に冒険者を続けられなくなつた。モモンガはアルシエにそう伝えねばならないと思う。自分は帰る場所を見つけた。かつての仲間たちの幻影。そして彼らが生み出したNPCが、NPCを超えている。

かつてタブラさんが熱烈に語つたアルベドの設定、そしてデザイン。ユグドラシルで

は、再現できなかつた質感が、再現されている。

エントマの姿。あれは、設定を超えた、もはや人格と言えるものであろう。

仲間達は去っていった……そう思っていた。自分はリアルとの天秤に掛けられ、そして捨てられた。自分だけが残された。そう思っていた。

けれど、ナザリック地下大墳墓を、そして彼らが作ったNPC達を、自分に残していつてくれたのではないか。

スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを破壊し、アインズ・ウール・ゴウンの呪縛を自分の力で解き放ち、自分が新しい人生を始めるために自分はこの世界にやってきたと思っていた。だが、そうではないのではないか。

仲間達が残していったもの。彼らが丹精込めて生み出した、命を与えたと言っても過言では無いような存在と共に生きていくことこそが、この世界に自分が来たという理由なのではないか。

鈴木悟のアドバイザーとしてのモモンガではなく、モモンガ自身として、ナザリックで生きていく。自分が孤独ではないように、仲間達は仲間達自身の代わりに、NPCに命を与え、そしてずっと自分と一緒にいてくれる。

しかし、自分がその選択をしたということは、アルシエと別れなくてはならないとい

うことだ。アルシエは、社会人であるか？ 冒険者として報酬を得ているのだから、社会人だと言っても良いかもしれない。しかし、アルシエは人間だ。異形種ではない。”あけみさん”のような例外対応をとることも可能かもしれない。

だが、少なくとも、もう冒険を一緒にすることなどできない。冒険者とナザリック地下大墳墓は利益相反だ。冒険者がナザリックに潜入してくるのであれば、それを迎え撃たねばならない。自らの大切な居場所を守るために……。

そして何より、自分は、モモンガだ。異形種、アンデッド、死の支配者、そして、人間とは現在、敵対関係にある存在だ。ニグン殿が、いつか、異形種と人間種の間の溝を埋め、橋渡ししてくれるかもしれないが、今は敵同士であろう。

アルシエに別れを告げねばならない。

しかし……短い期間だったとはいえ、チームを組んだアルシエに、チームの解散を伝えねばならないのは辛い。別れを告げられることの辛さを十二分に知っている。

そして、モモンガは気付く。引退して別れを告げていくギルドの仲間たち。その仲間たち自身も、別れを告げられる自分と同じように、辛かったのだと。忍びなかったのだと。

自分の愛用していた装備を託す。それは簡単なことではなかったのかも知れない。自分がギルド長として、装備を押し付け易かったのではなく、言い訳や建前ではなく、本

当に有効活用して欲しいと、託してくれていたのかもしれない。

別れなら、四十一回告げられてきた。慣れている。しかし、自分が別れを告げるのはモモンガにとって初めてであった。

「モモン……先に言わせて……」

神殿の階段の上で歩みを止め、押し黙るモモンを見て、アルシエは口を開いた。

「私、妹たちを連れて、冒険者の拠点を移して活動しようって言ったよね。だけど……やっぱりそれは出来ない。ごめん。私はやっぱり、お父様とお母様を置いて行ったりなんかできない……やっぱり、家族を捨てたりなんかできない。私から言い出したことだけど、ごめん。せつかくモモンも乗り気になってくれたのに……」

「……………家族を捨てられない、か。俺も同じだな。俺たちは似ているのかもしれないな……。すまないアルシエ。俺もだ。俺は昔の仲間と造りあげた場所に戻る……」

ユグドラシルから、アインズ・ウール・ゴウンを捨てて、新たな冒険者としての人生を踏み出そうとした。しかし、踏み出さないと決めた自分。

両親を捨て、妹たちと一緒に新しい人生を踏み出そうとした。しかし、踏み出さないと決めたアルシエ。

アルシエ……お前は俺と似ているのかもしれないな。ふつとモモンガはそんなこと

を思う。

初めて冒険者に登録し、アルシエと出会った。偶然のように思える。だが、もしかしたら自分が、自分と似た人間を無意識に探していたのかもしれない。

そんなことを思い、そしてモモンガの気持ちは軽くなる。アルシエも自分も、自分の道を決めた。

スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを破壊し、新しい人生を歩くという決断ではなく、アインズ・ウール・ゴウンを……ユグドラシルの夢の続きを生きる。

そして、アルシエは、妹たちを連れて家を出るという選択肢を捨て、家族の絆を取り戻すために帝都に残る。

別々の道になってしまったが、それはそれで良いじゃないか……。

「そっか。じゃあ、遺跡に再チャレンジというのも無しだね。でも、帝都を拠点にしながら冒険を続けていくことだってできるし——」

「——すまない、アルシエ。それが出来なくなつた」

「え？」

「俺は……冒険者を辞める。アルシエ、お前が冒険者を続けるなら……。次に出会う時は……敵同士となるかもしれない」

「え？ そんなのヤダよ……」

アルシエが、神殿の階段に足をかけた瞬間、モモンガの後ろに控えていたアルベドが動く。

「これ以上、前に進むのであれば、殺します」

アルシエの首筋にバルディッシュの刃が突きつけられていた。

「アルベド……やめろ」

「畏まりました」

スツとバルディッシュを引きゆつくりと階段を上がるアルベド。そして、アルシエを神殿の階段上から見下ろす。

「すまないな。アルシエ。チームは解散だ」

モモンは、自らの首にぶら下げていた“モモンと愉快な仲間たち”のミスリルプレートを引きちぎった。この帝都の悪魔騒動の解決の立役者であるなら、さらにアダマンタイト級冒険者へと昇格出来ていたかもしれない。そんな冒険者のプレートを、引きちぎる。

「そんなの嫌だよ……」

バルディッシュを突きつけられたばかりなのに、アルシエの口からそう自然と声が出た。

「アルベド……。何もするな！」とモモンガは、すつとバルディッシュを持ち上げたアル

ベドを制する。

「だって、私は、本当の意味で、“モモンと愉快な仲間たち”になれてなかった。いつも、モモンや、ニグンさんや、レイナースさんの足を引つ張つてた！ 遺跡の件だつてそう、迷惑ばかりかけてた！ いつも、三人の背中ばかり見つめてた。いつか、自分も実力を付けて、いつかきつと、レイナースさんやニグンさんのように、モモンの隣を歩く事ができたらいいなつて思つてた。それが目標だつた！ モモンに助けてもらはうばかりなんて嫌だつた。レイナースさんやニグンさんの足を引つ張つてばかりで嫌だつた。いつかモモンと対等な関係になつて、命を預け合えるようになる。その時が、きつと、私が本当に“モモンと愉快な仲間たち”になれる時だと思つてた。これからも頑張ろうつて思つてた。モモンとこれからも冒険できるつて思つてた。モモンと対等になつて、一緒に冒険ができるように精一杯頑張ろうと思つてた！ それなのに酷いよ……冒険の拠点を移せないことは私が悪いよ……。だけど、だけど、チームが解散だなんて、モモン……酷いよ……」

「まだ若いんだ。俺なんかよりもつと良い冒険者や、冒険者チームと巡りあえるさ。お前の力を必要とするチームは沢山あるさ。『魔法の腕には自信がある』のдар？ アルシエ？」とモモンガは言いながら神殿の階段を降る。そして泣きそうになっているアルシエの頭を優しく撫でる。

かつて、ユグドラシルで異形種狩りに嫌気がさして、辞めようと思っていたときに、たつちさんが声をかけてくれたように、アルシエにもきつと、良い仲間は見つかる。アルシエが今はそう思えなくても、『世界の可能性はそんなに小さくない』。きつと、アルシエにも良い仲間が見つかるはずだ。モモンガはそう確信できる。

「全然実力不足だって、思い知ったもん……ニグンさんは、私よりも早く第三位階を使えたみたいだし……」

「お前はこれからさ……」

「モモンと一緒に冒険がこれからもしたい……」

「別れは生きていれば必ず来るものさ。『子ども扱い』もしてほしくないのだから？ それなら、分かるはずだ。別れは絶対に来る。それが遅いか早いかだけの話だ」

「こんな時だけ、大人扱いはずるいよ」

「ああ。大人は狡いのさ」と、モモンはアルシエの両目に溜まっている涙を右手の親指の部分できつと払い、「もう泣くな。きつとお前なら良い仲間と巡りあえる」と言った。

その様子を眺めていたアルベドが、「モモン……様。そろそろ……」と口を開く。

「ああ」とモモンはアルシエから離れる。

「冒険は一緒にできなくても、また会えるよね？」

「いや、もう会うことはないだろう……。ニグン殿やレイナーズさんにも、よろしく言っ

ておいてくれ。頼んだぞ。じゃあ、元気だな、アルシエ……」

ゆつくりと遠ざかっていくモモンの足音。かつん、かつんという、モモンが装備している金属製の靴と敷石のぶつかる音が無機質に響く。

「あなた、名前は？」とモモンガの後ろをついて歩くアルベドが足を止め、アルシエに名前を尋ねた。

「アルシエ。アルシエ・イーブ・リイル・フルト。あなたは？」とアルシエは答えた。

自分の名前だけではなく、自分の家名まで含めた全ての名前を告げる。それが、フルト家で生きていくというアルシエの覚悟の表れでもあった。

「そう。憶えておくわ」とアルシエの質問にアルベドは答えず、そして再びモモンガの後ろを歩く。

モモンが遠ざかっていくのが分かる。だが、引き留めることはできないだろう。

モモンともう二度と会うことが出来ないかも知れない、アルシエは肩を震わしている。地面に顔を向け、歯を食いしぼる。

引き留めたかった。だが、アルシエは、振り返って遠ざかるモモンの姿を見ることすらできなかった。

モモンの足音が聞こえなくなり、アルシエは泣いた。

モモンの足音が聞こえなくなっても、ただずつと下を向いて泣き続けた。

どうして自分は泣いているのか。自分の感情の名前を上手く付けることがアルシエには出来なかった。寂しいという感情だけでもない。悔しいという感情だけでもない。様々な感情が入り交じって、自分を泣かせている。

モモンと二度と会えない。その事実がただ、悲しかった。

涙の量は多くなつていく。

涙がやがて嗚咽となり、嗚咽がやがて哀哭あいきくとなる。そして、哀哭は啼血ていけつとなつた。胃の中に入っている物を全て吐き出してしまひそうなほど、アルシエは泣いた。

・
・
・

帝都アーウィンターの神殿。その神殿の屋根の上から、パンドラズ・アクターは、配下として連れてきていた拷問トウの悪魔チャイと夕日に沈んで行く帝都を眺めている。そして、パンドラズ・アクターは、神殿の前でうずくまり、そして泣きつづける少女をも見ていた。

「Kommt, 来なさい ihr T・chter, 私の娘(トウチャイ)たちよ helft 私と共に mir 泣いて klagen くれ

Sehet! 見よ Wen? 誰を den あ Menschen 人間の

Seht 彼女を sie 見よ Wie? 何を als あの仔羊の weie よう Lamm! なさまを

Sehet! 見よ Was? 何を seht 耐え die 忍ぶ Geduld! 姿を

アルシエが、自分が泣いたその涙の理由を。自分を泣かせる感情の名をはつきりと自覚したのは、もう少し後になってからであつた。

. . .
 S e h e t ! 見よ
 S e h e t ! 見よ
 S e h t s i e 彼女を
 S e h e t ! 見よ
 W o h i n ? どこを
 W a s ? 何を
 S e h t s i e 見よ
 W e n ? 誰を
 W i e ? 何を
 S e h t a l s 耐え
 a u f 彼女
 i h e 仔
 r e r 羊の
 T r a u e r ! 哀姿
 L a m m ! さまを
 . . .
 M o n d 月も
 u n d 光も
 L i c h t の
 I s t 愛ゆ
 v o r え
 l i e b e 沈ん
 u n t e r でき
 g a n g e n まつた

E p i l o g u e

あの頃の私には、冒険と恋の間に、はつきりとした境界線はなかった。あの頃の私は、恋というものは自分よりも幸せな誰かがするもので、自分には遠い夢物語のように思っていて、無意識のうちに諦めていたのかも知れない。もしかしたら、自分自身が経験した冒険というのが、こうして振り返ってみると、十三英雄の冒険譚に出てくる話のように、それが現実とは思えない話ばかりだから、冒険をしながら恋という名の白昼夢を見ていただけなのかも知れない。

まだ小さかったあの頃の私は、身の丈に合わない杖を持ち、大きなバッグを背負い、いつもモモンの後ろを歩いていた。

「クーデリカおばあちゃん！ アルシエおばあちゃんが目を覚ましたよ！」

アルシエが寝ているベッドの傍らで、アルシエの看病をしていたクーデリカの孫が隣室で控えている人たちに呼びかけた。

「お姉さま……」

クーデリカとウレイリカが、アルシエの手を取る。

「クー、ウィー……」

「自分より若い弟子を見送る……何度経験しようとも悲しいものだ。慣れん」とアルシエの生涯の師となったフルーダが呟いた。その脛が皺だらけとなりながら鋭さと輝きを失わない瞳には、うつすら涙が浮かんでいる。

「お姉さま、ニグン最高神官長様からお手紙が届いていますのよ」

クーデリカは、アルシエのベッドの横に置いてある椅子に座り、手紙をアルシエの代わりに読み上げた。

「それに、こんな珍しいモノまで同封されていたわ」

「ほお。これは、口だけ賢者が残した“フォトン”だな。それにしても、まだ釣りをやっておるのか」と、フルーダは、手紙に同封されていた写真を見ながら言った。

その写真には、釣った魚を嬉しそうに掲げるニグン。その傍らに寄り添うレイナス。そしてその周りにいるのは、彼等の息子娘、そして孫たちが写っていた。そして、ビーストマンが写っていた。

「しかし、ビーストマンも釣りをやるとは……しかも人間と一緒に……。百年前なら想像もできなかったことだ」と、フルーダが呟く。

「ニグンさん、相変わらず世界を飛び回っているのね……」

自分よりも年齢が上のはずのニグンが今も元気に世界を飛び回っている。一方の自

分は、命がまさに燃え尽きようとしている。しかし、アルシエには後悔は無い。

冒険者が続ければ、そして困難な依頼をすればするほど、命の危険を伴う。仲間の命を救うため、自分の命を代償にすることでも多々あった。命を削って魔法を使う。無理が祟ったということかも知れない。けれど、それを後悔したりはしない。

「手紙の内容だと、やはりリ・エステイーズ王国との交渉が難航しているようですね……。やはり、あの時、戦士長を討ち取れていたら……」

「過ぎたことだし、討ち取れなかったのはアルシエのせいではないわ」と、イミーナが言う。

イミーナ。アルシエが所属した、冒険者チーム“フォースイト”のメンバーの一人だったハーフェルフだ。フォースイトのリーダー、そしてイミーナの夫であったヘツケラン・ターマイトと、回復役であった神官のロバーデイク・ゴルトロンは、既に寿命で先に亡くなっていた。イミーナは、エルフの血が半分流れており、人間とは寿命が違い、まだイミーナは二十代のような姿だ。

スレイン法国、バハルス帝国、竜王国、カルサナス都市国家連合、ドワーフ王国、飛竜騎兵部族、ビーストマン族、ローブル聖王国、アーグランド評議国、牛頭人国、エルフ国、ダーク・エルフ国など、種族間の争いの停止と種族間の平等に関する条約を締結し、新たな時代を迎えている。

しかしその中で、リ・エステイーゼ王国は、人間の人間による、人間のための国家という思想を是とし、隣国であるバハルス帝国やドワーフ王国に対して、毎年のように小競り合いを仕掛けてきていた。

そのリ・エステイーゼ王国を率いているのが、容赦のない外道な権謀術数を巡らす“腐つても黄金”と畏れられるラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ。若いころからその智謀を轟かせていたが、年老いてもその知識の泉は衰えることなく、和平を拒み続けていた。

また、リ・エステイーゼ王国には、齢百歳を超えているのにも拘らず武力と体力の衰えを知らない王国戦士長ガゼフ・ストロノーフがいる。

戦士長が戦場に現れると、死者数が膨大となる。王国戦士長を抑え、被害を最小限にとどめるとというのが、現役の冒険者であった時のアルシエやレイナース、フォーサイト、その他の仲間たちの大きな課題であった。

また、スレイン法国のニグン最高神官長や“片腕の賢帝”と称されるバハルス帝国の皇帝は、その争いの被害を最小限に食い止めるために外交上で腐心していた。しかし、その努力は未だに結実していない。

リ・エステイーゼ王国の悪辣な行為に苛立ちを憶えるアーグランド評議国の永久評議員の一部などからは、王都を焼き払うのに協力するというような過激な意見も出てきて

おり、その意見をニグンやジルクニフは抑えつつ和平交渉に臨むという、敵を守りながらその敵と和平の交渉をするという、“腐つても黄金”が作りだした複雑な外交上の立場に立たされているのだ。

重苦しい雰囲気室内を漂ったが、それは室内に飛び込んできた子供の声によつてかき消される。

「凄くよ！ 家の周りが花畑になつてる！」

部屋に飛び込んできたのは、ウレイリカの孫であつた。そしてその両手には抱えきれないほど花を抱えていた。

「紫苑の花？ この時期に？」と、イミーナは首を傾げる。あまりに季節外れだ。

「あら、本当だわ。珍しいこともあるのね」と、クーデリカが部屋の窓を開き、外を見る。クーデリカが窓を開くと、紫苑の花の香りが室内に流れ込んできた。

なだらかな丘の上に建てられた屋敷。まるで屋敷を囲むように、紫苑の花が咲き誇っている。

子供たちは季節外れの花が突然咲き乱れるという異様な光景に興奮をしているようであつた。そして、大人たちはその光景に首を傾げている。

ただ、アルシエだけは、ウレイリカの孫が抱えている花を見て、涙を流す。

「クー。私の引き出しに小さな木箱が入っているから、それを……」

「これかしら？」

クーデリカは、寝ているアルシエにその木箱を渡す。

痩せ細った手でアルシエは、その木箱をゆっくりと開ける。

そこに入っていたのは、一輪の紫苑の花びらだった。薄い紫の花びらと、黄色い雄しべ。花弁の何枚かは落ちてしまっている。折れ曲がってしまった花弁もある。けれど、その紫苑の花は色褪せはいなかった。

「あー、この花と同じ花だ！ アルシエおばあちゃんは、この花好きなの？ だったらこれもある！」とウレイリカの孫はアルシエにその花の束を渡す。

「ありがとうね……」とアルシエはその花を受け取りながら涙を流す。

遠い昔の日だった。アルシエがその後、何度訪れていても固くその門が閉ざされていたナザリツク地下大墳墓。そこに最初に、モモンと向かう途中だった。忘れることなどできない。

「私に？ ありがとう……。そういえば、私、花を男の人からもらったの初めてかも」

「そうか……。それは悪いことをしたな。俺なんかで悪かったな……。取り消すか？」

「ううん。嬉しい。だけど……。貰うなら両手に抱えきれないくらいが良かったな」と自

分はわざと頬を膨らましたのをはつきりと覚えている。

「ははは。そうか。そうか。いつか貰えるとよいな」とモモンが笑ったのをはつきりと覚えている。

ニグンさんがかつて自分に語ってくれた。

フライ・フィッシングをする際に最も重要なのは、「川を読む」ことなのだという。そして、誰しもが、自分の人生を語るにおいては、同じように、流れ続ける止まることのない時間の中で、自分の人生を読まなければならないのだと言う。

濁ったまるで泥川のような人生であると読むのか、穏やかな平野をゆつくりと流れる川であると読むのか。それは人それぞれによって違ってくる。だけど、人は、自分の人生を悲劇の川であると読んでしまいがちだという。

自分も、モモンに出会わなければ、自分の人生は、水の流れさえも堰き止められて腐った川。そんなように自分の人生を読んでいたのかも知れない。

雨が降り、水かさが増して流れの強い、全てを押し流してしまいそうな川。透明な水の中を、優雅に魚が泳ぐ川。

川も、その時々でその姿を変える。自分の人生というものも、同じようなものだといふ。たとえば真夏に干上がったとしても、水が堰き止められ異臭を放つようになって、

また雪解けの冷たく清らかな水が、春の到来と共にその川底を潤すのだ。間違いなく。

あの頃の私には、冒険と恋の間に、はつきりとした境界線はなかった。冒険と恋と、そして私という存在が融解し、融合して、たった一つの存在となつて、私の人生を確かに彩り続けてくれた。憂鬱な曇りが続くような時も、モモンがくれたその輝きが、私を絶望から救つてくれた。

アルシエは、紫苑の花を見つめながら、「ありがとうモモン。最期に会いに来てくれたんだ」と呟き、『遠くにいる人を思う』という花言葉を持つ、紫苑の花を抱えながら永遠の眠りへと入つていった。

「マール、御苦労だった」

「モモンガ様のお役に立てて良かったです！」

「モモンガ様……最期にお顔くらいお見せになつた方が良いではありませんか？」

ずつと陰ながら見守っていたことを伝えたら、彼女は喜ぶのではないでしようか」とモモンガの後ろに控えていたアルベドが呟く。

「そうか？　だが、これで十分だろう。しかし……アルベド……、お前にとって人間は下等な生き物なのだろうか？　随分と優しいじゃないか」

「人間は薄汚い下等生物です。ただ……あの女、アルシエ・イーブ・リイル・フルトには、多少の親近感が湧くというものでしょう」

「そうなのか？　珍しいように思えるぞ？」

「モモンガ様。それが女という生き物なのです。彼女は、私と同じ男を愛した女ですから……」

「……。マール、アルベド。先に、ナザリックに戻っている」

「畏まりました」

マールとアルベドは、モモンガの言葉を受けてナザリック地下大墳墓に帰還する。

一人残ったモモンガは、丘の上に建てられた屋敷を見つめる。

「アルシエ……ささらばだ」

モモンガの言葉は、風に乗って運ばれていった。そして『君を忘れない』という花言葉を持つ、紫苑の花がいつまでも風に揺れ続けているのであった。